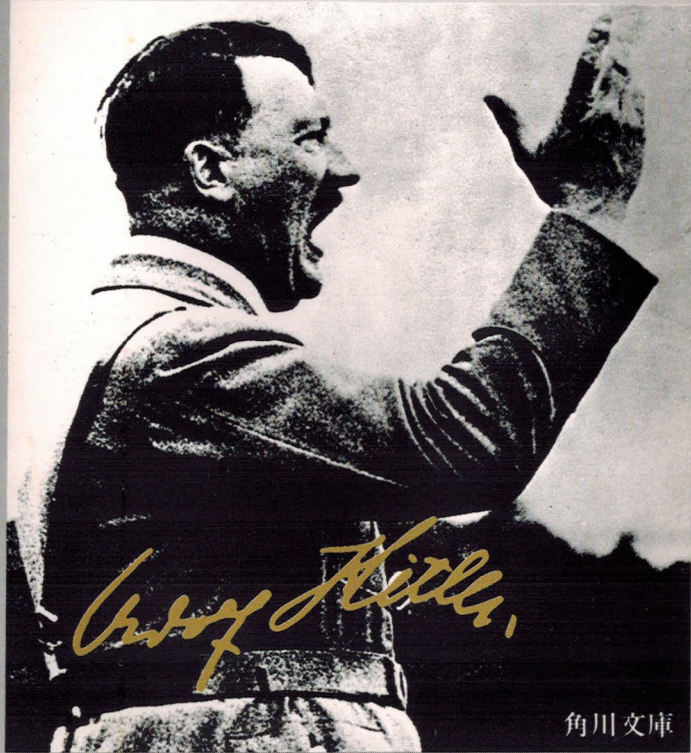
わが闘争（下）

II 国家社会主義運動

アドルフ・ヒトラー　平野一郎　将積茂 訳

角川文庫

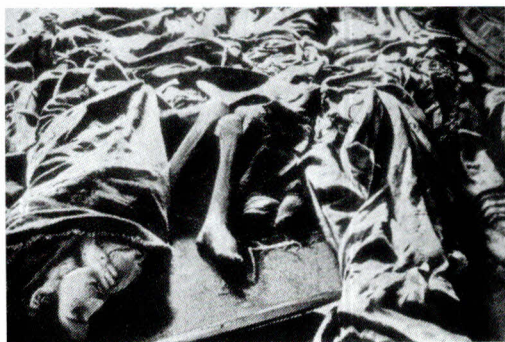
アドルフ・ヒトラー

わが闘争（下）

角川文庫

ヒトラー(右)とムッソリーニ　提供:共同通信社

オーストリアの少女たちに囲まれたヒトラー

ヒトラーの首相就任を祝う、ブランデン・ブルク門でのパレード

アウシュビッツのユダヤ人虐殺

完訳

わが闘争

（下）

アドルフ・ヒトラー

平野一郎・将積茂＝訳

角川文庫 3144

目　次

II　国家社会主義運動

II 国家社会主義運動

第一章　世界観と党

ブルジョア的「綱領委員会」　一九二〇年二月二十四日に、われわれの新運動の第一回大公開大衆示威が行なわれた。ミュンヘンのホーフブロイハウスのフェストザールで、新党の二十五か条からなる綱領のテーゼが、約二千人の群衆に示され、その各条が賛成の歓呼のもとに承認された。

それとともに、実際がらくたともいうべき因襲的観念や見解や、ばくぜんとした、むしろ有害な諸目標を一掃すべき闘争の指導原理と方針が、はじめて与えられた。腐敗した卑怯なブルジョア社会と、マルクシズムの征服の大波のような凱旋(がいせん)行列の中に、宿命の車を最後の瞬間に静止させようとする新しい力が、現われたのである。

この新運動が、この巨大な闘争のために必要な意義と必須の力とを得るためには、政治的生活に一つの新しい選挙のスローガンを強要するのではなく、原理的な重要性をもった一つの新しい世界観が先頭に立っているのだという神聖な信念を、はじめから同志の心の中に目ざめさせることが必要である、と思われたことはもちろんであった。

いわゆる「政党綱領」が通常、いかにあさましい観点からでっちあげられ、時々磨きをかけられたり、作り直されたりするか、を考えてみる必要がある。このような綱領の作られそこねたものを評価するに必要な理解力を得るためには、特にこれらブルジョア的「綱領委員会」を動かしている動機を、

厳密に吟味してみなければならない。

綱領を新しく決定したり、あるいは従来の綱領を変更したりするのは、いつもただ、一つの心配があるからである。すなわち次の選挙の成り行きが心配だからだ。これら議会の政治家たちの頭に、親愛なる民衆がまたもや反逆し、古い政党という馬車から脱走しそうだという心配がかすかに浮んでくるとただちに、かれらは車のながえを新たにぬりかえるのが常である。そうすると、占星術師や政党天文学者――いわゆる「経験豊かな」「老練な」、たいていは老いぼれた議会屋がやってくる。かれらはその「豊富な政治的修業時代」に、大衆がついに堪忍袋の緒をきらしたこれと似かよっている場合を思いだすことができるので、同様なことがまたしても切迫していると感ずるのである。そこでかれらは古い処方箋をもちだして「委員会」をつくり、親愛なる民衆の間を聞いてまわり、新聞記事を探し、親愛なる多数の民衆が何を好み、何をきらい、そして何を望んでいるかをようやくかぎつける。すべての職業群、むろんすべての使用人階級はあますところなく調査され、かれらの最も秘密な欲求まで研究される。そうすると危険視していた反対党の「不快なスローガン」であったはずのものもまた、にわかに再検討する必要があることになり、そしてまったく無害な、古くからわが党でとうぜんのこととして認められてきたことにさえなって、このスローガンを本来、発明し、宣伝した党をアゼンたらしめることもまれではないのである。

そこでいろいろの委員会が集まって、古い綱領を「改訂」し、新しい綱領を制定し、そこで各人にその欲するものが与えられるということになる。（その場合紳士方は、戦場にいる兵士が古いシャツがシラミだらけになると、新しいのととりかえるように、自分の確信をサッサと変えてしまうのだ。）農民は農業保護を、工業家は製品保護を、消費者は購買力の保護を受け、教員は俸給が増加し、官吏

は恩給が改善され、寡婦や孤児は国家が十分に配慮するはずであり、交通は便利になり、料金は値下げされ、しかも税金は全部とはいわぬまでもかなり軽減されるはずである。けれどもある階級のことを忘れていたり、あるいは民衆の間で広まっている要求を聞きもらしたりすることが、たびたび起る。そうすると平均的な俗物やかれらの妻君たちの群がふたたび落ち着いて満足するだろうと見当がついて、安んずることができるようになるまで、押しこめられるものはなんでも、最後のドタン場で大急ぎでつぎはぎ式に押しこんでしまうのだ。そうすると人々は内心で準備なれりとし、親愛なる神と、有権者市民の度しがたい愚鈍さに信頼して、かれらがいうところのドイツ国を新しく形成するための闘争をはじめることができるのである。

「民衆代表」の生活から　さて選挙日がすんで議員たちも四年間のための最後の民衆大会をすませてしまい、大衆愚民を馴養（じゅんよう）することから、より高級で快適な課題を処理することに移るようになると、綱領委員会はふたたび消滅する。そしてあれこれを新しく形成するための闘争も、ふたたび愛すべき日々のパンのための――議員によってこれが歳費と称されるのだが――闘争の形をとるようになる。

毎朝この民衆代表氏は、議会へ行く、ずっと奥へはいらないまでも、少なくとも出席簿のある控室までは行く。民衆のために衰弱せんばかりに奉仕して、かれはそこで名前を書きこむ。そしてとうぜんの賃銀として、この不断の疲労困憊（こんぱい）する辛苦に対するわずかばかりの報酬をうけとるのである。

四年後、あるいはその他議会社会の解散がふたたび間近かになった危機的な数週間がつづくと、紳士方にはにわかに制御しがたい衝動が襲ってくる。地虫がこがね虫に変る以外に方法がないように、

で行く。かれはふたたび選挙民に演説し、自分がどんなに活躍したかをならべたて、他のものが悪意をもち頑迷であるかについて語る。しかし無理解な大衆からは感謝の拍手のかわりに、しばしば乱暴な、実に憎悪にみちたことばを浴びせかけられるのである。こうした民衆の忘恩がある程度まで高まったときには、唯一の手段だけが残る。すなわちもう一度政党に磨きがかけられる。綱領は改善される必要があり、委員会は新たに息を吹きかえし、そしてまたはじめからペテンがくりかえされる。われわれ人間の度しがたい愚かさをみれば、その効果について驚くにはあたらない。新聞にあやつられ、新しい魅惑的な綱領に目をくらまされて、「ブルジョア」たると「プロレタリア」たるとにかかわらずその無定見な選挙人は、もとどおり同じ厩舎にもどり、そしてもとのペテン師を選んでしまうのだ。

こうして生産階級の代表者や候補者はふたたび議会の毛虫に変じ、そして四年後にまたもやきらびやかな蝶に変身するために、国家生活の樹枝にとまって、たらふく食いあらすのだ。

この全体の経緯を、その冷厳な現実において眺め、このような欺瞞がいつもくりかえされるのを見なければならないことほど、われわれを憂鬱にするものはない。

マルクシズムの組織だった勢力との闘争を闘い抜くような力が、かかる精神的培養基からブルジョア陣営に生まれてこないのは、とうぜんである。

マルクシズムと民主主義の原理　紳士諸氏はまた決して本気でこのことを考えてはいないのだ。この白色人種の議会の病気直しの魔法使いたちの、よく知られている偏狭固陋さや精神的劣等さを見れば、かれら自身、西欧民主主義の道をたどってマルクシズムの教説と闘っているのだ、とまじめに

自負することはできないのだ。マルクシズムにとって民主主義およびそれと関係しているすべてのものは、最善の場合でも敵を無力にし、そしてかってに自由に欲する道を行くために用いる目的到達の手段にすぎないのである。すなわちマルクシズムの一部は、いまのところ非常に老獪なやり方で民主主義の諸原則と不可分に結合しているのだと真実らしくみせかけようとしているが、人々はこれらの紳士諸君が危急の時に、(1)西欧民主主義的意味での多数決を三文の価値もないと考えていたことを、どうか忘れないでほしい！　ブルジョア代議士たちが、その記念さるべき頑迷さで、自分たちの絶対多数を信じて、ドイツ帝国の安全が保証されていると見ていたそのときに、その間にマルクシズムは町の浮浪者や逃亡兵や政党ゴロやユダヤ人文士らの群といっしょに、サッサと政権をうばいとり、その種の民主主義に音高く平手打ちをくらわせることが起ったのだ。だからその場合そのようなブルジョア民主主義を奉じている議会の魔術師の人の好さではたしかに、現在あるいは将来において、この世界的ペスト菌の保持者、関与者の野獣のような決心がかんたんに西欧的議会主義の呪文で封じられるだろう、と妄想しているようなものだったのだ。

マルクシズムは、国民的精神界を絶滅してやろうと決めているのだが、自己の犯罪目的のためにたとい間接的にせよ支持をうけうるかぎり、民主主義といっしょに進むだろう。しかし、われわれの議会主義的民主主義の魔法の釜からとつぜん多数者を沸きたたせ――そしてそれがただ正当な多数決の立法にのみよるとしても――本気でマルクシズムを弾圧しようとしているという確信に、今日到達するならば、議会のまやかしはただちに終りをつげるであろう。赤色インターナショナルの旗手たちは、さらに民主主義の良心に訴えるかわりに、プロレタリア大衆にもえるような檄を発する。そしてかれらの闘争は、わが議会のカビくさい議場の空気から一挙に工場で、また街頭で根をはるだろう。民主

主義はそれでもってかんたんに片づけられてしまうだろう。そして議会における民衆の使徒[2]の知的な要領のよさではできなかったことが、扇動されたプロレタリア大衆の鉄槌（てっつい）やハンマーで、ちょうど一九一八年秋[3]と同様に電光石火のように達せられるであろう。すなわち、西欧民主主義のやり方でユダヤ人の世界制覇に対抗できるなどとうぬぼれることが、いかに狂気じみているかを、それらはブルジョア社会の人々に痛切にわからせてくれるだろう。

規則などは、いつか高飛車な態度に出るときや、あるいは自分の利益になるときにだけ存在していて、自分の得にならないとなるやいなや投げすててしまうような博徒を相手にして、規則にしばりつけられているなどということは、前にいったようにまったくお人好しにほかならないのである。

とにかく、いわゆるブルジョア的な立場の政党の場合にはすべて、その全政治的闘争というものは、事実上ただ個々の議席をつかみあいすることだけである。その時にはいろいろの立場や原則はご都合次第で船の砂袋のように海中に投げだされてしまう。だからかれらの綱領ももちろんまたそれに応じていいかげんに定められており——もちろん逆に——また、かれらの力もそれに応じて貧弱である。ブルジョア政党には、偉大なすぐれた視点からの信服させるにたる印象と、その印象を無条件に信頼させるにたる説得力でもって大衆をいつも従え、この印象を固守していこうとする狂言的な闘争意欲とを結合させるような偉大な磁石のような魅力が、欠けているのである。

世界観対世界観　しかし、一方でおそろしく破壊的な一つの世界観があらゆる武器をもって現存の秩序を攪乱（かくらん）しようとしているときには、他方は、それ自身一つの新しい、われわれの場合には一つの新しい政治的信念の形を身につけ、そして弱々しいもろい防衛的スローガンをやめて、勇敢にもの

すごい攻撃のときの声をあげることと交代させたときだけつねに対抗することができるのだ。
だから、とくにバイエルン中央党あたりのいわゆる国民的ブルジョア的大臣たちから、われわれの今日の運動が「革命」を志して努力しているなどとシャレた非難をうけるが、そういうしろうと的政論好きな一寸法師に対してはただ次のように答えるだけである。そうだとも、われわれはおまえたちが犯罪に値するようなバカさで怠ってきたことを埋めあわせようとしているだけなのだ。おまえたちの議会主義的醜取引の原則によって、国民たちは奈落にひきずりこまれたのだ。ところがわれわれは攻撃の形をとって新しい世界観をうちたて、その根本原理を熱狂的に断固として守ることによって、いつかわが民族が自由の殿堂にふたたびのぼりうるための階段を築くのだ、と。
それゆえ、われわれの運動の創始時代の第一の配慮はいつも、この新しい崇高な信念のための闘士たちの軍勢が、単なる議会的利益促進団体にならぬように警戒することに向けられねばならなかったのである。
その第一の予防処置は、それでなくてもその内面的な偉大さだけで、今日の政党政治家の小さく弱弱しい精神を追いはらってしまうにたる目標にかなった発展をするにちがいない綱領をつくることであった。
そして、われわれが、綱領によって、目標とする点を明白に形成する必要があると認めていたことが、いかに正しかったかは、ドイツをついに崩壊にまで導いた、あの宿命的な欠陥をみれば最もはっきりとわかるのである。
これらを認識すれば、一つの新しい国家観が形成されるにちがいないのだ。その新しい国家観自体、新しい世界観の本質的に不可分の構成要素なのである。

＊

「民族主義的」という概念

すでに第一巻で、「民族主義的」ということばが、概念的にあまり不明瞭なため一つの団結せる闘争団体を形成することができないように思えるという程度に、このことばを説明しておいた。今日では、お互いの見解の本質的な点ですべてたいへん遠くかけはなれているものが、みんな「民族主義的」という同義語のもとにのさばっている。だからわたしは、いま国家社会主義ドイツ労働者党の課題と目標に移るまえに、「民族主義的」という概念とそれの党運動との関係を説明しておこうと思う。

「民族主義的」という概念は、「宗教的」ということばとほぼ同じように、明確に限定されておらず、いろいろと違った意味に解釈できるし、また、実際にいろいろ勝手な意味に使われているように思える。このことばの中に何かまったく厳密なものを想定することは、思想的に把握するという意味においても、実際の働き方の意味からも、非常にむずかしい。「宗教的」ということばにしても、このことばのはたらき方が一定の明瞭な形をとったときに、はじめて観念の上で把握しうるのである。ある人をその性質が「内面的に非常に宗教的」であるという場合、それは結構だがおおむねまたつまらない説明である。たしかに少数の人は、そうしたまったく一般的なレッテルをつけられて自分自身満足感をおぼえるであろう。そのうえかれらは一定の多少ともその精神状態のはっきりした像を媒介することができるかも知れない。しかし、大部分のものは、哲学者でも聖者でもないから、こんなまったく一般的な宗教的理念では、たいてい一人一人にそれぞれちがった考えや行ないを自由に与えることを意味するだけであり、なんといっても内心の宗教的渇望が、純粋の形而上的な無限の思考の世界の中から、明確な特定の信仰が形成されたときに生ずるような、あの効験にいたることもないのである。

この信仰なるものはたしかにそれ自身目的ではなく、目的のための手段にすぎない。だがそれは目的一般に到達しうるためには不可欠の手段である。しかしこの目的は単に観念的なものではなく、究極においてはすぐれて実践的な目的なのである。人々は一般に、最も崇高な美の尊さが、けっきょく、ただ倫理的な合目的性の中にだけ存するのとまったく同様に、最高の理想はつねに最も深刻な生活の必要に即しているということを知らねばならない。

宗教的な感じから疑いを許さぬ信仰へ　信仰というものは、人間を動物的な無為の生活の水準から高めるのにあずかって力があるのだから、信仰は実際に人間の存在を確固としたものにし、安全にするために、貢献しているのである。もし人々が宗教教育を全廃してしまい、そして、宗教と等価値のものによって補うこともせず、今日の人類から宗教教育によって保たれている宗教的＝信仰的な規準――それはその実際的意味では倫理的＝道徳的原則であるが――をとりさってしまうと仮定するならば、人々はその結果、人間存在の基礎が強く動揺することがわかるだろう。

かくして人間はたしかに、高い理想に奉仕するために生きているばかりでなく、また逆にこの高い理想が人間としての存在の前提をなしていると考えてよい。そのように循環が形づくられているのだ。

すでにこの「宗教的」という一般的表現の中にはもちろんまた、たとえば霊魂の不滅とか、存在の永遠さとか、神の存在等の個々の原則的な考え方や確信が存在している。ただしこれらの考え方はすべて、それが個人にとってはどれほどなっとくのいくものであっても、感情的な予感や認識が疑いを許さぬ信仰の合法的な力を得ない間は、これらの個々の人々の批判的吟味のもとにあり、したがって肯定あるいは否定という動揺状態にあるものである。この疑いを許さぬ信仰こそ、まず第一に、宗教

的な根本的観念を認めることに突破口を開き、道をつくってやる闘争の原動力なのだ。
この明確なはっきりした信仰なしには、宗教心はその不明瞭な多様性のために人間生活にとって価値がないばかりではなく、おそらくは一般的混乱をもたらすことになるだろう。

民族的感覚から政治的信条へ　「民族主義的」ということばについても、「宗教的」な概念と同じようなことがあてはまる。また民族主義的ということばにも、すでにさまざまな根本的認識がそこにある。これらの認識もまたりっぱな意義をもっているかも知れないが、形式が明瞭でないために、ある政党のわく内で根本的な要素として把握されるときには、多少とも認めるにたる意見にまで、その価値をまず高めなければならない。というのは、ただ漠然と憧れているだけで自由を獲得することができないのと同じように、一つの世界観に合った理想とその理想から導きだされた要求というものは、人間の純粋な感情や内心の欲求だけでは実現できないからである。そうだ、独立への理想の衝動が、戦闘組織を軍事的権力手段という形で獲得したときにはじめて、民族のその渇望している要求は、りっぱな現実にうつすことができるのである。

すべての世界観というものは、それがまったく正しく、人類のためにこの上もなく価値あるものであっても、その根本原則がある闘争運動の旗印にならないときには、民族生活の実際の形成にとっては無意味なものであろうし、また一方その活動が理念の勝利として終りをつげ、その党のドグマが一民族の共同社会の新しい国家的原則を形成しないかぎり、党として存在していかねばならないのだ。

しかし、ある一般的な精神的観念を、将来の発展の基礎として役だたせようとするならば、さらにその第一の前提となるものは、この観念の本質、種類および範囲について徹底的に明らかにするとい

うことである。というのは、そういう基礎の上にこそ、それらの信念が内面的に等質性をえて、闘争に必要な力を発展せしめうるような運動が形成されるからだ。一般的観念から政治的なプログラムがつくられ、ある一般的世界観から一定の政治的信念が形づくられねばならないのだ。その信念は、その目標が実際に到達しうるものでなければならないから、ただ理念それ自体に奉仕するだけでなく、この理念の勝利獲得のために存在し、またそのために用いられる闘争手段についても、考慮を払わなければならない。綱領立案者が布告するような抽象的には正しい精神的観念に、政治家の実際的な認識が結びつかねばならない。そのように、人類の導きの星としての永遠の理想は、この人類の弱点を顧慮して、一般の人間の欠点によって挫折しないためにはじめから、遺憾ながら妥協せざるをえないようである。永遠の真理や理想というような国から、人間という小さな存在に可能なものをひき出し、それに具体的形態を与えるためには、民衆の心理を知るものが真理の探究者に協力しなければならない。

政治的信条から闘争団体へ　最高の真実ともいうべき一般の世界観的理想の観念を、一定の限られた厳格な組織をもった、精神的にも意志的にも統一的な政治的信念をもち、闘争しようとする団体に移行させることは、その理念の勝利の可能性というものが、その手ぎわよい実現だけにかかっているのだから、最も重要な仕事なのである。この真理を自分一人では多少ともはっきりと確実に感じており、一部のものはおそらく理解しているような数百万人の人々の群の中から、一人の男があらわれて、疑問を許さぬ力で大衆の動揺している観念界から確固たる原則をつくりだし、自由な波のまにまにただよっている精神界から統一的な信念と意志をもった固い岩石のような団結が生じてくるまで、

この原則の無比の正当さのために闘争を続けなければならない理由がここにあるのだ。
　こうした行動に対する一般的権利は、その必然性の中に根拠があり、その行動に対する個人的権利は、その成果の中に根底をもつのである。

＊

人種と人格に反対するマルクシズム　われわれが「民族主義的」ということばから、その意味に最もよく合った中核をとりだそうとするならば、次のようなことを確認することができる。すなわち、
　今日のわれわれのありきたりの政治的な世界観は、一般に、国家には実際それ自体に創造的に文化を形成する力が与えられているのだが、国家は人種的前提とはまったく関係なく、むしろ経済的必要から生まれてきたか、せいぜい政治的な権力欲から自然に出てきたものだ、という観念にもとづいている。この根本観念は理論的に首尾一貫した教育を続ければ、ある人種の原動力を誤認するばかりか、人格の過小評価にまで導くのである。というのは、個々の人種が一般的な文化形成能力について差異があることを否定することが、この最も大きな誤りをまた個々人の判断にも及ぼしてしまうにちがいないからだ。いろいろの人種の質が同一であるという仮定は、さらに民族についても、また個人についても同様な見方をさせる根拠になる。だから国際的マルクシズム自体はまた、実際上すでに昔から存在していた世界観的な立場と解釈を、一定の政治的な信条の形にユダヤ人カール・マルクスが転用したにすぎないのである。マルクシズムの教説の驚くべき政治的成功は、かような一般に昔からあった害毒の下地がなかったならば、決してできなかったであろう。カール・マルクスこそ実際に、だんだんと堕落していく世界の沼沢の中で、その最も本質的な毒素を予言者のするどい目で認識し、それを抽出し、この地上の自由諸国民の独立的存在を急速に崩壊せしめるために、魔術師のように濃厚な

溶液につくりあげた、百万人の中の一人であるのだ。しかし、これらのすべては自分の人種(4)のために行なったのだ。

このようにマルクシズムの教説は、今日一般に通用している世界観の簡潔な精神的抜萃(ばっすい)である。こういう根拠からみればたしかに、マルクシズムに対するわれわれのいわゆるブルジョア社会の人々のすべての闘争は不可能であり、まさしく笑止のいたりである。というのは、これらのブルジョア社会にも本質的にこれらの毒素が浸透しており、マルクシズムの世界観とは一般にもはやその程度と人物がちがうだけで、その世界観に忠誠を誓っているからである。ブルジョア社会はマルクス主義的であり、マルクシズム自体が世界を計画的にユダヤ人の手中に移そうとしているのに、特定の人間のグループ(ブルジョアジー)が支配する可能性を信じているだけなのだ。

人種と人格に立脚する民族主義的態度

これに反して民族主義的世界観は、人類の意義を人種的根源要素において認識するのである。それは原則として国家をただ、目的のための手段と見、そして国家の目的としては人間の人種としての存在を維持することと考える。だから民族主義的世界観は決して人種の平等を信じないばかりか、かえって人種の価値に優劣の差異があることを認め、そしてこうした認識から、この宇宙を支配している永遠の意志にしたがって、優者、強者の勝利を推進し、劣者や弱者の従属を要求するのが義務である、と感ずるのである。したがって原則的には、民族主義的世界観は自然の貴族主義的根本思想をいだき、この法則がすべての個体にまで適用されることを信ずるのだ。それは単に人種間にある種々の価値の差異を認めるばかりでなく、また一人一人の人間の価値にも差異があることを認めるのだ。群衆の中から、民族主義的世界観のために、個人の重要性がむ

き出しになる。こうして民族主義的世界観は、解体的なマルクシズムと反対に組織的に働く。民族主義的世界観は人類が理想的なものになる必然性を信ずる。なぜならば、また一方では、ここにこそ人類の存在のための前提を認めるからである。しかしながら、ある倫理的理念が、より高い倫理をもっている人種の生存をおびやかす場合には、民族主義的世界観はまた、その理念に生存権を許容することができない。というのは雑種化し、黒色人種化した世界では、すべての人間的な美や崇高というような概念や、人類の将来を理想化しようとするあらゆる観念が、永久に失われてしまうだろうからである。

ヨーロッパ大陸では、人間的な文化や文明は、アーリア人種の存在と不可分に結びついている。アーリア人種が滅亡し、あるいは没落したならば、この地球上は、ふたたび文化なき暗黒なヴェールにおおわれた時代に沈むにちがいない。

だが、民族主義的世界観から見れば、人類の文化の担い手を滅ぼすことによって、人類文化の存立をくつがえすことこそ、最も呪うべき罪である。あえて神の似姿を冒瀆しようとするものは、この奇跡の恵み深い創造主をおかし、楽園放逐に手をかすものである。

自由な力の競争の促進　そのようにして民族主義的世界観は自然の内的要求に応ずるのである。というのは、それはたえずより優れた高い相手側を育てるにちがいない力の自由な競争を復興させ、ついには最も優秀な人類がこの地上を獲得し、地球上、地球外の諸領域で自由に活躍する道が開かれるからである。

われわれはみんな、遠い未来に人類には問題が生ずるだろうが、それを克服するために最高の人種

だけが支配民族として、全地球上のあらゆる手段と可能性に支持されて、招かれるのだ、という予感をもっているのである。

＊

党のためのまとめ　そのようにして民族主義的世界観をその意味する内容にしたがって一般に定めていくと、千差万別の解釈に到達することはもちろんである。実際上、われわれは最近のドイツにできる新しい政党で、この世界観をもっていないものを見いだすことはほとんどない。けれども、これこそ他の多くの存在に対して自己の独自の存在を主張することによって、民族主義ということばの理解の種々相を示しているのである。そのように、統一的な統制組織によって指導されているマルクシズムの世界観にごったまぜの観念が対立しているのだ。すでに理念的にも敵の団結している戦線に対して印象がうすいのだ。勝利というものは、こういう貧弱な武器で得られるものではない！　まず、政治的に組織化されているマルクシズムによって指導されている――国際的世界観に対して、同様に統一的に組織され、指導される民族主義的世界観が対立するならば、同じような闘争エネルギーをもっている場合にも、勝利は永遠の真理の側に帰するであろう。

だがある世界観を組織的に把握することは、いつもその世界観を明瞭に定式化する基礎があってのみ行なうことができるのだ。そして、信仰に対してドグマがあらわしている関係が、形成されつつある政党に対する党の根本原理の関係としてそのままあてはまる。

それゆえ、このように民族主義的世界観は、国際主義のためにマルクス主義的政党の組織が、自由にやっているのと同じような闘争的代弁を可能ならしめている道具が作られねばならない。

国家社会主義ドイツ労働者党はこの目的を追求するのである。

民族主義的世界観の勝利のための前提が、こういう民族主義的概念を党のような形で確定することであるということは、こうした党を結成することに反対しているものすらが、少なくとも間接的には認めている次のような事実によって最もはっきりと示されるのである。すなわち、民族主義的世界観は決して誰か一人の「永代借地権」ではなく、たしかに数百万の人々の心の中にねむっているか、あるいは「生きている」と、大声で反対するものこそ、そういう観念が一般に存在しているというだけでは、もちろん、政党政治の形で典型的に代表している敵の世界観の勝利を少しも防止することができなかったことを表明しているのだ。もしそうでなかったならば、今日ドイツ民族はすでに巨大な勝利をおさめ、断崖の縁に立っているようなことはないにちがいないのだ。国際主義的世界観が勝利をおさめたのには、その代表として突撃隊のように組織された政党があったからだ。反対の世界観が屈服せしめられたのは、いままで統一的に形成されたその世界観の代表を欠いていたからであった。世界観というものは、その一般的観念を各人の自由な解釈にまかせておくのではなく、政治的組織のはっきりした、それとともにまとめられた形においてのみ、闘争し、勝利をおさめるのだ。

政治的信条の形成　それだからわたしは、一般的世界観の範囲のきまらない、形のない素材の中からその中核理念を抽出し、それを多少ともドグマのような形に鋳直し、この明確に限定されたものによって、それを信奉している人々を統一的にまとめていくことに、とくにわたし自身の使命があると考えたのだ。いいかえれば、国家社会主義ドイツ労働者党は一般的な民族主義的世界観の基本的思想の中から、本質的な根本特質をとりだし、実際の現実、時代、既存の人材および人間の弱点を顧慮して、そこから政治的信条をつくりあげたが、この信条はいまやそれ自身、大衆をできるかぎりがっ

ちりと組織して把握することによって、民族主義的世界観の闘争を勝利に導く前提を形づくっているものなのだ。

第二章　国　家

一九二〇年〜二一年のころに早くもわれわれの新運動は、今日まで生き残っているブルジョア社会の人々から、現存の国家の地位を否定するものであるとしばしば非難された。これを理由にして、いろいろの傾向をもった政党政治的盗賊騎士たちは、この未熟なやっかいな新世界観の布告者に対してあらゆる手段で圧迫を加え、闘う権利があるかのように推論した。人々はそのさい、もちろん今日のブルジョア社会の人々自身、国家という概念に対して何ら統一的なものを考えることができず、それに対して統一的な定義も存在せず、また定義を与えることもできないのだということをわざと忘れている。どっちみちドイツの国立大学で学説を説明する者は、往々にして国法学の教師として地位をしめているのがつねであって、かれらの最高の使命は、目下のところ、かれらのパンをうる糊口の道ともいうべき多少とも幸福な地位のために説明し、解釈することであらねばならない。国家の存立がありうべからざるものになればなるほど、国家の存在目的についての定義はますます不徹底な、わざとらしい、わけのわからないものになる。たとえば、その国家としての存在が、まさしく二十世紀の最大の奇形児を具象化しているような国[1]において、国立大学教授が国家の意義と目的についてかつて何か書くべきものがあったであろうか。国法学にかかわっている今日の教師に対して、真理探究の義務感などはなく、むしろ一定の目的に結びつくことが大切だということを考えた場合、これはむずかしい課題だ。しかしその一定の目的は、今日国家と称されている人間的メカニズムともいうべき問題に

なっている怪物を、いかなる犠牲をはらっても維持していくことだ、という。したがって、これらの問題を論議するさいに現実的観点をできるだけ避けて、そのかわり「倫理的」、「道徳的」、「道義的」、その他の理念的価値や課題や目標のごったまぜに専心するのも、驚くにあたらない。

国家についての三つの有力な考え方　ごく大ざっぱにいって、三つの国家観念を区別することができる。

㈠　国家を単純に、ある政府の権力のもとに、多かれ少なかれ自発的に集った人々の総和とみるグループ。

このグループに属するものが最も多い。特に今日、合法主義の信奉者がこの線にある。かれらの目からみれば、これらの全機構では一般に人間の意志はまったく問題にならない。かれらにとっては国家が存立しているという事実だけで、すでに神聖なる不可侵性が基礎づけられている。人間の頭脳からでたこういう精神錯乱を維持するために、人々はいわゆる、国家権威をまさしく犬がするように敬慕することが必要となる。こういう人々の頭では、一つの手段から即座に究極目的が作りあげられるのだ。国家はもはや、人間に奉仕するためにあるのではなく、どこかの官吏の最後の一人までをも含めて、人間が国家権威をあがめるためにあることになる。この安易な有頂天の崇拝状態が不安な状態に変らないためには、安寧と秩序を堅持するためにだけ、かれらのいう国家権威があるのである。そうなると国家権威はもはや目的でなく、いわんや手段でもなくなる。国家権威は安寧秩序について配慮している。そして安寧秩序のほうは国家権威の存在を可能ならしめてやっている、というところへふたたびもどってくる。すべての生活はこの両極の中で堂々めぐりをしているのである。

バイエルンではこういう考え方はまず第一に「バイエルン人民党」と称するバイエルンの中央党の政治屋が代表している。オーストリアでは黒と黄の旗印の正統派の人々がおり、ドイツ国自体でも遺憾ながら、しばしばいわゆる保守的分子たちがいるが、かれらの国家観念はこの道をたどっているのである。

(二)　第二のグループは、国家の存在に少なくとも二、三の条件をつける人々がそれに数えられねばならないだけ、数からいっても少ない。かれらは単に同一の行政だけでなく、できるならばまた**同一の言語**——たとい一般行政技術上の見地からだけであっても——であることを要求する。国家権威はもはや国家の唯一の独占的な目的ではなく、臣民の福祉の増進がこれに加えられる。「自由」の思想が——しかもたいていは間違っている自由の思想が、これらの人々の国家観にこっそりはいってくる。統治形式はそれが存在しているという事実だけでは不可侵のものとは考えられず、それが目的に合っているかということが吟味される。国家が古いという尊厳だけでは、現代の批判をまぬがれない。ともかく、これは、国家からまず第一に個人の経済生活に有利な状態を期待し、それゆえに、実際的観点から一般の経済上の損得の観点から判断する見方である。この観点の主要な代表者は、普通のわがドイツ・ブルジョアジーの人々、特に自由主義的民主主義者である。

(三)　第三のグループは数字上、最も少ない。

かれらは国家を、言語的に特色をもち、統一された国家を形成している民族の、たいていは非常に不明瞭(ふめいりょう)に考えられている**権力政治的傾向**を実現する手段と見る。統一的な国語にしようとするこの意志は、その場合、ただこの国家がそれによって対外的権力を増大させるための力ある基礎をつくろうとする希望だけでなく、それにおとらず、——そのうえに根本的にまちがっているが——国語統一に

よって、一定の方向への国家化を実現しうるという考え方を表わしているのである。

誤れる「ゲルマン化」の観念　過去百年間にこういう人々の中で、たいていは善良な信念からではあるが、「ゲルマン化」という言葉が濫用されたのを見なければならなかったのは、まことにいたましいことであった。わたし自身、青年時代にこのことばをまったく信じられないほどまちがった意味にとって、迷わされたことをいまでも記憶している。汎ドイツ主義の人々においてすら、オーストリアのドイツ人が、政府の助成的援助のもとに、オーストリアにいるスラブ民族のゲルマン化を必ず達成しうるにちがいないという意見を、当時聞くことができた。そのさい人々は、ゲルマン化が土地についてだけは行なうことができるが、決して人間にはそれがありえないということについて、少しもわかっていなかったのだ。というのは、人々が一般に「ゲルマン化」ということばの中に理解していたものは、強制されてドイツ語を外見上話すようになることだけであったからだ。だから、いうならば、黒人や中国人がドイツ語を学び終え、将来もドイツ語を話し、そしてドイツ政党のどれかに投票するからといって、かれらがゲルマン民族になるなどと信ずることは、ほとんど理解しがたい考えちがいである。こういうゲルマン化はすべて実際には悪ゲルマン化[2]であるということが、わがブルジョア的国家主義者たちにはとうていわからなかったのだ。というのは今日共通の言語を強要することによって、いままではっきりと目についた諸民族間の相違が解消し、ついに混淆(こんこう)されるならば、それは雑種化のはじまりであり、われわれの立場ではゲルマン化ではなく、かえってゲルマン的要素を滅ぼすことを意味するからであるからだ。歴史においても、征服民族が外的権力手段で被征服民族に自己の言語を強制することができはしたが、しかし千年後にはその言語が他民族によって話され、か

くして勝利者がほんとうの敗者になったということがしばしば生じているのだ。

民族性、より正しくいえば人種は、言語の中にあるのではなく、血の中にあるのだから、敗者の血をそういう過程によって変えることができるならば、そのときはじめて、ゲルマン化について語ることができるだろう。だがそれは不可能だ。混血によって変化させることはできるが、なんといってもそれはより優秀な人種の水準の低下を意味するのだ。そういうことをすれば、究極の結果は、かつて征服民族に勝利をもたらした特質をまさしく滅ぼすことになるであろう。特に、劣等人種と結婚した場合、生まれた混血児がどれほどじょうずに以前より優秀な民族の言語を話したとしても、文化的な諸力は消えてしまうであろう。当分の間はなおいろいろな精神の格闘がいくらかあるだろう。そして、だんだんと没落しつつある民族が、最後の火が消えんとする瞬間のようにある程度まで、おどろくべき文化的価値のあるものをあらわすことがあるかも知れない。けれどもそれは、ただ優秀民族に属する個々の要素か、あるいはまた混血児でも最初の雑交のさいに優秀な血がなお優勢をしめ、格闘しようとしたのであって、だが決して混血の結果生まれでたものではない。混血にはつねに文化的な逆行の動きが示されている。

今日、オーストリアでヨーゼフ二世がなした意味でのゲルマン化が行なわれなかったことは、幸いだったとみなければならない。もしもそれが成功していたなら、おそらく、オーストリア国家の維持には役立っていたであろうが、しかし、ドイツ国民の人種的水準は言語の共通化によって低下をおこしていたであろう。数世紀の間には、ある群居本能が結晶化するかも知れないが、しかし群衆自体の価値は低下しただろう。国家を形成する民族は生まれるかもしれないが、文化をつくる民族は失われたにちがいない。

この混血の過程が中止されたことが、すぐれた見とおしからではなく、ハープスブルク家の近視眼的な偏狭固陋さのためであったとしても、ドイツ国民にとってはよかった。もしそうでなかったならば、ドイツ民族は今日もはや、文化の原動力といわれることができなかったであろう。

しかしオーストリアだけでなく、ドイツ本国においてさえも、いわゆる国家主義者たちが、同様のあやまった思考過程に動かされたし、いまでも動かされているのだ。東部をゲルマン化するという意味で、多くの人々が要求したポーランド政策は、遺憾ながら、ほとんどいつも同様な故意にまちがった論拠に立っていた。ここでも人々はポーランド分子のゲルマン化が、かれらを純粋に言語上ドイツ化することによって招来することができる、と信じていた。ここでもまた、その結果は不幸なものになったであろう。すなわち、人種の異なった民族がドイツ語で異なった思想をあらわし、われわれ独自の民族性の優秀さと尊厳が、かれら独自の劣等さと凝結されるのだ。ユダヤなまりのドイツ語を話すユダヤ人がアメリカへ行った場合、多くのアメリカ人がそれを知らないために、われわれドイツ人の勘定に入れられる。このようにして、間接的にわれわれドイツ人につけ加えられる害は、今日すでに実におどろくべきものである。しかし、東部からのこのシラミだらけの移住民族が、たいていドイツ語を話すという純粋な外面的事実で、ドイツ人の系統やドイツ民族に属するものだという証拠になるとは、誰も考えないだろう。

土地だけをゲルマン化すべし　歴史の中で有効にゲルマン化されたものは、われわれの祖先が剣をもって獲得し、ドイツ農民を移住させた土地であった。しかしそのさい、かれらがわが民族の肉体に異民族の血を混入したかぎりでは、かれらはわれわれの内面的本質を不幸にも分裂させることにな

ったのだ。それが――残念ながら、しかもいつもほめそやされる――ドイツ的超個人主義の形で効力を発するのだ。

この第三のグループの人々にとっても、国家はやはりある意味で、それ自体が目的であり、それゆえ国家の維持ということが人間存在の最高の課題となるのだ。

以上は次のように総括することができる。すなわち、これらの観念はすべて、文化形成力や価値形成力が本質的に人種的要素に根ざし、こうして国家はその意味で人種の維持、向上という、あらゆる人類文化の発展の根本条件を最高の課題としてみる、という認識にその最も深い根をおろしていないのである。

国家の本質と目的に関するこの誤った観念や観点を極端に追求した結論は、そのうえユダヤ人マルクスによって出されたのだ。すなわち、ブルジョア社会の人々は国家概念を人種的義務からきりはなすことによって、――他人が一様に認めることができる定式に達しうることなく――かれら自身、国家そのものを否定するマルクシズムの教説に道を開いてやったのだ。

だから、この領域だけをとってみても、マルクス主義インターナショナルに対するブルジョアジーの闘争は、まったく思うようにならないのだ。ブルジョアジーは、かれら独自の理念の世界を維持するためにどうしても必要な基礎自体を、とっくに犠牲に供していた。老獪（ろうかい）な敵はブルジョアジー独自の基礎が弱いのを認識して、ブルジョアジーが欲しなかったにせよ、現にかれら自身が提供した武器でもって反対に攻撃するのである。

だから民族主義的世界観の基礎に立つ新運動にとっては、国家の本質と存在目的に関する見解に、統一的形式をもたせるように配慮することが、第一の義務である。

国家はそれ自体目的ではない　そこで根本的な認識は次のようである。**国家は目的でなく、手段である。国家は、もちろん、より高い人類文化を形成するための前提ではあるがその原因ではない。その原因はむしろ文化を形成する能力のある人種の存在にのみあるのである。**地球上に幾百の模範となるような国家がありうるとしても、文化を担っているアーリア人種が死滅したならば、今日の最も優秀な民族の知的な高さにふさわしい文化というものは、存在しえないだろう。さらにもう一歩進めて次のようにいうことができる。すなわち、優秀な知的能力と弾力性が、その担い手となる人種がないために失われたとするならば、そのかぎりで、たとい人類が国家を形成したとしても、必ずや人類は滅亡にひんするだろう。

たとえば、今日、地球の表面がなにか構造上の異変によって不穏になり、洋々たる大洋の中から新しいヒマラヤのような山々が生じてくるならば、ただ一回の人類の恐しい破局で文化は滅びるだろう。もちろん、国家は存続せず、あらゆる秩序の紐帯(ちゅうたい)は解け、幾千年の発展の証拠は破壊され、唯一の水と泥濘(でいねい)のみちあふれる大きなしかばねの荒野になるであろう。だが、もしこのおそろしい混乱の中から一定の文化創造力のある人種がただの数人でも生き残るならば、たとえ千年後であろうとも混乱が平静に帰した後に、地上にはふたたび、人間の創造力の証明があらわれるであろう。ただ、文化創造力ある人種、その個々の担い手の最後の一人が滅びてしまうと、地上は究極的に荒廃するだろう。反対に、われわれ自身が、現在の例を見るならば、国家の形成がそのそもそものはじめに、その人種の担い手が創造性に欠ける場合には、この国家は没落を防ぐことはできないのである。太古の大動物が他の動物に屈服し、完全に滅び去ったと同じように、人間もまた、人間の自己保存に必要な武器を発

明する特定の知的能力を欠くならばそれだけで屈服するにちがいない。

文化的な高さは人種によってきまる　国家それ自体が一定の文化的な高さを創造するのではない。国家はただ文化的高さの原因をなす人種を維持しうるだけである。そうでない場合には、国家それ自体は幾世紀も同じ国家として存続するかも知れないが、その間に国家が人種の混合を防止しない結果、文化的能力とそれによって条件づけられる民族の一般的な生活像は、とっくにはなはだしい変化をこうむっているであろう。たとえば、今日の国家は形式的な機構としてなおかくも長く、その存在をさもありそうにみせかけることができるが、しかし、わが民族体の人種的な中毒は、今日すでに恐しいまでに現われてきている文化的没落をまねいているのだ。

そのように優秀な人類の存立の前提となるものは、国家ではなく、この目的のために能力を有する民族なのである。

この能力は、原則的にはいつも存在しているが、一定の外的条件を備えることによってのみ、実際的成就にもたらされねばならないのである。文化的、創造的な才能を与えられている国民、あるいはもっとよくいえば人種は、たとえ不都合な外的環境がこの素質を現実化することを許さない時にも、潜在的にこの有用性を自己の中にもっているのである。それゆえ、キリスト教以前のゲルマン民族を「文化なきもの」、野蛮人と称することは、またたいへん不法なことなのである。かれらは決してそのようなものではない。ただ、北方の郷土の峻厳さが、かれらの創造力の発展をさまたげる事情のもとに、かれらを強いていたにすぎないのだ。もしもかれらが、古代ギリシア、ローマの世界がなかったとしても、南の気候のよい広野に来て、劣等民族の素材の中に、最初の技術的手段を獲得していたな

らば、かれらの中にまどろんでいた文化形成力は、たとえばギリシア人の場合のようにまさしくらんまんたる花を開いたであろう。しかし、この文化創造の原動力自体は、また、北方性の気候からだけ生ずるのではない。ラップランド人[3]を南へつれてきても、エスキモーと同様にほとんど文化らしいものをつくりえないであろう。そうだ、このすばらしい創造的な形成能力は、まさしくアーリア人種に授けられたものであり、かれらがこれを自己の中に眠らせておくか、あるいは目覚めた生活を与えるかは、よい環境がこれを許すかあるいは荒涼たる自然がこれをさまたげるかによるのである。

ここから、次のような認識が生ずる、すなわち、

国家社会主義の国家観　国家は目的のための手段である。国家の目的は同種の人間の共同社会を肉体的および精神的に維持し、助成することにある。この維持ということ自体は、第一に人種的存立を含んでおり、かくしてこの人種の中にまどろんでいるあらゆる諸力を自由に発展させることを許すのである。この能力のうち、一部はつねに、まず第一に、肉体的生活の維持に役立ち、他の部分のみが精神的発展の促進に役立つのだ。だが、事実上、つねに前者は後者の前提をなすのである。この目的に奉仕しない国家は、できそこないであり、実に奇形である。かかる国家が事実上存在したとしても、海賊団の成功が略奪行為を正当化することができないのとかかわりない。

われわれ国家社会主義者は、新しい世界観の主張者として有名な「事実——ただし、そのうえ誤っている——の基礎」に立ってはならない。こういう場合には、われわれはもはや新しい偉大な理念の主張者ではなく、今日のうそつきのクーリーになるだろう。われわれは容器としての国家と、内容としての人種との間を、このうえもなく厳然と区別すべきである。この容器はその内容を維持し、保護

することができた時にこそ意味をもつのであり、そうでない場合には無価値である。
それゆえ、民族主義国家の最高の目的は、文化供給者としてより高い人類の美と品位をつくりだす人種の本源的要素の維持を心がけることである。われわれはアーリア人種として、国家のもとに、この民族の維持を保証するだけにとどまらず、その精神的、理念的能力をいっそう育成することによって、最高の自由にまで導く民族のいきいきした有機体だけを考えることができるのである。

けれども、今日、われわれに国家として押しつけようとしているものは、たいていは、その結果としてあらわれる、いうにいわれぬ悲しみをともなった、最も深い人類の迷いの産物にすぎない。

われわれ国家社会主義者は、こういう観念でもって、今日の世界では革命家として立っており、また、革命家として烙印をおされることを知っている。だが、われわれの思想と行動は、決してわれわれの時代の賛否によってきめられるものではなく、われわれが認識した真理に結びついている義務によって、きめられるのである。さらにわれわれは、後世のより高い洞察がわれわれの今日の行動を、理解するにとどまらず、正当なものとして確認し、尊敬するだろうということを確信してよいだろう。

*

国家の評価の視点　以上のことからまた、われわれ国家社会主義者にとって、国家を評価するための規準が生ずる。この価値は個々の民族の視点からみれば相対的であろうが、人類そのものの視点からみれば絶対的なものである。いいかえれば、

ある国家の価値は、他の世界と比較して、この国家が文化的にどれほど高いか、あるいはどれくらい勢力があるかによって評価されることができるのでなく、その場合問題となる民族にとって、この制度[4]がどの程度の価値があるかということによってのみもっぱら評価できるのである。

ある国家が、それによって代表されるべき民族の生活条件に適応しているばかりでなく、まさしくその国家が存在しているからこそ、この民族が実際に存在していくことができるのだというとき、その国家は模範的なものと称することができる。——その場合その国家の構造が、他の世界において、どの程度一般的文化的重要性をもっているかも、まったく同じに考えられる。というのは、国家の課題は、能力をつくりだすことではなく、いまある力を自由にのばすことだけにあるからである。**それゆえ、逆に、ある国家がどんなに文化的に高くとも、人種的に複合せられて、この文化の担い手を没落に導くならば、その国家は劣等国だということができる。**というのは、その国家は実際に国家がつくり出したものではなく、いきいきした国家的なまとまりによって保証されている文化創造力ある民族の結実たる、この文化の存続のための前提を、実際上それでもって破壊してしまうからである。国家はまさしく内容でなく、形式である。それゆえ、**ある民族のその時々の文化的な高さは、国家の価値をはかる尺度とはなりえない。**その国家の中で、民族が生活しているのだけれども。文化的に高い天分に恵まれた民族が、黒色人種よりも価値の高い文化をつくりだすということは、非常に明白である。それにもかかわらず前者の国家組織が、国家としての目的遂行という点からみれば、黒人国家よりも劣っていることもありうるのだ。たとい最善の国家が存在し、最善の国家形式をもっていようとも、能力がまったく欠けており、能力が存在していないなら、その民族から能力をひきだすことはできない。そのように、もちろん、劣等な国家があり、人種的に文化を担っているものの堕落を国家が許容し、あるいはそのうえ促進することによって、本来その民族に存在した能力が、次の時代には死滅してしまうことがある。

それだから国家の価値についての判断は、まず第一に国家が一定の民族に対してもっている相対的

な有用さによってだけ決められるものであって、決してその国家自体が世界において占める重要性によって決められるのではない。

この相対的な判断は、簡単にすることができる。ただ絶対的価値についての判断は、この絶対的判断が、本来単に国家によって定められるものでなく、むしろその時々の民族の価値と高さによって決められるのであるから、非常に困難である。

だから国家のより高い使命について語るとき、そのより高い使命は、本質的に民族の中にあるのであって、国家は国家存在という有機的な力によって、民族にその自由な発展を可能ならしめるだけである、ということを決して忘れてはならない。

したがって、われわれドイツ人に必要な国家はいかにしてえられるべきであるか、と問うならば、われわれはまず、その国家は人間というものをどう理解しているか、国家はいかなる目的に奉仕すべきか、を明らかにしなければならないのだ。

人種的分裂の結果　遺憾ながら、わがドイツ民族はもはや統一的な人種的中核を基礎としていない。種々の人種の構造要素が融合する過程は、このようにして新しい人種がつくられたといいうるまでにはまだ進んでいない。反対である。すなわち、特に三十年戦争[5]以来、わが民族体がつきあたった血の害毒は、われわれの血を分解に導いただけでなく、われわれのそういう精神までも解体に導いたのだ。わが祖国の国境が開放されていることや、ドイツ国の領域に非ゲルマン的異民族が寄居していたこと、だが、とりわけドイツ国自体の内部に異民族の血が今日まで強く流入してきたことによって、その絶えざる更新のために、完全に融合する時間がなかったのだ。新しい人種がつくられるよりも、

むしろいろいろな人種的要素が並存しており、その結果、特に一つの群ならば集まるのがふつうである危急のさいに、ドイツ民族は、風向にしたがって四分五裂におちいるのだ。人種上の基礎的要素が地域的にいろいろにわかれて住んでいるだけでなく、同一地域にもいろいろの人種が住んでいるのである。北欧系[6]の人間とならんで高山系[7]が、高山系とならんでディナール族[8]がおり、その両者とならんで、ヴエスティッシュ族[9]がおり、その間に混血民族がいるというぐあいである。これは一方では非常に不利である。すなわち、ドイツ民族には単一な血の中に基礎をもち、特に危急のさいに、そのような諸民族であったならその場合すべてのささいな内部的相違をすぐさま投げすて、共通の敵に対して統一した群の団結した戦線をつくって対抗し、国民を没落から護るという、あの確固たる群集本能が欠けているのである。人々がわれわれをさして、超個人主義ということばで呼ぶものは、種々の人種上の根源的要素が混合せずにいて、純粋な形で並存していることによるのだ。平和な時代には、この超個人主義はしばしば、役に立つかもしれない。だが、要するにこの超個人主義がわれわれの世界制覇を失敗させたのだ。ドイツ民族がその歴史的展開の中で他の民族に利益となったような団結した統一をもっていたならば、今日ドイツ国はおそらく地球上の女王になっていたであろう。世界史もちがった姿をみせていたであろう。そして、さらに今日多くの目のくらんだ平和主義者がめそめそ泣きわめけば、恵んでもらえると思っているようなことも、こういうやり方で実現しえないとは、いかなる人も断言することはできないであろう。すなわち、**平和というものは、めそめそした平和論者のような泣き女のシュロの葉によって維持されるのではなく、世界をより高度の文化のために役だたせようとする支配民族の勝利の剣によって樹立されるものだ。**

血統上の単一な民族がなかったという事実が、われわれを名状しがたい苦難におとしいれたのだ。

それは、多数のドイツの小君主に王城を与えることにはなったが、ドイツ民族から支配者となる権利をうばってしまったのだ。

今日でもなお、わが民族はこの内部分裂になやんでいる。だが、過去および現在において、われわれに不幸をもたらしているものが、未来においては、われわれの幸福となることもできる。というのは、われわれの本源的な人種の構成要素の完全な混血ができあがっておらず、したがって、統一的な民族体の形成がさまたげられたということは、一面ではまた非常に損であったが、他面では、それによって少なくとも、われわれの最良の血が一部分純粋に保たれ、人種的低下をまぬがれたという点で非常に幸いだったのだ。

たしかに、われわれの人種的な原要素(10)が完全に混血していたならば、一つの団結した民族体ができあがっていたであろう。だが、それはあらゆる人種雑交が示しているように、元の人種の構成要素の中の最高のものが本来もっていたよりも、劣った文化能力をもつものによってみたされていたであろう。完全な混血がなされずにいたこと、すなわち、今日もなお、われわれドイツ民族体の中で混血せずにいる大部分が、わが将来にたいして最も価値ある宝物を見ることができる北方ゲルマン系の人々であるということは、幸いである。人間は人間としてまったく完全に同じ価値をもっていると見るような、あらゆる人種法則について無知な陰鬱（いんうつ）な時代においては、個々の人種的原要素に差があるということを明らかにすることが欠けていたのかも知れない。わが民族体の構成要素が完全に混合していたならば、それによってできあがった統一のために、おそらく外面的な力を与えられたでもあろうが、しかし、運命が明らかに人類の最高目標を実現するために選びだした唯一の担い手が、統一民族という一般的な人種の雑煮の中で没落して、人種の最高目標を達成しないものになっていただろう、とい

うことを今日われわれは知っているのだ。

だが、われわれの力添えなしに、恵み深い運命によって防止されてきたことを、われわれは今日、新しく獲得された認識の観点から、検査し、利用せねばならない。

ドイツ民族の使命　地上でのドイツ民族の使命について語るものは、その使命がわが民族の、むしろ全人類の最も貴重な無傷で残っている構成要素を維持し、促進させることを、その最高課題と見るような国家を形成すること以外にない、ということを知らねばならない。

それによって、国家は、はじめて内面的な最高目標を保持するのである。平和的におたがいがうそをつきあうことができるための、安寧秩序を維持するという笑うべきスローガンに対して、全能の神のめぐみによってこの地上につくられた最もすぐれた人類を維持し、助成するという課題は、まことに尊い使命であるように思える。

ただ、自分自身のためにのみ存在を要求する、死んだメカニズム的国家観の中から、高い理想に奉仕するという唯一の目的をもったいきいきとした組織が形成されねばならないのだ。

国家としてドイツ国はこの民族の中から人種的原要素として最も価値ある部分を集め、維持するばかりでなく、徐々に確実に支配的地位に高めるように導いていく課題をもったすべてのドイツ人を包含すべきである。

＊

国家——生存競争における武器　それとともに、根本において硬直した状態のかわりに闘争の時代が来るのだ。だが、この世の常であるが、ここでもまた「使わぬ鉄はさびる」とか、さらに勝利は

つねに攻撃にのみある、ということばがあてはまるのである。そのさい目前に彷彿としている闘争目標が大きければ大きいほど、そして、大衆がその目標に対して理解していることが少なければ少ないほど――世界史の経験にしたがえば――その効果はいっそう巨大なものである。そして、さらにこの目標が正しく把握され、闘争が揺るぎなき堅忍さで遂行されるならば、この成果の意味もますます巨大なものになる。

今日の官職にあるわが為政者の多くのものにとっては**所与の**状態を維持するために働くほうが、**きたるべきもの**のために闘争しなければならないより、もちろん安心できるかもしれない。かれらは国家というものを単純に、かれら自身の生存を保つためにあるメカニズムであると見、逆にかれらの生存は――かれらがいつもいうように――「国家に属している」と見るほうが、ずっと容易に感ぜられるのである。ちょうど、民族から生まれてきたものが論理的に民族以外の他のものに奉仕しうるとか、あるいは人間は人間以外のもののために働くことができるかのようである。**右にのべたように、国家権威を、地球上のある民族の自己保存衝動の至高の権化として見るよりも、ただある組織の形式的メカニズムと認めるほうがもちろん容易である。**というのは、後者の場合には、貧弱な精神をもっているものにとっては、**国家も、国家権威**もともにすでにそれ自体目的であるが、しかし、前者の場合には、それらは存在をかけての永遠の大生存競争に奉仕する強力な武器にすぎず、それは形式的なメカニズムではなく、生命維持のための共通の意思の表示であるから、各自が従うべき武器にすぎないからである。

だから完全に事物の本源的意味に応じたわれわれの新しい観念のための闘争においても、単に肉体的のみならず、遺憾ながら往々にして精神的にも、時代おくれになった社会からは闘争協力者をほと

んど見いだすことができないだろう。ただ、老人でも若々しい心と新鮮な感情をもった例外者は、こういう層からも、われわれのところへくるであろうが、かれらの生活問題の最後の意義が所与の状態の維持にあると見ているものは、決してこないであろう。

世界史は少数のものによって作られる　悪意はないが無批判で無関心な、あるいは現状の維持にだけ興味をもっている無数の大群が、われわれに対立している。われわれが強力に闘っても、勝利の見込みはなさそうに思えるが、まさしくわれわれの課題の偉大さやその成果の可能性の基礎がそこにあるのである。小心者を、はじめから追いはらってしまうか、あるいは気おくれさせてしまうときの声、これが真の闘士の集合の合図になるのだ。そして、以下のことを、人々ははっきりしておかねばならない。すなわち、ある民族から最高のエネルギーと実行力をもった一定数のものが、一つの目標のために団結して現われ、したがって、大衆の怠惰さから決定的にぬけだしたならば、このわずかのパーセントのものは全体の支配者に高まったのである。そのときに世界史は少数者によって――数におけるこの少数者の中に意志と決断力の多数者が顕現するとき――作られるのである。

それゆえ、今日多くのものには、困難に思えるかも知れないものが、実際には、われわれの勝利の前提なのである。まさしくわれわれの課題の偉大さや困難さの中にこそ、闘争のために最良の闘士だけが見いだされる確率が多いのだ。そして、このような選抜の中にこそ成功に対する保証があるのだ。

＊

雑種の劣等さ　一般に自然は地上の生物の種族の純粋さの問題において、ある種の矯正をする立場に立っているものだ。自然は雑種をあまり好まない。特に、第三、第四、第五世代あたりの雑交の

初期に生まれてくるものは、はなはだしく苦しまねばならない[11]。かれらは本来の最高の成分のもっている価値を、雑交によって失ってしまうのみならず、血の統一を欠いているために、生存一般のための意志力や決断力の統一をも欠いているのである。人種的に統一している存在であれば、正確なしかも統一的な決断をくだすようなあらゆる危機的な瞬間にも、人種的に分裂しているときには、不安定になったり、あるいは、中途半端な処置しかとれないのである。このことは人種的に分裂している場合は、人種的に統一している場合にくらべて確実に不利なばかりでなく、実際にも急速に没落する可能性があることを意味している。**純種がもちこたえる場合でも、雑種が耐ええない場合は無数にある。**ここに自然の矯正を見ることができる。しかし、これがさらに一歩進んだ場合が往々にしてある。自然が雑種の生殖の可能性を制限するのだ。こうして、自然は雑交一般によって繁殖しつづけることをさまたげ、死滅をもたらすのである。

このようにたとえばある人種において、一人のものが人種的に劣っているものと結合したとするならば、その結果はまず、水準自体が低下するだろうが、さらに子孫が人種的に混血していない周囲のものに比して虚弱化するだろう。最もすぐれた人種の側からの血がそれ以上混入することを完全にさまたげられるならば、お互いに雑種同士の雑交をつづけることによって、雑種は自然によって抵抗力が低下させられるために死滅するか、あるいは幾千年かの間には種々雑多な雑交によって、本来の単一な要素が完全に混合し、したがってその単一な要素がもはや認められないような新混血物が形成されるであろう。それとともに、新民族が一定の集団的抵抗能力によって形成されるかも知れないが、しかし、第一次の雑交のさいに協力した最後の純種と比較すれば、その精神文化的意義は本質的に低下するであろう。しかしまた、このように新民族が形成される場合でも、よりすぐれた混血しないま

まの単一人種が競争相手としてあるかぎり、混血民族は互いの生存競争において負けてしまうであろう。幾千年もの間に集団的に形成せられ、内面的に緊密なまとまりをすべてもつようになったこの新しい民族はそれにもかかわらず、人種としての水準が一般に低下し、それが原因で精神的弾力性と創造的能力が制限されて低下しているために、同様に統一的な、しかし、精神的、文化的にすぐれている人種と戦争した場合、勝利をおさめるには十分でないのである。

かくして、次のような価値ある命題を立てることができる。すなわち、

人種の自然的更新過程　**すべての人種雑交は、この雑交自体の場合にすぐれていた部分が、なお純粋に、とにもかくにも人種的な統一において存在しているかぎり、雑種のほうは遅かれ早かれ、いつかは没落するであろう。**優秀な人種的純粋さをもつ最後の一人が雑種化したときに、雑種にとっての危険がはじめて除かれるのである。

なお、人種的に純粋な根幹が存在し、そしてそれ以上雑種化が行なわれないかぎり、たとえ、かんまんな自然の更新過程が基礎となっているものではあるが、人種的中毒をふたたび徐々にのぞいてくれるものがそこに存在するのである。

こういう経緯は、強い種族本能をもった生物の場合は、ただそれが特殊な環境や、ある特別な強制によって正常な、種族的に純粋な生殖の道から投げだされたときに、ひとりでにはじまるものである。この強制状態が終るやいなや、まだ純粋のままに残っている部分はただちにまた同族間の結婚につとめ、かくして、それ以上の混血に停止を命ずるようになる。雑種の数がすでに無限に増加してしまっていて、純種のままいるものが真剣に抵抗しても、もはや問題にならないならば別だが、雑種化の結

果は、それとともにふたたびみずから背後に沈んでしまうのである。

人種混合の危険　けれどもひとたび本能を失ってしまい、危急の場合自己に課せられた義務を見そこなうような人間は、その失われた本能をはっきりした認識によって補充しないかぎり、一般に自然の側からするそういう矯正を期待することができない。必要な補償活動を行なうためには、こういう認識が必要なのだ。けれども、ひとたび盲目になった人間が人種のさくをどしどし破って、ついには自分の最良部分の最後の残部までも失うという危険は非常に大きい。その場合実際には、今日の悪評高い世界改良者たちが理想として念頭にうかべる以上に、統一の雑煮が残るだけである。だが、そのごった煮は、やがてこの世界から理想を追いはらってしまうだろう。もちろん、**大群集はこうして形成されうるかもしれない。群居動物を人々はつくりあげることができるだろう。しかし文化担当者としての、なおもっと正しくいえば、文化の基礎をつくるもの、文化を創造するものとしての人間は、決してこういう混血からは生じないのだ。**人類の使命はそれと同時に終ったと見ることができる。

地上がこういう状態におちいることを欲しないものは、まず第一に、これ以上の混血化が根本的に停止されるように配慮することが、なによりもまずゲルマン諸国家の課題である、という考え方にもどらねばならない。

今日のドイツの周知のような弱虫の世代人たちは、もちろん、ただちにこれらに反対してわめき、この最も神聖な人種の侵害について嘆き、ぶつぶついうだろう。**そうだ。最も神聖な人権はただ一つあるだけである。そして、この権利は同時に最も神聖な義務である。すなわち、それは最もすぐれた人類を保持することによって、人類のより尊い発展の可能性を与えるために、血を純粋に保つように**

配慮することである。

それとともに民族主義国家は、人間とさるとの間の生まれぞこないでなく、神の似姿を生むことを任務としている結婚に神聖さを与えるために、まず第一に、結婚を絶え間ない人種汚辱の水準から高めてやらねばならない。

いわゆる人道的な根拠から、これに対して抗議することは、今日の時代は一方では、堕落しつつあるすべてのものに増殖の可能性を与え、生まれてくるもの自身にも、また同時代の人々にもいうにいわれぬ苦しみを負わせているのである。他方ではどの薬屋にも、どんな露天商人でさえも、最も健全な夫婦までもが出産をさまたげるための道具が売り出されているのに、だ。今日のこの安寧秩序の保たれている国家において、その代表者、この勇ましいブルジョア的国家主義的社会の人々の目には、かくのごとく、梅毒患者、結核患者、遺伝的悪質者、身体障害者や精神遅滞者の断種は犯罪であるが、これに対して最もすぐれた幾百万の人々が子供を生む能力を実際に阻止していることは、なんら悪とは見られず、この偽善社会の良俗にもとらず、むしろ近視眼的な無批判さから、有益であるとされているのだ。というのは、さもなければ人々は、その人々の養育と維持のための前提をいかにつくるかについて、少なくとも絶えず頭をなやまさねばならなかったであろうからだ。しかも、その人々はわが民族の健全な担い手として、他日生まれきたる子孫に関して、同様な課題に奉仕すべきなのだ。

民族主義国家と人種衛生　こうしたすべてのシステムが、いかに法外に理想からはなれており、下品であることか！　人々はもはや、後世のために最良のものを育てあげようと努力せず、ものごとを流れるままにまかせてしまうのである。そのさい、また、神の似姿の意義をいちばん強調している

わが教会も、神の似姿を冒瀆(ぼうとく)していることは、つねに精神について語りながら、その精神の担い手たる人間を、堕落せる下品な人間におとすという教会の今日のやり方とまったく同じ線上にあるのだ、それならそれでよいが、自国においてはキリスト教信仰の効力が少ないとか、この肉体的には台なしにされ、それとともにとうぜん精神的にもおちぶれた悲惨なゲスどものおどろくべき「無信仰」について、バカ面して驚き、そのかわりにホッテントットやズール族(12)に教会の祝福を与えてその成功でつぐなおうとする。われわれヨーロッパ諸民族が、肉体的、道徳的にハンセン病のような状態におちいって、ありがたいことだ、と没落しているのに、敬虔(けいけん)な宣教師は中央アフリカを歩きまわり、われわれの「高級な文化」が、そこでもまた、原始的で低劣ではあるが健全な人の子から腐敗した雑種の子をつくるようになるまで、黒人の宣教をするのだ。

われわれの両キリスト教会(13)が、望んでもいないし、わかりもしない黒人に宣教して重荷を負わせるかわりに、わがヨーロッパの人々に、健康でない両親の場合に、病弱で自分自身もまた他の世間の人々にも、ただ不幸と苦しみをもたらすにすぎない子供を生むよりは、健康で貧しい小さい孤児をあわれんで、父母を与えること(14)のほうが神の意にかなう仕事であるということを、親切に、だが真剣に教えたほうが、はるかにこの世の最も尊い意味にかなうだろう。

今日、この領域であらゆる方面が、おろそかにしているものを、民族主義国家は埋めあわせるべきだ。民族主義国家は、人種を一般的生活の中心点に置かねばならない。民族主義国家は人種の純粋保持のために配慮しなければならない。民族主義国家は子供が民族の最も貴重な財宝であることを明らかにせねばならない。ただ健全であるものだけが、子供を生むべきで、自分が病身であり欠陥があるにもかかわらず子供をつくることはただ恥辱であり、むしろ子供を生むことを断念することが、最高

の名誉である、ということに留意しなければならない。しかし反対に、国民の健全な子供を生まないことは、非難されねばならない。その場合国家は、幾千年もの未来の保護者として考えられねばならず、この未来に対しては、個人の希望や我欲などはなんでもないものと考え、犠牲にしなければならない。国家はかかる認識を実行するために、最新の医学的手段を用いるべきである。国家は何か明らかに病気をもつものや、悪質の遺伝のあるものや、さらに負担となるものは、生殖不能と宣告し、そしてこれを実際に実施すべきである。これに対して逆に国家は、国家の財政的にだらしない経済管理のために、子だくさんが両親にとってのろいとなり、健全なる女子の受胎が制限されることのないように、こころがけねばならない。国家は、今日、子だくさんの家族の社会的前提を無関心に取扱っているが、このずるい、犯罪者的な無関心を一掃して、国家自体が民族の最も貴重な祝福に対する最高保護者としての立場に立たねばならない。国家は成人よりももっと子供のことを心配しなければならない。

肉体的にも精神的にも不健康で無価値なものは、その苦悩を自分の子供の身体に伝えてはならない。民族主義国家はこの点で、巨大な教育活動をなすべきである。だがこの教育活動はいつかまた、今日のブルジョア時代の戦勝よりも、もっと偉大な事業としてあらわれるであろう。国家はこの教育によって、病身であったり、虚弱であったりすることは、恥ではなく、ただ気の毒な不幸にすぎず、しかし、この不幸を自分のエゴイズムから、何の罪もない子供に負わすことによって汚名をかぶせることは犯罪であり、したがって同時に恥辱であり、これに対して罪のない病人が自分の子供をもつことを断念し、自分の民族の健全さのために、他日、力強い社会の力強い一員になることを約束されている民族の見知らぬ貧しい幼い子孫に愛と情を注ぐのは、最高の志操や賞賛すべき人間性の尊さを、証明

するものであることを、一人一人に教えるべきである。そして国家はこの教育活動によって、国家の実際的活動を純粋に精神的に補うようにしなければならない。国家はこの意味で、理解や無理解、賛成や不賛成を顧慮せずに、行動しなければならない。

六百年だけでも、肉体的に悪化をしているものや、精神的に病気になっているものから、生殖能力と生殖可能性を阻止することは、計り知れぬ不幸から解放されるのみならず、今日ではほとんど理解できないように思えるほど健康回復に貢献するだろう。そのように民族の最も健全な担い手が、子供をつくることを、意識的計画的に促進することが実現されるならば、その結果少なくともまず最初は、現今のわれわれの肉体的な、同時にまた精神的な退廃の萌芽をまったく除去されてしまった人種ができるだろう。

というのは、ある民族やある国家がひとたびこの道を歩きはじめたならば、その後はみずから、まさしくその民族の人種的に最も価値の高い中核と、ほかならぬその生殖力をたかめ、ついに全民族に高度に淘汰（とうた）された人種的財宝の祝福を与えることに、注目するようになるからである。

人種の純粋な辺境植民地　そこに達するための道はまず第一に、国家が獲得した新しい土地の植民を放任しておかず、特別の規準にゆだねることになる。このために専門につくられた人種委員会が、個々人に移民証明書を発行すべきである。しかしこれはある人種上の純粋さを確定したものでなければならない。そのようにだんだんと、最も人種的に純粋で、したがって人種的に最も有能な担い手ばかりの住民がいる辺境植民地の基礎がつくられるのである。それとともにかれらは全民族の尊い国民的財宝となり、かれらの成長は民族同胞の一人一人を、誇りと喜ばしい期待でみたすにちがいない。

とにかくかれらの中にわが民族の、むしろ人類の将来の最後の大発展の萌芽が保護されて存在しているのだ。

民族主義的世界観は、民族主義国家において人間がこれ以上犬や馬やねこを飼育向上させることに熱中せず、人間自身を向上させるようなより尊ぶべき時代、すなわちあるものは自覚してだまって断念し、他のものはよろこんで身をささげて子供をつくる、という時代に到達するにちがいない。

幾十万の人々が教会の戒律にしばられ、それを義務と考えて、自発的に独身に耐えているというような世界でも、こういうことが可能であることは、否定できないのである。そういう戒律のかわりに、絶え間なく行なわれる人種を毒する遺伝的罪悪を阻止すべし、そして全能の造物主のために、神が人間をつくりたもうたように人間を生むべし、という警告を発するならば、子供をつくることを断念することは、不可能となるにちがいないだろう？

ドイツ青年への呼びかけ　もちろんこのことは、今日のあわれむべきおおぜいの俗物どもには決して理解できないだろう。かれらはこれを嘲笑するか、ななめに肩をすぼめ、(15)長い逃口上でうめき声を出すだろう。「それはそれ自体まことに結構だ。だが実際にできないだろう！」と。なるほどおまえたちにはとてもできない、おまえたちの世界はこういうためには適当でないのだ！　おまえたちにはただ一つだけ心配がある。つまりおまえたち個人の生活だ。そしておまえたちにはただ一つの神がある。つまりおまえたちの金だ！　だが、われわれはおまえたちに用はない。自分たちの個人的生活を、この世の最高の幸福と考えるためにはあまりに貧しすぎるおおぜいの人々、自分たちの生存を支配しているものを金とは考えずに、他の神を信じているおおぜいの人々に向かうのだ。われわれはな

によりもまず、力強いおおぜいのわがドイツ青年に呼びかける。かれらは偉大な転換期の中で成長しており、かれらの父たちの怠惰と無関心がおかした罪にかれら自身で挑戦するのだ。ドイツ青年はいつか新しい民族主義国家の建設主になるか、最後の目撃者として、ブルジョア社会の完全な崩壊、終末を体験するかであろう。

ブルジョアジーの無力　というのは、ある世代が多くの欠陥のもとに苦しんでおり、それをみずから認めるばかりか、みずから告白し、それにもかかわらずそのうえ、今日わがブルジョア社会でおきているように、それに対して何もすることはないという、もっともな弁明で満足しているならば、そういう社会は将来没落するのである。ところでわがブルジョア社会の人々の特色たるものはまさしく、ブルジョアジー自身がその欠陥をもはやまったく否定しえないところにある。多くのものが怠慢で悪いのだということをかれらは認めざるを得ない。だがかれらは、わざわいに抵抗し、六千万あるいは七千万の民族の力を、頑強なエネルギーをついやして傾注し、そして危険に対抗していこうという決心がもはやつかないのだ。それどころか、どこかでそれが行なわれると、これに対してくだらない悪口をならべ、遠くからではあるがそのやり方が理論的に不可能だと証明しようとしたり、成功するとは考えられないといってみたりする。その場合、自己の矮小さや精神的態度を支持するのに役立たせるためには、十分バカげた根拠を示すのである。たとえば民族をアルコールのおそるべき悪習のかすがいから救いだすために、ついにある大陸全体が禁酒を宣告した場合、わがヨーロッパのブルジョアジーはこれに対して、つまらない目をみはったり、頭をふったり、優越感をみせて笑ったりする——これが特にこの最も笑うべき社会の人々らしさをよくあらわすのだが——以外に何もしない。だ

が、すべてが役に立たず、それにもかかわらず世界のどこかで崇高不可侵な慣行にたち向かい、しかもそれがうまく行ったならば、右にのべたように少なくともこれを疑ったり、さげすんだりするにちがいない。その場合人々は、この最大の不道徳を一掃しようとするこの闘争に対して、すこしも恐れずブルジョア的な道徳の観点で対抗しようとするのだ。

そうだ、われわれは、次のことについて決してあざむかれてはならない。すなわち今日のブルジョアジーは人類のすべての崇高な課題のためにはすでに無価値になっている。端的にいって、質が落ち、あまりにも悪いからだ。そして、そのあまりの質の悪さは——わたしにいわせれば——劣悪さを望むからでなく、むしろ信じられないほどなげやりな態度と、それから生ずるすべてのもののためである。だから「ブルジョア政党」という総括概念のもとに浮遊している政治クラブも、ずっと前から特定の職業グループや階級の利益団体以外の何物でもなく、それらの最も崇高な課題は、もはやできるかぎりよく利己的な利益を代弁することだけである。こういう政治をもてあそぶ「ブルジョア」のギルド(16)は、闘争以外のことのほうが役に立つことは明白である。特に敵対者が、控え目なごく小さい人物でなく、極度に扇動され、最後の決意までしているプロレタリア大衆からなりたっている場合はそうである。

＊

民族主義国家の教育原則　もしわれわれが、国家の第一の課題を、民族に奉仕し、民族の福祉のために最良の人種的要素を維持し、保護し、発展させることであると認識するならば、こうした配慮はその時々の民族、人種の小さい同胞の出生にまで広がるばかりでなく、この若い子孫が将来のよりいっそうの発展のために価値ある成員になるよう教育しなければならないことは、もちろんである。

一般に精神的能力の前提が、人種的な質という所与の人間の素質にあるように、また個人においても教育は、まずなによりも肉体的健康を注意し、助長しなければならない。というのは、一般的に考えれば、強壮な精神はただ健全で強壮な身体にのみ宿るからである。天才が往々にして肉体的に不完全だったり、そのうえ病身であるという事実は、この主張をなんらさまたげない。これは例外であって――どこでもそうであるように――例外なき規則はないのだ。だがもし一民族が大部分肉体的に退廃しているならば、こういう沼からは、真に偉大な人物はまずでてこないだろう。だが、そういう人物が活動したところで、もはやそれ以上大きな効果がおさめられる場合はないだろう。堕落した烏合の衆はかれを一般に理解しないか、あるいは意志が弱くなっていて、こういう一羽の鷲の高翔について飛ぶことが、もはやできないのである。

民族主義国家は、これを認めて、全教育活動をまず第一に、単なる知識の注入におかず、真に健康な身体の養育向上におくのである。そのときこそ第二に、さらに精神的能力の育成がやってくる。だがここでも、その先端には人格の発展、とりわけよろこんで責任感をもつように教育することとむすびついている意志力と決断力の促進があり、そして最後にはじめて学問的訓練がくるのだ。

その場合、民族主義国家は、次の前提から出発しなければならない。すなわち、実際に学問的教養はさしてないが、肉体的には健康で、善良で堅固な性格をもち、欣然とした決断と意志力にみちた人間は、才知にめぐまれた虚弱者よりも、民族共同体にとってはより価値がある、ということだ。物知りからなる民族は、もしかれらがその場合肉体的に堕落し、意志の弱い、卑怯な平和主義者であるならば、大空を征服することはもちろん、この地上に生存を確保することもできないだろう。運命を決する困難な闘争においては、知識のないものが敗れることはほとんどなく、かえっていつも知識があ

けっきょく、ここにもまた一定の調和がなされねばならない。腐った肉体は輝かしい精神をふきこんでも、まったく美しくならない。そのうえ肉体的に重い障害をもっており、性格において意志薄弱で、ぐらつき、そして卑怯な人間であるならば、最高の精神的教養もまったくりっぱなものにはならないであろう。ギリシアの美の理想を不滅ならしめたものは、すばらしい肉体の美と輝かしい精神と、最も高邁な心情とのおどろくべき結合である。

「幸福というものは、たしかに長い目でみればただ有能であるということだ」、というモルトケのことばが正当であるならば、精神と肉体の関係についても、また精神は、それが健全であるならば、一般に長い目でみればただ健全な身体にのみやどる、ということは確かである。

だから民族主義国家においては、肉体的鍛練は、個人に関するものでなく、また、なによりも第一に、両親に関するものであって二番目か三番目にはじめて公共に関係するというような問題でもなく、国家によって代表され保護されている民族の自己保存の要求なのである。純粋の学問的教育に関しては、すでに今日国家が個人の自決権に干渉し、それに反対して全体の権利を認め、同時に両親に欲するか欲しないか相談することなく、子供を強制就学させているように、民族維持の問題においては民族主義国家はもっとはるかに高度に、個人の無知や無理解に対していつかその権威を貫徹しなければならない。国家は、子供のからだを幼児のころから目的にかなうように訓練され、将来の生活に必要な鍛練をうけるように、その教育活動を組織すべきである。国家はなによりも、部屋の中ばかりにいるような世代がつくられないように配慮しなければならない。

こういう保護や教育活動は、すでに若い母親の場合にはじめられねばならない。幾十年にもわたる

細心の研究によって、出産のさいに伝染病の心配のない清潔さを望むことが可能になり、産褥熱を減少させることができたと同様に、看護婦と母親自身を根本的に教育することによって、早くも生後の数年において、その後の発育のためにすばらしい基礎となるような育児方法を導入することができねばならないし、またできるであろう。

スポーツの価値　学校そのものは、民族主義国家においては、身体的鍛練のためにきわめて多くの時間をさかねばならない。小さい子供というものは、かれに注ぎこまれた素材を理性的にふるいわけることがまったくできないもので、若い頭脳というものは経験によればただある特定の部分を記憶して、その場合たいていそのうえに本質的なもののかわりに不必要な副次的なことにこだわるものだから、若い頭脳に重荷を負わすようなことがあってはならない。今日、中等学校の教育課程においてすら、体操が一週間に、ぎりぎり二時間を与え、しかも必修でなく各人の自由選択にゆだねられているが、これは純粋の知的教育に比較した場合、はなはだしい不均衡である。若い人々が少なくとも午前と夕方にそれぞれ一時間ずつ、しかもあらゆる種類のスポーツや体操で、身体的に訓練されない日がないようにしなければならない。この場合とりわけスポーツを忘れてはならない。まったく非常にたくさんの「民族主義者たち」から、スポーツは粗暴で下品なものと見られている。ボクシングがそうである。ボクシングについて「教養のある人々」の間にあやまった考えがいかに広がっているかは、信じられぬくらいである。若い人々がフェンシングをならい、そしてあちらこちら決闘して歩くことはとうぜんであり、名誉なことだと考える。だがかれらがボクシングをすると、それが粗暴だとは！なぜだ？　これぐらい攻撃精神を助長し、電光石火の決断力を必要とし、肉体を鋼鉄のように鍛える

スポーツはない。二人の若い人々が意見の相違を、みがかれた一片のはがねでよりもこぶしで争って決着をつけるほうが、粗野でないのだ。また、攻撃をうけたものが、その攻撃者からにげ出して警官のところで非をならすかわりに、みずからをこぶしでまもることは、下品でない。だが若い健全な少年はまず第一になぐられるのにたえることを学ぶべきである。それはもちろん現代のわが知的闘士の目には野蛮と思えるかもしれない。けれども民族主義国家はまさに、平和的な耽美(たんび)主義者や、肉体的に腐敗した群を育てあげるのが課題ではない。尊敬すべきプチブルや、淑徳高きオールド・ミスは民族主義国家の理想とする人間ではなく、男性的な力の権化たることを自負する男子、さらにこういう男を世に送りだすことのできる女子が、民族主義国家の理想なのだ。

そのように、一般にスポーツは個々人を強くし、器用にし、勇敢にするためばかりでなく、また不公正にもたえうるように鍛え、教えるべきである。

わが全上流知識階級層が、ずっと前から上品な礼法ばかり教えられず、そのかわりに徹底的にボクシングを学んでいたならば、娼婦のひもや逃亡者やこれに類したならずものによってドイツの革命がなされるということは、決してありえなかったであろう。というのは、こういう結果をもたらしたものは、革命を成功させたものが大胆で勇敢な実行力をもっていたからでなく、国家を指導し、そしてそれに対して責任のあったものが、卑怯で、みじめなほど決断力にかけていたからである。だが、われわれの知的指導者はすべて、ますます知的に教育され、したがって敵側が精神的武器のかわりに、ハンマーをふりかざした瞬間に無防備であらねばならなかったのだ。だがこれはすべてとうぜんだった。というのは、特にわが高等の学校教育は原則として人間をつくらず、むしろ官吏、エンジニア、技術者、化学者、法律家、文学者を、さらにこれらの精神性が死滅しないために、教授たちをもつく

っていたからである。

われわれの知的指導はいつも輝かしい仕事をしたのに、われわれの意志的な指導は、たいていあらゆる批判をうけざるをえなかったのだ。

自信の暗示力 根本から臆病に生まれついた人間は、教育によっても勇気あるものになしがたいのは確かである。だが臆病な人間が、かれのうけた教育の欠陥によって、身体的な力と強靭さにおいて、もともと他のものに劣っている場合、かれの特性をのばしてやることができないのもまた確かである。身体がじょうぶだという確信があると、どんなに自己の勇気が助長され、そのうえ攻撃精神がわいてくるかは、軍隊をみればいちばんよくわかる。軍隊にももともと英雄ばかりいたわけではなく、普通の平均の人間がいたのだ。だがドイツ兵の平時におけるすぐれた教練がこの巨大な組織全体に、われわれの敵でさえ信じられないぐらいに、自己の優秀さに対する暗示的信念を植えつけたのだ。というのは一九一四年盛夏から秋にかけての数か月間に、掃討しながら前進するドイツ軍を不滅の攻撃精神と攻撃勇気に導いたものは、長い長い平和の時代に、しばしば弱い身体をもっているものの中から信じられぬぐらいの能力をひき出し、最大の激戦のすさまじさの中でも失われない自信を養成した、うむことなき教育の結果だったからである。

今日、崩壊して他国の人々の蹂躙(じゅうりん)にゆだねられ、横たえられているわがドイツ民族こそ、自信の中にあるあの暗示力を必要とするのだ。だがこの自信は、すでに子供の時から若い同胞に引き入れられねばならない。すべての若い同胞の教育や訓練は全体に、自分たちが他のものより絶対にまさっているのだという確信を与えるようにはかられねばならない。若い同胞は自分の身体的な力や強靭さにお

いて、民族全体が無敵であるという信念をふたたび獲得せねばならない。というのは、ドイツ軍をかつて勝利に導いたものは、各々の個人は自分自身に対し、全体としてかれらの指導部に対してもっていた信頼の総和であったからだ。ドイツ民族をふたたび高めたものは、自由をふたたび獲得しうるという確信である。だが、この確信は幾百万のものが一人一人同じように感じた結論としてのみありうるのである。

ここでもまた人々は錯覚におちいってはならない。すなわち、わが民族の崩壊は、とほうもないものだったが、いつかはこの困窮を脱しようとする努力もまた同じようにとほうもなく大きいものであるにちがいないのだ。わが民族が安寧秩序を目的としている今日のわがブルジョア的教育活動によって、われわれの没落を意味している今日の世界秩序をいつか破り、そしてわれわれをしばりつけている奴隷の鎖の輪を敵の顔面にたたきつける力をうることができるだろう、と信じているものがあったなら、それはたいへんなまちがいである。ただ国民の意志力と、自由への渇望と、最高の情熱にみちあふれることによってのみ、かつて奪われたものをふたたびとりのえることができるだろう。

＊

教育活動におけるうぬぼれ　青少年の服装もこの目的に適合させられねばならない。今日の青年もすでに、「馬子にも衣装」という昔のことわざの意味を腐敗した意味に逆にとっているのをまったく助けているような、流行狂に感染しているのを見なければならないのは、まことになさけない。

青年の場合にこそ、服装もまた教育に役立たせねばならない。夏に長いタイト・ズボンをはき、首まで上衣をきこんだ青年は、そんな服装をするだけで身体の鍛練に対する動因を失っているのだ。実

際、野心——おだやかにいうなら——自負が、引き入れられねばならないからだ。これは、誰でも買いうるというのではない美しい服装へのうぬぼれではなく、すべてのものが形成に助力してできる美しい均整のとれたからだに対するうぬぼれである。

これはまた、その後のためにも有用である。娘は自分の騎士を知らねばならない。今日、肉体的な美しさがおしゃれの流行によって、完全に背後に押しやられることがなかったならば、がにまたのいまいましいユダヤ人の私生児によって、多数の娘がまよわされることはまったくなくなったであろう。また、美しい肉体を見つけだし、協力して、新たに美しい子供を民族に贈るということは、国民の利益にもなる。

今日、ドイツには軍隊教育がなく、したがって平時にわれわれの他の教育によってゆるがせにされていたものを、少なくとも部分的に埋めあわせる唯一の施設が除かれてしまっているがために、これらすべてのことはもちろん最も緊急なことであるだろう。そして軍隊教育でも、その結果はただ一人一人が訓練されていたというだけでなく、両性の関係にもそれが及ぼした影響があったのだ。若い娘は軍人以外のものより軍人のほうを好んだのだ。

学校時代と軍隊時代との間の監督　民族主義国家は、身体的鍛練をただ正規の就学期間だけ行なったり、監督したりするだけでなく、また学校を出てからも、青少年が身体的に発育する間は、青少年の幸福のためにこの発育をのばすように配慮しなければならない。学校時代が終るとともに、若い市民を監督する国家の権利がとつぜん中絶し、軍隊にはいるとふたたび復活すると信ずることは無意味である。この権利は義務であり、義務としていつも一様に存在している。健康な人間についての関

心をもっていない今日の国家は、この義務をひどいやり方でなおざりにしてきただけなのだ。国家は今日の青少年を、厳格に訓育し、そしていつか健康な男や健康な女に成長するまで身体的にいっそう訓練するかわりに、街頭や娼家で堕落させているのだ。

どんな形式で国家がこの教育を実施するかは、今日は問題になりえない。本質的なことは、国家がそれを実施し、そのために有用な方法をみつけることだ。民族主義国家は、まさしく知育と同様にまた学校卒業後の身体的訓練を国家の課題として見なければならず、国家の施設によって実施すべきである。そのさい、この教育はだいたいにおいてきっと後の兵役のための準備教育たりうる。そうすれば軍隊はいままでのように最も単純な操典の基礎概念を若い人々にもはや教えこまなくてよくなるのであり、また今日の意味とはちがった新兵が入営してくるだろうし、おそらく身体的には、ほとんど非のうちどころのない準備教育をうけた若人を兵士にもっとしあげればよいことになるのだ。

最後、最高の学校としての軍隊　民族主義国家においては、このように軍隊はもはや各人に進めや、止まれ、を伝えるのではなく、祖国的教育の最後、最高の学校とみなされる。若い新兵は軍隊で必要な銃器の使用法を教えられると同時に、しかしまたその他の将来の生活のためにもいっそう教育されるべきである。だが軍隊教育では、すでに古くからの軍隊に最高の功績として教えられねばならなかったもの、すなわちこの学校では少年がおとなに仕上げられるべきであり、単に服従することを学ぶだけでなく、これによってその後命令するための前提をも獲得すべきであるものを、先頭に立てるべきである。軍隊では当然非難されるときに沈黙することを学ぶべきのみならず、必要な場合には不当の非難のときにも沈黙して耐えしのぶことを学ばねばならない。

さらに軍隊は自分自身の力を固く信じ、いっしょに経験した団体精神の強みを把握し、ドイツ民族の無敵さを確信するようにならねばならない。

兵役を終えたのちに、かれには二種類の証書を交付すべきである。すなわち、かれに爾後（じご）、公的な活動をゆるす権利証書としての**国家市民証書**と、結婚のため肉体的に健全たることを確認する**健康証明書**がそれである。

少年の教育と同じように、民族主義国家は少女の教育を同じ視点から行なうことができる。そこでも、まず第一に肉体的訓練に重点をおくべきであり、その後はじめて心的価値の促進に、最後に知的価値の促進に重点をおくべきである。女子教育の不動の**目標**は、将来の母たるべきことである。

*

性格の陶冶　第二に、**はじめて**民族主義国家は、あらゆる方法で**性格**の陶冶（とうや）を助成しなければならない。

たしかに個々人の本質的な性格の特性は、根本的には素質である。すなわち利己主義の素質のあるものが、いつまでも利己主義であることは、まさしく根っからの理想主義者であるものがいつでも理想主義者であるのと同じである。だがこの完全にきわだった両性格の間に、ぼんやりと不明瞭（ふめいりょう）にみえる幾百万のものが立っている。生まれつきの犯罪者は、どこまでも犯罪者である。だが犯罪者的なある傾向を単に一部だけもっているような多くの人々は、正しい教育によって、なお民族共同体の価値ある成員になることができる。しかるに逆に悪い教育によって優柔不断な性格から実際に悪い要素を成長させることができるのだ。

寡黙への教育　大戦中、わが民族が沈黙を守れないことについて何度不平がいわれたことだろう！　それゆえ、重大な秘密すら敵に知らさずにおくことが、どんなにむずかしかったことだろう！　だが大戦前にドイツの教育が各人が沈黙をまもることを教えるために何をしたか？　という問題を提出してみよう。遺憾ながらすでに学校においてさえ、小さな**密告者**が多くの場合沈黙している協力者よりも好まれなかったことがあろうか？　密告はりっぱな「そっちょくさ」で、沈黙は恥ずべき寡黙（かもく）だとみなされてきたし、いまでもそうではないか？　一般に人々は、沈黙を男らしく価値ある徳であるといおうと努力したか？　否である。というのは今日の学校教育の目からみれば、それはつまらぬことなのである。だがこのつまらぬことが国家に幾百万という裁判費用を費やさせている。というのは、名誉毀損（めいよきそん）とか、この種の訴訟の九十パーセントは、ただ沈黙が欠けていることからきているからだ。無責任な発言が、同様に軽率にムダ口によって広められる。わが経済は、いつも重要な製造法などを軽々しくもらすことによって、損害をこうむっている。しかもそのうえ国防の秘密の心構えさえも、民衆が沈黙することを学ばず、すべてしゃべりちらすために、みんな妄想に終ってしまうのだ。そして戦時においては、このおしゃべりぐせが敗戦にみちびき、そして戦争の不幸な結果に本質的に貢献しうることになる。またここでも人々は、青少年のときに実行されなかったことは、年老いてからできないことを確信すべきである。たとえば教師が原則的に、よくない密告をするようしつけて、バカげた子供のイタズラを知ろうとしないことが、またこれにとって必要である。若いものは自分たちの世界をもっており、かれらはある団結した連帯性をもっておとなに対立している。そしてこれは自明のことだ。十歳のものが同じ年頃の仲間たちと結びつくのは、おとなと結びつくよりも自然でもっと多いのである。仲間を密告する子供は**裏切り**をしているのであり、そしてそれとともに厳格にい

うならばそして大きくいえば、そのまま国の反逆者の心情にそのまま通ずることを証明しているのだ。そういう少年は決して「**感心な、礼儀正しい**」子供だとみなすことができず、下劣な人格の子供とみなされうるのである。教師にとっては、自分の権威を高めるために、この種の悪徳を利用することは、便利であるかも知れない。だがそれとともに、子供の心に、後日おそるべき影響を及ぼす心情の芽を与えることになる。子供のとき密告者であったものから大きな無頼漢になった子供は、数多いのだ！

これは、多くの中の一例にすぎない。いつかはこのことにまったく違った重みがおかれねばならない。今日、学校ではりっぱな高貴な人格を意識して発展させることは、ゼロに等しい。いつかはこのことにまったく違った重みがおかれねばならない。誠実、献身、沈黙は、大民族が必ず**必要とする**徳であり、学校でこれを教えこみ訓練することは、往々にして現今われわれの教育計画にあるものよりももっと重要である。また泣かんばかりに不平をいったり、ぐちっぽく泣きわめいたりするのを矯正することも、この領域に属するのである。子供のときから苦しみや侮辱をもまた黙って耐え忍ばねばならないときがいつかはあるのだ、ということを教えるのを教育が忘れたならば、後日危機の時点で、たとえば、いつかその男が前線に行ったときに、すべての文通がおたがいにただ愁訴哀泣の手紙を助長するのに役立ったとしても、驚くにあたらないのだ。ドイツの少年が民衆学校で知識に向けられることがもっとへらされ、そのかわりに、もっと自制が教えられていたならば、一九一五年から一八年にかけて十分にこれが報いられていたであろう。

そのように民族主義国家は、その教育活動において、身体的な訓練とならんで人格的訓育に、まさしく最高の価値をおくべきである。

今日わが民族体の中にある数多くの道徳的欠点は、このようにねらいを定めた教育によって、全部除かれないとしても、非常に緩和されるのである。

＊

意志力と決断力の養成　意志力と決断力の養成は、責任感の助成と同様に最も重要である。かつて軍隊には、一つの命令はつねに命令がないよりはよい、という原則があったが、これが青年の場合には、一つの答えはつねに答えないよりはましである、といいうる[17]。間違ったことをいいはしないかという不安から答えないのは、間違った答をするよりももっと恥ずべきことでなければならない。この最も初歩的な原則から、青年は、実行への勇気をもつように教育しなければならない。

一九一八年十一月から十二月のころに、どんな地位にあるものも思うようにいかず、上は皇帝からはじまって下は軍団長にいたるまで、もはや、だれ一人として自主的な決断力をふるいおこすことができなかったということが、しばしば嘆かれた。このおそろしい事実はわれわれの教育に対する警告[18]である。というのは、このおそろしい破局においては、一般に小さい形で存在していたものが、巨大にゆがめられて表面化したにすぎないからである。今日ドイツが真剣な抵抗能力をもっていないのは、武器がないからでなく、この意志が欠如しているからである。この欠如はわが全民族の中に浸みこみ、危険をともなうようなすべての決断を避け、あたかも虎穴に入らずんば虎児をえずを知らないがごとくである。これを知らずにあるドイツの将軍は、このあわれむべき意志力の欠如について、典型的な文句をはいた。すなわち「わたしは五十一パーセントの成功の確率がある場合だけ行動する[19]」。この「五十一パーセント」にこそ、ドイツ崩壊の悲劇があるのだ。運命からまず成功の保証を要求するものは、それとともにみずから英雄的行為の意義を断念するものだ。というのは、英雄的行為の意義は、人々が情勢が死の危険をもっていることをよく知りながらも、多分成功しうるだろうと一歩をふみだすことにあるのだからである。他の方法では確実に死にいたるガン患者が、あえて手術を行なうのに、

五十一パーセントの確率を教える必要はない。そして治る確率が半パーセントないとしても、他の場合には生命をおしまないのだから、勇気のある男なら、それをあえてやるだろう。
だが今日卑怯な意志力と決断力を欠いている伝染病は、要するに、主としてわが青少年の教育が原則的に誤っている結果であり、そのおそるべき影響は、その後の生活にも伝わり、指導的政治家たちが市民的勇気を欠いていることに最後の結果と最後の頂点を見出すのである。

責任感の養成　今日まんえんしている責任を回避しようとする卑怯さも、同じ線にある。ここでもまた欠陥はすでに青少年の教育の中にあって、さらにすべての社会生活をつらぬき、議会主義的政治制度の中にその不滅の仕上げを見いだすのだ。

すでに学校において、遺憾ながら人々は、小さい罪人が、「後悔して」告白することや、「悔悟して以後やりませんと誓うこと」のほうが、公明正大に白状するよりも価値があるとしている。しかも後者は、今日の多くの民衆の教育者には、往々にして矯正しがたい度しがたさの最も明らかな徴表だと思われている。そして、そういう多くの子供たちを、そういう性質——それは貴重な価値があり、全民衆の共有財産を形成しているのだが——では絞首台にのぼるだろうとおどかすのだ。

民族主義国家は将来、意志力と決断力の教育に最高の注意をはらわねばならないが、同様に、民族主義国家はすでに小さいときから青少年の心に欣然と責任をとることや、告白する勇気を植えつけねばならない。

民族主義国家が、この必要な意義を十分に認める時にのみ、国家はこの教育活動を数世紀つづけた後についにその結果として、今日かくも宿命的にわれわれの没落に貢献したこれらの弱点にもはや負

けない民族体ができるだろう。

＊

学問的教育の原則　当今では実際、本来、国家の全教育活動の本質的なものである学問的な学校教育は、わずかの変更を加えるだけで民族主義国家にひきつぐことができる。その変更は三領域にわたっている。

第一に、九十五パーセントまでは若い頭脳が必要とせず、それゆえまた忘れてしまうようなことは一般につめこまれるべきでない。特に今日、民衆学校と中等学校の教育計画はどっちつかずである。多くの場合個々の教科は学ぶべき材料でふくれあがっている。そこで、ただその一部が個々人の頭の中に残り、そしてまたこれらのいっぱいのものの一部分だけしか役に立たない。であるのに他方それはある一定の部門で仕事をし、パンをかせぐ必要のためには十分でない。ギムナジウムか上級実科学校を卒業した普通の国家官吏で、三十五歳か四十歳の人を例にとって、その昔、学校で苦心して詰めこんだ知識を試してみればよい。当時詰めこまれたものの中で残っているもののなんと少ないことか！　もちろん次のように答えるだろう、「そうだ、昔、学んだ多くのものは、いろいろな知識をその後ももっているという目的だけでなく、精神的な受容能力、思索能力、特に頭脳の記憶力の訓練だったのだ」と。これは一部分は正しい。

頭脳の負担過重はいけない　けれども、若い頭脳がほとんど使いこなすこともできず、重要性の多い少ないによって個々の要素をふるいにかけたり、評価したりもできないような、多くの印象を氾濫させることに危険がある。その場合は、そのうえたいてい本質的でないものだけでなく、本質的な

もののも忘れてしまい、ムダになってしまう。そのように、このたくさん学ばせるというもっとも主要な目的がやはり失われてしまうのだ。というのは、たくさん学ばせるという目的は、はかり知れない多くの教材によって頭脳そのものを学びうるようにしてやるのでなく、個々人が必要とし、それによってさらに公共の役に立つような該博な知識をその後の生活のために与えてやることにあるからだ。しかし、人間が若いときにたくさんの知識を詰めこまれすぎるために、その後これをもはや全体に忘れてしまっているか、あるいはまさしくその中の本質的なものを、もはやとっくの昔に忘れてしまっているならば、これは妄想になってしまう。たとえば、なぜ幾百万の人々が数年後にはただ一部しか役に立てることができず、それゆえまた大部分は完全に忘れてしまっているような外国語を、二つか三つ学ばねばならないのか理解することができない。というのはたとえばフランス語を学ぶ十万人の学生の中で、わずか二千人ほどだけ、その後にこの知識をまじめに利用し、その他の九万八千人というものは、かつて学んだものを実際に応用することができる状態には全生涯中もはやないからだ。したがって、かれらは若いときに多くの時間を、その後自分たちにとってなんの価値も意味もないことのためにささげたということになる。この教材が一般教養に属しているのだという異論も正しくない。人々が、一生の間に学んだものを自由に用いたときに、それは、ただ主張しうるにすぎないのだからである。それゆえ、この言語の知識を利用する二千人のために、実際にはその他の九万八千人が苦しめられ、貴重な時間を犠牲にしなければならないのだ。

言語教育の原則　この場合に、鋭い論理的思考の練習になる——ラテン語がそれにあたるのであるが——といわれるような言語が問題になるのではない。それゆえ、フランス語のような言語は若い

学生には一般的な輪郭だけを、あるいはもっとよくいえば、その内面的な概観を伝える、すなわち、この言語の特質についての知識を与え、文法、発音、文章構造等の原則的なものに導き入れ、凡例を説明するならば、本質的に目的にかなっているであろう。一般の要求に対してはこれで十分であり、たやすく概観し、記憶しておくことができるのであるから、実際にマスターすることもできず、あとで忘れてしまうような言語を全部つめこむような今日のやり方よりも価値が多いであろう。その場合、若い人は最も注意すべきものだけ学ぶことができ、したがって価値があるかないかによるふるいわけは、すでにその前になされているのだから、圧倒的に充溢（じゅういつ）している教材の中から個々の偶然に脈絡のある断片を覚える、という危険もさけられるであろう。

こうして教えられた一般的基礎は、たいていの人々には将来の生活のためにも一般に十分であろうし、他方この言語をその後実際に必要とするものは、この基礎の上にさらに組みたて、自由選択で徹底的に研究することができるのである。

歴史教育の原則　特に従来の歴史教育の教授法の改革が企図されねばならない。ドイツ民族ほど歴史をたくさん学ぶ民族はないかも知れない。だがわれわれほど歴史教育をうまく利用していない民族もないだろう。もし政治が生成中の歴史であるならば、さらにわれわれの歴史教育はわれわれの政治活動のやり方で方向がきまるのである。ここでもまた、人々がもっとよい政治教育をやっていこうとする決心をしないならば、われわれの政治活動のあわれむべき結果について、ふくれっ面をしたところではじまらない。今日のわが歴史教育の結果は、九割九分まで嘆かわしいものである。偉大な明白な筋がまったく忘れられているのに、若干の日付、生年月日、人名などが記憶に残っているのがふ

つうである。本来肝要な、本質的なものはすべて、一般に教えられないで、日付の洪水や、たくさんの事件の中から内面的な動因をみつけだすことは、多少とも個々人の独創的な素質にゆだねられているのだ。人々はこの痛烈な断定に対して、考えられるかぎり抵抗することができよう。だが一度だけでも政治問題、特に外交問題に関して、わが議員諸氏の集会の席でなされる演説を注意して検討してみるがよい。その場合、ここでは、ドイツ国民の選良——少なくともそう主張されているが——が討論しているのか、とにもかくにもこれらの人々の大部分は中等学校の教室にすわったことがあるのか、しかも一部のものは大学までいったのかと考えてみるがいい。そこから人々は、これらの人々の歴史的教養がいかに不十分なものであるかということを、正しく認めることができよう。かれらがまったく歴史を学ばず、ただ健全な本能だけをもっていたならば、たしかにこれよりはましだろうし、国民のためにももっと役に立ったであろう。

歴史教育においてこそ教材の圧縮がなされねばならない。最も重要なことは大きな発展の流れを認識することにある。歴史教育がこの点に制限されればされるほど、ますます各人にとって自分の知識からその後利益が生まれてくるし、また全体としても、一般に役に立つことが期待できるのだ。というのは人々は、単に過去にあったことを知るために、歴史を学ぶのではなく、歴史の中に将来のため、自分の民族の存続のために指針をうるために歴史を学ぶのだからである。これが**目的**であり、歴史教育はそのための手段にすぎない。だが今日では、ここでも手段が目的になり、目的が完全になくなっている。根本的な歴史研究はこれらの個々の日付をすべておぼえることが必要でそれによってこそ大きな流れをはっきりとつかみうるからだ、といってはいけない。これを確定することは専門科学の課題である。だが普通の平凡な人間は歴史学の教授ではない。かれらにとっては歴史というものは、ま

ず第一に、自分の民族の政治事件に対して自分の態度を決定するのに必要な歴史的洞察の尺度を与えるためにあるのだ。歴史学の教授になりたいものは、あとでもっと根本的に研究に専心すればよい。こういう人はもちろんあらゆること、最もこまかいことすらも研究すべきだ。だがドイツの今日の歴史教育はこのためにも十分でない。というのは今日の歴史教育は普通の平凡な人間にとっては広すぎるが、それにもかかわらず専門の学者にとってはあまりにも貧弱なのだからである。

さらに、人種問題が主要な問題として取扱われるような世界史が最後に書かれるよう配慮することは、民族主義国家の課題なのである。

＊

一般教育と専門教育　要するに、民族主義国家は一般的な学問的教育を、短縮した本質的なものを包む形にしなければならないだろう。そこから最も基礎的な専門的教養の可能性が示さるべきである。個々の人間は、一般的な大きな特徴をつかんだ知識を基礎としてもち、そしてただ、自分の将来の生活の領域についてのみ基礎的専門教育、個別教育をうけられれば十分である。このさい、一般教育はすべての学科において必修であり、特殊なものは個々人の選択にまかせられねばならない。

これによって達成された教育課程と時間数の短縮とは、体育、性格、意志力、決断力の教育に役立てるのである。

われわれの今日の学校教育、とりわけ中等学校の教育が、将来の職業のためにいかに無意義なものであるかは、三つのまったく種類のちがった学校を出たものが同じ地位につきうる、という事実によって最もよく証明されるのである。決定的なことは、どうやら実際に一般教養のみであって、注入された専門的知識ではない。だが――すでにのべたように――実際専門的知識が必要なところでも、そ

れはわれわれの今日の中等学校の教育課程の中ではもちろんうることができない。したがって民族主義国家は、他日こういう中途半端なものを一掃しなければならない。

＊

人文教育の価値　学問的な教育課程の第二の改革点は、民族主義国家にとっては次のようなものでなければならない。すなわち、

われわれの学問的教育がますます、数学、物理学、化学等の実際的な学科にのみ向かうのが、今日の物質的時代の特徴である。技術や化学が支配し、少なくとも外面的にはそれが日常生活のもっとも顕著な特徴である時代には、これもまた必要であるが、国民の一般教育がいつもこの方面にだけおかれるということも非常に危険である。逆に一般教育はつねに理想の状態になければならない。一般教育はむしろ人文諸科目にそうべきであり、将来専門的教育をひきつづきうける基礎だけを与えるべきである。さもなければ、人々は国民の維持のためにいつもすべての技術的能力やその他の能力よりももっと重要な力を放棄することになる。特に歴史教育では古代の勉強を除外してはならない。ローマ史を全体に大きな流れにおいて正しくつかむことは、今日のためばかりでなく、たしかにあらゆる時代にとって終始変らぬ最良の教師である。古代ギリシア文化の理想も、その典型的な美とともに保持しなければならない。個々の民族に相違があるからといって、より大きな人種的共同社会を切りさいてはならない。今日荒れ狂っている闘争は、まったく偉大な目標をもっているのだ。すなわち、幾千年もが自己と結びつき、ギリシア精神とゲルマン精神をともに包含している文化が、その存在のために戦っているのだ。

一般教育と特殊の専門的知識の間には、はっきりした区別をつけるべきである。専門的知識は、今

日ではつねにまさしく純粋のマンモン[20]にだけつかえるようますます強要されているから、一般教育は少なくともそのより理想的な立場で、均整をたもたねばならない。ここでも人々は毅然(きぜん)として次の原則を心にきざみつけねばならない。すなわち、工業と技術、商業と産業は、つねに理想主義的素質のある民族共同体が必要な前提を提供する場合だけ、栄えることができるのだ。だがこれの前提は物質的な利己主義の中にはなく、欣然と自己を忘れる犠牲的精神の中にあるのである。

＊

ありきたりの「愛国」教育　今日の青少年の教育は大きく全体としてみると、若い人々が、その後の自分の人生行路で進歩するのに必要な知識を注ぎこむことを、第一目標にしている。これを人々は、「青年は後日、人類社会の有用な一員にならねばならない」というように表現している。だが人々はその中に、まじめな方法でいつか日々のパンをかせぐ能力というものを考えているのだ。なおこれとならんで、皮相的な国家市民の教育もはじめから基礎がぐらついている。国家自体はただ一つの形式にすぎないから、人を国家のために教育したり、あるいは、そのうえ国家のために義務を負わせようとすることも、非常に困難である。形式はかんたんに破壊することができる。だが――すでに見てきたように――「国家」という概念は今日、明白な内容をもっていない。だからありきたりの「愛国」教育以外にできないのだ。昔のドイツでは教育の重点が多くの小さい諸侯たちのしばしば無分別な、だがたいていは非常に愚かな賛嘆渇仰にあったので、その多数のものがはじめから、わが民族の真に偉大なものを周到に評価することができないようにしていた。だからその結果は、われわれの大衆のあいだにドイツ史についての知識が非常に不十分であるということになった。ここでもまた大きな線が欠けていたのである。

こんなやり方では、ほんとうの国民的熱狂に到達できないことはわかりきっている。わが民族の歴史的生成の中から若干の名前をとりあげて、それを全ドイツ民族の共有財産にし、そのように同じ知識と同じ熱狂によってまた全国民を同じように結びつけるきずなをまきつける技術が、われわれの教育には欠けていた。人々は、わが民族の真に重要な人物をすぐれた英雄として、現代人の目にうつるようにし、一般の注意をこれらの人物に集中し、こうして渾然たる感情をかもしだすことを知らなかった。種々の教材の中から国民にとって栄誉となるものを選び、それを事実と思われるような叙述水準にまで高め、そしてこういう輝かしい例で国民の誇りを燃えたたせることもできなかった。これは当時においては、こういう形では人々に好まれない悪しき過激な愛国主義と思われたのであろう。愚直な王党的愛国心のほうが、最高の国民的誇りというわきたつ熱情よりももっと好ましく、より耐えやすいように思われていたのだ。前者はつねに奉公の用意ができており、後者はいつか支配者になりうるものであった。君主への愛国心は古兵の団体で終ってしまい、国民的熱情は、そのゆくえをきめることが困難であったであろう。それは駿馬のようであり、すべてのものが乗りこなすことはできない。人々がこうした危険からむしろ身をひいていたとは何たるふしぎなことであろう。いつか戦争がはじまり、十字砲火や毒ガス戦が愛国的心情の内面的な堅固さを徹底的に吟味するだろうということは、誰も考えおよばなかったように思える。だがひとたびそれが起ったときには、最高の国民的情熱が欠けていたため、このうえもなくおそろしい報いがきたのだ。人々は、皇帝や王侯などの支配者のために命をすてる気は、ほとんどなかったが、かれらの大部分は「国民」というものをよく知っていなかったのだ。

ドイツにおいて革命[21]が起り、それとともに君主に対する愛国心が自然と消えてしまって以来、歴史

教育の目的は実際にもはや単なる知識獲得だけになっている。この国家は国民的熱狂をわきたたせることができず、だが国家が欲するものを、国家は決してえられないのである。というのは国家主義の原理が支配している時代にはとことんまでの抵抗力のある王党的愛国心を与えることもできず、まして共和制的熱狂などは与えることができないのだからである。なぜなら、ドイツ民族が「共和国のために」というモットーのもとに、四年半も戦場にとどまっていないだろうということについては、もちろん疑う余地もないからである。この奇妙な組織をつくったものこそ、戦場から最も早く逃げだしたものたちなのだ。

実際上、この共和国が妨害もされずに存立しているのは、ただあらゆる方面[22]に、自発的にみつぎ物をささげ、領土割譲に調印することを進んでする覚悟がある、と確言しているおかげである。この共和国は、すべての弱者が、かれを利用するものにとって腕っ節の強い一人の男よりも好ましく感ぜられるように、他国に同情されるのである。もちろん、**敵のこの同情の中には、まさしくこの特殊な国家形式に対して、またこれをなくするような批判があったのだ。**人々はドイツ共和国を好み、存立させてくれる。なぜなら、かれらは、わが民族を奴隷化するこれ以上によい同盟者をまったく見いだすことができないからである。ただこの事実があればこそ、このすばらしい組織が今日存続しているのだ。それだから実際にすべての国民的教育を放棄することができ、国旗党[23]の英雄たちの「バンザイ」の叫びで満足していたのだ。しかもかれらは、この旗を自分たちの血で守らねばならないときには、うさぎのように逃げ去ってしまうだろう。

民族主義国家は自己の存在のために戦わねばならない。国家はドーズ案[24]の署名によってその存続を保ったのでも、ドーズ案によって守りえたのでもない。だが国家は、まさしく人々がいまや放棄する

ことができると信じているものこそ、国家の存立と防護のために必要としているのだ。形式と内容が無比で価値があればあるほど、敵の嫉妬と抵抗もますます大きくなる。その場合に最良の防御は武器にはなく、その市民にある。要塞の壁が国家を守るのでなく、最高の祖国愛と熱狂的な国民的熱中にみたされた男女のいきいきした壁が守るのである。

それであるから、第三としては、学問的教育の場合に次のことが考慮されねばならない。すなわち、

国民的誇りの喚起　民族主義国家は学問においても、国民の誇りを助長するための手段を認識しなければならない。世界史のみならず、全文化史もこの視点から教えられねばならない。発明者は発明者として偉大に思われるだけではなく、また民族同胞としてさらにもっと偉大に思われなければならないのだ。すべての偉大な行為への賛美の念は、自分の民族の一員としてのその幸福な完成者への誇りに鋳直されなければならない。だがドイツ史の中の偉大な多数の名前の中から最も偉大なものを選択し、そして青少年にそれらがゆるぎなき国民感情の柱石となるよう印象深くうつしだすべきである。

教材はこの観点にしたがって、計画的に組織されねばならず、教育は、若人が学校を卒業するときに、なまはんかな平和主義者や民主主義者、あるいはその他いいかげんなものでなく、**一人の完全なドイツ人**であるよう計画的に形成しなければならない。

この国民感情がはじめから純粋であって、単に空虚なみせかけでないようにするため、青少年のころに、鉄のような原則が、まだ教育を受けつける能力のある頭にたたきこまれなければならない。すなわち、**自分の民族を愛するものは、民族のために喜んで身をささげる犠牲によってのみ、それを実**

証するのである。ただ利益からのみ発するような国民感情は存在しない。同様に、ある階級だけを包含するような国家主義というものも存在しない。バンザイの叫びも、もしもその背後に一般的な健全な民族性を維持しようとする偉大な愛の配慮がなければ、何も国家主義たることを証明しないし、またその権利もない。さらに人々がもはや自分の地位を恥じる必要がなくなったときに、はじめて自己の民族への誇りに対する基礎が存在することになる。だがある民族が、そのうちの半分のものがみじめで、苦悩にやつれ、あるいはまったく堕落しているならば、それは何人もそれに誇りを感じないにちがいないほどよからぬ姿である。民族がその一員のすべてにいたるまで心身ともに健全であるときにはじめて、その民族に属しているという喜びが、あらゆる場合に、われわれが国民的誇りと名づけるあの高い感情にまで正当に高まることができるのだ。だがこの最高の誇りを感ずるのはまさしくその民族の偉大さを知るもののみである。

国家主義と社会主義の感情との親密な結婚は、まだ若いうちに心に植えつけられねばならない。そうすれば他日、共通の愛と共通の誇りによっておたがいに結ばれ、鍛えられ、永久に揺るぎなき、無敵な国家市民からなる民族ができるであろう。

過激な愛国主義に対する不安は無気力である　　いまの時代に過激な愛国主義に対してもっている不安は、民族の無気力の徴表である。現代はすべての澎湃（ほうはい）たる力が欠けているばかりでなく、そのうえ不愉快に思われるので、現代のものは大事業をするためにもはや運命から選ばれないのである。というのは、この地上の最も偉大な変革は、もしその推進力が熱狂的な、むしろヒステリックでさえある情熱のかわりに、ただ安寧秩序というブルジョア的徳性であるならば、可能でなかったかも知れな

い。

だがこの世界はたしかに偉大な変革に向かって進んでいる。そしてただそれがアーリア人種の幸福になるか、永遠なるユダヤ人の利用する結果になるか、という問題だけがありうるのだ。

民族主義国家はそれにふさわしい青年の教育によって、他日この地球上の最後の、そして最大の判決のために準備のととのった世代を維持するよう配慮せねばならない。

そしてこの道を最初に歩む民族が勝つであろう。

*

人種意識の注入　民族主義国家の全陶冶・教育活動はその頂点を、教育にゆだねられた青少年の心と頭脳の中で、人種的意識と人種的感情を、本能的にも知性的にも燃やすことに見いださねばならない。男児たると女児たるとを問わず、血の単一性の必要と本質について究極的な認識を得ないで学校を出してはならない。それによってわが民族の人種的基礎を維持する前提が作られ、またこの前提によって将来文化的にいっそう発展するための前提条件がふたたび確保されるであろう。

というのは、あらゆる身体的、精神的教育は、もしそれらが自己と自己の特性を保持しようと根本的に覚悟し、決心しているような人間の役に立たないならば、結局はそれにもかかわらず無価値になるだろうからである。

*

そうでない場合は、われわれドイツ人が今日すでに深く嘆いているような事態が生ずるであろう。このかなしむべき不幸がどんなに大きいかは、いままでおそらく理解されていないであろう。すなわち、われわれは未来においても単なる文化肥料たるにとどまるであろう。それもわが民族同胞の一人

が失われたことを、ただ一人の市民が失われただけだと見る今日のわがブルジョア的観念の偏狭な見解の意味においてのみならず、さらにわれわれの知識や能力がどんなものであろうと、それはもちろんわれわれの血を堕落させるにきまっているのだという悲痛きわまりないことを認識する意味においても、そうである。われわれが他人種と結婚することを再三再四くりかえすことによって、われわれは他人種の従来の文化水準を一段階高めることになるが、われわれ自身の文化的水準からは永遠に低下するのである。

そのうえ、人種の観点のもとにあるこの教育も、その最後の仕上げを軍隊ですべきである。なぜなら一般に兵役時代が、一般のドイツ人の普通の教育の終結とみなされねばならないからである。

＊

人材の国家的選抜　民族主義国家においては身体的、精神的教育のやり方が非常に重要であると同様に、そのための人間の選抜ということ自体もまた重要である。人々は今日ではこれを軽率に取扱っている。一般に上流のいまのところ富裕なくらしをしている両親をもつ子供たちは、やはり高い教育をうける価値があると思われている。才能の問題はその場合、第二義的な役割りを演ずるのである。才能そのものはつねにただ相対的に評価されうるだけである。農民の子供が一般的知識でブルジョアの子供に劣る場合でも、幾世代もよい生活状態をつづけている両親をもった子供よりも多くの才能に恵まれていることもある。だがブルジョアの子供の知識それ自体が広いということは、才能の有無にまったく関係がなく、それはその子供が多方面の教育や富裕な生活環境のために絶え間なく受けてきた印象が、本質的にそうとう大きいという点に根ざしているのだ。もし才能のある農民の子供が、小さいときから同じようにそういう環境で成長したとするならば、かれの精神的能力はまったくちがっ

たものになっているだろう。実際に素姓よりも、むしろもって生まれた素質がもっと大きくものをいう唯一の分野は、今日ではおそらく芸術の分野である。ここでは、人々はまさしく「習得する」のでなく、すべてがもともと生まれつきでなければならず、そしてその後にすでにもっている才能をさらに助長するという意味で多少とも有望な発展にまかせるだけで両親の金や財産はほとんど問題にならない。だからここでも、天才というものは、上流の生活層やあるいは富などとはまったく関係がない、ということが最もよくわかるのである。最も偉大な芸術家がこのうえもなく貧しい家の出であることは、めずらしくない。さらに村の小さい子供がたくさん、その後非常に名声ある大家になっているのだ。

人々がそういうことを認めながら精神生活のすべてにそれを利用しないことが、まさしく現代の考えの非常な浅薄さを表明しているのだ。人々は芸術の場合に否定することができないことを、いわゆる実際的な諸学問にはあてはまらないと考えているのだ。疑いもなく老練な調教師がおぼえのよいプードル犬にとても信じられぬような芸を仕込むことができるのと同じように、人間にも一定の機械的熟練を教え込むことはできる。だが、この動物調教の場合、芸をおぼえたのは、動物の理解力自体から発するのではない。人間の場合もまた同じである。人々は他の方面の才能などは顧慮せずに、人間に一定の学問的芸を仕込むことはできる。だが、動物の場合と同様にまったく生命のない、内面的に生気のない過程である。人々はある一定の精神的なきびしい訓練によって、普通の人間にしかも普通以上の知識をたたきこむことはできる。だがこれもやはり死んだ知識であり、けっきょくは不毛の知識である。そしてそれは実際生き字引のような人間を生ずるのだ。しかしそれにもかかわらず特殊な状態や人生の決定的な瞬間においては、みんなみじめにも役に立たないのだ。かれはどんな必要な場

合でもまたそれがどんな些細な場合でも、いつもまずもう一度仕込まれねばならず、自分の力で人類のよりいっそうの形成にいささかでも貢献するということはできないのである。そのような機械的に訓練された認識は、せいぜい現代の国家官吏の仕事をするに役立つぐらいのものである。

ある国民の民族全体において、日常生活で起りうる領域のすべてに才能あるものが見いだされることは、自明のことである。知識の価値というものは、それにふさわしい才能をもった個々のものによって、死んだ知識に魂が吹きこまれれば吹きこまれるほどますます大きくなる、ということもそれ以上に自明のことである。**創造的な仕事自体は一般に能力と知識がいっしょになったときにだけ、できるものである。**

今日の人類がこの点でいかにかぎりなく罪を犯しているかは、やはり次の例が示してくれるであろう。時々グラフ誌で、あちらこちらではじめて黒人が弁護士、教師、そのうえ牧師やそればかりでなくりっぱなテナー歌手やそういったものになったなどと出ていて、ドイツ人の俗物ぶりに目をみはらせる。愚鈍なブルジョアジーがこうした奇跡的調教を知っておどろき、今日の教育技術のこのうえような結果に尊敬の念でいっぱいになっているのに、ユダヤ人は、たいへんずるくそのことからかれらが諸民族に吹きこんだ**人間の平等**の理論の正しさに対する新しい証拠につくりあげようと考えるのだ。この堕落したブルジョア社会の人々は、ここではほんとうにすべての理性に反する罪が問題なのだということを、想像もしないのだ。最高の文化人種に属する幾百万のものが、まったくくだらない地位にとどまっていなければならないのに、生まれつきなかばサルのようなものを長い間調教して、弁護士にしあげたと信ずることが、犯罪者的荒唐無稽(こうとうむけい)なことだということを考えないし、ホッテントットやズール族が知的職業にまで調教されているのに、最も天分のある幾十万という人々を、今日プ

ロレタリアの泥沼の中に堕落させるならば、永遠の造物主の意思を冒瀆しているのだということも考えないのだ。というのはこの場合は調教が問題なのであり、プードル犬の調教の場合とまったく同じであって、学問的な「教育」ではないからだ。同じ努力と配慮を知的人種に向けたならば、どんな人々も同じ仕事に千倍も早く熟達するだろう。

だがもしこの場合、いつか例外でなくなりもっと多くのものが問題となるならば、この事態は実に耐えがたくなるだろう。すでに今日でも、才能や素質に恵まれながら高等教育をうけることができないのだから、非常に耐えがたいのである。実際、何十万というきわめて素質のあるものが高等教育をうけることができないのに、幾十万のまったく才能のない人間が毎年高等教育を受ける価値があると考えることは、我慢ならないのだ。そのために国民がこうむる損失は、はかりがたい。最近数十年間に重要な発明という富が、特に北アメリカで非常に増加したが、これは北アメリカではけっきょく最下層のものでも本質的に才能があれば高等教育をうける可能性が、ヨーロッパの場合よりも、多かったということによっている。

発明のためには、注入された知識では、不十分であり、ただ才能によって魂を吹きこまれたものでなければならない。だが今日ドイツ人はこの点に価値をおいていない。紙幣だけが価値があると考えているのだ。

ここでもまた民族主義国家は、他日、教育に関与すべきであろう。**民族主義国家は、ある現存の社会階級に決定的な権利を主張するのではなく、民族同胞の全体の中から最も能力ある頭脳の持ち主を引き抜いて、そして官職や高官につかせることがその課題なのだ。**民族主義国家は、普通の児童に民衆学校で一定の教育を与えることだけが義務ではなく、また才能あるものをその属すべき道につけて

やることも、義務なのである。民族主義国家は、とりわけ国立の中等教育機関の門を、才能のあるものにはすべて、いかなる階層から出たものであろうとまったく平等に開いてやることを、その最高の課題と考えねばならない。国家はこの課題を果さねばならない。というのは、これのみが死せる知識の代表者の層から国民の独創的指導層を育成しうるのだからである。

また次の理由から、国家はこの方面にあらかじめ留意しなければならない。すなわち、特にドイツでは知識階層というものは自分たちだけでかたまっており、下層階級とのいきいきした結合を欠いているほどに硬化している。これは、二つの方面から報いがくる。第一に、このために知識層には大衆に対する理解と思いやりが欠けている。かれらは大衆との関連からすでに長い間はなれており、民衆に対する必要な心理的理解をあいかわらずもつことができないのだ。かれらは民衆とは無縁になっている。第二に、だがこの上層のものには必要な意志力が欠けている。というのは、箱入り娘のようなインテリ層においては、この意志力は素朴な大衆におけるよりもつねに弱いからである。だが学問的教養ではわれわれドイツ人が欠けたところのないのは、神も知るところである。だが意志力や決断力ではそれだけ欠けるところが多かったのだ。たとえばわが政治家が、「才知にあふれ」ていればあふれているほど、かれらの実際上の仕事はたいてい鈍くなったものだ。世界大戦に対する政治的準備や技術的軍備は、わが民族の**教養のすくない**頭脳の持ち主が統治していたからでなく、むしろ知識と精神はいっぱいつめられているが、健全な本能に欠け、エネルギーと大胆さに欠けていた、**教育のありすぎる人**が統治者であったがために、不足していたのだ。わが民族が哲学する弱虫の政府のもとで生存をかけた闘争をたたかわねばならなかったのが、一つの悪運だったのだ。もしわれわれがベートマン・ホルヴェーク(25)のかわりに、たくましい民衆階級の人間を指導者としてもっていたならば、一般の

歩兵の英雄的な血はむだには流れなかったであろう。同様に、極端に純粋に知的に高度のしつけをうけたわが指導層は、十一月革命のルンペンどもには最良の盟友だったのだ。このインテリ層は、かれらにゆだねられた国民的財宝を十分に拍車をかけてのばすかわりに、最も屈辱的なやり方でおさえ、それが敵に成功をもたらす前提となったのだ。

カトリック教会の民衆との結合性　この点でカトリック教会は、典型的な教訓例として見ることができる。カトリック教会の司教たちの結婚禁止には、聖職のための後継者を自分たちの系列からではなく、つねに民族の大衆の中から引き抜かねばならないという束縛が、基礎にある。しかし、この独身主義の意味がたいていの人には、まったくわからないのだ。これが、この古くからある制度に住みついている信じがたいほど強健な力の原因なのだ。というのはこうすることによってこの聖職という栄誉の担い手の大軍をたえず民衆の最下層の中から補充するために、教会は民衆の感情の世界と本能的に結合しているだけでなく、大勢の民衆の中においてのみ永遠に存在するようなエネルギーと実行力の総和を確保できるからである。ここからこの巨大な組織のおどろくべき若さ、精神的な弾力性、鋼鉄のような意志力が生まれるのだ。

教育制度において、現在の知識層が下層からの新鮮な血の導入によってたえず更新するよう配慮することは、民族主義国家の課題である。国家は民族同胞の全員の中から非常に注意深く、厳密に、生まれつきはっきりと能力ある人材を抜擢(ばってき)し、一般社会に役立てるようにする義務がある。というのは国家および政治家は、種々の階級のものたちに就職口を与えるためにあるのではなく、かれらに与えられた課題をじゅうぶんに可能にしてやるためにあるのだからである。だからこれは原則として、能

力もあり意志も強い人物がその担い手として教育されるときだけ、できることである。これはすべての官吏としての地位についてだけでなく、国民の精神的指導について、あらゆる領域で一般にいえるのである。また最も有能な人物を、かれらに適した分野のために教育し、民族共同体の仕事につかせるのに成功することが、民族の偉大さの一つの要素でもある。もしも同じようによい素質をもつ二つの民族が互いに競争するならば、すべての精神的指導において最良の才能あるものが代表しているものが勝利をかちうるだろうし、その指導がただある一定の身分や階級のための大きな共同のマグサおけのようなもので、個々の生まれつき才能をもつものを顧慮しない民族は、負けるであろう。

労働の価値　もちろんわれわれの今日の世界ではこれはまず不可能であるように思われる。人々はただちに異論をはさむだろう。たとえば本人が高級官吏の息子で、親が職工であった他のもののほうが才能があると思われるからという理由で、その息子が職工になるとは――われわれがいうようには――期待できない、と。手工労働に対する今日の評価からみればこれはあたっているかもしれない。それだからこそまた、民族主義国家は労働という概念に対して根本的にちがった態度をとらねばならない。**国家は、もし必要なら幾世紀かかろうとも、教育によって筋肉労働を軽視する非道をみずから打ち破らねばならない。国家は原則として個々人をかれの仕事の種類によってでなく、その仕事をする姿勢と成果によって評価せねばならない。**これは最も才知のない三文文士のほうが、かれがペンで仕事をしているという理由だけで、最も知的な精密機械工よりも高く評価されるような時代には、まったくいやなことだと思われるかもしれない。だがすでに述べたように、この誤った評価は物事の本性の中にあるのではなく、人為的に植えこまれ、ずっと以前はなかったものなのだ。今日のこの不自

然な状態は、まさしく現在の物質化した時代の一般的な病的現象にもとづくのである。

原則として、すべての労働は二通りある。つまり純実利的なものと、観念的なものとである。実利的価値は全体の生活のために行なう労働の重要性、しかも実利的重要性にもとづく。民族同胞が、ある完成された仕事から利益をしかも直接、間接の利益を多く受ければ受けるほど、その実利的価値もますます大きいと評価することができる。この評価は、各人がその労働に対して受けとる物質的報酬の形で具体的にあらわされる。ところがこの純粋の実利的価値に対して、観念的な価値がある。これはなされた仕事の意義を実利的に計ることにではなく、その本来の必要性にもとづくのである。もちろんある発明の実利的利益が、平凡な小売店員のそれよりも大きいということはありうる。けれども社会がそういう大事業におけると同じように、こうしたきわめて小さい仕事にささえられていることも確かである。社会は、社会に対する個々人の仕事の利益を評価する場合に、実利的に区別するかもしれない。そしてその時々の賃銀支払いによってあらわすこともできる。しかし各人がすべて自己の分野——それはつねにまた存在するだろうが——でベストをつくそうと努力しているときには、観念的にはすべて同等であると確認しなければならない。人を評価する場合はこの点にもとづき、報酬で評価してはならない。

理性的な国家においては、各人にその能力に応じた仕事をわりあて、あるいはいいかえれば、与えられた仕事に対して有能な頭脳の持ち主を教育するよう配慮すべきであるが、能力は原則として教えこまれるものでなく生まれつきであるにちがいない。それゆえ自然が贈ったものであって人間の功績ではないのだから、一般のブルジョアのように個々人にある程度までゆだねられた仕事にしたがって評価することはできない。というのは、この仕事はかれの生まれがどういうものであるかということ

と、そこに由来するかれが社会から受けた教育とによるのだからである。人間の価値評価というものは、かれが社会から責任をもたされた課題を正しく行なうか、というそのやり方に基礎がおかれねばならない。なぜなら、個々の人間が果す仕事は、かれの存在の目的でなく、ただそのための手段にすぎないからである。むしろかれは人間としていっそう教育され、洗練されるべきである。だがこれは、つねにある国家というものを基礎にしなければならない文化社会のわく内でのみ、なしうるのである。この基礎を維持するためにかれは何か貢献しなければならない。この貢献の形式は自然が決定する。それは、民族共同体がかれに与えたものを、勤勉に、誠実に民族共同体に返済することだけにある。これを行なうものが、最も高い価値評価と最も高い尊敬をうるのである。物質的報酬は社会のためになしたことがそれ相応の利益をもたらしたものに与えられるであろう。だが観念的報酬は、自然がそれを与え、民族共同体が教育した諸力をかれの民族に奉仕するためにささげたすべてのものが、要求しうる評価によらねばならない。だが、そうなればまじめな職工であることももはや恥ではなく、むしろ無能な官吏として愛する神からは日を、善良な民衆からは日々のパンを盗むことのほうがむしろ恥になる。さらにまた、はじめから耐えられないような人間に仕事をあてがわない、ということも自明のことと思われるだろう。

そのうえまた、そういう活動が、一般に同じ法律上市民として認められている権利に対する唯一の規準となるのだ。

現代は実際みずから解体している。すなわち、現代は普通選挙権を導入し、平等権についてしゃべり、だがしかしこれに対する基礎はなにも見いださないのだ。現代は物質的報酬によって人間の価値があらわせると考え、こうして一般に与えることができる最も高尚な意味での平等性の基礎を破壊し

ている。というのは、平等というものは個々人の業績にもとづかないし、決してもとづきえない。だがそれは各人がかれに与えられた特別の義務を果す形において可能である。こうしてのみ、人間の価値を判断する場合に、自然の偶然(26)が除外され、個々人は、みずから自分の価値をつくるようになるだろう。

すべての人間のグループが、ただ収入の高低によってだけ評価することを知っているような現代社会では、人々はこれに対して——すでにのべたようには——理解しないのである。だがこれは、われわれの考え方を放棄する理由にはなりえない。反対である。すなわち、内面的に病んでおり、腐敗している現代を救済しようとするものは、まずこの苦悩の原因を解放する勇気を奮いおこさねばならない。そしてこれが国家社会主義運動の配慮するところでなければならない。すなわち、あらゆる俗物根性を脱し、わが民族の中から新しい世界観の支配者としての能力のある力を集め、組織することがそれだ。

＊

等級別賃銀　もちろん人々は次のように異論をとなえるだろう。一般に観念的評価を実利的評価からきりはなすことは困難である、事実、筋肉労働の低い評価は、まさしくその低い賃銀によってもたらされたものである。そのうえこの賃銀の少なさは、個々人がその国民の文化財に関与することを制限する原因でさえある。だがそのためにまさしく人間の理念的文化は妨害され、かれの仕事自体となんら関係をもつ必要もなくなった。筋肉労働が嫌悪されるのはまさしく、賃銀が低いために手工労働者の文化水準が必然的に低下し、その結果、一般に低い評価をうるのがとうぜんとなった基礎がまずそこにあるのだ、と。

ここには非常に多くの真理がある。しかしだからこそ、人々は未来において、賃銀状態の大きい差を防止しなければならないのだ。そうなると仕事が停滞するだろうといってはならない。もし高級な知的な仕事をしようとする動機が、ただ高い報酬ということだけにあるならば、それは時代が堕落している悲しむべき徴表である。もしこの観点がいままでこの世界の唯一の規準的なものであったとしたならば、人類はその最大の科学的、文化的財宝を決してもたなかったであろう。というのは最も大きな発明、最も偉大な発見、最も革新的な学問上の業績、人類文化の最もすばらしい記念物は、世の中の金銭への衝動から与えられたのではない。反対に、その産物は往々にしてまさしく富の現世的幸福を断念することを意味したのだ。

今日では金が生活の唯一の支配者になっているかもしれない。けれどもいつか人間はもう一度より高い神々の前にひざまずくであろう。多くのものは今日、金銭と財産への渇望にのみその存在理由をみつけているかもしれない。だがそういう人間がいなくなったとて、人類が貧しくなるほどのものはかれらの中にほとんどいないのだ。

各人は、かれがその生活に必要とするものを与えられる時代、そのさい、しかし人間が物質的享楽のためにのみ生きようとしているのではないという原則を高揚するような時代が、くることを今日から知らせておくことも、われわれの運動の課題である。これは将来、まじめに働くものにだれでもどんな場合でも、民族同胞として、人間として見苦しからぬ、ちゃんとした生活ができるようにうまく限定された賃銀の等級づけを表示すべきである。

理想と現実　これは理想の状態であり、そんなことがこの世界では実際にできないし、事実上決

して達成されない、といってはならない。われわれも、いつかは欠点のない時代を招来することができうると信ずるほどにはお人よしではない。しかしこれは、わかっている欠点と闘い、弱点を克服し、そして理想へ努力する義務から解放されたということではない。峻厳(しゅんげん)な現実はみずから多くの制限のみを加えるだろう。だがそれゆえにこそ、まず人間は最終の目標に有用であるように努めねばならない。そして失敗の打撃はその観点からいって少しもとり去ってはならない。間違いがまぎれこむからという理由だけで法律を止めてしまうこともできず、薬があってもそれでも病人がいつもでるといって薬を拒否しえないのと同じである。

人々は理想の力を低く評価しすぎぬよう注意しなければならない。この点について今日もし小心なものがあるならば、もしかれがかつて兵士であったとしたら、わたしは英雄らしさが理想的動機から生ずる力のこのうえもなく強力な告白であったあの時代のことを思い出させてやりたい。というのは、当時人々をして生命をすてさせたものは、日々のパンに対する配慮ではなく、祖国愛であり、祖国の偉大さに対する信念であり、国民の栄誉に対する一般的感情だったからである。そしてドイツ民族が革命の現実的拘束にしたがうために、この理想からはなれ、そして武器をリュックサックととりかえたときにはじめて、かれらはこの世の天国に行くかわりに、一般的侮蔑(ぶべつ)とそれに劣らない一般的困窮の煉獄(れんごく)の中に陥ったのだ。

それゆえにこそ、今日の現実主義的な共和国の算術教師(27)に、理想主義的な帝国への信念を対置させることが、まさしく必要なのである。

第三章　国籍所有者と国家の市民[1]

今日どのようにして国家の市民となるか　一般に、今日、あやまって国家と称せられている構造の中には、二種類の人間だけがある。すなわち国家の市民と外人だ。国家の市民とは出生によって、あるいは後に帰化して公民権をえたすべてのものをいう。外人とはこれと同じ権利を他の国家でうけたすべてのものをいう。この中間になお惑星的現象として、いわゆる無国籍者がいる。かれらは現存のいずれの国家にも属さず、それゆえ市民権などは決してもっていないという栄誉をもっている人間である。

市民権は、すでにのべたように、今日ではまず第一にある国家の国境内で生まれたことによって獲得される。この場合人種とか、どの民族に属しているかということは、一般に問題にならない。以前はドイツの保護領に住んでいた黒人が、いまではドイツ国内に住んでいるとする。そうするとかれは自分の子供を「ドイツ国家市民」として世に出す。同じようにユダヤ人やポーランド人、アフリカ人種やアジア人種の子供はだれでも、無造作にドイツ国家市民に登録されることができるのだ。

出生による市民権獲得のほかに、その後市民権を獲得する可能性もある。これは種々の前提条件と結びついている。たとえば、帰化を希望しているものが、なるべく犯罪人や娼婦のヒモでないこと、さらに政治的に考慮する必要のないこと、つまり無害な政治的まぬけであること、最後に新しく国家の市民になった故国に重荷にならないことなどである。今日のような現実的な時代においては、もち

ろん経済的負担だけを考えるからである。そのうえに、多分将来のよい納税者だと思わせることは、今日の国家市民権の獲得を早めるためには効果的な推薦にさえなる。

そのさい人権を考慮することは、一般に問題にならない。

国家の市民になる全過程は、たとえば自動車クラブに入会するのとたいした違いのない手続で行なわれる。申告書をつくる。それが調べられ、鑑定される。そしてある日かれのところへ、かれが国家の市民になったことを知らせる一片の紙片がとどけられる。その場合に実にこっけいなふざけた方式で行なうのだ。今までズール族だった問題の人間に、「本状をもって貴下はドイツ人になった!」と伝えるのである。

この手品は州の首相が仕上げるのだ。神さえもできえないものを、官職にあるテオフラストゥス・バラツェルズス[2]が一瞬間にやってしまうのだ。簡単にペン先で、蒙古人の小僧[3]からとつぜん、ほんとうの「ドイツ人」ができあがるのだ。

だが、人々はこうした新しい国家の市民の人種がなんであるかに関係しないばかりでなく、その身体の健康さえも配慮しないのだ。こやつが梅毒でくさっていようがいまいが、それにもかかわらず今日の国家にとって、すでにのべたように、かれが経済的に重荷にならず、政治的に危険でさえなければ、市民として歓迎されるのである。

そのようにして毎年、国家というこの組織体は、自分ではもはや克服することができない毒素を、自己の中へとりいれるのである。

国家の市民自身は、さらになお次の点で外人から区別している。すなわち国家の市民にはすべての官職につく道が自由に開かれており、万一の場合には兵役義務に服さねばならず、さらにそれ以後は

積極的にも消極的にも選挙に関与しうる。大体においては差異はこれですべてである。というのは個人の権利、個人の自由の保護については外人も同じぐらい受けており、それ以上のこともまれではないからだ。いずれにせよ、今日のドイツ共和国ではこれがあてはまるのである。

人々が、こうしたすべてのことを聞くことが不愉快であることを、わたしは知っている。だが、今日のドイツの国家市民権ほど軽率で、むしろ狂的なものはめったにない。現時、少なくともよりましな解釈に向かっている微弱傾向が目につく一つの国がある。もちろんこれはわが模範的なドイツ共和国ではなく、アメリカ合衆国である。そこでは人々は、少なくとも他方一部分は理性にうったえる努力をしている。アメリカ合衆国は、健康上よくない分子が移民することを原則として拒否することによって、ある民族には帰化を全然認めない。すでにアメリカはかすかに、民族主義国家観に特有な観念を知ったのだ。

市民――国籍所有者――外人　民族主義国家は、その住民を三階級にわける。すなわち、国家市民、国籍所有者、および外人である。

出生によっては原則として国籍だけがえられる。国籍をもつというだけでは、まだ公的な官職につく資格がなく、また積極的にも消極的にも、選挙へ関与する意味で政治的に活動する権利もない。原則として国籍をもつものすべては、人種と、もとの国籍を確認すべきである。国籍所有者にはいつでも、かれの国籍を放棄し、かれのもとの国籍がある国の国家の市民に自由になることができる。外人と国籍所有者の区別は、こうしてただ外人が他の国に国籍をもっているということだけである。

ドイツ人でドイツに国籍をもつ子供は、すべてのドイツ人に規定された学校教育を終える義務があ

る。かれはそれによって人種意識と国家意識をもった民族同胞となる教育にゆだねられる。かれはその後、国家によって規定されたよりいっそうの身体的訓練を果し、そして最後に軍隊にはいるのである。軍隊における訓練は一般的なものである。すべての個々のドイツ人をつかみ、その身体的精神的能力に応じてできるかぎり軍隊に役立ちうるよう教育しなければならない。非のうちどころのない健康な青年には、兵役義務の終了後その結果として、堂々と**国家市民権**が授与される。これが、この世の全生涯をつうじて最も価値のある証書である。これによってかれは国家市民のすべての権利を保証され、市民としてのあらゆる特権に関与する。というのは、国家は、民族同胞としてその存在とその偉大さの原因であり担い手であるものと、単に「金もうけをする」分子として国内に居住しているものとの間に、はっきりした区別をもうけねばならないからである。

国家市民証書の授与は、民族共同体と国家に対するおごそかな宣誓と結びつかねばならない。この証書の中に、すべてのそれ以前の割れ目を解消させ、ともに抱きあうきずながあるのだ。**道路清掃夫としてドイツ国の市民であるほうが、他国の王であるよりも、もっと大きな名誉であらねばならない。**

国家の市民がドイツ国の主人である　**国家市民**は外国人に対して優先権をもっている。**市民がドイツ国の主人なのである。**だがまたこの高い地位は義務がある。名誉や徳操のないもの、卑劣な犯罪人、売国奴等はいつでもこの栄誉を剝奪（はくだつ）することができる。かれはこれによってふたたび国籍所有者にもどるのだ。

ドイツの少女は国籍所有者であり、結婚によってはじめて市民となる。けれどもまた職業をもっているドイツ女子の国籍所有者には市民権を授与しうるのである。

第四章　人格と民族主義国家の思想

貴族主義的原理による構成　民族主義的国家社会主義国家は、その主要課題が国家の担い手を育成し、維持することにあると見るならば、人種的要素それ自体を助成し、そして教育し、最後に実生活のために育成するというだけでは十分でなく、国家がそれ自体の組織をこの課題と一致させることが必要である。

もし人々が究極の帰結にまで徹底する決心がないならば、人間の価値をその属する人種によって評価しようとし、したがって「人間は同じ人間だ」というマルクス主義的立場に闘争を宣言することも、荒唐無稽(こうとうむけい)なことであろう。血の意義すなわち一般に人種的基礎の意義を認めた究極の帰結は、しかし、この評価を個々の人間に適用することである。一般にその人種的所属によっていろいろと評価しなければならないと同様にまた、ある民族社会の中においても、個々の人間についてさまざまの評価がされなければならない。ある民族がみな同一でないと確認することは、ある頭は他の頭と同じではありえないという意味で、さらにある民族共同体の中の個々の人間にもあてはまるのである。ここでも大きく見れば血の構成要素はもちろん同じだが、個々人においては千差万別のこまかい相違があるからである。

この認識の第一の帰結は、——わたしはあえていうのだが——同じく次のような大雑把(おおざっぱ)な帰結である。すなわち民族共同体の内部で人種的に特に価値があると認められている分子を、できるだけ助成

し、それが特別にふえていくように配慮するよう試みる、ということである。大雑把にいったのは、この課題は、ほとんど機械的に認めうるし、了解しうるからである。全体の中から精神的にも理念的にも実際に価値ある人物を認めて、かれらに影響力を与え、しかもこのすぐれた人物だけに与えるのでなく、なによりも国民に役立つようにすることは、いっそう困難である。有能さと有為さによるこのふるいわけは、機械的に行なわれるものではなく、日々の生活の闘争がたえず行なっていく活動によってである。

民主主義的大衆思想を拒否し、最良の民族、したがって最高の人間をこの地上に与えようとつとめる世界観は、その民族の中において論理的にいっても、同じように貴族主義的原理によって、最良の人物にその民族の指導と最高の影響力を確保するようにしなければならない。それゆえこの世界観は多数のものの思想の上にでなく、人格の上に構築せられるのである。

民族主義的国家社会主義国家が、なにか経済生活のもっとよい構造によって貧富の差のよりよき調整によって、あるいはもっと広汎な層が経済過程にもっと多く関与する共同決定権によって、あるいは公正な賃銀によって、大きな賃銀差の除去によってのみ、ただまったく機械的に他の国々と区別されるはずだ、と今日考えているものは、最も皮相的な見方にはまりこんでいるのであって、われわれが世界観と称するものについては、いささかの観念ももっていないのである。ここにのべたものだけでは、永続的存立が確保できることを少しも示していない。まして偉大なものになろうという要求はムリである。この現実の外面的改革にのみとどまっている民族は、一般的な民族競争でこの民族が勝利をおさめるという保証を、いささかも得られないだろう。単にこの種のもちろん正当ではあるが、一般調整的な発展をその使命の内容だと感じているような運動は、現存の状態の大きな改革が決して

できないのだから、実際には強力でも現実的でもない。その行動はすべて、けっきょく皮相にのみとどまっていて、われわれが今日苦しんでいるようなこの弱点を、必然的な——ほとんどそういいうるのだが——確実さをもって克服してしまう内面的な心がまえを、その民族に与えるものではないのである。

これをたやすく理解するために、もう一度人類文化の発展の真の源泉と原因をふりかえってみるのも、目的にかなっているだろう。

人間を外見上はっきりと動物から離す最初の一歩は、発明へのそれである。発明自体は元来、一策略や詭計(きけい)をみつけだしたことにもとづく、それらを応用することによって、他の生物との生存闘争が容易になり、一般にしばしば好都合に展開していったであろう。それゆえこの最も原始的な発明は後世の、もっとよくいえば今日の人間の目から見ると、もちろん最初は大衆の考えだした現象として解されるために、人物がまたじゅうぶんはっきりと現われていない。たとえば人間の目からみて、動物に見ることができるようなある策略とか、ずるいやり方とかいうものは、はじめは総括的なことがらとして目にうつる。そしてその根源を確認したり探したりすることもできず、そういうでき事を「本能的」だといって簡単にお茶をにごすのである。

この最後のことば[1]は、いまやわれわれの場合にはまったく無意味である。というのは、生物の進化発展を信ずるものは、生きようとする衝動や生存闘争の表現にはすべて一度は発端があったに違いないということを、認めなければならないからだ。すなわち一人の人間がその発端と同時に始め、さらにそういう過程がいつもたびたびくりかえされ、ついにはほとんどそれがある特定の種に属するすべてのものの意識下に移行し、さらに本能として現われるまでにだんだんと広がったのである。

人格と文化の進歩

これが人間自身の場合には、もっと容易に理解され、信じられるだろう。人間が他の動物と戦う最初のりこうなやり方――それらもその源泉をさぐれば、たしかに一人特別に有能なやつがやったのだ。この場合でもそういう人物が、かつてはいろいろのことを決断したり、実行したりする誘因だったに相違ない。その後それがまったく自明のこととして、全人類に引きつがれたのである。今日あらゆる戦術の基礎となって、軍事的に自明なこととされているものも、まったく同じで、もともとまったく特別の頭脳の持主がそれを作りあげたのであり、ただ多年、おそらくは幾千年もたつうちに、まったく完全に自明なこととして一般に通用するようになっただけである。

この最初の発明を、人間は第二の発明によって補った。人間は他のいろいろな物や生物までも人間自身の生存維持の闘争に役立てることをおぼえた。それとともに今日一般に、われわれが目の前に見ることができるような、人間の本来の発明活動が始まったのだ。これらの物質的発明は、石を武器として用いることから出発し、動物を飼育するようになり、人間に人工的に火をつくって与え、さらに現代の多様な驚嘆すべき発明にいたるまで、その個々の発明が現代に近く、あるいはそれが重要であり、有用であればあるほど、それを創造した担い手である人物を、ますますはっきりと認めることができるのである。いずれにせよこのようにしてわれわれは、次のことを知っている。すなわち、われわれが物質上の発明に見るものは、すべて個々の人物の創造的な力と能力の結果だということである。そしてこれらの発明のすべては、究極において人間を動物界の水準からだんだんと高め、そのうえ人間を動物からまったくはなすことを助けたのである。それだから発明は人類が絶え間なく高等なものになっていくための最も基礎的なものになっているのである。しかし、かつては最も簡単な策略とし

て、原始林の中で狩をする人間に生存のための闘争を容易にしたものすら、現代では知的にしっかりした学問的認識の形で、ふたたび今日の生存のための人類の闘争を容易にし、未来の闘争のための武器を作りだす助けとなっているのだ。人間のすべての思考や発明は、ある発明や発見や事物の本質の深い学問的洞察のもたらすいわゆる現実的な利益が目下のところ見えなくても、その究極的効果は、第一にこの遊星における人間の生存闘争に役立つのだ。これらすべてがいっしょになって、次第に人間を周囲の生物のわく内から高める役目をし、人間がどの点から見てもこの地上の支配的生物になるようにその地位を強化し、固めたのである。

人格の価値　このようにすべての発明は、ある一人の人の創造の結果である。これらの人物のすべては、欲すると欲しないとにかかわらず、多少とも全人類の偉大な恩人である。かれらの活動は、その後何百万、何十億の人間が生存闘争を容易に行なう補助手段を与えたのだ。

もしわれわれが、今日の物質文化の源泉はつねに個々の人間が発明者であると見て、さらにおたがいに補充しあい、ある発明の上に他の発明をつみかさねていったと見るならば、これら発明者が考えだし発明したものを実地に応用し、実際に行なう場合も、それと同じである。というのは、あらゆる生産過程もその源泉自体においては発明と同じに見るべきであり、したがって個人にもとづくものだからである。また純粋の理論的思索活動も、一つ一つを計ることができなくとも、やはりその後のすべての物質的発明の前提であり、まったくただ一人の人間が作りだしたものと思えるのである。大衆が発明するのではない。そして大衆が組織を作ったり、考えたりするのではなく、あらゆることにおいてつねにただ個々の人間、個人がなすのだ。

人間社会がこれらの創造力をもつものに、できるだけ親切に仕事をしやすくしてやり、かれを全体のために利益となるように用いないならば、人間の社会はりっぱに組織されているとは思えないのだ。発明そのものの中で最も価値あるものは、それが物質上のものであろうと思想界に属していようと、なによりもまず一人の人間としての発明者である。かれをこのように全体のために利益となるように配置することが、民族共同体という組織の第一のまた最高の課題である。そうだ。組織自体はただこの原則を執行するにすぎないのだ。それと同時に組織もまたメカニズムののろいから脱して、それ自体なにかいきいきしたものになるのだ。**民族共同体という組織それ自体は、そういう人間を大衆の上におき、したがって大衆をそういう人々の下に従属させようとする努力の具体化したものでなければならない。**

それゆえ組織は、大衆の中から人物が出てくることを妨害してはならないばかりでなく、反対に組織独自の本性によってこれを最高度に可能にし、容易にしなければならない。その場合人類に対する祝福は、決して大衆の中にあるのではなく、創造的な頭脳をもつ人々、したがって実際に人類の恩人ともいえる人にもとづいているという根本的原則から出発しなければならない。かれらに最も権威ある影響力をおよぼしうる地位を確保してやり、かれらの活動をやりやすくしてやることが、全体の利益になるのである。この利益は、考える能力もなく、有能でもなく、いささかも天賦の才のない大衆の支配によっては満たされず、また役にも立たない。自然からそのために特別の才能を与えられた有能なものの指導によってのみ可能なのだ。

こういう頭脳の持主の選抜は、すでにのべたように、なによりも峻厳(しゅんげん)な生存闘争自体が行なうのである。多くのものは挫折(ざせつ)し、没落しかくして最後に残るものとして定められていないことをみずから

証明する。そして少数のもののみが最後に選ばれたものとして現われるのである。思想の分野や芸術的創作の分野や、実に経済の領域でさえも、この選抜過程は——たといそれが経済の分野では非常な重荷を負わされているとはいえ——今日でもなお行なわれているのだ。国家行政や、同様に国民の組織だった防衛力によって強化された力は、こうした考えが支配するのである。どこにおいても人格の理念、すなわち人格の権威は上から下へ、これに対して上位の人に対する責任は下から上へという理念が優勢になるのである。ただ今日では、政治生活はすでにこの最も自然な原理から完全に離れている。人類文化はすべてただ個人の創造的活動の結果であるのに、民族共同体の全体において、だがまず第一にその最高指導層においては、多数者に価値があるという原理が決定的に現われ、そこから次第に全生活を毒し始めているのである。つまり実際に全生活を解体しているのだ。また他の民族体の中でのユダヤ人の活動の破壊的作用というものは、根本においては、このお客さんたる民族の場合には個人の意義を否定し、そのかわりに大衆の意義をおこうとするかれらの永遠の試みにのみ帰することができるのである。だがこれによってアーリア人種の組織的原理のかわりに、ユダヤ人の破壊的原理が出てきたのだ。かくしてユダヤ人は、民族と人種の「分解酵素」になり、もっと広い意味では人類文化の解体者になるのだ。

多数決原理　だがマルクシズムは、人間生活のあらゆる領域で、人格のいちじるしい重要性を排除し、それを大衆の数によっておきかえようとして、ユダヤ人がもちこんだ正真正銘の試みのあらわれである。政治的には議会主義的政治形式がそれに応じたものであり、われわれはそれが地方自治体の最も小さい胚細胞から始まって、全ドイツの最高の統治にいたるまで、有害な作用を及ぼしている

のを見る。そして経済的には、労働者の実際的利益には奉仕せず、もっぱら国際的な世界ユダヤ主義の破壊的意図にだけ奉仕している労働組合運動の体系も、これに適応しているのである。人格の原理の作用から離れ、そのかわりに、大衆の影響力と干渉にのみゆだねられるにしたがって、経済は、すべてのものの役に立ち、すべてのものにとって価値のある指導能力を失い、そして次第に確実に逆行的に堕落していくに違いない。かれらの使用人の利益を認めず、そのかわりに生産そのものに影響を及ぼそうとしている全経営組織[2]は、同じような破壊的な目的に役立つのである。これは全体の仕事に害を及ぼし、かくして実際に個々人にも害を及ぼすのだ。というのは、ある民族体に属しているものが満足するのは、けっきょくは単に理論的な口先だけでなく、むしろ日常生活の個々の手にはいる品や、そこから決定的に生ずるところの民族共同体がそのすべての仕事において個人の利益を保護しているのだという確信から、もっぱら起るのだからである。

マルクシズムは人格価値を否定する　マルクシズムがその大衆理論にもとづいて、現存の経済を引き受け、それをさらに発展させていくことができるように思えるかどうかは、また大した問題ではない。この原理が正しいか正しくないかについての批判は、現存のものを将来も管理しうるかどうかという能力を証明することによってきめられるのではなく、もっぱらただ現存のような文化をみずから創造しうるということを示すことによってである。マルクシズムは今日の経済を引き受け、自分が指導していっそう活動させるぐらいのことは、いくらでもできるだろう。しかしこの活動の成果は、マルクシズムがその多数決原理を用いることによって、今日できあがっているものとして引き受けたものでさえ創造しうるような立場にいないのだという事実に面しては、まったくなんらの証明にもな

らないのだ。

そしてこれに対しては、マルクシズムは実際の証拠を提出している。マルクシズムはどこにおいても、文化やまた経済すらも創造的につくりえなかっただけでなく、実際上マルクシズムは、現存のものを自己の原理にしたがってさらに導いていくという立場には一度もいなかった。そればかりかまもなく譲歩して人格原理の思考過程へたちもどらねばならなかった。マルクシズムも同じように自己の組織においては、この原則なしですましえないかのようにである。

民族主義的世界観は、しかし、単に人種の価値だけでなく、それとともにまた個人の意義をも認め、これをもって全組織の礎柱にするという点で、マルクシズムの世界観とは根本的に異なるのである。これがその世界観のもっている原動力なのである。

特に国家社会主義運動が、この原則的認識の基本的意義を理解せず、そのかわりに今日の国家に外見的なつくろいをしたり、あるいはそのうえ大衆の立場と自己の立場として認めたりするならば、それは事実上マルクシズムに対する単なる競争政党たるにすぎないだろう。そんなことでは国家社会主義運動は、世界観と称する権利はないのだ。もし運動の社会的プログラムが、ただ人格を排除し、そのかわりに大衆をすえることにあるならば、国家社会主義自体がすでに、わがブルジョア的政党界と同じくマルクシズムの毒にむしばまれていることになる。

民族主義国家は、すべての人々の中に個人の価値の意義を認め、個々人が最大限に能力を発揮できるように、すべての領域でおのおのの生産能力を最高度に導くことによって、市民の福祉をはからねばならない。

さらに民族主義国家は、それゆえ全体の指導、だが特に最上部の、このような政治的指導を、完全

に多数決、すなわち大衆が決定する議会主義の原理から解放し、そのかわりに人物の権利を異論なく確保すべきである。

そこから次のような認識が生ずる。すなわち、

最良の憲法　**最良の憲法と国家形式は、民族共同体の最良の頭脳をもった人物を、最も自然に確実に、指導的重要性と指導的影響力をもった地位につけるものである。**

だが経済生活において有能な人間は、上からきめるべきものでなく、みずから闘って地歩を占めるべきものであるように、ここでも最小の商業から最大の企業にいたるまで不断の修練を与え、さらに生活がその時々の試験をひきうけるように、もちろん政治的頭脳の持主もまたとつぜんに「発見される」ものではない。ずば抜けた天才の場合は普通の人間とは話が違う。

国家はその組織において、地方自治体という最小の細胞から始まって、全ドイツ国の最高の指導部にいたるまで、人格原理に根拠をもたねばならない。

多数決はなく、ただ責任ある人物だけがある。そして「ラート」[3]ということばは、ふたたびその本来の意味にもどされる。もちろんすべての人々には、相談相手というものはある。だが**決定は一人の人間だけがくだすのである。**

かつてプロイセン軍をドイツ民族の最も驚嘆すべき武器たらしめた原則が、意味を転用して、将来われわれの国家観全体を建設する根本原則であらねばならない。すなわち**全指導者の権威は下へ、そして責任は上へ、**である。

さらにまた、人々は、今日議会と呼んでいるこの団体をなしですますこともできないだろう。だが

議会の助言は実際に助言するだけになって、責任はつねにただ一人の担い手だけが負うことができるし、また負わせてもよい。したがってまたこの人物だけが権威と命令権をもちうるし、もたせてもよい。

議会それ自体は必要である。なぜなら、まず第一にすぐれた頭脳の持主は議会で徐々に頭角をあらわす可能性があり、後にその人物に特に責任ある課題を委託することができるからである。

ここから次のような結論がでてくる。すなわち、

協議会と責任ある指導者　民族主義国家は、地方自治体から始まってドイツ国の指導部にいたるまで、多数決によってことを決めるような代議制はなく、ただそのときどきの選ばれた指導者に助言し、指導者から仕事を分担させられるような協議会[4]だけがあるのだ。それはその必要に応じて、何か特定の領域においては、ちょうど大きな領域の場合そのときどきの団体自体の指導者や長がもっていると同じような、絶対的責任を引きうけるためにあるのである。

民族主義国家は原則として、特殊な、たとえば経済的利害については、学歴や活動の上からいってその問題について何も知ることができないような人間に、助言や判断を求めたりすることは、許されない。したがって民族主義国家はその代表団体を、はじめから**政治的な協議会と職能身分的な協議会**[5]とで構成するのである。

両者が効果のある協働ができるために、その上により抜きとして特別の参事会[6]をつねに設ける。

協議会においても参事会においても、つねに投票は行なわない。それらは仕事をする機関であって、票決機関ではない。個々の構成員は意見をのべることはできるが決して決定する権利はない。決定は

もっぱらそのときどきのそれに対して責任をもつ議長だけにある。

絶対的な責任と絶対的な権威とが無条件に結合するこの原則によって、次第により抜きの指導者が育成される。これは、今日の無責任な議会主義の時代には、まったく考えられないことである。

かくして国民の憲法は、文化と経済の領域で早くもその大をなすにあずかっている法則と一致することになる。

＊

国家社会主義運動と来たるべき国家　いまやこの認識の実現可能性に関しては、次のことを忘れないでほしい。すなわち民主主義的多数決という議会主義の原理は決して昔から人類を支配していたものではなく、逆に歴史的にはまったく短期間だけ見いだされるものであり、そしてその時代はつねに民族や国家の没落の時代だったのだ、ということをである。

もちろん、こういう変更が上からの純粋の純理論的規範によってもたらされうると信じてはいけない。そのうえ一般の市民生活をもつらぬかねばならないからだ。このような変革はただ、それ自体がすでにこの思想の精神において構成され、したがって自己自身の中に早くも来るべき国家を担っているような運動によってのみ、実現することができるし、また実現されるのである。

だから国家社会主義運動は、すでに今日完全にこの思想に精通し、それを運動自体の組織の中で実際の成果をもたらし、それによってこの運動は他日、国家にそれ自身の基準を示すことができるだけでなく、きたるべき国家の完成体に役に立てることができるのである。

第五章　世界観と組織

闘争と批判　わたしが一般的な輪郭を大まかに描こうとした民族主義国家は、国家に必要なものをただ認識しただけでは、まだ実現されるものではない。民族主義国家はいかなる外見をしていなければならないか、を知るだけでは十分ではない。それを建設する問題のほうが、もっともっと重要である。人々はまず第一に、現今の国家の受益者である今日の政党がみずから転向し、いまの態度を自発的に変更するなどと期待してはならない。これは、政党の実際上の指導分子がつねにユダヤ人ばかりであるから、いっそう不可能である。だが、われわれが目下経験しているこの発展は、もし妨げられずにさらに進んでいくならば、いつの日か汎ユダヤ的予言のとおりになるであろう。——すなわちユダヤ人は実際に地球上の諸民族をむしばみ、その支配者になるだろう。

そのようにユダヤ人は、大部分怠惰と愚鈍に結びついた卑怯(ひきょう)さから自滅の道をのろのろと歩く幾百万のドイツ「ブルジョアジー」と「プロレタリアート」に対して、かれらの未来の目標を最高度に意識して、抗しがたい力でその道を進んでいくのである。このようにユダヤ人に指導される政党は、ユダヤ人の利益以外のためには決して闘うことができないのであり、だがその利益はアーリア諸民族の利益とは決して共通するところがないのである。

もし人々が民族主義国家の理想像をこのように実際に認めようとするならば、その時にはいままで支配してきた社会生活の諸力から独立して、こういう理想のための闘争を引きうける意志と能力をも

つ新しい力を求めねばならない。というのは、この第一の課題は民族主義国家観をつくりあげることでなく、なによりもまず現存のユダヤ的国家観を除去することにあるのだから、この場合は闘争が問題となるのである。歴史上しばしば見られるように、主としてむずかしいのは新しい状態を形成することでなく、そのための余地をつくることである。偏見や利害が、団結した密集隊形[1]のように結びつき、自分たちにつごうの悪い、あるいは自分たちが脅威を感ずるような理念の勝利を、あらゆる手段で妨害しようとするのだ。

だから、こういう新しい理念のために闘うものは、かれがどんなに積極的な面を強調しても、残念ながらまず闘争の消極的部分、すなわち現存状態の除去をもたらすにちがいない闘争部分を、どうしても闘い抜かねばならないのだ。

これは各々の闘士には好ましくないかもしれないが、原理的に偉大な新しい意義をもつ若い教説は、最初の武器として最も鋭い批判というゾンデをあてなければならない。

もし今日、いわゆる民族主義者たちが、自分たちは決して**消極的批判**をするつもりはなく、ただ**建設的な仕事**だけが価値があると再三再四いうならば、それは歴史的発展についての深い洞察が不足していることから生じているのである。それは真に「民族主義的」とはいいがたい、子供のようにバカげた吃音であり、自分の属している現代の歴史さえも頭に全然はいっていない証拠である。**マルクシズム**も目的はもっていた。また**建設的な活動**も知っている（この場合はまたただ国際的世界経済ユダヤ主義の専制確立に関してだけだ！）。だがマルクシズムはそれにもかかわらず昔から**七十年**間も**批判してきた**のだ。そして実に否定的、破壊的な批判であり、このあくことなくむしばむ酸によって、古い国家がぼろぼろになり、崩壊するまで再三再四の批判だ。それからやっとかれらのいわゆる「建

設」が始まったのだ。それはとうぜんであり、正当であり、そして論理的だった。既存の状態は、単に未来の状態を強調したり、代弁したりするだけでは、除去されない。というのは、現在すでに存在している状態に傾倒しているものや、そのうえ利害関係のあるものは、ただ必要性を証明してやることによって、完全に転向したり、新しい状態のために獲得したりすることができるとは、信じられないからである。反対に、まさしく二つの状態が並行して存在し、それとともにいわゆる**世界観**が党になってしまい、その束縛から二度と抜けだすことができなくなる場合が、簡単に起りうる。というのは、世界観というものは不寛容なものであり、「他党と並ぶ党」という役割では満足することができず、自己のもっぱら全面的な承認と、自分の見解にしたがった全社会生活の完全な変革を、有無をいわさず要求するからである。このように世界観というものは、以前の状態を代表するものが依然として同時に存続しつづけていることには、耐えないのだ。

これは宗教に対してもそのままあてはまる。

世界観は不寛容たるべし　キリスト教も、自分の祭壇をつくるだけでは満足できず、必然的に異教の祭壇を破壊するまでに進展せざるをえなかった。こういう狂信的な不寛容さからのみ、疑いをいれぬ信仰を形成することができたのであり、しかもこの不寛容さがキリスト教のための絶対的前提なのである。

世界史に見られるこういった種類の現象の場合は、たいていこうした独特のユダヤ的な考えに関係しており、実際にこの種の不寛容さや狂信はまさしくユダヤ的本質を具体化している、と異論をはさむ人ももちろんたくさんいる。これは十分正しいでもあろう。これは実に悲しむべき事実である。そ

して人類史のこういう現象は、あまりにも不愉快すぎるので、いままで注意されていなかったのである。——しかしだからといって、今日この状態が存在していることに変りはない。わがドイツ民族をこの現在の状態から解放しようとする人々は、あれやこれやがなかったならばどんなによいだろうということに、頭をなやます必要はない。むしろいまあるものをどうして除去するかということを、決定するようにしなければならない。だが悪魔のような不寛容さに満ちた世界観は、ただ同じような精神にかりたてられ、同じ強い意志によって守られ、しかも同時に純粋なまったくほんとうに新しい理念によってのみ、破壊することができるのである。

非常に自由な古代社会において、キリスト教の出現とともに、最初の精神的テロが現われたことを知って、今日、心を痛めるかも知れない。しかしそれ以来、世界がこの圧制に侵害され、支配されており、圧制はただ圧制によってのみ、そしてテロはただテロによってのみ破ることができるという事実は、異論をとなえることができないのである。かくしてこそ始めて新しい状態が、建設的につくられるのである。

政党は妥協に傾く　**政党は妥協に傾くが、世界観は決してそうではない。政党は相手を考えにいれるが、世界観は自己の間違いのなさをみずから表明する。**

政党も本来、ほとんどつねに唯一の専制的支配に達する意図をもっている。ある世界観へと向かう小さい衝動はほとんどいつも政党の中に潜んでいる。けれどもかれらの綱領の偏狭さが世界観が要求するような英雄的精神を、政党から奪ってしまうのである。政党の意志が穏和であるということは政党に弱小な精神をもった人々を供給することになる。そんなことでは十字軍をおこすことはできない

のだ。そして政党は、たいていかれら独特のあわれむべき小さいものに、早くもはまりこんでしまうのだ。だがそれとともに、政党は世界観のための闘争を放棄し、そのかわりにいわゆる「積極的協力」によって、現存制度という飼葉槽のまわりにできるだけ早く小さい場所を獲得し、できるだけ長くそこにとどまっていようと試みる。これが政党の目的のすべてである。そしてもし政党が、なにか獣的な素質をもっている競争的立場にいる寄食者によって、この共通の飼葉槽から押しのけられるならば、暴力や奸計によって、飢えている獣群の中へわりこみ、ついには自分たちの最も神聖な確信を犠牲にしても、この好ましい栄養の泉のほとりで元気をつけるために、前へ出ようとする意志と努力だけになる。政治のジャッカル(2)だ。

新世界観にもとづく社会　世界観というものは、決して他の世界観と並存しようとする意志はないのだから、その世界観が、有罪なりと判定をくだした現存状態と協働していこうというつもりはなく、反対にこの状態と自分に敵対するすべての理念界にあらゆる手段で闘うこと、すなわちその崩壊を準備することを義務と感ずるのである。

この純粋に破壊的な闘争――この闘争はあらゆる敵によってすぐにその危険を認められ、それゆえいっしょになって防衛につとめるに違いないのだが――もまた積極的な闘争――この闘争は自分の新しい思想界を貫徹するために攻撃するのだが――も、ともに毅然たる闘士を必要とする。そのように世界観が、その時代、その民族の中の最も勇気と実行力のある分子を一列にならべて、闘争力をもったがっちりした組織に形づくったときにのみ、世界観はその理念を勝利に導くであろう。けれどもそのためには、これらの人々に顧慮をはらいながら、その一般的世界像の中から一定の思想を抜き出し、

それをこの新しい人間の団体に信条として役に立つような簡潔な、スローガン的な短い適当に思える形式にまとめることが必要である。単なる政党の綱領は、次の選挙がうまく行なわれるための処方箋であるにすぎないが、世界観のプログラムは、現存の秩序、現存の状態、要するに現存の世界観一般に対する宣戦布告の定式を意味するのである。

指導と服従　その場合この世界観のために闘う各人が、運動の指導者の根本的理念と思考過程について完全な洞察と詳細な知識をもつことは、必要ではない。むしろ、二、三のきわめて大きな視点を明確にし、そして本質的な基線を忘れがたい程度に心に刻みつけることが必要であり、各人がその運動とその教説の勝利の必然性を完全に認識していることが必要である。個々の兵士にしても、高等戦術の思考過程をすべて知らされているわけではない。むしろ兵士は厳格な規律を守ることや、自己の本分たる正義と力を熱狂的に確信することや、そのために完全な態度をとることを、教育されているのだ。大きな規模と大きな未来と最大の意図をもった運動の個々の信奉者にも、これと同じことが行なわれねばならないのである。

ある軍隊の個々の兵士が、教養や見識だけをとってみた場合、例外なく将軍なみであったならば、役に立たないだろう。同じようにある世界観の代表としての政治運動も、それがただ「才気煥発（さいきかんぱつ）」の人間のための池にすぎないならば、役に立たないだろう。そうだ、政治運動もまた単なる兵卒を必要とする。そうでなければ、内面的規律が得られないからである。

組織の本質には、最高の精神的指導者に、数多くの非常に感激しやすい大衆がつかえるときにのみ、成立しうるということがある。まったく同じ知的能力をもつ二百人の人間の団体は、百九十人の知的

に劣った能力をもつものと、十人のより高い教養をもつものからなる団体よりも、けっきょくは訓練することがいっそう困難だろう。

社会民主党は、かつてこの事実から大きな利益を得た。社会民主党は兵役を終えて、すでに軍隊で訓練を受けてきた人々をわが民族の広範な層からつかみ、そして軍隊と同じように厳格な党の規律の中へおいたのである。その組織も将校と兵士とからなる軍隊のようなものであった。兵役を終えたドイツ手工労働者が兵士になりユダヤ人のインテリが将校になった。その場合ドイツ人労働組合員は、下士官団と見ることができる。わがブルジョアジーがいつも頭をふって見ていたもの、すなわちマルクシズムにはいわゆる教養のない大衆だけが属していたという事実が、実際にはマルクシズムの成功の前提だったのだ。というのは、ブルジョア政党がその一面的な知性に流れて、役に立たない、規律のない団体であったのに対し、マルクシズムは知識のない人々を材料として党の兵士からなる軍隊を形成し、その党兵は、かつてドイツ将校に服従したようにいまやユダヤ人の指導者に完全に盲目的に服従したからである。ドイツ・ブルジョアジーは、ずっとお高くとまっていたので心理的問題よりもこの問題については原則的に注意していなかった。ここでもまた、この事実の深い意味とかくれた危険性を認めるために、よく考える必要はないと思っていたのだ。人々は反対に、「インテリゲンツィア」の層のみからなる政治運動は、すでにそれだけで価値があり、教養のない大衆よりも政治に関係する権利も大きく、そのうえその確率さえも多い、と信じていたのだ。人々には、政党の強味というものは、決してその党員各人のできるだけ大きな自主的な精神性にあるのではなく、むしろ党員が精神的統率におとなしくついていく規律正しい服従にあるのだ、ということが決してわかっていなかったのだ。決定的なものは指導自体である。もし二つの兵団があい戦うならば、各個人が最高の戦術的

教育を受けている側が勝つのではなく、最もすぐれた統帥部と、同時に最も規律正しい、このうえもなく盲目的に服従する、最もよく訓練された部隊が勝つだろう。

これが、われわれが世界観を実行にうつす可能性を検討する場合に、つねに念頭におかねばならない最も原則的な認識である。

運動の指導原理　われわれが世界観を勝利に導くためには、このように世界観を闘争運動に転換せねばならないとしたら、論理的にいって、運動のプログラムは、その運動を実行せんとする人材を顧慮しなければならない。終局目標と指導理念は不動でなければならないが、同様に党員募集のプログラムは、かれらの助力がなくてはこのすばらしい理念も永遠に理念たるにとどまるであろうから、独創的で心理的にぴったりと、かれらの心に適合しなければならないのだ。

もし民族主義的理念が、今日の不明瞭な願望から明白な成果に達しようとするならば、その場合その理念は広い思想界からその本質と内容において適当であり、大衆に義務を感じさせるような一定の指導原理を抽出し、実際にしかしながら大衆がこの理念の世界観的闘争を保証するものでなければならない。これがドイツ労働者階級なのである。

だから新運動の綱領は、少数の、全部で二十五か条に総括されたのだ。これらはまず民衆の人々に運動の目的としているだいたいの像を与えるために定めたものである。これはいわば政治的信仰告白であり、一方では運動のために宣伝し、他方では集まってきた人々を共通に認めた義務によって団結させ、一致させるに適しているのである。

そのさい次のような洞察を決して忘れてはならない。すなわち、いわゆる運動の綱領は、その終局

目標においてはたしかに絶対に正しいのであるが、その表現においては心理的契機を顧慮しなければならず、時代がたつとともにもちろん個々の、あるいは一定の条項は他の表現を用いたほうがよく、もっともよい表現を用いねばならない、という主張もでてくるに違いないということを、である。だがそういう試みは、たいていみんな悪い影響を及ぼす。というのは、そうすることによって確固不動たるべきものが討論にゆだねられ、そしてひとたびある点がこの信念的、断定的な規定から除かれるならば、新しい、もっとよい、そしてなによりも統一的な規定はすぐには出てこないし、むしろ際限のない討議や全般的な混乱におちいってしまうだろうからだ。こういう場合にはいつも、もっといいものは何であるか、を考えるべきである。すなわち運動の内部に論争をひきおこすような、新しいより効果的な構成がよいか、あるいは目下のところ最良の形ではないかも知れないが、内部では団結し、不動で内面的にはまったく統一的な組織であるほうがよいか、ということである。あらゆる点から見て後者を選ぶべきである。というのは変更する場合にはいつもただ外面の形式を与えることが問題なのであり、そういう修正はいつでもできるし、またいつでも直したいと思うものだからである。**だがけっきょく人間は皮相的なものだから、綱領の純外面的な表現を、運動の最も本質的な課題と見るような大きな危険が、生ずるのである。**さらにそれとともに理念自体のための闘争の意志と力は消えうせ、外部に向かうべき活動は内部の綱領争いにおいて精根つきはてるのである。

だいたい実際上正しい教説の場合には、たとえある表現が現実にまったく即さなくなった場合でさえも、その表現を保持するほうが、それを訂正していままで確固として通用していた運動の原則を一般の討論にゆだねて最悪の結果を招くよりは、害が少ないのである。運動自体がいまなお勝利を求めて闘っている間は、なによりもそれは不可能である。というのは、もしも人々がその外面的形式をい

つも変更していて、不確実さと疑惑をひろめるならば、いかにして一般の人々に教説の正しさを盲目的に信じさせることができようか。

本質的なものは決して外面的な表現にではなく、つねに内面的な意味の中にのみ求められるべきである。そしてこの内面的な意味は不変であり、それについて関心をもってのみ人々は、分裂したり不安を生じたりするいっさいの過程を遠ざけることによって、その運動がその闘争に必要な力を保持することをけっきょく期待しうるのである。

ここでもまた人々は、カトリック教会に学ばねばならない。カトリックの教説は多くの点で精密科学や研究とあいいれず、ある部分は完全に衝突するところもあるが、それにもかかわらずカトリック教会は、その教義の一小節さえも犠牲にしようとしないのである。カトリック教会は、その抵抗力がそのときどきの学問的成果――事実それはいつも動揺しているが――に多かれ少なかれ適応するところにあるのではなく、むしろ一度決定されて全体にはじめて信仰性を与えたドグマをかたく固執することにある、ということを非常に正しく知っているのである。それだから、カトリック教会は今日では、いままでよりももっと確固たるものになっているのである。現象が動揺すればするほど、教会自体は諸現象が連続しておこる中のいこいの極として、ますます盲目的信者を獲得しうるのだ、と予言してもいいだろう。

かくして、民族主義的世界観の勝利を実際にまじめに望むものは、第一にただ闘争能力のある運動のみがそういう成果を獲得するに適しているのだ、ということを認識するだけでなく、第二にそういう運動自体が、動揺することなき確固とした不変さをもった綱領を基礎としてのみ存立することができる、ということを認識しなければならない。綱領を作成するときには、そのときどきの時代精神に

譲歩してはならず、一度有益だとみた形式を、どんなときでも運動が勝利の栄冠にかざられるまでは、長く保持しなければならない。それ以前にあれやこれや綱領の合目的性について議論しようと試みるならば、その信奉者がそういう内部の討論に関与するにしたがって、そのすべてが運動の団結と闘争力を分裂させるのである。それとともに、今日行なわれた「改革」が、次の日にさらにもっとよい代用物をみつけるために、すぐに明日新たに批判的吟味を受けえないというのではない。ここで一度さくを破るものは道をひらくのであるが、その始めはわかっていても、その終りはいつになるかわからないのである。

この重要な認識は、新しい国家社会主義運動に応用されなければならない。**国家社会主義ドイツ労働者党は、この二十五か条の綱領とともに動かすべからざる基礎を得るのだ。**われわれの運動の今日および将来の成員の課題は、この指導原則を批判的に改造することにでなく、むしろその指導原則にかれらを義務づけることにある。というのはさもなければ、次の世代も、新しい運動に新しい信奉者や、したがって新しい力を供給するかわりに、とうぜん党の内部におけるそういった純粋の形式的な活動に、あらためてその力を消費してしまうからである。

信奉者が多くなるにつれて、われわれの運動の本質はわれわれの指導原則の文字の中にはなく、むしろわれわれがその指導原則に与えることができる意味の中に、多くあるのだ。

この若い運動は、かつてこういう認識にもとづいてその名称をつけたのだ。その後その認識にしたがって綱領がつくられ、さらに綱領の普及のやり方もそこに基礎があったのだ。民族主義の理念に勝利をもたらすためには、民族の党がつくられねばならず、党は知識階級の指導者ばかりでなく、手工労働者も含まねばならなかったのだ！

こういう強力な組織なしに民族主義の思考過程を実現しようとする試みはすべて、過去におけるごとくまさしく今日においても、また未来永劫にムダである。だがそれゆえこの運動がみずからこの理念の先頭にたって闘う闘士であり、同時にその代表であると感ずることは、権利であるばかりでなく、義務である。国家社会主義運動の根本思想が非常に民族主義的であるように、同時に民族主義思想もたいへん**国家社会主義的**である。だが国家社会主義が勝とうとするならば、国家社会主義は絶対に、もっぱらこれを確認することを認めなければならない。国家社会主義はこの場合にも、国家社会主義ドイツ労働者党のわく外で民族主義的理念を主張しようとすることはすべて不可能であり、たいていの場合まさしくインチキだという事実を、極度に強調することは、権利であるばかりでなく、義務でもある。

もし今日、われわれの運動が民族主義理念をあたかも独占しているかのように非難するものがあれば、それに対する答はただ一つである。すなわち、

独占しただけでなく、実践のためにつくったのだ、と。

なぜなら、いままでこういう概念のもとに存在したものは、わが民族の運命に少しでも影響を及ぼすには適していなかったからだ。というのは、これらの理念にはすべて明白な統一的表現が欠けていたからである。たいてい多少とも、相互に矛盾することもまれでない正当さについての個々の支離滅裂な認識が問題であり、どんな場合でもおたがいの内的結合というものはなかったのだ。そしてたとい内的結合が存在していたとしても、それは弱く、運動を調整し組み立てていくには決してじゅうぶんではなかったのだ。

だが国家社会主義運動だけが、これを遂行したのだ。

＊

国家社会主義と民族主義的理念　今日ではあらゆる団体やグループは大小を問わず、また「大政党」も、「民族主義的」ということばをわがもの顔に主張しているがこれ自体まったく**国家社会主義運動の活動の結果である。この活動がなければ、これらのすべての団体は決して「民族主義的」ということばを主張することすら、思いつかなかったであろう。**かれらはこのことばが何を意味するか、を一般に考えもせず、その指導者たちはどこから見てもこの概念に少しも関係などなかったであろう。この概念を内容豊かなことばに仕上げ、いまではできるだけ多くの人々が口にするようになったのはまず国家社会主義ドイツ労働者党のはたらきであった。なによりもこの運動の信奉者の募集活動を成功させて、この民族主義思想の力を示し、実証したのである。そのようにして、他のものの利欲を刺激して、少なくとも口先きだけでも同じようなものを欲しているようにしむけたのだ。

それらの政党が従来すべてのものを自分の選挙の小さな投機に利用していたのと同様に、これらの政党にとっては民族主義的という概念は、今日でもまったく皮相的な空虚なスローガンにすぎず、それによって自己の党員をふやし、国家社会主義運動の信奉者獲得力をそいで、平均化しようとするのだ。というのはかれら自身の存続に対する心配と、同じく新しい世界観を担っているわれわれの運動――かれらもこの運動の危険な排他性と同じようにその普遍的な意義を予感したので――の台頭に対する不安が、かれらが八年前には全然知らず、七年前には嘲笑し、六年前にはたわごとだといい、五年前には反対し、四年前には憎悪し、三年前には告訴し、ついに二年前には自己のものにして、そして闘いのときの声として闘争に用いるために他のスローガンと併用するようになったことばを口にさせたからである。

そして今日ですら人々は、これらのすべての政党が、ドイツ民族に何が必要であるかということがわかっていないのだ、ということにつねに注意せねばならない。これに対するいちばん適切な証拠は、かれらがこの「民族主義的」ということばを口にする皮相さかげんだ！

そのさい、見せかけだけ民族主義者のようにうろつきまわり、空想的計画をつくりだすが、たいていはなんらそれ自体正しかるべき確固とした理念にもとづかず、孤立しているがある大きな統一的闘争団体をつくるという意味でもなく、またそうしたものをつくるには適当でないといったもののほうがすべて、これに劣らず危険である。一部は自分の考えから、一部は読んだものから綱領をつくりあげる人々は、民族主義的理念と敵対するものよりももっと危険である。かれらは最もうまくいった場合でも非生産的な理論家であるか、たいていは破壊的な大言壮語家であり、放浪のため顔一面にひげをはやし、原始ゲルマンのようなわざとらしい所作によって、自分の行動や能力の精神的、思想的空虚さに仮面をかぶせうると信じているのだ。

だから、これらすべての無益な試みに対比させて、若い国家社会主義運動が闘争をやり始めた時代を思いだすことは、いいことである。

第六章　初期の闘争——演説の重要性

毒化宣伝に対する闘争　一九二〇年二月二十四日の**ホーフブロイハウスのフェストザール**での第一回大集会の記憶が消え去らないうちに、はやくも次の大集会の準備が行なわれた。そのころまでミュンヘンのような都市で、月に一度、あるいは隔週に一度、小さな集会を開催しようとすることができるかどうか、疑わしいものとされていたのであるが、いまや八日に一度、つまり毎週一回のわりで大民衆集会を開こうということになった。その場合われわれはただ一つの不安にたえず悩まされた、とはっきりいう必要もない。すなわち、人々が集まってくるだろうか、人々はわれわれのいうことを聞いてくれるだろうか、ということだった。——個人的には当時すでに、人々が一度集まってきさえすれば、かれらは帰らずに演説についてくるにちがいない、という揺るぎない確信をいだいてはいたが。

このころミュンヘンのホーフブロイハウスのフェストザールは、われわれ国家社会主義者にとっては、ほとんど荘厳な意味をもっていた。毎週一回の集会。ほとんどいつもこの部屋を用いる。そして回を追うごとにこの広間はだんだんといっぱいになる。そして人々はますます熱心に傾聴してくるのだ！　そのころだれも気にかけなかった「戦争の責任」から出発して、講和条約にいたるまで、およそアジテーションの目的にかない、あるいは理念的に必要だと考えられるものは、ほとんどすべて扱われた。特に講和条約そのものには、最大限の注意がはらわれた。当時この若い運動が大衆に向かっ

ていつも予言していたものはなんであったか、そして今日までその中のほとんどすべてが、いかに適中したことか！　今日では、人々はこれらのことについて簡単に語ったり、書いたりすることができる。だが当時「ヴェルサイユ講和条約」をテーマとし、市民的俗物がでなく、けしかけられたプロレタリアの集まる公開大衆集会を開くということは、共和制に対する攻撃を意味し、君主制でないまでも反動的志操の特色を意味するものであった。ヴェルサイユ条約批判が一言でもなされるとすぐに、人々は型通りのヤジをとばしたのだ。「さてブレスト・リトフスクは？」[1]、「ブレスト・リトフスク？」と。大衆は次から次へと、声がかれるか、演説者がついに説得することをやめるまで、わめくのだった。こういう群集に対しては、絶望のあまり頭を壁にうちつけてしまいたいぐらいだった！　群集は、ヴェルサイユ条約が恥辱であり、屈辱であるということを、実際この強制的命令がわが民族からの前代未聞の略奪を意味しているということすらも、聞こうともしなかったし、理解しようともしなかったのだ。マルクス主義的破壊工作と敵意ある毒化宣伝が、これらの人々からあらゆる理性をとり去っていた。そしてこれに対して人々は、ひとつも不平をいうことができなかったのだ。というのは、他の側[2]の罪も計り知れないほど大きかったからなのだ！　ブルジョアジーはこの恐るべき破壊を停止するために、またそれに対抗するために、そして真理をより良く、かつより根本的に解明することによって道を自由に開くために、何をしたのだろうか？　何もしなかった。もう一度いうが何もしなかったのだ！　わたしは当時、今日の偉大な民族主義の使徒を、一人たりとも見かけなかった。おそらくかれらは、小さい会合で、お茶のテーブルで、あるいは同じような考えのものが集まるサークルで、しゃべっていただろう。だがかれらがいなければならなかった場所、すなわちおおかみどものまっただ中には、かれらはあえて出ようとはしなかったのだ。いっしょにほえることができる機会を除いて

はである。

だがそのころわたし自身には、まっ先に運動を起したこの小さい根幹のために、戦争責任の問題が解決されねばならない。しかも歴史的真理の意味において解決されなければならない、ということが明白になっていた。われわれの運動が、最多数の大衆に講和条約についての知識を伝えてやったことが、将来においてこの運動が成功した前提だった。大衆がこの平和をすべて民主主義の成果だと依然として見ていた当時、われわれはこれに対して抵抗し、人々の脳裏に永遠のこの条約に敵対するものとして、銘記されねばならなかった。その後この見せかけだけの金ピカ物のにがい現実が、あらわな憎しみをありのままにあらわしてきたとき、われわれの当時の態度が思い出されたことが、かれらの信頼を獲得することになったのだ。

すでにこのころからわたしは、重要な原理的問題において——その重要な原理的問題について全体の世論が誤った態度をとっている場合には、人気だとか、憎悪だとか、あるいは闘争だとかを顧慮しないで、いつでも世論に抵抗する態度をとっていた。国家社会主義ドイツ労働者党は、世論の捕吏であってはならず、世論の命令者にならねばならなかった。国家社会主義ドイツ労働者党は、大衆のしもべではなく、主人になるべきなのだ!

時流に抗して　もちろん、特にまだ弱々しい運動にとっては、ある優勢な反対者が、かれの誘惑技術によって民衆を狂気のような決断や、あるいは誤った態度をとらせることに成功した瞬間に、自分もそれと協議したり、いっしょに叫んだり、ついには、この若い運動自体の視点からみて——みせかけだけのものではあるが——若干の根拠があると思える場合はさらに、大きな誘惑があるものだ。

そのさい、人間の卑怯さは、たいていいつも「自己の視点」からそういう犯罪に仲間入りしようとすることを正当らしくみせかける何物かを発見するそういう根拠を、なお熱心にさがすのである。

わたしは二、三度こういう場合を体験した。その場合には、この運動という船が、人工的に扇動された一般的潮流にはいりこまないために、あるいはもっとよくいえば、この潮流に押し流されないために、このうえないエネルギーが必要であった。最近では、実際ドイツ民族の存在などはどうでもよい悪魔[3]のようなドイツの新聞が、南ティロール問題をドイツ民族にとって災となるにちがいない重大問題にまでもちあげることに成功したときである。多くのいわゆる「国家主義的な」人々や政党や団体は、だれのために心配してくれるのかということは考えようともせず、ただユダヤ人によって扇動された世論を恐れる卑怯さから、一般の叫びに従い、そしてわれわれドイツ人が、まさしく今日のような状態においては、この堕落した世界における唯一の希望の光として感ぜねばならない組織に対する闘争を支持するために、無意味な手助けをしたのだ。国際的なユダヤ世界が、徐々に、だが確実に、われわれののどをしめつけているあいだに、われわれのいわゆる愛国者たちは、少なくとも地球上の一箇所でユダヤ的＝フリーメイスン的束縛から脱し、国家主義的抵抗でこの国際的世界害毒に対抗しようとあえて試みた人間と組織に反対してわめきたてるのである。だが性格の弱いものにとっては、簡単に帆を風にまかせ、世論の叫びに降服するということは、誘惑的なことだった。そしてその降服が問題なのだ！　人間は、内心に虚偽と劣悪さとをもっているから、おそらく自分自身に対してすらなんといっても降服だとは認めないかもしれないが、しかし、かれらをさそって協力させたのは、ユダヤ人によって扇動された民衆世論に対する臆病と不安だけだった、ということの真実さには変りはない。他のいかなる理由づけもすべて、罪の意識のある小罪人のあわれむべき逃口上なのだ。

深慮遠謀の政策　それゆえ、運動がこの方向に向かって破滅することを防ぐために、鉄拳をもってこの運動を急転回させることが必要であった。大きな炎がただ一方にばかり燃えあがっているように、世論があらゆる推進力によってあおっているときに、こういう転換をやろうとすることは、もちろんすぐにはたいそう俗受けがしないし、実際それを敢行する勇気のあるものは、往々にして生命の危険にさらされるのである。だが、こういう時に行動を起して石でうち殺され、その後、後世の人々がひざまずいて感謝する原因となっている人物は、歴史上少なくないのである。

だが運動が期するところはそこにあるのであり、現代の瞬間的賛成ではないのである。こういう時には個人としては不安な気持になるのも、もっともである。だが一度このときをすぎれば、救済がくること、そして世界を革新しようとする運動は瞬間にではなく、未来に奉仕するものである、ということを決して忘れてはならないのである。

歴史上、最も偉大な、最も持続的な成果というものは、たいていは、それが一般的世論やその認識、さらにはその意志に最もするどく対立するものであるから、そのはじめのころはまったく理解されないのが普通である、ということをそのさい人々は確認することができる。

われわれは当時われわれが公にデビューした最初の日にすでに、それを経験することができた。事実われわれは、「大衆の愛顧を得よう」としたのではなく、これら民衆の狂気に対立したのだ。いたるところでそうだった。このころにわたしはわたしのいおうとした反対のものを信じ、わたしが信じていたものと反対のものを欲している人々の集会に、ほとんどいつもでていったのである。二時間にわたり、二千人から三千人に対して、かれらがいままで確信していたものから引きあげてやり、一撃

一撃とかれらのいままでの見解の基礎を破壊し、そしてついにかれらをわれわれの信念や世界観の土台にまで導いてやることが、わたしの仕事であった。

演説の経験　わたしは当時、短期間のうちにある重要なことを学んだ。すなわち、**敵の手からただちにその抗弁の武器をたたき落すことである。**われわれの相手は、特に討論する演説者の場合には、一定の脚本をもってあらわれる。そこにおいてはわれわれの主張に対する反駁がくりかえしてなされる。だからこの過程がいつも同じなのは、目的を意識した統一的訓練があることを示しているのだ。実際にもそうだったのだ。われわれはここで、相手の宣伝が信じられないぐらいに訓練されていることを知ることができた。この宣伝を単に無効にしたばかりではなく、ついにはそれと同時に宣伝の首謀者すらもたたきつける手段を発見したことを、わたしは今日でも誇りに思っている。二年後にわたしはこの技術を完全にマスターした。

どんな演説のときにも、討論のさいにでてきそうな相手の異論の内容や形式を想定して、前もってはっきりとさせておき、そしてこれをさらに自分の演説の中で、手まわしよく残るくまなくやっつけることが重要である。でてきそうな反駁自体をいつもただちにあげて、そしてその根拠の薄弱さを示すことが、その場合有効であった。聴衆は、たとい教えこまれた異論でもっていっぱいつまっていても、それとは別に正直な気持でくるものであるから、かれらの記憶にきざみこまれた疑念を前もって解決しておくことによって、比較的容易にかれらを獲得した。かれらにたたきこまれたものは、おのずから論駁され、その注意はますます演説に引きつけられたのである。

講和条約についてのはじめての説明　わたしはすでに、軍隊でいわゆる「教育係」として、「ヴェルサイユ講和条約」についてはじめて講演をしたが、爾後（じご）は「ブレスト・リトフスクおよびヴェルサイユ講和条約」について話すというところまで変更したのは、前述のような理由からであった。というのは、すでに最短期間に、実際わたしのこの最初の講演について討論が行なわれている間でさえも、人々はブレスト・リトフスクの講和条約については実際はまったく何も知らず、むしろこの条約をかれらの政党の老練な宣伝が、まさしく世界で最も屈辱的な圧制行為の一つだと言明していたことを、わたしが知ったからである。幾百万のドイツ人がもはやヴェルサイユの講和条約の中にブレスト・リトフスクでドイツ人がなした犯罪に対するとうぜんの報酬だけを見て、したがってヴェルサイユ体制に対して実際に闘争することはすべて不正であると感じ、しばしば真剣に、道徳的に憤激したが、それは大衆にかかる虚偽が不断にくりかえし述べられたしつようさに帰するものであった。そしてまた破廉恥の、身の毛もよだつ「賠償」ということばがドイツに流布されたのも、原因はここにあった。このうそにみちた偽善が、幾百万のわれわれの扇動された民族同胞には実際により高い正義の実行に思えたのだ。恐るべきことだが、それは事実だった。これに対する最もよい証明を、ブレスト・リトフスク条約についての見解を先にのべたヴェルサイユ講和条約に対する――わたしがはじめて行なったのだが――宣伝の成果が、伝えている。わたしはこの二つの講和条約を対立させ、各案ごとに比較し、第二の条約[4]の非人道的残虐さと反対に第一の条約[5]の実際にこのうえもなく人道的なことを示した。そしてその成果は決定的であった。当時わたしは、このテーマについて二千人の会衆を前にして語った。そこでは三千六百の敵意ある視線にしばしばぶつかった。三時間後には、眼前に神聖な憤激とはてしない憤怒にみちた波うつ大衆がいた。あらためて千をもって数える群衆の心と頭脳から大きな虚偽が

のぞかれ、そのかわりに真理が植えつけられたのである。

二つの講演、すなわち「世界大戦の真の原因」と「ブレスト・リトフスクおよびヴェルサイユ講和条約」についての講演を、当時わたしは最も重大なものと考えていた。それゆえわたしはそれらを数十回もいつも新しい表現でくり返し、くり返し行なった。ついには少なくともこの点については、一定の明白な統一的な見解が人々の間に広がり、これらの人々の中から運動は最初の党員を得たのである。

演説は書物より影響が大きい　これらの集会は、わたし自身にとっても利益があった。すなわちわたしはだんだんと民衆大会の演説者に変っていった。荘重さとか、千人を包含する大きな会場が要求する身振りに熟達してきたのである。

すでに強調したように、小さいサークルにおいてなら別だが、あたかも**自分たち**が世論に転換をもたらしたかのように、今日大言壮語している諸政党によって、この方向への啓蒙が行なわれたことを、わたしはこのころに見たこともなかった。だが、もしいわゆる国家主義的政治家がどこかでこの方向について講演したとするならば、それはたいていすでに自分と同じ信念をもっていた仲間に対してだけであって、しかもその場合に発言したことは、せいぜい自分たちに固有な考え方を強調するにすぎないものであった。だが当時そんなことは問題ではなく、従来かれらの教育や認識によって反対の立場に立っていた人々を、啓蒙と宣伝によって獲得することだけが問題だったのだ。

また、われわれはパンフレットをこの啓蒙のために利用した。わたしは軍隊にいたときすでに、**ブレスト・リトフスク**および**ヴェルサイユ**の講和条約の対比をのべたパンフレットを作り、それは、流

布するために大量部数に達した。わたしはさらにその後、党のためにその残部をひきうけたが、ここでもまた効果はよかった。そのために第一回の集会は、机の上があらゆるかぎりのパンフレット、新聞、小冊子などでいっぱいだったことが目立った。けれども重点は語られることばにおかれていた。そして事実上また、——そして実際に一般的な心理的根拠からも——このことばだけが大革新を招来する立場にあるのだ。

わたしはすでに上巻において、すべての力強い世界的革新のでき事は、書かれたものによってではなく、語られたことばによって招来されるものだ、と述べた。一部の新聞では、その点についてそうとう長い論議を行なった。もちろんその論議においては、特にわがブルジョア的狡猾者によって、このような主張に対する非常にきびしい反対をうけた。だが反対が起ったというこの根拠が、すでに懐疑者を論駁しているのだ。というのは、こういう考え方に対してブルジョア的インテリゲンツィアが抗議するのは、かれら自身が語られたことばによって大衆に影響を与える力と技術をあきらかに欠いていたがために、つねに純粋の文筆活動だけに没頭し、演説によって実際に扇動的に活動することをあきらめているからである。だがこういう慣習は時がたつにつれて、今日わがブルジョアジーを特徴づけているもの、すなわち大衆への働きかけと、大衆への影響に対する心理的本能の喪失に導くにちがいないのである。

演説者は、大衆が自分の評論をどの程度理解してついてくることができるか、また自分のことばの印象や効果が所期の目的をはたしているかどうかを、たえず聴衆の顔付から計り知ることができるかぎりにおいて、かれは自分が語っている大衆からたえず自分の講演を修正してもらえるのに、文筆家は読者一般を知ることができない。だから文筆家は、はじめから自分の目前にいる一定の大衆を目標

とすることができず、まったく一般的に論述するのである。だがそのためにある程度までかれは、心理的な鋭敏さと、後にはしなやかさを失うのである。それだから一般にりっぱな演説家は——文筆家がたえず弁論術を練習しないかぎり——りっぱな文筆家が演説する以上にいつももっとうまく書くことができるであろう。そのほかに、大衆自身というものは不精なもので、古い慣習の軌道にはまって動こうとせず、そして自分が信じているものにぴったりしなかったり、自分が望んでいるものを書いてなかったりすると、自分自身からは好んで何か書かれたものに手を出さない、ということがある。だから一定の傾向をもった書物は、たいていは以前からこの傾向に属している人が読むだけである。それとともに、せいぜいパンフレットかポスターがその簡潔さによって、意見の異なる人々の場合にも注意を一瞬間ひくことを考えることができる。フィルムをも含めたあらゆる形式の像が、疑いもなくもっと大きな効果をもつのである。ここでは人間はもはや知性をはたらかす必要がない。眺めたり、せいぜいまったく短い文章を読んだりすることで満足している。それゆえ多くのものは、**相当に長い文章を読む**よりも、むしろ**具象的な表現**を受けいれる用意ができているのである。像というものは、人間に、かれが書かれたものについて、長いことかかってやっと読んだものから受けとる解明を、ずっと短時間に——一撃でといってもいいぐらいに——与えてしまうのである。

だが最も本質的なことは、書物はどのような手に落ちるかわからないのに、一定の表現を保持しなければならない、ということである。この表現が、その読者たるものの精神的水準や本質的性質にぴったり応ずれば応ずるほど、一般にその効果はますます大きいのである。だから大衆を目的とした書物は、はじめから文体と程度において、より高度の知識層を目的とした著作物とは異なった効果があるようにせねばならない。

ただこういう種類の適応能力をもつことによってのみ、書かれたものが語られたことばに近づくのである。演説家は、書物と同じテーマを、かまわずに取扱うことができる。けれども、かれが偉大な天才的な民衆の演説家であるならば、同じ主題や同じ題材を二度と同じ形式でくりかえさないであろう。その時々の聴衆の心に語るために必要なことばが、その場で感情に合してちょうど流れ出すように、つねに大衆によって動いていくに違いない。けれども、かれがもし少しでも間違っているならば、いつでもかれの目前にはいきいきした訂正があるのだ。すでに上述したように、演説家は聴衆の表情によって、かれらが第一に自分がいったことを理解したかどうか、第二にかれらが全体についてくることができるかどうか、そして第三にどの程度まで提議したものの正しさについて確信したか、ということを読みとることができるのである。第一に——かれは聴衆が自分のいったことを理解しないと見たならば、かれは最も劣等なものでさえも理解できるにちがいないぐらいに、その説明を単純に平易にするだろう。第二に——かれは聴衆が自分についてくることができないと感じたならば、みんなの中で最も頭の弱いものすらとり残されない程度に、自分の思想を注意深く、徐々に組みたてる。そして第三に——聴衆が自分の提議したものの正しさを納得していないように思えるかぎり、これをたびたび、つねに新しい例をくりかえし、また口に出さないまでも感じとれる聴衆の異論は、自分からもち出して、ついには最後まで反対するグループさえも、かれらの態度や表情によって、自分の論証の前に降伏したと認められるまで、反駁し、粉砕するであろう。

そのさい、人間というものは、知性に根拠をもたず、たいていは無意識に、ただ感情によってのみささえられた先入見にとらえられていることがまれでない、ということが問題である。こういう本能的な嫌悪、感情的な憎悪、先入的な拒否というようなさくを克服することは、欠点のある、あるいは

誤った学問的な意見を正しくなおすことよりも、千倍も困難である。だが感情からする反抗は断じてそれができない。ただ神秘的な力に訴えることだけが、ここでは効果があるのである。そしてそういうことはつねに文筆家にはできず、ほとんどただ演説家だけがなしうるのである。

これに対しては、わが民衆の間に幾百万という法外な部数で氾濫(はんらん)している、往々にして非常に巧妙につくられたブルジョア新聞があるにもかかわらず、新聞は大衆がこのブルジョア社会の人々のまさしく最もするどい敵となることを防ぐことができなかったという事実が、このうえもなく適切な証拠を与えている。毎年毎年主知主義から発刊される新聞の洪水や書籍のすべては、油を塗ってある革から流れ落ちる水のように、幾百万という下層階級の人々の間にすべりおちるのである。これはただ二種類だけ論証することができる。すなわち、これらすべてわがブルジョア社会の文筆家の内容が正当でないか、あるいは著作物によってのみでは、大衆の心に達することができないかである。もちろん、この著作物自体が、新聞の場合がそうであるように、ほとんど心理的に調整されていない場合は、特にそうである。

演説によるマルクシズムの成功　けれども（これはベルリンのある大きなドイツ国家主義新聞がしたように）**マルクシズム**自体がまさしくマルクシズムの著作物によって、特にカール・マルクスの基礎的労作の影響によって、この主張に対する反証を提供している、とだけは答えてほしくない。誤った見解を支持するのにこれ以上皮相的なものはありえないであろう。**マルクシズム**に、大衆に対する驚嘆に値する力を与えたものは、決してあのユダヤ人の思想界の形式的な文字で書かれた著作物で

はなく、むしろ幾年もの間に大衆をわがものにした演説による巨大な宣伝の波である。十万人のドイツ労働者のうち、平均してこの著作物を百人も知ってはいない。この著作物は以前から、多くの下層階級から出てこの運動に実際に関与しているものよりも、インテリ、特にユダヤ人によって千倍も研究されたのである。しかもそのうえこの著作物は、大衆のために書かれたものでなく、もっぱらユダヤ人の世界制覇機関の知的指導のために書かれたものなのだ。かれらはそれをまったく別の材料によってたきつけた。すなわち新聞だ。けだしマルクシズムの新聞が、ドイツのブルジョア新聞から区別されるのはこの点である。**マルクス主義の新聞は扇動者によって書かれ、ブルジョア新聞は文筆家によって好んでアジテーションをやっていこうとするのだ。**ほとんどいつも集会場から編集局へやってくる社会民主党のつまらぬ編集者は、期待にそむかず比類なく大衆を知っている。だがブルジョア的へボ文士は、かれの書斎から大衆の前に出てくるのであるから、すでに大衆の気息だけで病気になり、それゆえ文章的なことばだけで途方にくれて大衆の前につっ立つのである。

マルクシズムに幾百万の労働者を獲得させたものは、マルクシズムの教父たちのお筆先ではなく、むしろ偉大なる扇動の使徒から始まって、小さい労働組合役員、腹心の友、討論の演説家にいたるまでの幾万のうむことなき扇動者の、あくことのない実に強力な宣伝活動であり、無数の集会のためである。その集会ではこの民衆の演説家は、たばこの煙でもうもうたるレストランのテーブルの上に立ちあがり、大衆の頭にたたきこみ、そうしてこの人的資源の驚くべき知識を獲得することを知り、そしてそれが世論の城郭の最も正しい攻撃武器を選ぶ地位にかれらをはじめて置いたのである。さらに巨大な大衆デモ、十万人の行列がそれだった。これは小さいあわれむべき人間に、自分は小さいウジ虫であるにもかかわらず大きな竜の一部をなし、その紅蓮の吐息のもとに、にくらしいブルジョア社

会がいつか火炎に化し、そしてプロレタリア独裁が最後の勝利を祝うのだ、という誇らしい確信を燃えあがらせるのだ。

さらにこういう宣伝から、社会民主主義の新聞を読もうという気になり、心構えができた人々が出てきた。けれどもこの新聞自体、やはり書かれたものでなく、語られたものである。というのは、ブルジョア陣営では、あらゆる種類の教授たちや書物を書く学者たち、理論家や文筆家たちが、ときどき演説をしようとするのに、マルクシズムにおいては演説家がしばしば書こうとするからである。そして、なおここで特に問題になるのだが、ユダヤ人は一般に、そのうそつきの弁論術の機敏さと抜け目なさによって、文筆家としても作家などよりもはるかに扇動的演説家なのである。ブルジョア新聞界が（それ自体、大部分がユダヤ化しており、それゆえ大衆を実際に教化しようとする関心をもっていないということをまったく度外視しても）わが民族の最も広範な層の態度に影響をおよぼすことができなかった理由は、それである。

演説の効力の心理的条件　感情的な先入見、気分、感覚などをくつがえして、他のものでおきかえることがどんなに困難であるか、またその成果がどれほど多くの計り知れない影響や条件にかかっているかということは、敏感な演説家ならば、講演が行なわれる時間すらもその効果に対して決定的な影響がありうるということを推測しうるのだ。同じ講演、同じ演説者、同じ演題でも午前十時と午後三時や晩とでは、その効果はまったく異なっている。わたし自身まだ新米のころに、集会を午前に定めたことがある。特に「ドイツ領土の抑圧に対する」抗議として、ミュンヘンのキンドル・ケラーで行なった示威を思い出す。キンドル・ケラーは当時ミュンヘンの最大のホールであったし、それは

非常に大きい冒険だと思えた。運動の支持者やその他の参会者がみんな特に出席しやすいように、わたしは集会を日曜日の午前十時と定めたのだ。その結果はみじめなものだった。けれども同時に非常に教えられるところがあった。すなわちホールはいっぱいであり、印象も実に圧倒的だった。だが気分は氷のように冷やかであった。誰も熱してこない、そしてわたし自身演説者として、聴衆としっくり合わず、わずかの接触すら回復することができなかったことを、非常に残念に感じた。わたしはいつもよりもへたにしゃべったとは思わなかった。だが効果はゼロに等しく思えた。また、一つの経験が豊富になったのだが、満たされぬ気持でいっぱいになって、わたしは会場を去ったのだった。わたしはその後同じような方法で試みてみたが、同じような結果であった。

これは驚くにあたらない。演劇に行って、なにか一つ劇を午後三時と同じ配役の同じものを晩の八時に見ると、人々はその異種の効果と印象に驚くであろう。この気分についてはっきりとしたものを得るだけの感覚と能力がある人は、午後の上演の印象が晩の印象ほど大きくないことが、すぐにわかるだろう。映画においてすら同じことがたしかにいえる。これは重要である、というのは、劇場では役者は午後には、夜の部ほど熱心にやらないかも知れない、ということができるからである。けれども映画は午後も、夜九時でも変っていない。そうだ、ここではちょうど会場がわたしに対するのと同じように、**時間**自体が一定の影響を及ぼしているのだ。よくわからない理由からではあるが冷静にさせる会場というものがあって、それがあらゆる気分の醸成に何か猛烈に反対するのだ。また人間の中にある伝統的な思い出とか観念とかが、印象を決定的に規定することができるのである。パルジファル[6]はバイロイトで上演すると世界のどこでやるよりもいつも異なった効果がある。古いマルクグラーフの町のフェストシュピール・ヒューゲルにある建物の神秘的な魔力は、**外観**だけで代用すること

ができず、また埋めあわせさえもできない。

これらのあらゆる場合に、人間の意志の自由の妨害ということが問題になる。もちろんこれは集会の場合にたいていあてはまる。集会には反対の意見をもった人々が集まってくる。しかもかれらは爾後、新しい意図のために獲得されねばならないのだ。朝は——日中ですらもそうだが——人間の意志力は、自分と異なった意図や異なった意見を強制しようとする試みに対しては、このうえないエネルギーで抵抗するように思える。これに対して晩には、それらはより強い意志の支配力に、もっと容易に屈服するのである。というのはこういう集会はすべて、たしかに二種類の対立する力の格闘であるからだ。支配的な、使徒のような性質をもつもののすぐれた演説技術は、すでに最も自然にその抵抗力を弱められている人々を、精神的にも意志的にも緊張力を完全にもっているものよりも、もっとたやすく新しい意図に獲得することができるであろう。

カトリック教会の、実際に人工的に作られたのではあるが神秘的な夢幻状態、燃えるローソク、香煙、香炉なども同じ目的に役立つのである。

演説家と革命　演説家は反対者を転向させようとこうして格闘しているうちに、次第に宣伝の心理的条件に対して驚くべき敏感さに達するが、これが物を書く人にはほとんど例外なく欠けているのである。だから一般に限られた影響だけしかない書かれたものは、既存の心情や見解を維持し、固め、深化させることに役立つほうが多いのである。実際に偉大な歴史的変革というものはすべて、**書かれたことば**によってひき起されたのではなく、せいぜい変革に**ともなわれた**ものであるにすぎないのである。

フランス革命は、本来しいたげられた民衆の情熱を刺激して、ついには、全ヨーロッパを恐怖で硬直せしめ、おそろしい火山の爆発をひきおこした大々的な扇動者によって指導された扇動軍がなかったとしても、いつか哲学的理論によって成就されたであろう、と信じてはいけない。最近の最大の革命的変革、すなわちロシアにおけるボルシェヴィキの革命も同様であり、レーニンの著書の結果起ったのではなく、大小無数の扇動の使徒たちの演説による憎しみにみちた扇動の結果なのである。

非識字の民衆は、実際上カール・マルクスの理論的読物によって共産主義革命に熱狂したのではなく、ただすべてのものが一つの理念のために奉仕して民衆にもっともらしく説いた幾千の扇動者という輝ける天空によってである。

民衆というものはつねにそうであったし、永遠にそういうものであろう。

演説家としてのベートマンとロイド・ジョージ　わがドイツのインテリゲンツィアが、文筆家のほうが演説家よりも、その知性において必然的にまさっているにちがいないと信じていることは、まったくかれらの頑迷な世間知らずにふさわしい。こういう考え方は、すでに一度述べた国家主義新聞の批評によって実にすばらしく説明してある。すなわち、よく知られている大演説家の演説もただちに印刷されたのを見ると、往々にして幻滅を感じる、とそこで確認されているのである。それは、戦時中にわたしが手に入れた別のある批評を思い出すのである。それは、当時まだ軍需大臣であったロイド・ジョージの演説を綿密すぎるほどよく吟味し、この演説が精神的にも学問的にも価値が低く、そのうえ平凡なわかりきった結果を取扱っている、と才気煥発の確認をしていたのだ。そこでわたしはこれら若干の演説を小冊子の形にまとめられたものを入手し、この大衆の心に影響を与える心理的

傑作を、普通のドイツ人の三文文士が全然理解していないということを哄笑せずにはおれなかった。これらの人々は、自分の鈍感な頭に残された印象だけで、この演説を判断したのだ。ところがイギリスの偉大な扇動政治家は、ただ自分の大ぜいの聴衆、広い意味ではイギリスの下層民衆全部に、できるだけ大きな効果を及ぼそうとだけ考えていたのだ。だがこの見地から見れば、このイギリス人の演説は、実におどろくべきできばえであった。とにかくそれは広い民衆層の心理についてのまさしくおどろくべき知識を示している。というのは、またその効力たるや実に決定的であったからである。

それとベートマン・ホルヴェークの救いがたい吃音とをくらべてみられよ。もちろんかれの演説はみかけは才知に富んでいた。だが実際上それはこの人が、民衆——かれはまさしく民衆を知らなかったのだが——に語る場合の無能さだけを示したのだった。それにもかかわらず、学問的にはもちろん最高の教育をうけたドイツ人文筆家の心理の平均してすずめ程度の頭脳は、大衆への効果をめざした演説が自分の純粋な学問によって硬化した内奥に残した印象にしたがって、イギリスの大臣の知性を評価し、さらにその才気ぶったおしゃべりが、自分たちにはもちろん感じやすい基礎に合っているドイツの政治家の演説と比較するようなことをするのである。ロイド・ジョージがその天才において、ベートマン・ホルヴェークと対等どころか、千倍もすぐれていたことは、かれが演説において、民衆の心を自分に向かって開き、ついにはこれら民衆を完全に自分の思うままに動かしたその形式や表現のすべてに見いだされることによって、示されているのである。そのことばの質朴さ、その表現形式の独創性、さらにわかりやすい最も簡単な例を用いることこそ、このイギリス人のすぐれた政治能力があることを示しているのである。というのは、民衆に対する政治家の演説というものを、わたしは大学教授に与える印象によって計るのでなく、民衆に及ぼす効果によって計るからである。そしてこ

れのみがまた演説家の才能を計る基準なのである。

＊

民衆集会の必要性　つい数年前、無から基礎をつくって、そして今日ではすでにわが民族の内外のすべての敵から、最もきびしく迫害する価値があると思われているわれわれの運動の驚くべき発展は、いつもこの認識を顧慮し、応用したことに帰すべきである。

運動に関する著作物も重要であるには違いない。だがそれは、今日の状態ではわれわれと反対の立場に立っている大衆を獲得するためよりは、上位および下位の指導者を同じように統一的に教育することのために、もっと大きな意義があるのである。信念の固い社会民主主義者や狂信的な共産主義者が、国家社会主義のパンフレットや本を手に入れ、これを読み、そしてそこからわれわれの世界観に対する洞察を得たり、自分たちの世界観に対する批判を研究したりすることをいやいやながら引受けるのは、ごくまれなばあいだけである。新聞ですら、はじめからある党派に属していることがはっきりしていないならば、めったに読まれないのである。そのうえこれは、ほとんど役に立たないであろう。というのは、あるただ一つの新聞の全体像というものは、非常にちりぢりであるし、その効果も分散していて、一度読んだだけでは読者への影響などは期待できないからである。わずか数ペニッヒすら問題である人々が、客観的な解明を求める衝動だけで、反対派の新聞を継続的に予約するようなことは期待できないし、また期待すべきでない。そんなことをするものは一万人の中で一人もいないだろう。運動によってすでに獲得されたものだけが、はじめて党の機関紙を、実際その運動の日常の通信事務として継続的に読むのである。

「話しことば」のビラは、すでにこれとまったくちがうのだ！　ビラをもらったものは、特にただで

もらった場合はそうであり、すでにそのときあらゆる人々の口にあがっているテーマが、表題にはっきりとかかげられている場合は、なおさらである。多少とも注意深く目を通すならば、かれは多分こういうビラによって新しい観点や立場、さらにまた新しい運動に注意することができるようになるであろう。だがこうしてもまた、最もうまくいった場合でさえも、ただ軽い刺激が与えられただけであり、けれども決して完成した事実が与えられるのではない。というのはビラもまた、単に何ものかへの関心をおこさせるか、注意をうながすだけであり、その効果はただそれを読んだものをひきつづきより根本的に教化し、啓蒙することと結びつくことができるだけだからである。だがそれはつねに民衆集会にあるのだ。

また民衆集会というものは、まず第一に若い運動の支持者になりかけているがさびしく感じていて、ただ一人でいることで不安におちいりやすい人に対して、たいていの人々に力強く勇気づけるように働く大きな同志の像を、はじめて見せるものであるから、それだけでも必要である。同じ人間でも、中隊や大隊の中で、戦友のみんなにかこまれているほうが、自分一人にたよってするよりも楽な気持で突撃に参加できるであろう。群をなしておれば、人間というものは実際にこれに反する千の理由があろうとも、つねに何か安心感をもつものなのだ。

だが大示威運動の連帯感は、各人の気を強くするだけでなく、かれらを結合し団体精神を生みだす助けとなるのである。新しい教説の最初の代表者として、自分の企業においても、仕事場においても、ひどい圧迫にさらされている人は、大きな包括的な団体の一員であり、闘士であるという確信の中に横たわっている強味を必然的に必要とする。けれどもかれはこの団体に属しているという印象を、はじめて共同の民衆示威においてのみもつであろう。もしかれが自分の小さい仕事場や、かれ自身まさ

しく小さいと感じている大工場から、はじめて民衆集会に足をふみいれ、そしてそこで同じ考え方をもつ幾千人もの人々にかこまれるならば——もし探求者としてかれが三千人から四千人の人々の暗示的な陶酔と感激の力強い勢力にまきこまれるならば、もしもこの目に見える成果と数千人の人々の賛同とがかれに新しい教説の正当性を確証し、はじめてかれのいままでの確信の真理性に対する疑いの念をめざめさせるならば、——そのときかれ自身は、われわれが大衆暗示ということばで呼ぶあの魔術のような影響に屈服するのである。何千人の意欲と憧憬と、しかしまた力とが、個々人すべてに蓄積する。疑いをもって、また動揺してこういう集会にふみいった人が、内心で固まって集会場を去るのだ。すなわちかれは団体の一員になったのだ。

国家社会主義運動は、これを決して忘れてはならず、特にすべてのことをよく知っているが、それにもかかわらず自分自身の存在と自己の階級の支配権とともに大国家をも、賭博で失ってしまっているかの市民のお人よしから影響を受けさせてはならないのだ。そうだ、かれらはすばらしくものわかりがよく、どんなことでもでき、何ごともよく知っている。——だがかれらは、ただ一つのこと、すなわちドイツ民衆がマルクシズムの腕に落ちるのを防ぐことだけは心得ていなかった。その点でかれらは、このうえもなくあわれに、このうえもなくみじめに拒否されたのだった。だからかれらの現在の自負は、たんなるうぬぼれにすぎず、誇りとしてのうぬぼれはよく知られるように、つねに愚鈍といっしょに一つの木に繁茂するのだ。(7)

これらの人々が今日、語られることばに特別の価値を認めるならば、それはこれがともかく、自分たち独自の空語の効果のなさを、ありがたいことにはすでに自分自身でいやというほど確信しているのであるから、というところからきているのだ。

第七章　赤色戦線との格闘

ブルジョア的「大衆集会」　一九一九年から二〇年にかけて、また一九二一年にも、わたしは、自身でいわゆる市民大会に出席した。それはわたしにいつも、子供のころに飲まされた一匙(ひとさじ)の肝油のような印象を与えたものだ。人々は肝油を飲むべきであり肝油はたいへんよいにちがいない。だが、それはとほうもない味がするものだ！　ドイツ民衆を縄でしばりあげ、むりやりにブルジョア的「示威運動」にひっぱりこみ、すべての演説が終ってしまうまでとびらを閉じて、出さないようにするならば、おそらく数世紀したならば効果があらわれるかも知れない。だが、腹蔵なくいうならば、人生はわたくしにとってまったくおもしろくなくなるだろうし、さらに、もはやいっそのことドイツ人たることをやめたくなるに違いない。だが、ありがたいことには、人々はそうできないのであるから、健全な堕落していない民衆が、悪魔が聖水を避けるように、「大衆集会」を避けるとしても、人々は驚くにはあたらないのである。

わたしは、かれら、すなわちブルジョア的世界観の予言者たちを知った。そしてかれらがなぜ語れることばになんの意義も与えないのかということに、実際上驚かずに、それを理解したのだった。わたしは当時民主党、ドイツ国家人民党、ドイツ人民党や、またバイエルン人民党（バイエルン中央党）の集会に出てみた。そのときただちに奇異に感じたことは、聴衆が同種のものの集まりであることだった。こういう示威大会に参加するものは、ほとんどつねにその党に属するものだけであった。

なんの規律もない全体は、たったいまこのうえもなく大きな革命を経験してきた民衆の大会というよりも、むしろ退屈なトランプ遊びのクラブに似ていた。

この平和な気分を維持するために、報告者たちは、なしうるかぎりすべてのことを、案にたがわずやっているのだった。かれらは才知にあふれた新聞論調か、学術論文のような文体で語り――より適切にいえばたいていてい式辞を朗読しているのだが――迫力あることばをすべて避け、しばしば弱々しい大学教授的シャレをさしはさむ。そうすると尊敬すべき幹部のテーブルでは義務的に笑いはじめる。大声にでも扇動的にでもなく笑い、上品に声をひそめて、遠慮がちに笑うのである。

そしてそもそも、この幹部のテーブルはどうなのだ！

わたしは一度ミュンヘンのワーグナー・ザールでのある集会を見たことがある。それはライプツィヒ戦勝記念日の再開にさいしての示威であった。演説は、どこかの大学の上品な老教授氏がやった、というよりは朗読した。壇上には幹部がすわっていた。左手には片メガネ、右手にも片メガネ、そしてその間に片メガネなしの一人の人がいる。三人がすべてフロックコートを着ている。だから人々はまさに処刑をもくろんでいる裁判所か、おごそかな幼児洗礼か、いずれにせよこうしたもっと宗教的な祝聖別式でもやるかのような印象をもつのだ。いわゆる演説――それは、おそらく印刷されていてまったく美しく見えるだろうが――は、その効果においてまったくおそるべきものであった。四十五分も経過すると、全会場が恍惚（こうこつ）でねむっている。この恍惚状態は、一人ずつ男女が出ていくことや、ウェイトレスのガチャガチャさせる音や、だんだん大きくなる聴衆のあくびによって破られるだけである。三人の労働者――かれらは好奇心からか、あるいは役目を命ぜられてか集会に出席していて、その後にわたしがいたのだが――が、ときどきかくれてニヤニヤ笑って眼を見合わせ、ついにはお互

いにヒジでつつきあって、まったく静かに講堂を立ち去った。人々は集会が妨害するに値しなかったということを、かれらの態度から見てとったのである。こんな集会ではまた実際に妨害は不必要だった。ついに集会が終りに近づいたようにみえた。教授が――教授の声はますます小さくなっていたのだが――かれの講演を終えると、二人の片メガネの間にすわっていた集会の管理者が立ちあがり、来場の「ドイツ男女同胞」に呼びかけた。教授某氏が得るところの多く、根本的、徹底的にここで行なわれた比類のない、りっぱな、そしてことばの真の意味における「内的経験」というか、実に一つの「業績」である講演に対して、いかに感謝していることか、また、みなさんの感じもそうであるに違いない。このような透徹した論述に討論をつけ加えようとすることは、この神聖な時を汚すことを意味するであろう。であるから出席者全員の意志でそういう討議は度外視して、そのかわりにみんなで「われら唯一の民族同胞」の叫びに唱和するために起立してほしいなどというのだ。かれは最後にドイッチュラントの歌を歌うことで会を閉じることを求めたのだ。

そしてかれらは歌った。わたしには、ちょうど第二節ではやくも声が小さくなり、リフレーンのところでだけふたたび力強くなったように思えた。そして第三節にいたっては、この感じが強くなり、だからわたしはみんなが文句をはっきり知らないのではないか、と思った。

だが、そういう歌をひとりのドイツ国家主義的魂をもったものが、心からの熱情で天に向かって響かせるならば、これは大した問題ではない。

それに続いて集会は終った。つまり誰もが、あるものはビールを飲もうとして、あるものはカフェーへ行こうとして、さらにあるものは新鮮な空気を吸うために、早く出ようといそぐのだ。

そうだとも。空気の新鮮な外へ、ただ外へ出るのだ！　これがまたわたしが感じた唯一のものだっ

た。そしてこれが何十万のプロイセン人やドイツ人の英雄的闘争[1]を賛美するために奉仕すべきことなのか？　チェッ、畜生、くたばりやがれだ！

もちろん政府は、こういうようなことが好きなのだ。もちろんこれは「平和な」集会である。これなら安寧秩序のための大臣は、実際に感激の大波がとつぜんに、当局が定めた市民的端正さを破るかも知れないと心配する必要はない。とつぜん、感激に興奮して人々が会場から流れ出し、カフェーやレストランへ急ぐのでなく、四列に並んで足なみそろえて、「誉れぞ高きドイツ国」を歌いながら、街頭を行進し、こうして治安にきゅうきゅうとしている警察に面倒をかけるなどと、心配する必要もないのだ。

そうだ、そういう国家の市民でもって、人々は満足することができるのである。

＊

国家社会主義の大衆集会　これに反して、国家社会主義の大衆集会は、もちろん「平和な」集会ではなかった、そこでは、実に二種類の世界観の大波がたがいに衝突する。そして集会は、なにか愛国的な歌を単調に歌って終るのではなく、民族主義的、国家主義的熱情の熱狂的な爆発でもって閉じるのである。

われわれの集会では盲目的な規律を導入し、集会幹部の権威を無条件に確保することが、最初からただちに重要であった。というのは、われわれがしゃべることは、ブルジョア的な「報告者」のような無気力なムダロではなく、内容や形式によって、つねに相手を怒らせて抗弁せしめるようなものであったからである。そしてわれわれの集会には相手がいたのだ！　かれらが数人の扇動者をその中にまじえて、きょうこそはおまえたちと決着をつけるぞ、という確信をみんなの顔面に反映させながら、

大挙してきたことが、どんなにしばしばあったことか！
　そうだ。当時かれら、すなわち赤色のわが友人たちが、今晩こそあらゆるガラクタを投げあって、すべて結末をつけてしまおうと、あらかじめ任務を教えこまれて、文字どおり縦隊になってひきつれてこられたことが何度あったか知れない。さらにまたすべてが一触即発の状態であったこともしばしばだった。そして、わが集会幹部の仮借なきエネルギーと、われわれの会場防衛者の断固とした猪突猛進性が、つねに敵の企図を阻止しえたのであった。

疑わしい赤いポスター　きっとわれわれのポスターの赤色が、かれらをわれわれの集会場にひきつけたのだ。普通の市民は、われわれもまたボルシェヴィキの赤を選んだことに、まったく驚いた。そして人々はそこに実に二種類の問題をみつけだすのだ。ドイツ国家人民党の連中は、われわれもまたつまるところマルクシズムの変種にすぎないだろう、一般に覆面のマルクシストか、よくても覆面の社会主義者にすぎないだろうという嫌疑を、いつもこそこそとささやいた。というのはこれらの人々は今日もなお社会主義とマルクシズムの区別を把握していないからである。特に、われわれが、われわれの集会で原則として「紳士ならびに淑女諸君」と挨拶せずに、「男女同胞諸君」と挨拶し、われわれの間ではただ党員についてのみ語られるということをなお発見したとき、多くのわれわれの敵にとってはマルクス主義的幽霊が実証されているように思えたのだ。われわれはこの単純なブルジョア的小心者が、われわれの由来とか、われわれの意図とか目標とかについて、かしこそうに謎を解いているのを見て、何度哄笑（こうしょう）したかわからないくらいだ。
　われわれは綿密に、徹底的に熟考して、これによって左翼を刺激し、憤激させ、かれらをわれわれ

を選んだのだ。それによって、われわれはこうして一般に世人に語ることができたのだった。

マルクス主義者の動揺せる戦術　このころに、われわれの敵の戦術がたえず動揺して、途方にくれており、また援助もないのをみて、追撃していくことは、すばらしいことであった。まずかれらは、かれらの支持者に対して、われわれに注意せず、われわれの集会を避けるよう勧告していた。

これはまた一般に遵守された。

だが、時がたつにつれて、それにもかかわらず個々に集まってき、その数は徐々にではあるがしかしだんだんと増加し、われわれの教説の印象が明白だったので、その指導者たちも次第に神経質に、不安になってきた。そしてかれらは、この発展を永久に傍観していてはならず、テロで始末しなければならない、という確信にこりかたまったのである。

その結果、われわれの集会の代表者の「君主制的、反動的扇動」にプロレタリアートの鉄拳をみまうために、「階級意識にめざめたプロレタリア」に、いまや大挙してわれわれの集会に行くべしという教唆が発せられた。

そこでわれわれの集会は、突然に開会四十五分前に早くも労働者でいっぱいになった。かれらは火薬樽と同じで、いつ爆発するか、すでに火縄に火がついているようなものだった。だがいつも反対の結果になった。人々はわれわれの敵としてはいってくるが、われわれの支持者とならないまでも、自分たちの教説の正しさを考えて、実際批判的な検討者となって、出て行くのだった。だがわたしの三時間の講演の後には次第に、支持者も敵も、ただ一つの熱狂した大衆に融合するようになってきた。

そうなると強制的に集会を解散させようとするすべての合図は、無益だった。そこで、かれらの指導者たちは、はじめてほんとうに不安になってきた。そしてすでに以前にこの戦術に反対して、労働者に原則としてわれわれの集会へ出席することを禁止することだけが正しいのだという意見をいまやさももっともらしく論じている人々のいうことを、ふたたび聞くようになったのである。

そこで、かれらはもはやこなくなったか、きてもわずかだった。だがしばらくすると、この演技がすべて、はじめから新たにはじまったのだ。

だが禁止は守られない。同志はだんだんふえてくる。そしてついにふたたび急進戦術の支持者が勝つ。われわれをたたきのめさなければならないのだ、と。

さらに、二回、三回、しばしば八回も十回もの集会が開かれた後に、集会を解散させるなどということは、いうはやすく行なうは難しということがわかり、そして集会のたびごとの結果が赤色闘争軍の崩壊を意味するということがわかると、とつぜんまた他の合言葉があらわれた。「プロレタリアの男女同志諸君！　国家社会主義の扇動者の集会を避けよ！」と。

敵がわれわれを一般に知らせる　ともかく、これと同じようなたえず動揺する戦術を、人々は赤の新聞でも見いだした。かれらは、われわれをしばらく黙殺しようとする。この試みの無益さを確信し、そしてふたたび反対のやりかたをするためにだ。われわれは毎日どこかで「言及」された。そして実際、たいていは、労働者にわれわれの存在のすべてが笑止千万きわまりないことを説明するためだった。だがしばらくすると、現象がそれほど笑うべきものであったなら、なぜ人々はその現象にそんなに多くのことばをついやすのか、という疑問が自然に多くの個々の人々から生じてきたときに、

これはわれわれに害にならないばかりか、反対に利益になるということを、紳士方は感じたにちがいなかった。世人が好奇心をもってきたのだ。かれらはとつじょ、方向を転ずる。そして、しばらくの間は、われわれは人類の真の元凶として取扱われはじめた。論説につぐ論説で、われわれの犯罪性が解説され、つぎからつぎへと新たに証明される。はじめから最後まで、でっち上げであるが、スキャンダルがさらに余計なものとしてはたらくということになる。だがこういう攻撃の効果のなさについては、かれらもしばらくするとわかったらしい。つまるところ、これらすべては、実際に一般の注意をはじめてほんとうにわれわれに集中するのを助けただけである。

わたしは当時、次のような立場をとっていた。すなわち、かれらがわれわれを笑おうと、ののしろうと、道化役として、あるいは犯罪者として言明しようと、まったく同じである。かれらがわれわれに言及し、かれらがたえずわれわれのことに没頭し、われわれが次第に労働者自身の目に実際に、目下ただ一つだけまだ対決している力があるのだと思われることが、主要事なのだ。われわれは実際何であるか、われわれは実際何を欲しているのか、われわれは将来いつの日かユダヤの新聞の暴徒たちにたしかに示してやるだろう。

当時なぜわれわれの集会が、たいていじかに強制解散にまでいたらなかったかという理由は、もちろん、またわれわれの敵の指導者たちのまったく信じられぬほどの臆病さにあった。危機的場面にはいつも、かれらはわかいバカなやつを前に出して、せいぜい会場の外で強制的解散の結果を待っているのだった。

われわれはほとんどいつも、紳士方の意図に非常によく通じていた。われわれが、それが有効であるということ自体のために多くの党員を、赤色部隊の中へ編入していたからというだけでなく、赤の

黒幕たち自身が――残念ながらわれわれドイツ民族に一般に非常にしばしば見られるように、この場合われわれにとって非常に有利な饒舌にかられていたからでもあるが、かれらは何か悪事をたくらみだしたときには、秘密を守ることができない。そしてかれらはたいてい卵も産まないうえに、コケコッコとやるのがつねだったのだ。だから赤色強制解散司令部自体が追いだされる時期が切迫している予感さえももつことなしに、われわれはたびたびこのうえもなく周到な準備をしたのだった。

このころは、われわれ自身で、集会の警護をどうしてもやらなければならなかった。当局の警護はあてにすることができなかった。反対である。当局の警備は、経験によると、つねに妨害者のためになるだけだった。というのは、当局の介入、しかも警察による介入の唯一の結果は、せいぜい集会の解散、つまり閉会だったからである。またいうまでもなく、それが敵の妨害者たちの唯一の目標であり、意図だったのだ。

不法な警察のやり方　一般に警察では、考えうるかぎりの最もひどい不法なやり方が訓練されていた。すなわち、脅迫かなにかによって、集会の強制解散の危険があることが当局に知れると、当局は脅迫者を拘引せずに、他のもの、すなわち罪のないものに集会を禁ずるのだ。そういうやり方を普通の警察の連中は、非常に法外に自負している。これを称して「法律違反の防止に対する予防処置」という。

かくして、覚悟をきめた常習犯罪者は、いつでもまじめな人々に政治運動や政治活動を不可能にすることができるのだ。安寧秩序の名において、国家権威が常習犯罪者に屈服し、そして他の側には、すまないがかれらを挑発しないようにと頼むのである。このように国家社会主義者がどこかで集会を

開こうとし、労働組合が、それは組合員の側から抵抗がおこるだろうといえば、警察はこれらの恐喝者どもを獄に投ずるようなことは断じてせずに、われわれに集会禁止を命ずるのである。いやそれのみか、この法の機関は信じがたいほど無恥であり、文書でわれわれにこれを数えきれないほど何度も通知してきたのである。

人々がこうした万一の場合に身を守ろうとするならば、こうして妨害をしようとするあらゆる試みを、あらかじめ萌芽のうちに不可能にするよう配慮しなければならなかった。

だがこれとともにさらに次のことが問題になった。すなわち、**警護をもっぱら警察にやってもらうような集会は、すべて大衆の目からみれば、その開催者が信用を落すということである。**ただ大動員した警官を配置することによってのみ開催が保証されるような集会は、下層の民衆を獲得する前提というものが、つねに目に見えて存在している力であるかぎり、勧誘的な効果はない。

臆病者よりも勇気のある男のほうが女性の心を征服しやすいのと同じように、警察の警護によってのみ存続しているような卑怯な運動よりも、勇ましい運動のほうが、民衆の心を獲得しやすいのである。

特にこの最後にのべた理由から、この若い党は、自己の存在をみずから主張し、みずから守り、そして敵のテロをみずから破るように配慮しなければならなかった。

心理的に正しい集会管理　集会警備は、

一、集会のエネルギッシュな、心理的に正しい管理と

二、組織的な整理隊

によって、樹立された。
われわれ国家社会主義者が、当時集会を開催したときには、集会の支配者はわれわれであり、他のものではなかった。そしてわれわれはこの支配権をたえず、どんな瞬間にも極度に鮮明に強調した。われわれの敵は、当時挑戦的なものは容赦なくたたき出されるということを、十分に知っていた。そしてわれわれのほうが五百人の中のわずか十二人にすぎなくてもだ。当時の集会、とりわけミュンヘン以外のところでの集会においては、国家社会主義者が十五、六人であったのに対し、敵は五百人、六百人、七百人、八百人であった。だがわれわれは、それにもかかわらず挑戦に対しては寛容ではなかったはずである。そしてわれわれが、屈服するよりは打ち殺されたほうがましだと考えていることは、われわれの集会の出席者が非常によく知っていた。小人数の党員がわめき、なぐりかかる赤の優勢な力に対して、豪胆にやり通したことは、一度ならずしばしばのことであった。
もちろんこういう場合に、十五人や二十人ではついに圧倒されてしまったであろう。だが、その前に少なくとも敵は二倍か三倍は頭をたたきこわされるだろうということを知っていた。そしてかれらは生命の危険をおかすことは好まなかったのだ。
われわれはここでマルクス主義者やブルジョアの集会技術の研究から学ぼうとし、そしてまた学びとったのだ。

マルクス主義的集会の技術　マルクス主義者は、昔から盲信的な規律をもっていた。そこでマルクス主義の集会を強制解散させるという考えは、少なくとも市民の側からはまったくあらわれなかった。赤のほう自体は、いつもこういう企図にますます没頭していた。この領域ではかれらはだんだん

と一定の老練さに達したばかりでなく、ついにはドイツ国の大領域において非マルクス主義的集会は、それだけでプロレタリアートへの挑戦だと称するようになったのだ。そのうえに、民衆を欺瞞し、民衆をだましている自分たちの活動の卑怯さをあばくために、その集会で自分たちの罪状目録がいろいろと数えられるだろうと黒幕がかぎつけたときには、とりわけそうである。さらにまたそういう集会が公示されるやいなや、あらゆる赤の新聞は、荒れ狂ったように叫ぶのだ。その場合、これら法の侮辱を主義とするものたちは、まっさきに当局にかけつけて、「これ以上悪化しないように」この「プロレタリアートへの挑発」をただちに防止するよう、切にそして脅迫的にたのみこむこともまれでなかった。役職にある人のばかさかげんによって、かれらはことば使いを選び、かれらの目的を達するのだ。だがそういう地位にあるものが例外的に、走狗官吏でなく、真にドイツの官吏であって、恥知らずの要求を拒否するようなことがあると、かかる「プロレタリアへの挑発」には耐ええず、「プロレタリアートのたこだらけのこぶしのたすけでブルジョアの走狗に陋劣な職業を停止」させるために、某日大衆を集会に出席させるという、例の要請がつづくのであった。

ブルジョア的集会技術　さて人々は、そこでブルジョアの集会も見てみなければならない。まったくみじめに、不安そうにその集会の司会がなされるのを、一度体験してみる必要があるのだ！　そのうえそういう脅迫で集会がすらすらとお流れになることがまったくしばしばなのだ。だが、八時の開会が九時十五分前から九時になっても行なわれないと、不安はだんだんと大きくなる。そうすると司会者が臨場している「反対派の紳士方」に何度もお世辞をいって、ただお互いが意見を開陳することによってのみ（それによってかれは、はじめから反論をもったいぶって承認しているのだが）、お

互いの見解がいっそうよくわかり、お互いの了解がめざめ、そして橋渡しをすることができるのであるから、自分たちと異なる立場に立っている出席の方々に、わたしをはじめ他のすべての出席者も、内心よりたいへん喜んでいる（はっきりしたウソだ！）と、わからせようと努力するのだ。その場合同時にかれは、この集会の目的が、人々にかれらがいままでもってきた見解をすてさせる意図がまったくない、と確信するのだ。断じてそうではない。各人は自分の流儀にしたがって幸福になるべきである。だが、また他人も幸福にしなければならない。それゆえ、かれは、演説はいずれにせよそんなに長くはないだろうから、報告者に最後まで語らせてほしい、そしてまたこの集会でドイツ同胞が憎しみあって、はずかしい光景を世界に示さないように、と請う。……チェッ。

左翼の民族同胞は、もちろんこれについてたいてい理解をもちあわせず、報告者ははじまらないうちから、乱暴な誹謗のもとに早くもちぢみあがらねばならないのだ。あたかも報告者が、拷問のような手順が早く短縮されたことを運命に感謝しているかのような印象を、人々がうけたのもまれではない。ものすごい騒動の中で、こういうブルジョア集会の闘牛士は闘技場から出て行くのだ。かれらが頭をぶたれて階段をころがりおちないかぎりだ。しかもそういう場合がしばしばあるのだが。

国家社会主義の場内整理隊　それゆえ、われわれ国家社会主義者がはじめてわれわれの集会を開いたとき、そしてとくにわれわれがどういうふうに集会を開いたかは、マルクス主義者にとってはもちろん新しいものだった。かれらはたびたび演じた寸劇を、とうぜんわれわれの場合にもくり返しうると確信してやってきた。「今日、われわれは結末をつけるのだ！」。われわれの集会に入場するさいに、他のものにほら文句をふいているものも多くいた。だがかれは二言とヤジを飛ばさないうちに、

電光石火のようにもう会場の入口にのばされてしまうのだった。

第一に、われわれの場合はすでに集会の司会がちがっていた。われわれの講演をお慈悲で許してほしいと請うこともせず、またはじめからみんなに際限ない討論を確約したりもせず、サッサと、集会の支配者はわれわれであり、したがってわれわれが家屋不可侵権をもっていること、そしてヤジをあえてとばそうとするものは、だれでもはいってきたところから容赦なく出ていってもらうことを、確言するのだった。さらにそういう連中に対しては、どんな責任もわれわれは拒否しなければならない。もし時間が余り、われわれにつごうがよいならば、われわれは討論させてやろう。そうでなければ、討論はしない。そこで報告者、党員某氏が、いまや演説をするというふうだ。

その間にかれらは、もう驚いたのだった。

第二に、われわれは厳格に組織された会場警備を意のままにした。この会場警備、あるいはもっとよくいえば整理係が、ブルジョア政党の場合には、たいてい年からくる品位が、権威と尊敬をある程度うける権利があると信じているような方々から成りたっているのがつねであった。だが、マルクシズムに扇動された大衆は、年齢、権威、尊敬についてほとんど注意をはらわないから、このブルジョアの会場警備の存在は実際上はいわばないのと同じであった。

わたしは、われわれの大集会活動の開始と同時に、整理係として、原則としてみんな若いものばかりの会場整備組織をつくった。一部は、わたしが軍務に服していたときの戦友であり、他ははじめて獲得された若い党員だった。かれらははじめから、テロはただテロによってのみ破ることができ、そのうえこの地上では勇気と決断力のあるものがつねに成果をおさめたのであり、われわれは非常に偉大で崇高なある力強い理念のために闘っており、最後の血の一滴までも庇護し、守護される値打ちが

十分ある、というふうに教えられ、教育されてきたものたちだった。かれらは、ひとたび理性が沈黙し、暴力が最後の決定をくだすようなときには、攻撃が最良の防御の武器であり、そしてわれわれの整理隊は、討論クラブではなく、最悪の場合には断固決然たる闘争団体であるという風評を必ず先頭にたてねばならない、という教えにつらぬかれていたのだ。

そしてこれらの青年たちは、こういう合言葉にどれほどあこがれたことだろう！

これら従軍した世代は、ブルジョア的意気地なさに対して十分に嘔吐と嫌悪を感じ、いかに失望し、憤激していたことだろう。

そこで、革命が実際にわが民族の破壊的なブルジョア的指導にのみ、いかに感謝することができたかということがはっきりとしてきた。ドイツ民族を守るこぶしは、もちろんそのころもあった。ただそれを投入する頭がなかっただけなのだ。当時、わたしが青年にかれらの使命の必要性を説明し、さらにこの地上ではどんな知識も、それに奉仕する力が現われて、それを保護し、防衛しないならば、効果がなく、やさしい平和の女神はただ戦いの神の側へさまようものであり、この平和の大事業はすべて力の加護と援助が必要である、といつもくりかえし確信したとき、かれらが目を輝かせてわたしを見たことが何度あったことだろう。現にどんなにはるかにいきいきした形で、兵役義務の思想がかれらにはいりこんでいったことか！　死せる国家の死せる権威につかえる、古い骨化した官吏根性の硬化した意味においてではなく、個々人の生命を、いつ、いかなる地位にいても、いかなる場所であってもつねに、民族全体の存在のためにささげようとする義務をいきいきと認識してのことである。

そしてこれら青年がいかに立ちあがったことだろう！

くまばちの群のように、かれらはわれわれの集会の妨害者に、その優勢におかまいなく、襲いかか

っていった。そして妨害者がどんなに強大であっても、負傷や流血の犠牲を顧慮せずに、われわれの運動の神聖な使命に自由な道をきりひらくという大きな思想に、完全にみたされていた。
すでに一九二〇年盛夏に、この整理隊の組織は、次第に一定の形をとってきた。そして一九二一年春には、だんだんと百人隊に編成され、それ自体がさらに分隊にわかれていった。
そしてこれは緊急に必要だった。というのは、その間に集会活動が引きつづき盛んになってきたからである。もちろんわれわれはまたこのころ、ミュンヘンのホーフブロイハウスのフェストザールで集会をした。だが、町のいっそう大きな会場のほうをもっとたびたび用いた。ビュルガーブロイのフェストザールやミュンヘナー・キンドル・ケラーでは、一九二〇年から二一年にかけての秋と冬に、次第に強力になっていく大衆集会が行なわれ、いつも同じ情景だった。すなわち、国家社会主義ドイツ労働者党の示威大会は、当時すでにたいていは開会まえから詰めすぎるため、警察の手で閉鎖されるのだった。

＊

統一的象徴の意義　われわれが整理隊を組織したことは、ある非常に重要な問題を明瞭(めいりょう)にした。運動は、それまで党章も党旗ももっていなかった。そういうシンボルがないということは、ただ一時的に不利であったばかりでなく、将来のためにもがまんできなかった。まず第一にその不利は、党員に同じ党に属しているという外的な目印がまったくなく、それは、運動のシンボルの性格をもってはいるが、インターナショナルなそういうものに対抗しうるような目印を欠いているということは、将来のためにも耐えられないことだった。
だが、こういうシンボルが心理的にどんな意義を与えるか、わたしはすでに青年時代に一度ならず

しばしば認識し、また感情的に理解する機会をもった。さらに第一次大戦後、わたしはベルリンにおいて王宮とルストガルテン前でマルクシズムの大衆示威を体験した。赤旗、赤い腕章そして赤い花の大海が、おそらく十二万人も参加したと思われるこの示威運動に、純粋に外面的だけでも力強い勢力を与えたのだ。わたし自身、このような雄大に活動する光景からする暗示的魔力に、民衆出身の人々がいかにたやすく屈服してしまうか、ということを感じ、また理解しえたのだった。

政党政治的には一般にいかなる世界観も心に浮べず、あるいは代表もしていないブルジョアジーは、それゆえまた自分たちの旗をもっていなかった。かれらは「愛国者たち」からなりたっており、したがってドイツ国の旗をもってぶらついていたのである。もしこれ自体が一定の世界観のシンボルであったならば、実際かれら自身の活動によってかれらの世界観のシンボルが国家の、そしてドイツ帝国の旗になったのだから、国家の支配者がその旗に自分たちの世界観の代表をみたことも、理解しうることだったろう。

だが事態は、そうならなかった。

ドイツ帝国は、ドイツ・ブルジョアジーの力添えなしに作られ、旗自体は戦争の若枝から生まれたのだ。だがそれゆえ、旗は事実上単なる国旗であって、特別の世界観的使命の意味ではなんらの意味ももっていないのである。

新旧の黒・赤・金　ただドイツ語地域のある場所で、ブルジョア政党旗のようなものがあっただけだ。ドイツ・オーストリアだ。当地の国家主義的ブルジョアジーの一部は、一八四八年の旗[2]すなわち、黒・赤・金[3]を、かれらの党旗に選び、一つのシンボルをつくったので、それは世界観的には何の

意味もなかったが、それにもかかわらず国家政治的には、革命的性格をおびたものであった。**当時、この黒・赤・金の旗の最も激しい敵は——人々はこれをいまでも決して忘れてはならないのであるが——社会民主党であり、キリスト教社会党員ないしカトリック党員であった。**当時かれらが、まさしくこの旗を侮辱し、けがし、よごしたのは、これらがその後、一九一八年に、黒・白・赤の旗を下水溝へ引きずりこんだのとまさに同じである。もちろん旧オーストリアのドイツ諸政党の黒・赤・金は、一八四八年の色であった。このようにそのころは、幻想的な時代であったかも知れないが、個々人においては、たとい背後に黒幕としてのユダヤ人がかくれていたとしても、最も真正なドイツ魂が代表として座をしめていたのである。したがって、まず祖国の裏切り行為や、ドイツ民族とドイツ財宝の無恥な駆引き売りが、マルクシズムと中央党にこの旗を非常に気に入らせたのである。すなわち、かれらはそれを今日、このうえもなく神聖なものとして尊び、かつてはかれらがつばをはきかけたこの旗を守ろうとして自己の旗印をつくったのだ[4]。

かくて、一九二〇年までは、事実上マルクシズムに対抗し、かれらの世界観に正反対の対立を具象化する旗はなかったのである。というのは、一九一八年以後にドイツ・ブルジョアジーは、自分たちのよりよい政党の中に、いまとつぜん発見された黒・赤・金のドイツ国旗をかれら自身のシンボルとして引きうけることをむしろ好都合とは考えなかったからだ。しかし人々はみずから新しい発展に対して、将来のための独自のプログラムも対置することなく、最善の場合でも過去のドイツ国の再建思想をもっていただけであった。

新旧ドイツ国旗　そして、旧ドイツ帝国の黒・白・赤の旗[5]が、われわれのいわゆる国家主義的ブ

ルジョア政党の旗として復活したのは、この思想のおかげである。

いまや名誉にならない諸状態や随伴現象のもとに、マルクシズムによって征服されてしまった状態をあらわすシンボルが、この同じマルクシズムをふたたび滅ぼしてしまうべき目印に適さないことは、明白である。この古いユニークな美しさをもつ色は、その若く新鮮な組み合わせによって、このもとで戦いそして多くの犠牲を見てきた真のドイツ人には、神聖で尊いものでなければならないが、この旗はそれゆえ将来の闘争のシンボルとして通用しないのである。

わたしはいつも、われわれの運動においてはブルジョア政治家とちがって、古い旗を失ったことを、ドイツ国民のためにほんとうに幸福であった、という立場をとっていた。共和国がこの国旗のもとに何をしようと、われわれには変りはない。だが、われわれは運命が恵み深くも、すべての時代を通じてこのうえもなく名誉ある軍旗を、このうえもなく破廉恥な淫売（いんばい）の敷布として使われることから守ったことを、心の底から感謝しなければならない。自分自身と自己の市民を売った今日のドイツ国は、決して黒・白・赤の栄誉と英雄的な旗を使うことができないのだ。

十一月革命の恥辱が続くかぎり、共和国もその外被（６）をまとってもよい。そしてまたより忠実な過去からその外被（７）を盗ませないようにしよう。わがブルジョア政治家は、国民のために黒・白・赤の旗を望むものは、われわれの過去に窃盗行為を犯すものであることを、良心によびおこさなければならない。ありがたいことには、共和国が自己に適したものを選んだように、かつての旗は実際に、ただかつてのドイツにとってのみ完全に適合していたのである。

国家社会主義の旗　われわれ国家社会主義者がなぜ旧国旗を掲揚することに、われわれの独自の

活動の意味深いシンボルを見ることができなかったか、という理由も、ここにあった。というのは、われわれは自己の失敗で没落した古いドイツ国を、ふたたび死からめざめさせることを望むのではなく、新しい国家をつくることを望んだからである。

今日、この意味でマルクシズムと闘っている運動は、だからその旗からして、疑いもなく新国家のシンボルであらねばならない。新しい旗の問題、すなわちその模様について、当時われわれは非常に頭を使った。あらゆる方面から提案された。もちろんたいていよく考えられてはいたが、目的に適合しなかった。というのは、新しい旗はわれわれの独自の闘争のシンボルでなければならないのと同様に、他方それは大きなプラカードのような効果もなければならなかったからである。自分で大衆とさかんに接触しているものは、こうしたすべてのものが、小さく思えるがしかし非常に重要なことであることがわかったであろう。効果の多い記章は、非常に多くの場合に、ある運動についての関心に対する最初の誘因を与えることができるのである。

こういう理由から、われわれの運動を――種々の方面から提案されたように――旧国家と、あるいはより正しくいえば、過去の状態の再現を唯一の政治目的であるとする弱い政党と、白旗によって同一視するようなあらゆる提案を、われわれはすべて拒否しなければならなかった。そのうえ白は感動的な色ではない。それは純潔な処女団体には合うが、革命期の革新運動には合わないのである。

また黒を提案するものもあった。それ自体は現代に適しているが、そこにはなんらわれわれの運動の意欲の説明的表示がなかった。けっきょくこの色も感動的な効果がじゅうぶんでない。

白・青は、美的効果はすばらしいにもかかわらず、あるドイツの一連邦[8]の色として、遺憾ながら評判のよくない分離主義的偏狭さという政治的立場をあらわしているものとして、問題外である。さら

に人々はここでもまたわれわれの運動を表示するものを見いだすのは非常に困難であろう。黒・白に対しても同じことがいえた。(9)

黒・赤・金は、もとより問題にならなかった。

また黒・白・赤は、上述した理由から、問題にならず、いずれにせよいままでの表現では問題外である。たしかに効果という点では、この色の組み合わせは他のすべてのものをこえて高くそびえている。それは現存するものの中で最も輝かしい調和である。

わたし自身は、つねにこの昔の色を残しておく考えだった。それは兵士としてのわたしにとって、わたしの知っているかぎりの最も神聖なものであったからというだけでなく、その美的効果においてもわたしの感覚に、はるかにぴったりするものであったのだ。それにもかかわらずわたしは、当時若い運動の各方面から渡された無数の図案――そしてたいていは古い旗の中にはハーケンクロイツ(10)を描いたものだった――を、例外なく拒否せざるをえなかった。わたし自身は――指導者として――わたし自身の図案をすぐに公にしたくなかった。とにかく他の人が、りっぱな、あるいはおそらくもっとりっぱなものをもってくる可能性があったからである。実際上、シュタルンベルクのある歯科医も、かなり悪くない、そのうえわたしの図案にかなり近い図案を提出した。ただ一つ欠点があった。すなわち、かぎの湾曲したハーケンクロイツが、白い円の中にはめこまれていたものだった。

その間にわたし自身が、いろいろとやってみて最後の形を描いた。すなわち、赤地に白い円を染め抜き、その真中に黒のハーケンクロイツを描いた旗である。長い間試みた後にわたしはまた、旗の大きさと白い円の大きさと、同じくハーケンクロイツの形と太さに一定の割合をきめたのだった。

そしてそれが、最後まで残された。

同じ意味で、整理隊のための腕章もその後ただちに作図された。しかも、赤い腕章で、同じように白い円を抜き、黒いハーケンクロイツを描いたものだった。

党員章も、同じ規準にしたがって立案された。すなわち、赤地に白い円、中央はハーケンクロイツを描いた。ミュンヘンの金細工師、フュースが、はじめて使いうる図案を作り、その後にそれが決定された。

一九二〇年の盛夏にはじめて、この新しい旗が公衆の前にあらわれた。それはりっぱにわれわれの若い運動に適合した。運動が若く新しかったように、旗もまた若く新しかった。それはだれもそれ以前に見たことがなく、当時、点火用の炬火のような効果があった。ある忠実な女子党員が、はじめて図案をしあげ、旗を引きわたしたとき、われわれ自身、みんなほとんど子供のような喜びを味わった。はやくも数か月後、われわれはミュンヘンでそれを六本もっていた。そしてますます拡大する整理隊は、特にこの運動の新しいシンボルを広めるのに役立った。

国家社会主義の象徴の説明　しかもこれはまさしく一つのシンボルなのだ！　われわれみんなによって熱愛せられるこの独得の色によって、かつてドイツ民族のために数多くの栄誉をかちえたもので、ただ過去に対する畏敬の念をわれわれにおこさせるだけでなく、それはまた運動の意図を最もよく具体化したものだった。国家社会主義者としてわれわれは、われわれの旗の中にわれわれの綱領を見る。われわれは赤の中に運動の社会的思想を、白の中に国家主義的思想を、ハーケンクロイツの中にアーリア人種の勝利のための闘争の使命を、そして同時にそれ自体永遠に反ユダヤ主義であったし、また反ユダヤ主義的であるだろう創造的な活動の思想の勝利を見るのだ。

二年後には——そのときにはすでに整理隊からとっくに数千人を包括する突撃隊になっていたが——この若い世界観の防衛組織に、特別な勝利のシンボルを与えることが必要である、と思われた。すなわち、**隊旗**である。それもまたわたし自身が図案をつくり、そして古くからの忠実な党員、金細工師ガールに、その仕あげをまかせた。それ以来隊旗は国家社会主義の闘争の目印になり、軍旗になったのである。

＊

ツィルクスの第一回集会　一九二〇年にますます盛んになってきた集会活動は、ついに毎週しかも二回開くまでになった。われわれのポスターに人々は群がる。町でいちばん大きい講堂はいつもいっぱいになる。そして誤った道に導かれた何万というマルクス主義者は、きたるべき自由のドイツ国の闘士となるため、民族共同体へもどる道を見いだしたのだ。ミュンヘンで公衆は、われわれを知った。人々はわれわれのうわさをし、「国家社会主義者」ということばが、多くの人によく知られ、すでに一つの綱領としての意義をもってきた。また、支持者の群も、そのうえ党員さえもたえず増加しはじめた。そのようにして、一九二〇年から二一年にかけての冬にわれわれは、すでにミュンヘンで強力な党として登場することができた。

当時はマルクス主義政党をのぞいては、政党はなかった。とりわけわれわれのように、こういう大衆示威運動で注意を促すことができるような**国家主義的**政党はなかった。五千人を収容するミュンヘナー・キンドル・ケラーは、一度ならずしばしば破れんばかりにいっぱいになった。そしてわれわれがまだあえて近づかないただ一つの会場があった。これがツィルクス・クローネ[11]だった。

一九二一年末、ドイツにとってまた苦しい心配事がもちあがった。ドイツに不合理な一千億金マル

クの支払い義務を負わせたパリ協定が、ロンドン協約の形で実現することになったのだ。
ミュンヘンにずっと前からあったいわゆる民族主義同盟の労働共同体[12]が、これをきっかけとして大々的な共同抗議に招こうとした。時は非常に切迫していた。わたし自身は、一度決定したことを実行にうつすのをいつまでも躊躇し、ぐずぐずしているのをみていらいらしていた。はじめはケーニヒスプラッツで示威大会をやるといっていたが、人々は赤になぐりこまれるという心配からふたたびこれを中止し、そしてフェルトヘルンハレ前の抗議示威運動を計画した。だがさらにこれもやめ、そして最後にミュンヘナー・キンドル・ケラーで合同集会をやると提案した。とかくするうちに、一日一日とたっていった。大政党は、この恐ろしいでき事にいっこうになんの注意もしない。労働共同体も、ついに計画した示威大会のはっきりした日取りをきめる決心をつけることができなかった。
一九二一年二月一日、火曜日、わたしは最後的決定を切に要求した。わたしは水曜日にしたらとなぐさめられた。それだから水曜日に、わたしは、集会は行なわれるのか、いつ行なわれるのか、と絶対に明白な報告を求めた。答はまたもやはっきりせず、いいのがれだった。人々は、労働団体が来週水曜日に示威大会を起す「つもり」だという。
そこでわたしの堪忍袋の緒が切れた。わたしは抗議示威大会をただひとりでやろうと決心した。水曜日の正午に、わたしは十分間で口授し、ポスターをタイプライターでうたせた。そして同時に翌二月三日木曜日にツィルクス・クローネを借りさせた。
当時これは、際限もなく大きな冒険だった。あの巨大な会場をいっぱいにすることができるかどうか疑問に思われただけでなく、強制解散させられるという危険もあったのだ。
わが整理隊は、この巨大な会場を守るためには、まだ十分でなかった。わたしもまた、強制解散さ

せられる場合に、どういう処置をとったらよいか、適当な考えが浮かばなかった。そのころ、わたしは普通の講堂を使うよりも、ツィルクスの建物でやるほうが、ずっと困難が大きいと思っていた。だが、これはやってみて明らかになったのだが、まさしく逆だった。狭い講堂にぎっしり詰っているよりも、巨大な会場のほうが、強制解散させようとする一群のものを事実上もっと容易におさえることができた。

ただ一つ、一度でも失敗すれば非常に長い間押しもどされるということが、確かだった。というのは一度でも強制解散が成功すれば、われわれの後光は一撃で破壊され、敵は一度成功したことをなん度もくりかえしてやろうと元気づくからである。そうなると、われわれの今後のすべての集会活動がサボタージュされるにちがいなく、また何か月も困難きわまる闘争をやって後に、やっとそれを克服することができるにちがいないからである。

われわれはビラをはるのにわずか一日しかなかった。すなわち木曜日だけだ。不幸にして、朝から雨が降っていた。こういう状態では多くの人が、雨や雪のときに、人殺しやなぐり殺しがありかねないような集会に急ぐよりは、むしろ家にひきこもっているのではないか、と考えるのも無理ではないように思えた。

とにかく、木曜日の午前中わたしはとつぜん不安になった。どっちみち会場はいっぱいになりえないのだろう（そうなれば実際わたしは労働団体の笑いものになるだろう）、そこでわたしは大いそぎで若干のビラを口述し、午後それを配布させるために印刷にまわした。もちろんこれは集会への参加を求めるものだった。

わたしが借りさせた二台のトラックは、できるだけ赤い色でおおわれた。その上にわれわれの旗を

二本立て、おのおののトラックに十五ないし二十人の党員が乗った。かれらは懸命に街路を飛ばして、ビラをまくべし、要するに今晩の大衆示威大会の宣伝をなすべし、という命令をもらっていた。マルクス主義者の乗っていないトラックが旗を立てて町を走ったのは、これが最初であった。だから市民たちは赤く飾りたて、はためくハーケンクロイツ旗で飾った車をぼうぜんと見送っていた。その間に町はずれでは無数の拳骨がふりあげられ、かれらはこの最も新しい「プロレタリアートへの挑発」に対してあきらかに憤激しているらしかった。というのは、トラックでねり回るのも、集会を開くのも、マルクシズムだけがその権利をもっていたからである。

夕方六時にはツィルクスはまだ十分にはいっていなかった。わたしは十分ごとに電話で知らせをうけていた。わたし自身かなり不安だった。というのは他の講堂だったら七時か七時十五分すぎにはたいていもう半分はきていたか、往々にしてほとんどいっぱいだったからだ。もちろんこれはまもなくわかった。わたしはこの新しい会場のとほうもない広さを計算に入れていなかった。千人くればホーフブロイハウスのフェストザールはすでにそうとういっぱいに見えた。それだのにツィルクス・クローネでは一呑みなのだ。人々はそれをほとんど見ていなかったのだ。けれどもまもなくもっとよい報告がやってきた。そして八時十五分前には、会場の四分の三はつまっており、非常にたくさんの大衆が入場券売場の前に立っているとのことだった。そこでわたしは車で走った。

八時二分すぎにツィルクスの前についた。ツィルクスの前にはやはり多数の人々がいた。一部分は単なる好奇心からきたのだが、その中には、結果を場外で待っていようとするたくさんの敵もいた。

わたしが巨大なホールに踏み入ったとき、一年前にミュンヘンのホーフブロイハウスのフェストザールでの第一回の集会のときと同じような喜びが、わたしをつつんだ。だがわたしは人壁をおしわけ

て、一段高い壇にあがった後にはじめて、その成果のまったく大きいことをみたのだった。この広間は巨大な貝殻のようにわたしの前に横たわっており、何千人もの人でいっぱいになっていた。サーカスの走馬路すら、黒山のようだった。五千六百枚の入場券が売りだされ、失業者・苦学生や、わが整理隊の総数をふくめて数えるならば、約六千五百人がそこにいたであろう。

テーマは「未来か没落か」というものだった。わたしは、未来がそこに、わたしの目の前にあるのを確信して、心がおどった。

わたしはしゃべり始めた。そして二時間半ほど演説した。すでにはじめの半時間で、この集会は大成功をおさめるだろうという感じをもった。これら何千人の一人一人との接触がかもしだされた。はじめの一時間後には、もう拍手が自発的に破れんばかりにますます大きくなってわたしの演説を中断しはじめ、二時間後にはふたたび興奮が静まって、そしてわたしがその後この会場でしばしば何度も体験し、またおのおのの人にももちろん忘れがたく記録されているあの厳粛な静けさにもどっていったのであった。さらに人々はただこの巨大な群衆の息づかいだけを聞いていた。そしてわたしが最後のことばを語りおわったとき、とつぜんどよめき、このうえなき熱情をもってドイッチュラントの歌が歌われ、救われたような終末をみいだしたのだった。

わたしは、この巨大な会場が次第に空になりはじめ、巨大な人海が大きな中央出口からほとんど二十分もかかって押しだされていくのを、なお目で追っていた。そしてわたし自身もはじめて、非常な幸福感にみたされて、家へ帰るために自分の席をはなれたのだった。

このミュンヘンのツィルクス・クローネにおける第一回集会は写真にとられた。それはことばよりもずっとよく示威大会の偉大さを示している。ブルジョア新聞は写真と記事をのせたが、ただ「国家

主義的」示威大会に関していたと述べただけだった。だがいつものように謙遜してその主催者については何もいわなかった。

集会につぐ集会　これでもって、われわれははじめて、きまりきった普通の政党のわくから遠くへ踏み出たのだった。人々はもはやいまでは、われわれを無視して通ることができなくなった。この集会の成功がたんにかげろうのようなものであるという印象を与えないために、わたしはただちにツィルクスでの第二回示威大会を次週にきめた。そして成功は同じだった。この大会場はふたたび破れんばかりに大衆で埋った。そこでわたしは、次週には同じ形式で第三回の集会を開こうと決意した。そして第三回目には巨大なツィルクスは上から下まで人でいっぱいで、すしづめだった。

この一九二一年の開始以後、わたしはミュンヘンでの集会活動をますます高めたのだった。わたしは、いまやさらに、単に毎週一回でなく、往々にして週二回の大衆集会を開催し、そのうえに、夏の盛りや秋の終りごろには、しばしば週三回にもなった。いまではわれわれはいつもツィルクスで集会をした。そしてわれわれの集会の晩はいつも同じような成功をおさめた、と満足して確認することができたのだった。

その成果は、運動の支持者数がますます増加したことであり、党員の数が大増加したことだった。

＊

むなしい強制解散の試み　もちろん、こうした成功はまたわれわれの敵を安心せしめてはおかなかった。かれらはあるいはテロで、あるいは黙殺でと、いつも戦術が動揺していたので——かれら自身認めねばならないのだが——どういう方法でもそれは、われわれの運動の発展を阻止することがで

きなかったのである。そこでかれらは最後の努力として、われわれの今後の集会活動に、それによって究極的にとどめをさすように、テロ行為を決意したのだった。
この行為の外面的理由として、人々はエアハルト・アウアーという州議員に対するこのうえなくなぞにみちた暗殺計画を利用した。上述のエアハルト・アウアーがある晩なにものかに撃たれたというのである。すなわち、かれは実際に射殺されたのではないが、かれを射殺しようとしたものがあったというのだ。だが社会民主党指導者のウソのような沈着さと、なぞのような勇気は、不法な攻撃を失敗させただけでなく、この極悪な犯人自身が卑怯にも逃げるのをたたきのめした、というのだ。かれらは、警察もその後かれらについてもはやすこしの足取りもつかむことができないほど早く、遠くへ逃げてしまったという。このなぞにみちた事件を利用して、ミュンヘンの社会民主党の機関紙は、われわれの運動に対してこのうえなく過激に扇動し、同時に古くから習慣になっているおしゃべりで、次に起るにちがいないものをほのめかすのだった。われわれの木が天に達するまで成長しないよう、プロレタリアのこぶしでいまや適当なときに干渉するよう配慮せられている、というのだ。
その数日後、はやくも干渉の日がやってきた。
ミュンヘンのホーフブロイハウスのフェストザールでの集会――わたし自身がそこで話すことになっていたのだが――が、究極的な対決のために選ばれたのだった。
一九二一年十一月四日、午後六時と七時の間に、わたしははじめて実際の報告をうけとった。それはこの集会が無条件に強制解散をさせられるだろう、そしてこの目的のために特に若干の赤の工場から多数の労働者大衆を集会に送るくわだてがある、というのだった。
われわれがこの情報をもっと早くうけとらなかったことは、ある不幸な偶然のためであった。われ

われはその日にミュンヘンのシュテルンエッカー街の神聖な旧事務所を去って、新しい事務所へ引越したのだった。すなわち、われわれは旧事務所からは出たが、新しい事務所がまだ手入れがしてなかったので、はいれなかったのだ。また電話は旧事務所からとりはずしたが、新事務所にはまだ取りつけられていなかったので、この日に強制解散をもくろんでいると伝える多数の電話が、みんな通じなかったのだ。

この結果、集会自体が非常にわずかの整理隊だけで守られるということになった。おおよそ四十六人からなる数的にあまり強くない百人隊がいただけである。だが夕方一時間のうちに多くの増援軍を集めるためには、警急機構はまだできていなかった。さらに、こういう気づかわしいうわさは、いままで何度もわれわれの耳に達していたし、そのうえ特に何事も起らなかったということがあった。通告された革命はたいてい起らないという古くからの格言は、われわれの場合にもいままでいつも正しい、ということを実証していた。

このうえもなく残虐な決断でもって強制解散に対抗するためにその日にやりえたことをみんな、こういう理由でおそらくやらなかったのである。

ついにわれわれは、ミュンヘンのホーフブロイハウスのフェストザールを、強制解散には適していないように思える、と考えていた。われわれはもっと大きい講堂、特にツィルクスに対してもっと強制解散を恐れていたのだ。そのかぎりにおいて、われわれはこの日貴重な教訓をえた。われわれはその後この問題をすべて――わたしはあえていうのだが――科学的な方法で研究し、いろいろの結論に達した。それは一部分は興味深くまた信じがたいものであった。そしてその後われわれの突撃隊を有機的、戦術的に管理するために根本的に重要であった。

七時四十五分、わたしがホーフブロイハウスの玄関についたとき、たしかにそういう企図があることについて、もはや疑うことができなかった。講堂は満員だった。だから警察が入場を阻止していた。非常に早くからきていた敵は、講堂の中におり、われわれの支持者は大部分外にいた。小人数の突撃隊が玄関でわたしを待っていた。わたしは大講堂の入口を閉じさせ、そして四十五、六人にはいるよう命じた。わたしは若者たちに次のように説明した。おそらく今日はじめてのるかそるか、運動に忠誠をつくさねばならないだろう。そして殺されてわれわれにかつぎ出されないかぎり、われわれの中の一人といえども講堂を去ってはならない。わたし自身も講堂に残るつもりであり、この中の一人といえどもわたしを一人にして去らないだろうと信じている。だが一人でも卑怯(ひきょう)であることを実証したものを見たならば、わたしはみずからその腕章をとりさり、党員章をとりあげるだろう、と。さらにわたしはかれらに、強制解散のちょっとしたきざしでもみたらただちに前へ進め、攻撃することこそ最良の防御だということを忘れるべきでない、と命じた。

ハイル三唱——今日はいつもより荒々しくしゃがれて響いた——が、答えであった。

それからわたしは講堂にはいり、実際に自分の目で様子を見渡すことができた。かれらはぎっしりと内部で席を占め、すでに目でわたしをにらみ抜こうとしていた。無数の顔が憎悪にみちてわたしに向かっていた。その間他方では悪意のあるしかめ面で、非常にはっきりしたヤジをくりかえしとばしていた。人々はそのうえに、今日は「われわれが結末をつけるぞ」、脇腹に注意しろ、永久に口に栓をしてやるぞ、とこういう美しい空語をまた叫んでいた。かれらは自分たちの優勢を知っており、したがって優越感をもっていたのだ。

それにもかかわらず集会は開くことができた。そしてわたしはしゃべり始めた。わたしはホーフブ

ロイハウスのフェストザールではいつも講堂の長いほうの前面に立っていた。そしてわたしの演壇はビールのテーブルだった。わたしはこうしてもともと、人々のまん中にいたのだ。この講堂では、わたしがその他の場所では決して同じようにはみられない気分をいつも生ぜしめていたのは、まさしくこういう状態が寄与していたのかも知れなかった。

わたしの前、特にわたしの左前方には、敵ばかりがすわったり立ったりしていた。それら大部分はマファイ工場や、クスターマンやイザリアツェーラー工場等からきた、みんな非常にたくましい男や若者だった。左側の講堂の壁にそって、かれらはまったくぎっしりとほとんどわたしのテーブルのところまで押しだしてきていて、そこでジョッキを集めはじめた。つまりかれらは、どしどしビールを注文し、空になったジョッキをテーブルの下においたのだ。全砲列はかくして成立した。今日もことがもう一度うまくはこんだなら、驚きだろう。

約一時間半後には――わたしはいろいろのヤジにもかかわらずそんなに長くしゃべったのだが――、ほとんどわたしはあたかも状勢を支配したかのようであった。強制解散隊の指導者自身もまたこれを感じたらしかった。というのは、かれらはだんだん落ちつかなくなってきて、何度も行ったりきたりし、目に見えて神経質に仲間たちを励ましていたからである。

わたしはあるヤジを受けながすとき、ちょっとした心理的な失敗を犯した。そのことばが口から出るか出ないかのうちに、わたし自身気がついたのだが、それが戦端を開く合図を与えた。

二、三の怒ったヤジ。そして一人の男がとつぜん椅子(いす)の上におどりあがり、講堂の中へどなった。「自由だ!」。この合図に自由の闘士たちは自分たちの仕事を始めた。

数秒にして会場全体は、わめき絶叫する人の群でいっぱいになった。その上を無数のジョッキが榴(りゅう)

弾砲の射撃のように飛ぶ。その間に椅子の脚のめりっめりっと折れる音、ジョッキのわれる音、どら声で叫ぶ、わめく、叫ぶ。

バカげた光景だった。

わたしは自分の場所で立ったままであり、わたしの若者が完全にかれらの義務をいかに遂行するかを観察することができた。

そこでわたしはブルジョア集会を見ていればいいのだった！

立ち回りが始まるか始まらないかに、早くもわたしの突撃隊員——というのはかれらはこの日からそう呼ばれた——は攻撃していった。おおかみのようにかれらは八人か十人の群をなして、どしどし敵の中へ突進していった。そしてかれらを実際にだんだんと講堂からたたき出しはじめた。五分もたつと、もはやわたしはかれらのうちの一人といえども、まだ血まみれになっていないものをまったく見ることができなかった。そのときはじめてわたしがほんとうに知った人が、いかにたくさんいたことか。先頭にわたしの勇敢なマリウス、今日のわたしの個人秘書ヘス、その他たくさんのものが、すでに重傷をうけながら、両足で立っていることができるかぎり、幾度も幾度も攻撃する。二十分間大騒動が続いた。だがさらに、おそらくは七、八百人を数えた敵は、五十人にみたぬわが方の人間によって大部分講堂からたたき出され、階段から追いたてられた。ただ講堂の左うしろの隅に、まだ大きな群がもちこたえていて、最も激しく抵抗をしていた。とつぜん会場の入口から演壇に向けて二発のピストルを発射した。そこで乱射がはじまった。昔の戦争のでき事のこういう再生に直面して、ふたたび心は歓喜せんばかりであった。

だれが撃ったか、そこからはもう見わけがつかなかった。ただひとつ確認できたのは、その瞬間か

ら血みどろになったわれわれの若者の憤怒がいちじるしく激しくなり、ついに最後の妨害者を圧倒し、講堂から追い出してしまったことだけだった。

「集会は続行する」　おおよそ二十五分たっていた。講堂自体は、ちょうど榴弾が破壊したかのように思われた。われわれの支持者の多くは、まさしく包帯でおおわれていた。他のものは車で運ばれねばならなかった。だがわれわれはいぜんとしてこの場の支配者であった。この晩の集会を司会していたヘルマン・エッサーが宣言した。「**集会は続けられます。報告者が発言します**」と。そこでわたしはふたたびしゃべった。

われわれが集会を閉じたあと、とつぜん興奮した警部が飛びこんできて、腕をふりまわして講堂の中へわめきちらした。「集会は解散だ」

わたしは知らず知らず、このおくればせのでき事を笑わずにはおられなかった。まことに警察らしいもったいぶりだ。かれらが小さければ小さいだけ、少なくともそれだけかれらは大きく見せかけねばならないのだ。

われわれはその晩、実に多くのものを学んだ。そしてまたわれわれの敵も、自分たちの側で受けた教訓をもはや忘れなかった。

それ以来一九二三年秋まで「ミュンヘンの郵便」は、もはやプロレタリアートの鉄拳を知らせてこなかった。

第八章　強者は単独で最も強い

運動の優先権　わたしは前述の箇所で**ドイツ民族主義同盟の労働共同体**があることを述べた。ここではこの労働共同体の問題をごく簡単に説明しておこう。

一般に人々は**労働共同体**を、諸同盟がその仕事を軽減するために、ある一定の相互関係に立ち、多少とも大きな権限のあるものを共通の指導部に選び、共通の行動を共同して遂行するグループ、と考える。すでにそこから、目的と方法があまりへだたっていない結社、組合あるいは党派に関しているという結論がでてくる。そしてそういう組合が最後に、こうした「労働共同体」に集まって、**共通の結合点**を発見し、**共通ならざるものを排除する**ということを聞いて、普通の一般の市民に満足感と安心感を与えているのである。その場合、そういう結合が非常に力の増大に役立ち、さもなければ弱小グループたるものもこれによってとつぜん強力なものになる、という一般的確信が支配している。

けれどもたいていこれは誤りなのだ！

みんなが同一目標を追求しようと主張するいろいろの組合とか結社とか、そういった類のものが、いったいどんなふうにできあがるのか、ということをはっきりとつかむことは興味もあり、またわたしの目にはこの問題をもっとよく理解するのに重要である。だが**一つ**の目標はただ**一つ**の組合が闘い、そしてたくさんの組合が同一目標のために闘わないほうが理性的である、というのがそれ自体理屈に合っているだろう。疑いもなく、その目標ははじめはただ**一つ**の組合が注目したのだった。ある一人

の男がどこかで一つの真理を告げ、ある一定の問題を解決するために呼びかけ、目標を定め、かれの意図を実現するのに役立つべき運動を形成したのだ。

こうしてその綱領に従って、存在する不合理を除去したり、あるいは将来における特殊な状態をつくりあげたりすることを目的とする結社とか党とかが設立されるのである。

こういう運動は一度生まれいでると、それとともに運動は実際上ある**優先権**をもつのである。ところでこの運動と同じ目的を闘おうと考えているすべての人々は、こういう運動に順応し、共通の目的によりいっそう奉仕するために、かくしてその力を強化することは、本来自明のことであるだろう。特に精神的に明敏な頭をもっているものはだれでも、こういうものに加入することに、まさしく共通の闘争の実際的成果を生む前提を感じなければならないであろう。だから理性的にもまた良心的な忠実さという点でも、(わたしが後に示そうと考えているように、ここが非常に重要なのだが)一つの目標にはまたただ一つの運動しかあってはならないであろう。

それがそうでないというのは、二つの原因に帰することができる。その一つをわたしはほとんど悲劇的だといいたい。一方その第二のほうはあわれむべきもので、人間的な弱点自体の中に求めるべきものである。だが最も深い根底においては、わたしは両者の中に、意欲それ自体が、意欲のエネルギーと強さを増大させ、人間の実行力のこの高度の養育によって現存の問題をけっきょく可能にするに適した事実だけを見るのである。

一定の課題を解決するのに、たいていただ一つの団体だけになぜとどまらないのか、という悲劇的な原因は次の点にある。すなわち、この地上の大事業は、どれも一般に幾百万の人間の中にすでにずっと長く存在していた希望、多くのものの中に静かにいだかれていた憧憬(しょうけい)を実現することにあるのだ。

そうだ、幾世紀もそれが耐えがたい既存状態のもとに呻吟していたため、ある一定の問題の解決を願ったのに、この一般的憧憬が実現されないこともありえたのだ。こういう困窮から一般に英雄的解決をもはや見いだささない諸民族を、**無気力**だということができる。一方われわれは、ある民族の生活力とそれによっていっそう保証された生存のための使命というものは、大きな圧制から解放されるために、あるいはつらい困窮を除去するために、あるいは自信を失ったがために落ちつきがなくなった魂をいやすために、他日運命から、長い間あこがれていたものを最後に実現するために神の恵みをうけた人間が贈られたときに、最も適切に実証されるのである。

指導権争い　それだから、いわゆる大きな時事問題の本質には、その解決に何千人も参加し、多くのものがそのために招かれているとみずから信ずること、とにかく運命さえもいまや諸力を自由に闘争させて、けっきょく強者、優者に勝利を与え、かれにその問題の解決をゆだねるために、選択しようとして種々の人々に指令する、ということがあるのだ。

だから、幾世紀も宗教生活の形態に不満をもち、ある革新にあこがれ、そしてこの心の衝動から十数人やそれ以上の人々がたちあがり、かれらの洞察や知識を基礎にしてこの宗教上の緊急事態の解決のために新しい教理の予言者として、あるいは少なくとも現存するものに対する闘士として登場するために、自分が招かれたと信ずることがありうるのだ。

もちろんこの場合でも、自然の秩序によって、最も強力なものがこの大使命をはたすために定められるだろう。しかしながら、この一人の男がただ一人招かれたのだと他のものが認識するのは、たいていまずいつもずっとあとになってからである。反対に、人々はみんながその課題を解決するために

同等の権利をもち、そのために招かれたのだとみずからみなすのである。そして同時代の人々は、かれの中の誰か――ただ一人のものが最高の能力をもっているのだから――ただ一人自分たちの支持をうけるに値するか、判断しえないのが普通である。

そのようにして数世紀の間に、実際にしばしば同じ時代の中に種々の人間があらわれて、少なくとも主張するところは同じような、あるいは大衆から同一と感ぜられるような目標を闘いとるために、いろいろの運動をつくるのである。民衆自身はもちろんはっきりしない望みをいだいており、一般的な確信をもっているが、なんといってもその目標や、自己の希望や、あるいはそのうえそれを実現する可能性というような本来的な本質についてはまったくはっきりしていないのである。

悲劇はそこにある。すなわちこれらの人々はおたがいを知らず、まったく異なった道をたどって同じ目標に達しようと努力しており、したがってかれらの独自の使命に対しても最も純粋な信念をもって、他のものを顧慮することなしに自己の道をすすむことが義務だと考えていることにあるのだ。

こういう運動、党派、宗教団体が――一般の時代的欲求からではあるが同じ方向へと活動するために――おたがいに完全に独立して成立することが、少なくとも一目見ただけで悲劇と思われる。というのは、種々の方向に分散している力というものは、ある唯一の方向にまとめあげれば、より急速に、より確実に成果をもたらしうるという意見にあまりにも強く傾くからである。だがこれはそうではない。かえって自然自身はその仮借なき論理で、種々のグループをたがいに競争させ、勝利のシュロの枝をめざして格闘させ、そして最もはっきりと、最も近い、そして最も確実な道を選んだ運動が目標に達するような決定をくだすのである。

だがもし、いろいろの力が働く自由な道が与えられておらず、最後決定が人間的な知ったかぶりの

空論的結論にひきつけられて、目に見える成果——けっきょくそれが行動の正しさにいつも最後の確証を与えるのだ！——という確かな証明にゆだねられないならば、外からその道の正しいか正しくないかをどうして決めるべきなのか。

このように種々のグループが同じ目的をめざして別々の道を行進するならば、種々のグループは、かれらが同じように努力しているものがあることを承知しているかぎり、かれらの道を根本的に検査し、できるかぎり近道をし、最後のエネルギーまで緊張させて、より早く目標に達しようとするであろう。

そのように、この競争によっておのおのの闘士の高度の淘汰が行なわれる。そして人間が、以前に失敗した試みが不運であったことからひきだされた教訓に感謝しなければならないこともまれではない。

それだからわれわれは、一見して悲劇的と思われる事実、意識的な過失ではないが、最初から個々に発生して分裂しているという事実の中に手段を認識することができ、それによってけっきょくは最善の処置がとられるのである。

オーストリアとプロイセン　われわれは、歴史の中に次のようなことを見る。すなわち、かつてドイツ問題[1]の解決のためにとることができた二つの道——そしてそのおもな代表者であり主張者であったものは、オーストリアとプロイセン、ハープスブルク家とホーエンツォレルン家であったが——は多くの人の考えによればもともとひとまとめにされねばならなかった。人々は、かれらの考えによれば、両方の道をひとつに結合した力に託すべきだったのだ。だがその場合、当時けっきょくはより

重要な代表者の道がとられたであろう。けれどもオーストリアの意図は決してドイツ帝国を建設することにはなかったはずである。

そしてこのうえもなく強力なドイツ統一の帝国は、まさしく幾百万のドイツ人が断腸の思いで、わが兄弟牆(けいていかき)にあいせめぐ最後の、このうえなく恐ろしい徴表を感じたことから成立したのである。すなわちドイツ皇帝の冠は、ほんとうはケーニヒグレッツの戦場[2]から得られたものであって、後世考えるようなパリ全面の戦い[3]において得られたものではないのだ。

そのようにドイツ帝国の建設それ自体は、なにかある共通の意図が共通の道を進んだ結果ではなく、むしろ意識的な、しばしばまたヘゲモニーをもとめる無意識的な格闘の結果であり、その格闘から最後にプロイセンが勝者として登場したのだった。そして政党政治に眩惑(げんわく)されて真理を断念していないものなら、いわゆる人間の英知というものは、決して生活の英知、すなわち種々の力の自由な働きという英知がけっきょく実現させるような同様な賢明な決意をしないだろうということ、が確認できるにちがいない。というのは二百年前には、後日新ドイツ帝国の胚細胞となり、建設者、教師となるものはホーエンツォレルン家のプロイセンであり、ハープスブルクではないだろうということを、ドイツ諸邦のうちで誰がはっきりと本気に信じていただろうか！　これに反して、運命がうまく行動してくれたことを、今なお拒もうとするものがあるだろうか。事実腐った、堕落した王朝の原則を身につけているドイツ帝国を、今日なお想像しうるものがいったいあるだろうか。

そうだ、自然の発展は――もっとも数世紀にわたる闘争の後にではあるが――ついに、最善のものをそれが属するその地位においたのだった。

これはつねにそうであるだろう。いままでつねにそうであったように、永久にそうであるにちがい

ない。
　それだからいろいろの人々が、同じ目標に達するためにその道を進んでも、苦情をいってはならない。最も力強く最も速いものがこうして認められ、勝利者になるのだ。

民族主義の分裂の原因　ところがさらに、それにもかかわらず民族生活においてはしばしば、同じように見える運動が、同じように見える目標に種々の道を通って達しようとするのはなぜか、ということについては、第二の原因がある。この原因は、単に悲劇的であるばかりでなく、そのうえまさしくあわれむべきものである。それは羨望（せんぼう）、嫉妬（しっと）、野心、盗人根性などの悲しむべき混合の中にある。これらの性質は遺憾ながら、人間の各個人においては、しばしば合体しているように見える。
　すなわち民族の困窮を認識している人物が現われて、この病気の本質について最後まで明らかにしたのち、本気でそれを除こうとし、もしもかれがその目標を確定し、その目標に達しうる道を選んだならば——ただちに小人物や最も心の小さい人物が気づいて、そしてそこで公衆の目を自己にひきつけたこの男の行動を、熱心に追求するのだ。まさにすずめのようだ。他のものにはまったく興味がないように見えるが、だがそれにもかかわらず実際には極度に緊張して、パンのかけらを見つけた幸運な仲間から、ゆだんしている瞬間にとつぜん盗むために、たえず観察しているのだ。こういう人間もまたそうなのだ。だれか一人だけが、新しい道を進もうとする。そうするともう、たくさんのつまらない怠けものたちはびっくりして、この道の終点のところにあるかも知れない少しばかりの利益をかぎつけるのだ。それが見つかりそうなことがわかるやいなや、別のできるだけ早く行ける道を通って目標に到達するために、真剣に走り去るのである。

さて、新しい運動が樹立され、その運動が一定の綱領を定める。そうするとこういう人間が寄ってきて、これと同じ目標を闘いとるのだと主張する。けれどもかれら自身正直にこういう運動の線に決してつらならず、またその運動の優先権も決して認めない。かえってかれらは綱領を盗み、そのうえに自分の新しい党をつくるのである。そのさいかれらは、他のものと同じように、自分たちもずっと以前からちょうどそれと同じものを望んでいた、と考えのない同時代の人々に確言するほどにしらじらしいのである。そして一般の軽蔑(けいべつ)を正当に甘受するかわりに、そうすることによってつごうのよい立場をうることも、まれではないのである。というのは、他の人がその旗に書き入れた課題を、自分の旗に書き、その綱領の照準点を転用し、だがそのうえに自分がこれらすべてをつくりだしたかのように詐称し、かれ独自の道を行くなどということは、なんとあつかましいことではなかろうか？　だがこのあつかましさは、最初に自分たちが新しい党を樹立して分裂をひきおこした当の分子が、相手の優位にもはや追いつくことができないと認めるやいなや、経験によると、たいていは合同や統一の必要性について語る、ということに特に示されるのだ。

いわゆる「民族主義の分裂」は、こういう経過のおかげをこうむっている。

もちろん一九一八年、一九年に民族主義的といわれるグループや政党などがたくさんできあがったのは、設立者にはまったく罪はないのであって、事物の自然の発展から起ったのであった。これらの中から早くも一九二〇年には国家社会主義ドイツ労働者党が、勝利者として次第に上昇し結晶してきた。さて、個々の設立者が根本的に誠実であったことは、多くのものが実に感嘆に値する決意によって、明らかに効果が少ない自分の運動をより強力な運動の犠牲に供すること、つまり自分の運動を解散し、あるいは無条件に合併すること以上に、輝かしいものによって示されることはできないのである。

このことは、特に当時のニュールンベルクのドイツ社会党の重要な闘士ユリウス・シュトライヒァーにいいうることである。国家社会主義ドイツ労働者党とドイツ社会党は、同じ究極目標をもっていたが、おたがいにまったく無関係に成立したものだった。ドイツ社会党の最も重要な第一線の闘士は、前述のように当時ニュールンベルクで教師であったユリウス・シュトライヒァーであった。はじめはかれも、自分の運動の使命と未来について聖なる確信をもっていた。だがかれは、国家社会主義ドイツ労働者党のより偉大な力とより強力な成長とをはっきりと、疑う余地なく認めるやいなや、ドイツ社会党および工員組合のための活動を中止し、その党員に、相互闘争の中から勝利をおさめて台頭してきた国家社会主義ドイツ労働者党に合流し、そしていまやあいならんで共通の目標のために闘い続けることを求めたのだ。個人的で、根本的にまじめな決心というよりもっと困難な決心である。

実際この運動の初期から、分裂したままで残っているものはなく、ほとんど徹頭徹尾、当時の人々の誠実な意図がまた誠実で、正直で、正しい目的に導いたのだ。われわれが今日「民族主義の分裂」ということばで呼んでいるものは、すでに強調したように、例外なくわたしが述べた第二の原因のおかげで存在しているのである。すなわち以前は独自の思想も、さらに独自の目標ももっていなかった野心満々の人々が、国家社会主義ドイツ労働者党の成果が疑いもなく熟したのをみて、まさにその瞬間に「招かれた」と感じたのだ。

とつぜん、残るくまなくわれわれの綱領を書きうつした綱領ができあがり、われわれから借りた諸理念が闘いとられ、われわれがすでに数年来闘ってきた目標がたてられ、国家社会主義ドイツ労働者党がすでに長い間闘ってきた道がえらばれたのだ。人々は国家社会主義ドイツ労働者党が長く存続してきたにもかかわらず、新党を設立せざるをえなかった理由を、あらゆる手段で基礎づけようとする

さを失ったのだ。
のである。ただしかれらがその高貴な動機をこじつければこじつけるほど、その空語はますます真実

実際に決定的な唯一の根拠があった。すなわち、なんらかの役割を演じたいという設立者の個人的野心だ。そこにはその矮小な出現は、他人の思想を引きつごうとするたいした厚顔さ——その他の市民生活において人々がどろぼう根性だというのがふつうである——以外、みずからは実際なにももっていないのである。

当時、他人のもっている観念や理念で、かかる政治的な病的盗癖が、短期間に自分の新しい仕事のために集めなかったものはなにもない。だがこういうことをしたものこそ、さらにその後目に涙をうかべながら、「民族主義の分裂」を深く嘆き、絶えず「統一の必要性」についてしゃべり、他のものがついに、このいつまでも続く悲歌の叫びにあきてしまって、いままで理念を盗まれたうえになおその理念を達成するために起した運動までも盗人たちに投げ与えるまで、ペテンにかけることができるというひそかな望みをいだいている人々だったのだ。

「労働共同体」けれどもこれがうまくいかず、この新企業の収益が、企業主の頭の弱さのため、人々がそれに期待したほどのものでなかったとなると、もちろん安売りするのをつねとする。そしていわゆる労働団体の一つに乗り込めるならば、それだけで満足したのである。

当時、自分の両足で立つことができなかったものは、みんなこういう労働共同体と結合した。もちろん、八人の不随者がおたがいに腕を組めば、たしかに一人の闘士ができあがるという信念から発したのだ。

だがこれらの不随者のものの中にほんとうに一人健全なものがいたとしても、かれは他のものを両足で立たせるためにだけ全力を用い、こうしてけっきょく自分も障害をもってしまうのだ。いわゆる労働団体といっしょに進むことを、われわれはつねに戦術の問題と見ていた。けれどもその場合われわれは次のような根本的認識から決してはなれてはならない。すなわち、

協力団体の形式によって、弱い同盟が強力な同盟に変わることは決してない。だがおそらく強力な組合がそれによって弱化をこうむることは少なからずありうるし、またあるだろう。弱いグループを集めることによって強力な要素が生ずるにちがいないという意見は、正しくない。なぜなら経験によれば多数者というものは、いかなる形式においても、あらゆる前提のもとでも、愚鈍と卑怯（ひきょう）の代表であるだろうし、したがって同盟が多く集まっているということは、それが自分たちが選んだ多数者の指導によって支配されるやいなや、卑怯さと弱さに引き渡されてしまうからである。また、かかる結合によって諸力が自由にふるまうことがはばまれ、最善のものを選び出す闘争が排除され、かくしてより健全なもの、より強いものの必然的、究極的な勝利が永久に妨害されるのである。だからこういうたぐいの結合は、自然的発展の敵である。というのは、それはたいてい闘っているその問題の解決を促進するよりは、妨げるからである。

純粋の戦術的顧慮から、将来を見ている運動の最高指導部が、それにもかかわらず、まったく短期間ではあるが、ある特定の問題の処置について類似の組合と一致し、また共同の歩調をとろうとすることもありうる。だがこれは、運動自体がそれによって救済という使命を断念しないならば、決してそういう状態を永久化することに導いてはいけない。というのは、運動が一度究極的にかかる結合にまきこまれたならば、その運動は自然的発展の意味で自己の力を十分に活動させ、ライバルをうち負

かし、そして勝利者として定められた目標を達成する可能性も権利も失ってしまうからである。

すべてこの世界ではほんとうに偉大なものは、共同戦線によって闘いとられたものではなく、つねにただ一人の勝利者の成果だったということを、決して忘れてはならない。共同戦線の結果というものは、すでにそのそもそものやり方からして、将来の崩壊、またはそれ以上に、すでに到達したものを喪失する萌芽をもっているのだ。偉大な、ほんとうに世界を変革させるような精神的な革命というものは、一般にただ、単一組織の巨人のような闘争としてのみ考えうるのであり、実現されるのであって、決して共同戦線の企てとしてではないのだ。

それゆえまたまず第一に、民族主義国家はある民族主義的協力団体の妥協的意欲によって決してつくられるのではなく、ただあらゆるものに対して闘いぬいたただ一つの運動の鋼鉄のような意志によってのみつくられたのである。

第九章　突撃隊の意味と組織に関する根本の考え方

権威の三原理　旧国家の強さは、君主政体、行政機関、軍隊の三本の柱に基礎があった。一九一八年の革命は、この政体を除去し、軍隊を解体し、行政機関を腐敗政党に引き渡した。だがそれによって、いわゆる国家権威の最も本質的な支柱が打ちこわされたのである。国家権威それ自体は、ほとんどつねに、原則としてすべての基礎となるこの三要素にもとづいているのだ。

権威を形成するための第一の基礎は、つねに人気である。けれどもこの基礎にのみもとづく権威は、まだ非常に弱く、疑わしく、また動揺している。それゆえこういう人気にだけ立脚している権威の担い手は、権力を形成することによって、権威の基礎を改善し、確実にしようと努力しなければならない。権力、したがって強制力の中に、**われわれはすべての権威の第二の基礎を見るのである。**それは、わずかに本質的により安定し、確かであるが、つねに第一のものより断じて力強くない。**人気と強制力が結合し、それらがともにある期間継続することができると、権威はさらにもっと固い基礎の上で立ちあがることができる。伝統の権威がそれだ。ついに人気と力と伝統が結合した時に、権威は揺るがしがたいものと見られてよいのだ。**

革命によってこの最後の場合も完全に除外された。そのうえ、もはや伝統の権威もなくなった。旧帝国の崩壊、旧政体の除去、かつての主権の表章と帝国のシンボルの壊滅とともに、伝統は急激にひきさかれた。その結果は、国家権威の最もひどい動揺だった。

国家権威の第二の柱たる強制力すら、もはやなくなった。そもそも、革命を実行しうるためには、人々は国家の組織された力と**強制力**の具体化されたもの、すなわち軍隊を解体しなければならなかった。そのうえ軍隊自体の腐敗した部分を、革命の闘争分子としてふりむけねばならなかった。たとえ前線の軍隊は統一的にはこの解体工作の手には帰さなかったとはいえ、しかしかれらは四年半の英雄的力闘の栄誉ある場所をうしろにすればするほど、故国のこの解体の酸におかされ、復員組織にはいったとき、同様に、兵士評議会時代のいわゆる自発的服従という無秩序に終ってしまったのだ。

もちろん兵役を八時間労働の意味に解して暴動をおこすこの兵士群の上に、人々はもはや権威を置くことはできなかった。かくして権威の確立をまず保証する第二の要素が除去された。そしてもはや革命は、本来その上に権威を構築するための最も本源的なもの、すなわち**人気**だけをもっていた。だがこの基礎はまさしく非常に不安定であった。もちろん革命はただ一度の強力な打ち込みで古い国家構造を粉砕することができたが、けれども最も根本的な原因は、ただわが民族構造の内部における平常の均衡が、戦争によってすでになくなっていたがためであった。

民族体の三クラス　いずれの民族体も、三つの大きなクラスにわけることができる。すなわち一方の側では最良の人間性という極端で、あらゆる道徳の意味で善良で、とりわけ勇気と献身によって特徴づけられる。他方は、最悪の人間の屑という極端で、あらゆる利己主義的衝動と悪徳が存在しているという意味で劣悪である。両極端の間に、第三のクラスとして、大きな広範な中間層があり、ここにおいては輝かしい英雄的精神も、卑劣きわまりない犯罪者的根性も具体化されていない。

民族体の興隆期は、この極端によい部分の絶対的指導によって特徴づけられ、そのうえそれによっ

てのみ存在する。

普通の、均整のとれた発展期、あるいは安定状態の時代は、明らかに中間の分子の支配によって、特徴づけられ、またそれによって成立している。この場合両極端は、相互に平衡を保ち、あるいは相殺しあう。

民族体の崩壊期は、最悪の分子の優勢な活動によって定められる。

だがそのさい、大衆は――わたしはかれらをそう呼ぼうとするのだが――中間のクラスとして、両極端自体がみずから相互の格闘にしばられているときだけ、はっきりとあらわれるのであり、だがかれらは両極端の一方が勝った場合には、つねによろこんで勝利者に従属するものだ、ということに注意すべきである。最良のものが支配している場合には、大衆はこれに従い、最悪のものが興隆している場合には、かれらは少なくとも最悪のものに何の抵抗もしない。というのはこの中間の大衆は決してみずから闘わないからである。

最良のものの犠牲　さて、戦争はその四年半の血なまぐさいでき事において、人々が――あらゆる中間クラスの犠牲を認めるとしても――それにもかかわらず最良の人間性という極端が、ほとんど完全に血を流し出したということを認めねばならなかったほどに、この三つのクラスの内的均衡を乱してしまったのだ。というのはこの四年半の間に、かけがえのないドイツ人の英雄の血が流されたのが実に巨大なものであったからである。何十万という個々の場合を集めてみればよい。そこではつねにいわく、戦線への**志願兵**、**志願**斥候兵、**志願**伝令兵、電話隊の**志願兵**、架橋**志願兵**、潜水艦**志願**水兵、飛行隊**志願兵**、突撃大隊**志願兵**等――いつもいつもまた、四年半を通じて無数の場合に志願兵で

あり、また志願兵だ。――そして人々はつねに同じ結果をみたのだ。すなわちひげも生えていない若者が、あるいは年配の男が、ともに燃えるような祖国愛に、偉大な個人的勇気や最高の義務意識にみたされて、みんな志願したのだった。そういう場合が何万も、実際に何十万もあった。そして次第にこういう人間がだんだんとまばらになってきた。戦死しなかったものは撃たれて廃人になるか、あるいは生き残った数が少ないために次第に消散してしまった。だが、まずなによりも次のことを考えてほしい。一九一四年全軍はいわゆる志願兵によって編成されていたのであり、かれらはわが議会の能なしの犯罪者的な不誠実さのおかげで、なんら有効な平時訓練も受けておらず、それゆえ防御力もなく大砲のえじきとして、敵の犠牲に供せられたのだった。当時フランドルの戦いで倒れ、あるいは不具になった四十万人は、もはや償うことはできない。かれらを失ったことは、単に人数が減ったこと以上のものがある。かれらの死によって、よい側の重みが少なくなり天秤が急にはねあがり、そして下賤（げせん）で卑劣で卑怯（ひきょう）な分子、要するに悪い極端の群が、以前にもまして重くなったのである。

悪の繁茂　というのは、もう一つ次のようなことがつけ加わるからである。

すなわち、ただ最良の極端が戦場で四年半の間にこのうえなく大量に減らされただけでなく、その間に悪の極端が驚くほど貯蔵されたのである。自発的に志願して神聖な犠牲の死をとげた後に、さらに招魂堂のきざはしを登った各々の英雄に対して、死ぬかわりに多少とも故国で有利に活動するために、非常に注意深く死から背を向けた一人の徴兵忌避者がたしかにいたのだ。

そこで戦争の終末には次のようなありさまが生じた。すなわち、国民の広範な中間層は、その税を義務にしたがって血の犠牲で払ったのだ。最良の極端は、典型的な英雄的精神においてほとんどすべ

て身をささげてしまった。悪の極端は、一方ではこのうえなくナンセンスな法律によって保護され、他方では陸軍法規摘要が適用されなかったことによって、遺憾ながら同じく全部残ったのである。

このうまく保存されたわが民族体のカスがさらに革命を起し、そしてそのカスが革命をなしえたのは、最良の分子の極端がもはやそのカスに対抗しなかったためである――最良分子の極端はもはや生きていなかったのだ。

だがそれゆえ、ドイツ革命は、はじめからその人気が限られたものであるにすぎなかった。ドイツ民族自体がかかるカイン[1]のような行為を犯したのではなく、民族の中の逃亡兵や娼婦のヒモ等という光を忌む無頼漢がやったのだった。

前線の男、かれは流血の格闘の終結を歓迎し、ふたたび故郷の土を踏むことができ、妻子と再会しうるという幸福を感じていた。だが革命自体には、かれは内心でまったく関心がなかった。かれは革命を好まなかった。そしてその扇動者や組織者をなおいっそう好まなかった。四年半のこのうえない苦闘のうちに、かれは政党のハイエナ[2]のことを忘れ、その不和もすべて疎遠になってしまったのだ。

革命は、ドイツ民族の小部分においてだけ、実際に人気をえた。すなわちこの新国家のすべての名誉市民の目印としてリュックサックを選んだ革命の援助者の階級の場合だけだった。かれらは、今日でもまだ多くのものが誤って信じているように、革命自体のために革命を好んだのではなく、革命の結果のために好んだのだった。

だがこのマルクス主義の略奪者どもの人気だけで権威をひきつづき支持することは、実に困難だった。けれどもこの若い共和国こそ、短期間の混沌（こんとん）の後に、わが民族のよい側の最後に残った分子たち

の結合した報復力によってとつぜんふたたび呑みこまれることを欲しないならば、どんな代価をはらっても権威を必要としたのだった。

当時かれら、すなわち革命の担い手たちには、自分たちの混乱の渦の中ですべての地盤を失い、こういう時局では一度ならずしばしば諸民族の生活から発生してくる青銅のようなこぶしによってとつぜんつかまえられ、他の地盤に置かれること以上におそろしいことはなかった。共和国は、いかなる代価を払っても固まらねばならなかった。

結果としての瓦解　そこで共和国は、ほとんどすぐさまその弱い人気という動揺する柱とならんで、より固い権威の基礎をつくるためにさらに、強制力の組織をつくらねばならない必要にせまられた。

一九一八年から一九年にかけての十二月、一月、二月のころ、革命の勝利者たちは足もとの地盤が揺れ動いたと感じたとき、かれらは、自分たちに民族の愛が提供した弱い地位を、武器の力で強化する覚悟ができる人をもとめて見回したのだった。「反軍国主義的」共和国が、兵士を必要としたのだ。だがかれらの国家権威の第一の、唯一の支柱——すなわちかれらの人気——は、ただ娼婦のヒモ、どろぼう、強盗、逃亡兵、徴兵忌避者等の社会、したがってわれわれが悪の極端と呼ばざるをえない民族のその部分にのみ根ざしていたので、新しい理念のために自己の生命を犠牲にする覚悟ができている人間を得ようとするすべての努力は、こういう連中の間ではむなしい片思いであった。革命思想とは、この階層は共和政体を決して欲していたのではなく、かれらの本能をもっとよく満足するために、革命の遂行を担っている階層は、兵士をその守りのために置くべき能力も覚悟もなかった。というのは、この階層は共和政体を決して欲していたのではなく、かれらの本能をもっとよく満足するために、

現在の政体を解体することを欲していたからである。かれらの合いことばは、ドイツ共和国の秩序と建設ではなく、むしろ、ドイツ共和国の略奪であった。

そのように人民委員たちが、当時多くの不安から発して助けを求めた叫びは、この階層においては聞くものもなく消えていき、むしろ逆に自己防御と立腹に解体したのだった。というのは、人々はこういう行動の中に忠誠と信仰の侵害を感じ、だが、もはや人気だけに立脚せず、力によって支持された権威をつくることの中に、革命というこれらの分子にとってのみ権威あるものに対する戦闘、すなわち窃盗の権利や、刑務所の塀から脱走し、鎖から解放されたどろぼうや略奪者群、要するに悪の破廉恥漢のだらしない支配の権利に対する戦闘の開始を、感じとったからである。

人民委員が欲したところをいくら叫んでもかれらの仲間からはだれもこなかった。ただ「裏切者」という反対の叫び声が、かれらにかれらの人気の担い手たちの考えを知らせただけであった。

義勇軍の成立　当時はじめて、多数の若いドイツ人が「安寧秩序」のために――かれらはそう考えたのだが――もう一度軍服をつけ騎兵銃や小銃を肩にかついで、鉄カブトをかぶって故国の破壊者に対抗する覚悟をしたのだった。**志願兵としてかれらは、義勇軍に結合し、かれらは革命をおそろしく憎んでいたのに、この革命をかばい、かくして実際に革命を強固にしはじめたのだった。**

かれらはそれが最もよいと信じてそう行動したのだ。

革命のほんとうの組織者であり、革命の事実上の張本人である国際主義のユダヤ人は、当時この状態を正しく判断していた。ドイツ民衆は、ロシアにおいて成功したようには、ボルシェヴィキの血の沼に引きこまれるほどには、まだ熟していなかった。これは大部分、ドイツ・インテリゲンツィアと

ドイツ手工労働者の間に人種的にいぜんとして大きな統一があったからである。さらに教養のある分子が民衆階層の中に、このうえもなく広くよく浸透していたためである。これは他の西欧諸国においてもよく似た場合があるが、ロシアでは、完全にこれが欠けていたのだ。ロシアでは、すでにインテリゲンツィア自身が大部分非ロシア的国民性をもち、あるいは少なくとも非スラブ人種的性格をもっていた。当時のロシアのまばらなインテリ上層は、当時民族の大部分をしめる大衆に結合する中間成分を完全に欠いていたために、いつでも排除することができたのだった。そして大衆の精神的、道徳的水準は、ロシアでは驚くべく低かったのだ。

ロシアでは、無学な、読み書きのできない大衆の群をかれらと何の関係も連絡もないまばらなインテリ上層に対して扇動することに成功するやいなや、この国の運命が決定した。すなわち革命が成功したのだ。それと同時にロシアの非識字者たちは、ユダヤの独裁者の抵抗力のない奴隷にされてしまった。もちろんユダヤ人の側では、この独裁を「人民の独裁」という文句で表現せしめるほどに十分に狡猾(こうかつ)だった。

逃亡兵に対する不適当な寛大さ　ドイツではさらに次のようなことが加わった。すなわち、革命は、軍が漸次崩壊してきただけで成功することは確かであったが、革命の真の担い手や軍隊の解体者が前線の兵士でなく、故国の駐屯地でぶらぶらしていたり、あるいは「欠くことのできないもの」として、どこかで経済にたずさわっていた多少とも光を恐れる破廉恥なやつどもだったことも、たしかだった。この軍勢は、特別の危険もなく前線に背を向けることができた何万という逃亡兵によって、なお強化された。ほんとうの卑怯者は、いつの時代でももちろん死より恐ろしいものはないのだ。だ

がかれは前線で毎日、千度も死を目撃してきたのだ。もし人々が弱い優柔不断な、あるいはまったく卑怯なヤツらに、それにもかかわらずその義務をはたさせたいならば、それには昔からただ一つだけ可能性がある。すなわち、それは逃亡兵に、逃亡というものがまさしく自分が逃れようとしているものを、自分といっしょに運んでいるものだということを知らせることなのだ。前線では人々は死ぬかも知れない、だが逃亡兵は死なねばならないのだと。逃亡しようとするものにはみんな、こういう峻厳な脅迫を試みることによってのみ、個人に対してだけでなく、また全体に対しても警告的な影響をねらうことができるのだ。

そしてここに陸軍法規摘要の意義と目的があったのだ。

逃亡兵と革命　必然性の認識から生まれ、また保持された自発的な忠誠にだけもとづいておれば、民族の生存のための大闘争を戦い抜くことができるという信念は、りっぱなものだった。だが自発的な義務履行というものは、つねに最良のものをその行動において規定するものであって、普通一般の人間を規定するものではない。そのために、たとえば窃盗行為に対するような法律も必要なのである。そのうえこれは根本から正直なもののためにつくられたものではなく、気持の動揺している、弱い分子のためにつくられたのだ。こういう法律は悪いものを威嚇することによって、けっきょく正直者がバカ者とみなされ、したがって空手で傍観したり、盗むにまかせたりするよりは、自分も同じように盗みに加わったほうが有利だという観念がますます広がるような状態が発展するのを防がねばならない。

それだから、人々が人間として予見しうるかぎり、何年も荒れ狂うと思われる闘争において、最も

太い神経を必要とする重大な時や瞬間に、弱々しい、おぼつかない人間をもかれらの義務を履行するために強制することができると、何百年もいや何千年もの経験が思わせている補助手段を、なくてすますことができると信ずることは誤りであった。

戦争志願兵のような英雄たちに対しては、もちろん陸軍法規摘要はいらない。だが自分の民族の危急の時に、全体の生命よりも自分の生命を高く評価するような卑怯な利己主義者に対しては、もちろん必要である。だがそういう節操のない弱虫は、ただ最もきびしい罰を適用することによってのみ、自分の卑怯さに譲歩するのを妨げることができるのだ。男たちが絶えず死と格闘し、数週間も休みなく泥濘（でいねい）の弾痕の中で、何度も極度に悪い糧食の給与を耐え忍んでいるとき、あぶなっかしくなってきた徴募新兵は禁固や懲役ぐらいの脅迫ではだめで、ただ仮借なく死刑を適用することによってのみ、ささえられることができたのだ。というのは、かれは、経験によれば、こういうときにはいつも刑務所を——どっちみち少なくともそこではかれのこのうえもなく貴重な生命が脅かされるわけではないので——戦場よりも何千倍も好ましい場所だと考えるからである。だが戦争において実際に死刑を排除し、したがって陸軍法規摘要は実際に通用しなかったということが、おそろしい報いをもたらしたのだ。逃亡兵の軍勢は、特に一九一八年には、兵站地（へいたんち）にも、故国にもふえ、さらに一九一八年十一月七日以後にとつぜん、革命の製造者としてわれわれの前にあらわれたあの大きな犯罪者的組織をつくる手助けをしたのだ。

前線兵士に対する恐怖　前線自体は、本来それとまったく無関係であった。もちろん前線にいるものたちはみんな平和へのあこがれだけは感じていた。だがこの事実にこそ、革命にとっても非常な

危険があったのだ。というのは、休戦後ドイツ軍が故国に近づきはじめたとき、当時の革命家たちにとって心配な問題がつねにただ一つあった。すなわち前線部隊はなにをするだろう！　野戦にいた兵士はこれをゆるすだろうか？　ということだった。

ドイツの革命は、若干のドイツ混成軍団によってとつぜん電光石火のように打ちのめされるという危険を犯したくなかったとき、この数週間に少なくとも外見的にはやわらげられたように思えたのだった。というのは、当時、ただ一人の軍団長が、自分に忠誠をつくしている軍団でもって赤のボロぎれを引きずりおろし、「評議会」を窮地におとしいれ、万一抵抗したときには迫撃砲や手榴弾でうち破る決心をしたならば、この混成軍団は四週間たらずに六十個軍団の軍隊にふくれあがったであろうからだ。ユダヤの張本人は、他のなにものにもまして、それを恐れたのだ。そして、これを阻止するためにこそ、革命にある手心を加えねばならなかった。革命はボルシェヴィズムに堕してはならず、事態に即応して、「安寧秩序」をみせかけねばならなかった。それゆえ数多くの譲歩、旧官吏団や旧軍の指導者への呼びかけをしたのだ。人々はかれらを少なくともまだ一定期間必要とした。そして走狗が義理を果したときはじめて、人々はかれらをとうぜんふみつけにし、共和国を旧官吏の手からうばい、革命というハゲタカの鉤爪にあえて引きわたしたのだ。

そうしてのみ人々は、旧将軍や旧官吏をペテンにかけ、かれらから起るかもしれない反抗を新しい状態の見せかけの無害さと平穏さによって、はじめから敵対心をくじくことを望みえたのだった。

いかにこれが成功したかは、実際が示している。

だが革命は安寧秩序の分子によってなされたのではなく、むしろ暴動、窃盗、略奪をする分子によってなされたのである。そして革命の発展はかれら自身の意志に応じたものでもなく、また戦術的理

由からその経過もわからなかったし、気に入ったものでもなかった。

社会民主党は、だんだん膨張するとともに、次第に粗暴な革命党の性格を失ってしまった。社会民主党が思想的に革命以外の他の目標を追求しようとしたのでも、あるいはその指導者がなにか他の意図をもっていたとかいうのでもない。断じてそうではない。だが最後に残ったものは、その意図と、それを実行するのにもはや適しない団体だけだったのだ。人々は、一千万人の党でもってはもはや革命はできないのだ。そういう運動においては、もはや極端な行動性はもつことができず、中間の大衆、すなわち不精さだけがあるのだ。

左翼政党の協力　こういう認識で戦時中にもやはり、社会民主党の有名な分裂がユダヤ人によって行なわれた。すなわち、社会民主党が大衆の不精さにふさわしく、鉛の重りのように国家の防衛に執心している間に、ユダヤ人は党の中から急進的、活動的分子を引きぬいて、かれらを特別に戦闘力のある新しい攻撃集団に形成しあげた。**独立社会党とスパルタクス団が、革命的マルクシズムの突撃大隊だった。**かれらは既成事実をつくらねばならず、むしろその基盤の上に何十年もの間そのために準備されてきた社会民主党の大衆が登場することができたのだ。そのさい卑怯なブルジョアジーは、マルクシズムによって正しく評価され、まったく「侮辱的に」とりあつかわれたのだった。年老いて使いものにならなくなった世代からなる政治組織の犬のような卑屈さが、本気の抵抗などは決してできそうもないことを知っていて、かれらについては全然注意をしなかった。

革命が成功し、旧国家のおもな支柱が倒されたものとみなされ、しかし、前線から帰還してきた兵隊が気味の悪いなぞとしてあらわれ始めるやいなや、革命の自然の展開にブレーキがかけられねばな

撃大隊はわきへ押しやられたのだった。社会民主主義軍の本隊は、征服された地位を占領し、独立社会党とスパルタクス団の突撃大隊はわきへ押しやられたのだった。

けれどもこれは闘争をしないでは、だめであった。

革命の行動主義の攻撃部隊は、満足を与えられなかったために、いまや裏切られたと感じ、みずから攻撃をつづけようとしただけでなく、かれらの手におえぬろうぜきも、革命の張本人たちだけには望み通りのものだったのである。というのは、革命がやっと終ったときに、早くもそれ自体の中に外見上二つの陣営が存在したからだ。すなわち、安寧秩序の党と流血のテロのグループがそれだ。だが、わがブルジョアジーがただちに旗をひるがえして、安寧秩序の陣営にはいったのは、その場合とうぜんのことだったじゃないか？　いまやとつぜんに、このあわれむべき政治組織に、活動の可能性が与えられ、それによってかれらは、いうまでもなく、それにもかかわらず早くもひそかにふたたび足もとの地盤を見いだし、かれらが憎悪し、だがそのうえ切実に恐れていた権力とある固い結合を行なったのである。政治的ドイツ・ブルジョアジーは、くそいまいましいマルクシズムの指導者とともに、ボルシェヴィストに反対するために同席しうるという高い栄誉を得たのだった。

そのようにして一九一八年十二月と一九一九年一月には、早くも次のような状態ができあがった。

ブルジョアジーの籠絡　少数の最悪分子によって革命が行なわれ、その背後にただちにマルクス主義政党が全部現われでた。革命自体が外見上穏和な印象をもっており、それが狂信的な極端な人々の敵意を招く。かれらは、手榴弾や機関銃でもってあばれ回り、国家機構を占拠したり、要するに穏和な革命を脅迫し始める。こういうその後の発展の恐怖を除くために、新体制の担い手と旧体制の信

奉者との間に、いまやいっしょに極端分子と闘うために休戦が締結されることになる。その結果は、それとともに共和国の敵が共和国それ自体に対して闘うことをやめ、まったく他の観点からではあるが、やはりこの共和国の敵であるものたちを圧迫する手助けをするのだ。だがその後の結果は、かくして新国家の担い手に対して旧国家の担い手が闘う危険が究極的にそれたように思えたことである。

人々はこの事実を何度くりかえしても、またどんなにするどく注目してもしすぎることはない。それを把握するものだけが、革命に参加しなかったもの十分の九、革命を拒否するもの十分の七、革命を憎悪するもの十分の六という民族が、それにもかかわらずついに十分の一のものによってこの革命を押しつけられたということが、どうしてできたのか、わかるのである。

ブルジョアジーの降服　一方ではスパルタクス団のバリケードの闘士が、他方では国家主義的熱狂者や理想主義者たちが、次第に出血死していき、この両極端がたがいに精根つきはてるにしたがって、例によって、中間の大衆が勝利を得た。ブルジョアジーとマルクシズムは所与の事実の地盤の上にあり、共和国は「堅固になり」はじめた。もちろんこれははじめのうちはブルジョア政党が、特に選挙前しばらくの間、過去の世界の精神で自分たちの信奉者の小人物を呼びだし、あらたに籠絡(ろうらく)するために、君主制思想を引きあいにだす妨げとはならなかった。

これは正直ではなかった。かれらはみんな内心では、とっくに君主制にみきりをつけており、新しい状態の悪辣(あくらつ)さが、ブルジョア政党の陣営にもその誘惑的効果を現わし始めていたのである。平凡なブルジョア政治家は、今日では過去の国家以来まだ記憶されているきっぱりした厳格さの中にいるよりも、共和国という腐敗の泥濘の中にいるほうを好ましいと感じていたのだ。

＊

革命はなぜ成功したか？　すでに述べたように、旧軍隊の崩壊以後革命は、国家権威を強化するために新しい力の要素をつくるように強いられた。そのような情勢では、革命はこれを本来自分たちと対立している世界観の担い手からうることができただけなのだ。ただかれらからのみ、たとい徐々にではあるが新しい軍団が成立しえたのであり、その軍団は、外面的には講和条約によって制限を受けているが、その考え方においては時の経過とともに新しい国家観の道具に改造されるにちがいなかった。

なぜ革命が運動として成功しえたかということを――その原因となった旧国家のあらゆる実際上の欠陥を度外視して――自問してみるならば、次のような答に到達するだろう。すなわち、

一、われわれの義務履行と服従の観念がマヒしたため、と、

二、いわゆる国家を担っているわが政党の卑怯な受動的態度のためである。

なお次のことを付言しなければならない。すなわち、

われわれの義務履行と服従の観念がマヒした究極的原因は、われわれのすべての教育が非国民主義的であり、つねにただ純粋に国家的であったことにある。そのことからここでも、手段と目的の誤認が生じてくる。義務意識、義務履行、服従ということは、まさに国家がそれ自体目的でないように、それ自体目的ではなく、これらはすべて、精神的、身体的な同種の生物の社会に、地上での生存を可能にし、確保するための手段でなければならない。ある民族体が明らかに崩壊し、若干のルンペンどもの行動のおかげで、外見的にどうみても困難きわまりない圧制にひきわたされる時においては、かれらに服従し、かれらに対して義務を履行することは、他面では服従と「義務履行」を拒否すること

によって民族を没落から救うことが可能であるかも知れない場合には、空論的な形式主義であり、そのうえまったく荒唐無稽なことを意味する。今日のわがブルジョア国家観によれば、当時上から撃つなという命令をもらった軍団長は、撃たなければ義務にかない、したがって正しい行動をしたことになる。というのはブルジョア社会の人々には無思慮な形式的服従のほうが、自分の民族の生命よりも価値があるからである。だが国家社会主義的見解によれば、そういう場合には、弱い上官に対する服務が効力を生ずるのではなく、民族共同体に対する服従が効力を生ずるのだ。そういうときには、全国民に対する個人としての責任という義務が、現われるのだ。

この観念のいきいきした解釈がわが民族の中に、あるいはもっとよくいえば、わが政府の中に失われて、純粋の空論的、形式的解釈に屈服したことが、革命の成功の原因だった。

第二の点については、次のことを注意すべきであろう。すなわち、

「国家維持者」の消極性

「国家を維持している」政党が卑怯であった最も深い根拠は、なによりもわが民族の戦場で血を流した行動主義的なよい志操をもっている部分を、自分の陣営から排除したことである。それを度外視すれば、旧国家の基盤の上に立っている、われわれが唯一の政治的組織といいうるわがブルジョア政党が、自分たちの観念はもっぱら精神的方法、精神的手段で代弁しておればよい、というのは身体的手段を用いるのはただ国家にのみ帰するからだ、と確信していたのだ。人々はこういう解釈の中にだんだん退廃的な弱さが形成される徴表をみるだけでなく、政治上の反対者がこの立場をとっくの昔にみすてて、そのかわりにできれば自己の政治目標をまた暴力によって闘いとろうと考えているとはっきりと公に強調している時代においては、こういう解釈はまたナンセン

スであった。ブルジョア民主主義の世界において、その随伴現象としてマルクシズムが姿を現わした時機に、「精神的武器」でもって闘うというかれらの呼びかけは、ナンセンスであり、それは他日恐ろしい報いをうけるにちがいなかった。というのは、マルクシズム自体は、以前から武器の使用は合目的的観点からだけ実行すべきであり、なおまた、その正しさはいつも成功することにある、という見解を主張していたからである。

この見解がいかに正しかったかは、一九一八年十一月七日から十一日までの間に実証された。当時マルクシズムは、議会主義と民主主義をすこしも気にかけず、わめき、乱射する犯罪者の群によって両者にとどめをさしたのである。そのときにブルジョア的おしゃべり組に抵抗力がなかったことはいうまでもない。

マルクシズムへの降服　革命後、ブルジョア政党は――その看板をかえたとはいえ――とつぜんまた姿をあらわし、かれらの勇敢な指導者は暗い地下室や風通しのよい倉庫のかくれ場所からはいだしてきたが、かれらはかかる旧組織の代表者がみんなそうであるように、自分たちの失敗を忘れてもいなかったし、またなんら学んだところもなかった。かれらは新情勢と心からとけあう用意ができていなかったため、かれらの政治綱領は過去のものであった。けれどもその目標は、もしできれば新情勢に協力することができるものであった。そしてその場合、かれらの唯一の武器はいぜんとしてことばであった。

革命後もまた、ブルジョア政党はいつでもみじめに街頭で降服したのだった。

共和国保護法が採用されることになったとき、大部分のものは、はじめこれに反対だった。だがブ

ルジョア「政治家」はデモをする二十万人のマルクス主義者をおそれ、かれらは自分の信念に反してこの法律を承認した。さもなければ国会を出る場合に、憤激した大衆に打ちのめされるというありたい懸念があったからだ。残念ながら承認されたためそれは起らなかったが――。

そのように、新国家の発展も、あたかも国家主義的反対が一般になかったかのように、自分の道を選んでいった。

この時代に、マルクシズムとその扇動された大衆に対抗していく勇気と力をもっていたといえる唯一の組織は、はじめは義勇兵団、その後は自衛組織、自警団等であり、そして最後に伝統擁護連盟であった。

だが、これらの存在もドイツ史の発展上、少しも認めるにたる転換をおこしえなかったのはなぜかということは、次の点にある。すなわち、

国家主義政党の無為　いわゆる国家主義政党が、街頭において少しも脅威的な力をもっていなかったので、なんらの影響をも及ぼすことができなかったのと同じように、いわゆる防衛隊も少しも政治的理念をもたず、とりわけ実際上の政治目標を欠いていたので、なんらの影響も及ぼすことができなかった。

かつてマルクシズムに成功をもたらしたものは、政治的欲求と行動主義的残虐さの完全な合同劇であった。国家主義的ドイツを実際上のドイツ発展のあらゆる形成から除外したものは、断固たる力と天才的な政治的意図との渾然(こんぜん)たる協働を欠いていたことにあった。

「国家主義的」政党の意図がどういう種類のものであったにしても、かれらはこの意図を闘いとろう

とする力を、ほんのすこしももっていなかった。街頭では特にそうだった。
防衛隊はすべての力をもっていたし、街頭と国家の支配者であった。そして政治的理念や政治的目標をもたず、その力を国家主義のドイツの役に立つように投入されたとか、あるいはやろうと思えば投入することができたとかいうことがなかった。両方の場合に、ユダヤ人の狡猾さはそれをなした。かれらは如才なく説得したり、力づけたりして、だがあらゆる場合に、この不幸な宿命をますます深刻化するような本式の永遠化をなしたのだった。
ユダヤ人は、かれらの新聞によって巧妙きわまりなく、防衛隊の「非政治的性格」の思想を流布させることを知っていた。同様にユダヤ人はやはり政治生活においては抜目なくいつも闘争の「純精神性」をほめ、また要求したのだった。さらに幾百万という愚鈍なドイツ人たちは、このナンセンスにしたがってぺちゃくちゃしゃべり、自分自身はそのために実際に武器をうばわれ、ユダヤ人に防御力なしで引き渡されたということには、少しの注意もしなかったのだ。
理念なくして闘争力なし　だがまたこれに対してはもちろん、もうひとつ自然な解釈がある。偉大な新しく形成された理念の欠如は、つねに闘争力の制限を意味する。最も残虐な武器すら用いる権利があるという確信は、つねにこの世の革命的新秩序の勝利の必然性に対する熱狂的な信念の存在と結びついている。
それゆえ、こういう最高の目標と理想を見ない運動というものは、決して究極の武器をとりえないであろう。
新しい大理念を明らかにしたことが、フランス革命の成功の秘密なのだ。ロシアの革命もその勝利

は、理念のおかげをこうむっているのだ。そしてファシズムが、民族を幸多く、広範な新建設に服従させたのもただこの理念の力によるのである。

ブルジョア政党は、これに対する能力がなかった。

だが単に、ブルジョア政党が、過去を復活させることに、その政治目標を見ていただけでなく、一般に政治目標に関するかぎり防衛隊もまたそうであった。昔の在郷軍人会やキフホイザー同盟の傾向が、かれらの間に旺盛(おうせい)になってきて、当時国家主義的ドイツがもっていた最もするどい武器を政治的に鈍らせ、共和国の傭兵(ようへい)的奉仕に堕せしめる手助けをしたのだ。そのさいかれら自身、最善の志操から、だがなによりも、最善の信念から行動したことは、この当時の経過の不幸な荒唐無稽さを少しも変えるものではなかったのだ。

次第にマルクシズムは堅固になってきた国防軍の中に自分の権威に必要な力の支柱を得、そして論理的に危険と思われる国家主義的防衛隊を、それ以後は余計なものとして、解体しはじめた。かれらが不信の念で対していた特に大胆な指導者は、個々に法廷の被告席に引っぱられ、そして、牢獄へ入れられたのだ。だがすべてのものに、自業自得の運命が実現したのだ。

＊

民族主義理念の主張　国家社会主義ドイツ労働者党の樹立とともに、ブルジョア政党のように過去の機械的復活を目標とせず、不合理な今日の国家機構のかわりに、有機的な民族国家をつくるよう努力することを目標とする運動が、はじめて出現したのだ。

この若い運動は、その場合最初の日から、理念は精神的に主張するが、しかしこの主張の擁護はもし必要ならば、腕力手段に訴えても確保されねばならない、という立場に立っていた。新しい教説の

巨大な意義についての確信に忠実に、目標に到達するためには、どんな大きな犠牲をはらってもよい、ということは自明のように思えた。

わたしは、運動というものは、それが民族の心を獲得しようとするかぎり、自己の系列から敵のテロの試みに抗して防衛を引きうける義務がある、という事由についてはすでに示した。また、ある世界観を代弁するテロは、決して形式的な国家の強制力によっては破りえないものであり、つねにただ、新しい、同じように勇敢な、決然と前進する他の世界観のみが、うちやぶることができるのだ、ということは、世界史の不朽の経験である。これはどんな時代にも、官職にある国家の番人の感じからいえば、不愉快であるだろう。だが、だからといって、この事実はこの世からなくなりはしない。国家権力は、国家が内容的にそのときどきの支配的世界観でおおわれ、暴力活動をする分子が個々に犯罪者的性質をもっているだけであり、国家の観念に極端に対立する思想の代表者とみなされないときにのみ、安寧秩序を保証することができるのである。そういう場合には、国家は、国家を脅迫するテロに対して、幾世紀もの間、どんな大きな権力的処置をも利用できる。けれどもついにはそれに対して何もできず、征服されてしまうのだ。

防衛隊の必要性　ドイツ国家は、マルクシズムによってこのうえもなく激しい、包囲攻撃を受けるだろう。ドイツ国家は七十年間の闘争においても、この世界観の勝利を阻止することができず、国家を脅かすマルクス主義的世界観の闘士に数えきれないほど罰をくだし、まとめて千年にもなる懲役や禁固の刑や残虐きわまる処置をとったにもかかわらず、それでもなお、ほぼ完全に降服することを余儀なくされたのである。（普通のブルジョア的国家指導者は、これも否定しようとするだろうが、

かれがそれを他人に確信させることができないことは自明のことである）

しかし一九一八年十一月九日に、マルクシズムの前に無条件に屈服した国家は、その圧伏者としてとつぜんあすにでもよみがえることはできないであろう。反対に、大臣席にいるブルジョア的低能どもは、はやくも今日労働者に反対しないで統治する必要性についてたわごとをいう。そのさいマルクシズムが労働者という概念のもとに、それを念頭に浮かべたのだ。しかしかれらはドイツの労働者をマルクシズムと同一視することによって、真理に対して卑怯な、また虚偽の偽造を行なっただけでなく、かれらはその動機によって自分がマルクス主義の理念と組織の前に崩壊したことをかくそうとしているのである。

だが、この事実、すなわちマルクシズムのもとへの今日の国家の安全な屈服に直面して、国家社会主義運動にとってはじめて、精神的にその理念の勝利を準備するのみならず、勝利に酔った国際労働者同盟自身のテロに対する防衛を引き受けるべき義務が、まさしく生じてきたのである。

わたしはすでに、実際生活の中から次第に、われわれの若い運動の中に集会防衛団がいかに形成され、またこれがだんだんと一定の整理隊の性格をとって、組織的構成をえようと努力したかを述べた。

さらに次第に成立してきたこの組織が、外面的にはいわゆる防衛隊と非常によく似ていたかも知れないが、それとほとんど比較すべきものではなかったのだ。

防衛隊の課題　すでに述べたように、ドイツの防衛組織は自分の一定の政治思想をもたなかった。それらは実際に多かれ少なかれ、目的にかなう訓練と組織をもった自己防衛団にすぎなかった。それゆえ、それらは本来その時の国家の合法的権力手段の非合法の補足であった。その義勇団的性格は、

ただその形成の方法と当時の国家の状態によって基礎づけられただけであって、だが決して自由な自己の確信のために闘う自由な部隊としてのそういう肩書にふさわしくなかったのだ。個々の指導者や団体全体が共和国に対してあらゆる反対の態度をとったにもかかわらず、それにもかかわらず、そういう確信をかれらはもたなかった。というのは、高い意味で確信について語ることができるためには、現存の状態の劣等さについて確信をもっているだけでは十分でなく、新しい状態について知っており、そして人々がそれに到達すべき必然性を感じ、その実現のために力をつくすことを人生の最高の課題と見て、その状態を内面的に看取する点にのみ根ざしているのだからである。

当時の国家社会主義運動の整理隊が、すべての防衛隊と根本的に相違している点は、それが革命によってつくられた状態に少しも奉仕したり、あるいはそうしようと思うものでなく、むしろもっぱら新ドイツ国のためにだけ闘ったことにある。

国民の防衛で、国家の防衛ではない　もちろんこの整理隊は、はじめはただ会場防衛の性格だけをもっていた。その最初の課題は局限されたものであった。すなわちそれは、集会の開催を可能にすることであり、整理隊がなかったならば敵によってやすやすと妨害されたであろう。整理隊は当時すでに、やみくもに攻撃を行なうように教育されていた。しかし、愚鈍なドイツ民族主義の仲間の中でいわれているように、ゴムの棍棒(こんぼう)を最高の精神として尊敬したからでなく、歴史上では事実、最もすぐれた頭脳の持ち主が最もつまらない奴隷たちの殴打のもとに果ててしまったこともまれでないように、最も偉大な精神というものは、その担い手がゴムの棍棒によってたたき殺されるならば、排除されてしまうということをかれらが知っていたからである。かれらは暴力を目標だと言明しようとする

かれらは、国民になんらの保護も保証しない国家の防衛を引きうけることを義務とするのではなく、反対に民族と国家を滅ぼそうと脅迫したものに抗して、国民の防衛を引きうけることを義務としているのだ、ということを理解していた。

ミュンヘンのホーフブロイハウスでの集会における闘いの後、整理隊は、当時のわずかな人数での英雄的な突撃攻撃を永久に記念するために、今後永久に**突撃隊**の名を得たのだった。すでにこの名称が語っているように、それと同時にこれは運動の**一部**であるにすぎない。これは、まさしく宣伝、新聞、科学研究所やその他のものが、単に党の肢体を構成していると同じように、運動の中の一肢体なのである。

その整理がいかに必要であったかを、われわれは、この記念すべき集会において見ることができただけでなく、運動が次第にドイツの他の地方に進出しようとしたさいにも、見ることができたのである。われわれがマルクシズムに危険と思われるやいなや、マルクシズムは国家社会主義の集会の企てをすべて未然に防ぎ、あるいはそれが開催されたならば強制解散によって妨害するために、あらゆる機会を利用した。その場合、あらゆる色調をおびたマルクシズムの諸政党組織は、こういう意図も、こういう事件もすべて政府の代表機関のせいにしてほおかぶりしたことも、まったくとうぜんのことであった。だが、自分自身はマルクシズムに打ちのめされ、しかも多くの場所で、自分の演説者を公然と思いきって登場させることもできず、それにもかかわらずまったく理解できない、ばかげた満足でもって、われわれになにか不利に経過する闘争をマルクシズムに対して続けているブルジョア政党に対して、人々は何をいうべきであろうか。ブルジョア政党は、自分自身で征服できずむしろ自分の

手で征服できなかったものがわれわれによってもうち破ることができなかったのを、喜んだのだった。実に不体裁な定見のなさで、外部に対しては「国家主義的」な人間であると言明しながら、しかしわれわれ国家社会主義者がマルクシズムと対決する場合には、マルクシズムのために不名誉きわまりない手伝い奉仕をしている国家官吏、警察署長、そのうえ大臣に対しては、なにをかいわんやである。自分たちが数年前赤の暴徒によって解体された死体として街頭の柱にぶらさげられなかったのは、ある部分はある種の人々の英雄的勇気ある努力のおかげをこうむっているのに、かれらはユダヤ新聞の卑劣な称賛をうるためにさっさとその人々を迫害するような自己卑下にすらおちいっている連中に対してはなにをかいわんやである。

国家機関の無能　これは実に悲しむべき現象であった。すなわちかれらは、正しい心をもった人間だけが憎むことができるようなすべての卑屈者を憎悪した剛直な人で、忘れがたき警視総監故ペーナーに、次のような無遠慮な意見をはかせたのだ。「わたしは、わたしの全生涯を通じて、まず第一にドイツ人として、それについで官吏として以外に考えなかった。そしてわたしは、一時支配者となっているものに対して、それがだれであっても、娼婦的官吏として売淫行為をするような手下どもと決して混同してほしくない」と――。

この場合特に悲しむべきことは、こういう種類の人間が次第に幾万という最も誠実で最も感心なドイツの国家官吏を自己の権力下におくだけでなく、徐々に自分の無節操を感染させ、これに反して誠意のあるものを激しく憎悪して迫害し、ついにはその官職や地位から追いだし、しかもその場合自分たちはいぜんとして偽善的虚偽から「国家主義」者を表明していることである。

こういう人間からわれわれは、なにかある支持をうることを決して期待してはならなかった。そしてまたわれわれが支持をうけたことはごくまれだった。単に自分の防衛を完成することだけが、運動の活動を保証することができたのであり、同時にそれのみが、攻撃をうけたとき、みずから防衛するものに人々がささげる公衆の注目と一般的尊敬をうることができたのである。

自衛隊にして、「防衛隊」にあらず　この突撃隊の内部訓練に対する指導的思想として、つねに主として次のような意図が支配的であった。すなわちあらゆる肉体的鍛練と並行して、確固不動の国家社会主義理念を確信する代表者たるよう訓練し、最後にその規律を最高度に固めることであった。それはブルジョア的な考え方の防衛組織とは無関係であり、同様にまた秘密組織ともなんら無関係であるべきものだった。

なぜ防衛隊ではないのか？　このころわたしはすでに、国家社会主義ドイツ労働者党の突撃隊を、いわゆる防衛隊として育成させることをなぜ極力防いだか、ということは次のような考慮に根ざしているのである。

純粋に即事的にいえば、ある民族の防衛訓練は、最も巨大な国家的手段による助力がなければ、私的団体の手では実行できない。これとは異なる信念をもつものはすべて、自己の能力の過大評価にもとづいているのである。いわゆる「自発的な訓練」によって一定の規模以上に軍事的な価値をもつ組織をつくりうるということは、とんでもないことである。ここでは、命令権の最も重要な支柱、すなわち刑罰権が欠けている。もちろん一九一九年の秋には、あるいはもっとよくいえば、すでに春にい

わゆる「義勇軍」をつくる可能性があった。だがそれは当時大部分のものが旧軍隊という学校へ行ったことのある前線兵士をもっていただけでなく、各自に課した責任が、少なくとも一定の期間は、やはり絶対に軍隊的服従を要求する種類のものであったのである。

これが今日の自発的「防衛組織」にはまったく欠けている。団体が大きくなればなるほど、それだけ規律は低下し、人々が個々人にもとめる要求も小さくてもよいことになる。そしてそれだけ全体が昔の非政治的在郷軍人会や古兵会の性格をもつようになるのである。

確固たる絶対的命令権なしで自発的な軍務教育をすることは、大人数では決して実行できないであろう。軍隊で自明のことであり、とうぜんのことであるとされているような、服従への強制に自発的によろこんで従う覚悟のあるものはつねにほとんどないのである。

さらに、そういう目的のためにいわゆる防衛隊を用立てる手段が、おかしいほど少ないため、実際上の訓練をいっそう実行させることができない。しかし最良の、最も信頼できる訓練が、まさにかかる制度の主要課題であらねばならなかったろう。大戦以来、いまや八年を経過した。そしてこの時以来、わがドイツ青年のいかなる年齢のものも、もはや計画的に訓練されたものがない。だが、すでにかつて訓練された世代のものを集めることは、防衛隊の課題ではありえない。というのは、さもないと最後の成員がこの団体を去ったときが、ただちに数学的に前もって計算できるからである。一九一八年に最も若かった兵士ですら、二十年たてば戦闘力がなくなる。そしてわれわれは、容易ならぬ速度でこの時点に近づいているのだ。それとともに、いわゆる防衛隊はすべて、必然的にますます老在郷軍人会の性格をもつのだ。だがこれは、古兵同盟でなく、みずから防衛隊とよんでいる制度の意義からありえない。そしてこれは、伝統の維持と以前の兵士のまとまりだけをその使命とするのでなく、

見ていたのであって、これをその名称からだけでも表明しようとつとめているのである。
防衛思想の養成とこの思想の実践的擁護、すなわち、戦闘力のある団体を創設することにその使命を
けれども、この課題は、いままでにまだ軍隊で訓練をうけたことのない分子を養成することが絶対に必要であり、そしてこれは実際においては事実上不可能である。一週に一時間や二時間の訓練では、実際に兵士をつくることはできない。今日のように軍務が各人に課している要求が途方もなく大きくなっている場合には、未教育の若い人々を既教育兵にするためには、おそらく二年間の軍務期間でぎりぎりであろう。そのうえ戦争の技術を基本的にたたきこまれていない若い兵士の身に起った恐るべき結果を、われわれは戦場で目撃しているのだ。十五週間や二十週間、鉄のような決意でもってかぎりない献身さで訓練された志願兵部隊は、それにもかかわらず、前線では大砲のえじきにすぎなかった。経験の深い古兵の戦列に分けて配置しなければ、若い、四か月ないし六か月訓練された新兵は、連隊の有用な一員として務めることができなかった。これとともにかれらは「古兵」に指導されて、次第にその任務をつくすように育成されていたのだ。

だが、これに反して、はっきりした命令権力もなく、包括的な手段もなくして、一週に一時間や二時間のいわゆる訓練によって部隊をつくりあげようとするのは、なんと乱暴なことであろう！　それによって人々は古兵にふたたび新風を入れることはできようが、若い人間を兵士にすることは決してできないのだ。

こういう処置がその結果においてはまったくどうでもよいことであり、またいかにまったく無価値なものであるかは、さらにとりわけ次の事実から証明することができるのだ。すなわち、いわゆる自発的防衛隊が艱難辛苦し、苦心惨憺して、防衛思想を二、三千人のもともと善良な意志をもった人間

（そうでないものには防衛隊は一般に近づいていかないのだが）を訓練し、あるいは訓練しようとしているときに、国家自体は平和主義的、民主主義的教育法によって何百万もの若い人々から徹頭徹尾その生まれつきの本能を奪い、かれらのスジの通った祖国的思想を毒し、こうして次第にかれらをどのような専横にも耐えるような羊の群にしてしまったのである。

これにくらべれば防衛隊が、その思想をドイツの青年に伝えようとする苦労などはみんな、なんと笑止なものだろう。

だがつねに志願兵的基礎にもとづくいわゆる軍隊的武装化のあらゆる試みに反対する態度をとってきたわたしの、次のような観点はもっと重要である。すなわち、

前に述べた困難があるにもかかわらず、一定数のドイツ人を毎年戦闘力ある男に訓練することが、しかもその志操の点からみても、肉体的な堪能さ、武器をもった訓練という点からみても、ある結合に達すると仮定しても、そういう武装がその指導者――すなわちこの国家を悪化させるものたちの――の最も内奥的な目的に完全に反するので、その全体の傾向としてこれをまったく望まないばかりか、それ以上に直接に憎悪するというような国家にあっては、その結果はゼロに等しからざるをえないのである。

だがいずれにせよ、国民の軍隊的な力には関心をもたず、行為によって示そうとしないばかりでなく、せいぜい自分自身の退廃的な存在を守るとき以外には、この力に訴えようとは決して考えていないような政府のもとでは、そういう結果をえたところで価値がないであろう。

そして今日やはりそうである。そうでなければ、数年前に最もよく訓練されていた八百五十万の兵士を、国家は屈辱的にも放棄して、もはやかれらを用いないばかりか、その犠牲に対する報酬として、

しかも一般の侮辱にさらしたのに、一政府のためにたそがれの薄明の中で数万の人々を軍隊的に訓練しようとすることは笑止千万なことではないか。最も栄誉ある兵士をかつて冒瀆し、つばを吐きかけ、胸から勲章をはぎとり、軍帽のリボンを奪いとり、軍旗を蹂躙し、その業績を蔑視した政府のために、かくのごとく兵士を育成しようとするのだろうか？　あるいは今日の政府が旧軍の栄誉をふたたび回復し、軍を破壊したものや侮辱したものの責任を追求するため、ただの一歩でも踏みだしたことがかつてあったであろうか？　いや、少しもそうしなかったのだ。反対に、われわれはかれらが最高の国家の官職で統治しているのを、見ることができよう。――それだのにライプツィヒではどういったか。すなわち「法は権力である」と。けれども今日わが共和国では権力はかつて革命をたくらんだ同じ人間の手中にあるが、けれどもこの革命は最も卑劣な反逆であり、そのうえドイツ史一般をつうじて最もあわれむべき無頼行為であるから、まさしくこういう性格の人間の権力が新しい若い軍隊の形成によって高められるべき理由は、実際にまったく見いだされないのである。いずれにせよ理性の根拠はすべて、これに反対を語るのである。

だがこの国家が、一九一八年の革命後も、その地位を軍事的に強化することにどんな価値をおいたかは、当時存在した大自衛組織に対するかれらの態度から、もう一度明白に、明瞭にわかることである。これらの組織は、人間的に卑怯な革命の走狗を守るために登場したかぎりでは、歓迎されないこともなかった。だが、わが民族が次第におちぶれてきたおかげで、自分たちに対する危険も除かれたと思われ、またそれ以後これらの団体の存在が国家主義的な政治的強化を意味するやいなや、それらは余計なものとなった。そして人々は、それらを武装解除し、そのうえできるなら、追い散らすためにあらゆることをやったのだ。

歴史は、王侯が感謝するのは例外的な場合だけであることを実証している。だがそれどころか革命的放火殺人犯、民衆略奪者、反逆者の感謝の念を期待することは、ただ新ブルジョア的愛国者だけがなしうるのである。いずれにせよわたしは自発的な防衛隊をつくるべきかどうか、という問題を検討する場合には、次のことを問題にせざるをえなかった。すなわち誰のために若い人々を訓練するのか？　どんな目的のためにそれは用いられ、いつ召集されるべきか？　これに対する答は、同時に自己の態度に対する最良の方針を与えている。

今日の国家がこの種の訓練された現員をいつか呼びもどすことがあるならば、これは決して外部に対して国民の利益を代弁するためではなく、だまされ、裏切られ、売られた民衆の一般的憤怒がいつか燃えあがるだろうと考えて、それに対して国内における国民の暴行者を守るためにだけいつも、そういうことが起るのである。

国家社会主義ドイツ労働者党の突撃隊は、こういう理由からだけでも、軍隊的な組織とはまったくなんらの関係ももつべきではなかった。それは国家社会主義運動の防衛と教育の手段であり、そしてその任務はいわゆる防衛隊とはまったく異なった分野にあった。

秘密組織ではない　だがそれはまた秘密組織であってはならなかった。秘密組織の目的は、違法のものでしかありえない。しかしだから、そういう組織の規模はみずから制限するものである。特にドイツ民族の饒舌(じょうぜつ)さを考慮すれば、若干の大きさの組織をつくりあげ、同時にそれを外部に秘密にしておいたり、あるいは単にその目的をかくしたりするだけでも、できないのだ。

そういう意図は、なんども失敗に終るであろう。三十枚の銀貨の裏切り報酬で、見つけることがで

きる秘密をもらし、もらす価値があるような秘密を捏造するような、娼婦のヒモや無頼漢のたぐいの幹部が、今日わが警察で役に立っているというだけでなく、自己の支持者ですらこういう場合に必要な沈黙を決して守ることができないのだ。まったく小さいグループだけが、何年間も選りわけることによって、ほんとうの秘密組織の性格をとりうるのである。けれどもただその組織が小さいということだけで、国家社会主義運動のためにその価値がなくなるであろう。われわれが必要としたもの、また必要としているものは、百人や二百人の大胆な共謀者ではなく、われわれの世界観のための何十万という熱狂的な闘士であったし、また闘士である。秘密の信徒集会において仕事がされるべきなのではなく、力強い大衆行進においてなされるべきなのであり、そして運動はその道を、短刀や毒薬、あるいはピストルによってではなく、街頭を征服することによって開くのである。国家社会主義はいつか国家の支配者になるだろうが、それと同じように未来の街頭での支配者が国家社会主義者であることを、われわれはマルクシズムに知らせるべきだ。

さらに今日秘密組織の危険はなお次の点にある。すなわち、成員の間でしばしばその任務の偉大さが完全に誤認されており、そのかわりに一人の人間を殺すことによってとつぜん実際に民族の運命が好都合に決定されうるだろうという意見をもっている。そういう考え方も、歴史的な理由をもつことができる。すなわちある民族がある天才的な圧制者の暴政のもとに苦しんでおり、この敵意をいだく圧迫の内面的な堅固さと恐怖を、ただその人間の傑出した個性だけで保っていることを人々が知っている場合は、そうである。そういう場合に、このにくまれているただ一人の人間の胸に死の刀剣をつきさすために、民衆の中から一人の犠牲的精神のある男がとつぜんとび出すかも知れない。そして罪を意識している小さいルンペンの共和国的感情だけが、こうした行為を最もいとうべきものと見るの

るのだ。

である。一方、わが民族の最も偉大な自由の詩人は、その「テル」の中でかかる行動の賛美をしてい

一九一九年と一九二〇年には、秘密組織の成員が、歴史の偉大な範例に感激し、そして祖国のかぎりない不幸に身ぶるいして、こうして民族の困窮に結末をつけると信じて故国を悪化させるものを罰しようとした。だがこういう試みはどれも、ナンセンスであった。しかもそのうえマルクシズムは、ある一人のすぐれた天才と人格的な重要性のおかげで勝利をえたのではなく、むしろブルジョア社会の人々のかぎりなきあさましさと、卑怯な無能さのためだったからである。人々がわがブルジョアジーにおよぼしうる最大の酷評は、革命自体が実際ただ一人の偉大な人物すら出していないにもかかわらず、それに屈服したと確証することである。ロベスピエール、ダントンあるいはマラーのような人[3]の前に降服することは、いまもなおわかる。だがやせっぽちのシャイデマン[4]、よく肥えたエルツベルガー[5]やフリードリッヒ・エーベルト[6]のようなものや、その他の無数の政治的な小僧たちみんなに恭順の意を表したのでは、もうダメである。そのうえ事実またそこには革命の天才的人物や、したがって祖国の不幸をみることができたような一人の人物もなく、大きく見ても、個々に見ても、まったく革命の南京虫やリュックサックを背負ったスパルタクス団のものばかりだった。その中から誰かあるものを片づけてしまっても、まったくたいしたことでなく、せいぜい二、三の他の同じぐらいの大きさの、同じぐらいみすぼらしい吸血動物が、それだけ早くかれの地位につくぐらいの結果だった。

歴史上の実際に偉大な現象の中にその原因と基礎づけをもってはいるが、目下のように小人物ばかりの時代には少しも適合しないような考え方に反対して、どんなに鋭く行動してもそのころには十分ではありえなかった。

国事犯は「除去」すべきか？　またいわゆる国事犯を除去する問題の場合にも、同じ見方をすることができる。一方では全ドイツ国を売り、二百万人の死者というムダな犠牲について良心のかしゃくをうけ、幾百万の身体障害者に責任を負わねばならないにもかかわらず、心安らかに共和国の仕事をしている悪漢どもが、最高の顕職にならんでついているのに、大砲の秘密をもらしたヤツを殺すなどということは笑うべきほど不合理である。小さな反逆者を除去することは、その政府自体がこうした反逆者をあらゆる刑罰から免除しているような国家では無意味である。というのは、そういう状態では、他日民族のために武器を売った無頼漢を除く忠実な理想主義者が、主領株の国事犯によって責任をとらされるようなことが起りうるからである。そしてそこにはやはり重要な問題がある。すなわち、こういう国事犯的小走狗(しょうそうく)はさらに走狗によって片づけさせるべきか、それとも理想主義者によって片づけさせるべきか？　という問題である。前者の場合には成功が疑わしいし、後にほとんど確実に裏切りがおこる。後者の場合には小さい悪漢は片づけられるが、その場合おそらくかけがえのない理想主義者の生命を賭けることになるのだ。

さらにこの問題においてわたしは次のような立場である。すなわち人々は大どろぼうをにがすために小さいコソどろを絞首刑にすべきではなく、他日ドイツ国家主義の法廷は、二、三万の、十一月革命を組織し、したがってそれに責任ある犯罪者とそれに属するすべてのものに、最後の判決をくだし、処刑すべきである。こういう例はさらにまた武器を売った小国事犯にも永久にぜひとも必要な教訓であるだろう。

これらのすべてが、わたしをつねに秘密組織に参加することを禁止させ、突撃隊自身がこういう組

織の性格をもつことを防ぐように考慮させたのである。わたしはそのころに、国家社会主義運動を実験からはなしておいた。その実施者はたいてい、りっぱな理想主義的な考えをもった若いドイツ人であった。しかしその行動によってかれらは、祖国の運命を少しも改善することができないうちに、ただ自己を犠牲にしているにすぎなかった。

＊

突撃隊のスポーツ訓練　だが突撃隊が軍隊的防衛的組織でも、秘密結社でもあってはならないならば、さらにその場合次のような結論が生じなければならなかった。すなわち、

一、突撃隊の訓練は軍隊的な観点によらず、党の目的に合うような観点から行なわれるべきである。

そのさい突撃隊の成員は身体的にできるだけ鍛練すべきであるが、その主眼点は軍隊的練兵でなく、むしろスポーツ活動におかれる必要がある。わたしはボクシングと柔道のほうが、劣悪な――中途半端であるため――射撃訓練よりも重要だといつも思っている。ドイツ国民に、スポーツで非のうちどころなくトレーニングされた身体をもち、すべてのものが熱狂的な祖国愛に燃え、そして最高の攻撃精神をもつよう教育された六百万人を与えてみよ。そうすれば国家主義の国家はかれらの中から、必要ならば、二年とたたぬうちに、少なくともそれに対する確実な基礎があるかぎり、軍隊をつくりあげるだろう。だがこの基礎は、今日のような状態では、ただ国防軍だけが可能であり、中途半端に立ち往生している防衛隊では不可能である。肉体的鍛練は、各人に自分が優越しているとの確信を植えつけ、永遠にただ自己の力の意識の中にのみ存在する信念を各人に与えるべきである。そのうえにそれは、運動の擁護のための武器として役立つスポーツ上の技能を各人に与えるべきである。

目印と公然性　二、突撃隊がはじめからいかなる秘密的性格をも避けるためには、誰でもすぐにわかる服装をすることは別として、現員数を多くしてみずからその道を示し、運動に役立たせ、そしてすべての世間の人々に知らせなければならない。突撃隊はかくれて集会してはならず、自由な大空の下を行進し、それによって「秘密組織」というようなすべての伝説を決定的に破壊する活動に、はっきりと導いていかねばならない。また精神的にも、小さいむほんぐらいでその行動主義を満足させるようなあらゆる試みを引っこめさせるために、突撃隊は、そもそものはじめから、運動の大理念に完全に引きいれられ、この理念を擁護すべき任務のために徹底的に訓練されねばならなかった。すなわちはじめから視界は広くなり、各人は自己の使命を大悪漢や小悪漢を片づけることにあると考えるのでなく、新しい国家社会主義的民族主義国家の建設のためにつくすことにあると考えたのである。だがこうして今日の国家に対する闘争は、小さい復讐やむほん行為の雰囲気からマルクシズムとその組織に対する世界観的殲滅戦の大きさにまで脱けだして、高まるのである。

三、突撃隊の組織的な構成、同様にその服装や装備は、その意義にしたがって、旧軍隊の範に従わず、その任務によって規定される目的適合性によって企画すべきである。

　これらの考え方は、一九二〇年と一九二一年にわたしが指導したものであり、そしてわたしは次第にこれを若い組織に植えつけようとし、その結果、われわれは一九二二年の盛夏までに、早くもおびただしい数の百人隊を指図し、一九二二年の晩秋にはだんだんと特別な記章をつけた服装を受けとったのである。突撃隊のその後の発展のために非常に重要なのは、次の三つのでき事であった。

ミュンヘンにおける最初の行進　一、一九二二年晩夏ミュンヘンのケーニヒスプラッツにおける

全愛国同盟の共和国保護法に対する一般的大デモンストレーション。

ミュンヘンの愛国的諸同盟は、当時、共和国保護法の施行に対する抗議として、ミュンヘンで巨大な示威運動をいどむという檄(げき)を発していた。国家社会主義運動もこれに参加することになった。党のまとまった行進は、六組のミュンヘンの百人隊によって導かれ、そのあとに政党の部隊がつづいた。行列自体の中に二組の音楽隊が行進し、約十五本の旗がかかげられた。国家社会主義者の到着は、すでに半分ほど埋まっていたが、はかり知れぬ感激をひきおこした。いつもは旗一本ない大広場がし自身、いまや六万人を数える大衆を前にして、演説者の一人として語ることがゆるされるという名誉をもった。

この催しの成功は圧倒的だった。特にあらゆる赤の脅迫をものともせず、国家主義者もミュンヘンで街頭行進ができることが、はじめて実証されたからである。行進している縦隊に向かってテロで立ちむかおうとしていた赤の共和国防衛の徒党は、数分の間に突撃隊百人隊によって、頭を血だらけにして追い払われた。国家社会主義運動は、そのときはじめて、今後もまた街頭へ出る権利を主張し、それとともにこの独占権を国際的な民族の裏切り者や祖国の敵の手からもぎとる決意を示したのだった。

この日の成功は、突撃隊の構成に関するわれわれの見解が、心理的にも、組織的にも正しいことに対するもはや反駁(はんばく)できない証明であった。

突撃隊は、いまやそのような効果を実証した基礎の上に、エネルギッシュに拡張され、早くも数週間後には二倍の百人隊員数がミュンヘンに配備された。

コブルクへの行進　二、一九二二年十月のコブルクへの行進。

「民族主義的」諸団体はコブルクでいわゆる「ドイツ会議」を開くことをもくろんだ。わたし自身は、若干の同伴者をつれて出席してほしい、という但し書のついた招待状を受けとった。わたしが午前十一時に受けとったこの懇願状は、わたしにとって非常につごうがよかった。早くも一時間後にこの「ドイツ会議」への出席の指令が出された。「同伴者」としてわたしは八百人の突撃隊員を定めたが、かれらは約十四の百人隊にわかれミュンヘンから特別列車に乗って、バイエルンに属するようになったこの小都市へ送られることになった。それに対応した命令が、その間に他の場所で形成されていた国家社会主義突撃隊のグループに発せられた。

ドイツではこの種の特別列車が走るのは、はじめてだった。新たに突撃隊の人々が乗りこんでくるすべての土地で、この輸送は最大のセンセーションをまきおこした。まだわれわれの旗をいままで見たことがないものが多かった。その人たちの印象は非常に大きかった。

われわれがコブルクの駅についたとき、「ドイツ会議」の開催本部の代表者がわれわれを迎え、当地の労働組合ないし独立社会党および共産党の「協定」と称する命令を伝えた。その内容は、われわれが旗を巻き、音楽なしで（われわれはわが党の四十二人の強力な楽隊をつれてきた）そして隊伍を組まずにでなければ町へはいってはならない、というのだった。

わたしはこの屈辱的な条件をただちにきっぱりと拒否した。だがそこにいるこの会議の本部の人々に、こういうヤツたちと討議がなされ、取りきめが行なわれたことについてのわたしの不快の念を表明することをぬからなかった。そして突撃隊はただちに百人隊に整列し、音楽をひびかせ、旗をひるがえしながら町へ行進すると宣言した。またそれはそのときその通りに行なわれた。

早くも駅前の広場では数千を数える、どら声で叫び、わいわい騒ぐ群集がわれわれを迎えた。「人殺し」、「山賊」、「強盗」、「悪人」、これがドイツ共和国の模範的建設者がわれわれに愛称深くも浴びせた愛称であった。若き突撃隊は模範的な秩序を保ち、百人隊は駅前の広場で編成され、はじめは野卑な振舞いに注意しなかった。われわれみんなにとってこのまったく見知らぬ町を行進していく隊列は、小心翼々たる警察機関によって定められたように、われわれの宿営たるコブルク郊外にある射撃場へでなく、町の中心部近くのホーフブロイハウスケラーに導かれた。隊列の左右では、ついてくる大衆の狂騒はますます増大してきた。最後の百人隊がケラーの構内にやっと曲ってはいるや、早くも多数の群衆が耳を聾せんばかりの叫びをあげて後から押そうとした。これを防ぐために警察はケラーを閉鎖した。この状態は我慢ならなかった。そこでわたしは突撃隊をもう一度整列させ、簡単に訓戒を与え、警官にただちに門を開くよう要求した。しばらくためらった後、かれらもその要求をききいれた。

そこでわれわれは、われわれの宿営へ行くために、来た道をもう一度もどって行進した。そこでこんどは、もちろんついに抵抗につきあたらざるをえなかった。単なる叫び声や侮辱的な呼びかけでは、百人隊が泰然としているので、真の社会主義と平等と同胞の代表者たちは石をつかんだ。それによってわれわれの堪忍袋の緒がきれた。かくして十分間、右に左に殲滅(せんめつ)せんばかりに石が雨あられのように飛び、十五分後にはもはや赤は一人だに街に見られなくなった。

夜にはさらに激しい衝突があった。一人の国家社会主義者が襲われ、ひどい状態でいたのを突撃隊のパトロールが発見したのだ。その結果敵を手っとり早く片づけた。早くも翌朝には、ずっと何年来コブルクが苦しんでいた赤のテロが砕け落ちたのだった。

かれらはいまや、生粋のマルクス主義的、ユダヤ的虚偽でもって、事実を完全にゆがめて、われわれ「殺人団」がコブルクで「平和な労働者の殲滅戦」をはじめたと主張しながら、ビラによって「国際プロレタリアートの男女同志」をもう一度街頭へ行くようにけしかけようとしたのだった。一時半にこの付近全部の一万人の労働者に希望されている大「民衆デモ」が行なわれるにちがいなかった。それゆえわたしは赤色テロを決定的に片づけることを固く決意し、その間にほとんど千五百人にふくれあがっていた突撃隊を十二時に集め、そしてわたしもかれらとともに赤のデモが行なわれるにちがいない大広場を通って、コブルクの城塞に行進しはじめた。わたしは、かれらがわれわれをなやますようなことをもう一度あえてやるかどうか、見ようと思ったのだ。われわれが広場に立ち入ったとき、発表通りの一万人のかわりにただ二、三百人ばかりのものがいたにすぎず、われわれが近づいてもたいていのものは静かにしており、一部のものは逃げ去った。ただ二、三の場所で、その間によそからきて、まだわれわれを知らない赤の一群が、もう一度われわれにけんかをふっかけようとした。だがたちまちかれらからはっきりとその気持がなくなってしまった。そしていまや、いままで不安そうに畏縮していた住民は次第に目覚め、元気になり、歓呼によってわれわれを思いきって歓迎しようとし、夕方われわれが退去するときには方々で自発的な歓声が爆発するのを見ることができた。

とつぜん駅で鉄道員が、列車を出すことができない、とわれわれに宣言した。わたしはそれに対して数人の首謀者に次のように伝えた。そうなればわたしは赤の領袖でつかまえることができるものは一からげに捕えるつもりである。さらにわれわれは自分たちで運転するつもりである。もちろん機関車にも、炭水車にも、またどの客車にも国際連帯性の二、三ダースの同志をのせていくつもりだ。わたしはまた、われわれ自身の力による運転がとうぜん危険きわまりない冒険であり、われわれみんな

いっしょに首や骨を折るかも知れない、と紳士方に抜け目なく注意した。だがそうなれば少なくとも、われわれだけでなく、赤の紳士諸氏と平等かつ親密に来世へ向かうだろうから、われわれには喜ばしいことだ、と。

その結果、列車は非常に正確に出発し、われわれは翌朝ふたたびミュンヘンに着いた。

それによって一九一四年以来、はじめて法の前の国家市民の平等が、コブルクで再建された。というのはもしも今日、誰かお人よしの高級官吏が、国家は市民の生命を保護すると主張しようと思いあがっても、これは当時にはいずれにしても当っていなかったからだ。なぜならば、市民たちはあのころは今日の国家の代表者に対して、身を守らねばならなかったからである。

闘争組織としての突撃隊の評価　この日の意義を、いろいろの結果から、はじめはまったく十分に評価することができなかった。勝利を確信する突撃隊が、自信やその指導の正しさに対する信念をたいそう高めただけでなく、周囲のものもまたわれわれと深く関係を持ちはじめ、そして国家社会主義運動が後日マルクス主義の妄想に相応の結末をつけるに適したものになるだろう、とはじめて認識したものも多かった。

ただ民主主義者だけは、国家社会主義運動がおとなしく頭をたたかれることをあえてしないで、民主主義的共和国の中で獣的な攻撃をするのに、平和主義の唱歌のかわりにこぶしと棒でもって立ち向かうことをあえてしたことに、ためいきをついた。

一般にブルジョア新聞は、いつもながらなかばあわれむべく、なかば卑劣であった。そして少数の公正な新聞だけが、少なくともある場所でマルクシズムのおいはぎに、ついにその仕事をやめさせた、

と歓迎したのだった。

だがコブルク自体では一部のマルクス主義労働者は――ちなみにかれら自身はただ誤った道に導かれたにすぎないと見られねばならないのだが――国家社会主義の労働者のこぶしに教えられて、人間というものは経験上自分が信ずるもの、自分が愛するもののためにだけ闘うのであるから、これら国家社会主義の労働者も理想のために闘争しているのだ、ということを勝手に認めるようになったのである。

もちろん突撃隊自体が最大の利益を得た。突撃隊はいまや非常に急速に増大し、一九二三年一月二十七日の党大会のさいには、すでに約千人が隊旗授与式に参加することができた。そのさい初期の百人隊は一人残らず新しい制服を着ていた。

突撃隊に統一的服装を採用することが、実際単に団体精神を強化するためばかりでなく、また混同をさけ、おたがいに相手を誤認するのを予防するためにも、いかに必要であるか、ということを、このコブルクにおける経験はまさしく示してくれたのだ。そのときまで突撃隊はただ腕章をつけていただけだったが、いまやヴィントヤッケと周知の帽子がこれに加わった。

だがコブルクの経験はそれ以上になお次のような意義をもっていた。すなわち、多年にわたって赤色テロが意見を異にするもののあらゆる集会を妨害していたすべての場所において、われわれはいまや計画的にこれを打ち破り、集会の自由を再建しはじめたことである。このときから、国家社会主義の大隊はいつも何度もそういう場所に集められ、バイエルンでは他の赤の牙城が、順々に国家社会主義の宣伝の犠牲になっていったのである。突撃隊はその任務にしたがってますます成長し、それとともに無意味な、生活には重要でない防衛運動の性格からますます脱却し、新しいドイツ国家の建設の

ための生きた闘争組織に高まったのである。

一九二三年三月までこの理屈に合った発展が続いた。さらにある事件が起り、わたしはあの運動を従来の軌道からはずして、改造をどうしても行なわねばならなかった。

一九二三年の結果　三、一九二三年のはじめの数か月内に起ったフランスのルール地方の占領が、その後の突撃隊の発展に重大な意味をもった。

今日なお、これについて公然と語ったり、書いたりすることは不可能であり、特に国民的利益からいって有益でない。わたしはただ公然の論議においてこのテーマに早くも触れ、それによって公に知られているかぎりで述べることができるだけである。

われわれにとって意外でもなかったルール地方の占領は、いまや決定的に譲歩の臆病な政策が打ち破られ、それとともに防衛隊に完全にはっきりした任務が与えられるかも知れない、というもっともな期待を生ぜしめたのであった。また、当時すでに数千の若い元気旺盛な人々を擁していた突撃隊も、この国民的奉仕に除外されてはならなかった。一九二三年の春と盛夏に、軍隊的闘争組織への転換が行なわれた。それがわれわれの運動に関したかぎり、一九二三年におけるその後の発展は、大部分この転換のためだったのである。

わたしは、一九二三年の発展は他のところで取り扱うから、ここではただ次の点を確認しようとするだけである。すなわち当時の突撃隊の改造は、この改造に導いた前提、つまりフランスに対する活動的な抵抗が行なわれなかったならば、運動の観点から有害だったのだ、ということである。

一九二三年の結果は、一見したところ恐ろしく思えるかも知れないが、大所高所からみれば、ドイ

ツ政府の態度によって根拠のないものになり、運動にとってはむしろ有害であった突撃隊の改造を、一撃で終らせ、そしてそのためにかつて正しい道を去らねばならなかったその場所から、他日再建する可能性ができたというかぎりにおいて、ほとんど必然的であったのだ。

一九二五年の新しい突撃隊　一九二五年に新たに設立された国家社会主義ドイツ労働者党は、突撃隊をいまやもう一度、冒頭で述べた原則にしたがって整備し、訓練し、また組織しなければならなかった。国家社会主義ドイツ労働者党はそれとともにもう一度本来の健全な見地にもどらねばならなかった。そして突撃隊においては、運動の世界観闘争の擁護と強化のための道具とすることをその最高の課題として、もう一度見なければならなかった。

国家社会主義ドイツ労働者党は、突撃隊が一種の防衛隊に堕することも、秘密組織になりさがることも、甘受してはならない。むしろ国家社会主義的な、それゆえ最も深い民族主義的な理念の何十万人の精兵を、突撃隊の中で訓練するようにつとめねばならないのである。

第十章　連邦主義の仮面

軍需会社と反プロイセンの気分　一九一九年冬に、またそれ以上に一九二〇年の春と夏に、われわれの若い党は、戦時中すでに非常に重大化していたある問題に態度を決せざるをえなかった。わたしは上巻で、わたし個人にはっきりしてきた迫りくるドイツ崩壊の特徴を簡単に述べて、北ドイツと南ドイツの昔からの割れ目を開くために、イギリス人の側からもフランス人の側からも行なわれた特別な宣伝のやり方に言及しておいた。一九一五年春に、戦争の単独責任者としてのプロイセンに対する組織的な扇動ビラが、はじめてあらわれた。一九一六年にはこの組織は、完全な、卑劣ではあるが巧妙な機構にまで達していた。最も低級な本能を計算にいれて南ドイツが北ドイツに対してなした扇動は、やがて早くもまたその実をむすびはじめた。政府や同様にまた軍の指導部においても――より適切にいえばバイエルン司令部においても――当時の権威者に対して、かれらが神をいつわるほど義務を忘れ、ぜひとも必要な決意でこれに反対しなかったことは、非難されねばならないし、また非難をさけることができない。かれらは何もしなかったのだ！　反対にいろいろの地位にあるものが、それをまったく不快と思わず、むしろこういう宣伝によってドイツ民族の統一的発展が妨害されるばかりでなく、それとともに自動的に連邦勢力を強化するにちがいないと考えて、むしろ十分に偏狭であった。歴史上悪意の怠慢が、かつてこれほど悪く報復されたことはほとんどない。人々がプロイセンに加えようとした弱化が、全ドイツを襲ったのである。だがその結果は、崩壊を速めたことであった。

けれどもそれはただドイツを破壊しただけでなく、まず第一にまさしく各連邦諸国自体を破壊したのだ。

人為的に扇動されたプロイセンに対する憎悪が、このうえもなく激しく荒れ狂った都市[1]において、世襲の王家に対する革命がまっさきに勃発したのである。

さて、この反プロイセンの気分がつくられたのは、ただ敵の戦時宣伝にのみ帰するものであって、それにとらえられた民衆には弁解の理由もないだろう、と思うことは、もちろん誤りであろう。まさに狂気のように集中して全ドイツ領土を監督し、そして——詐欺をはたらいたわが戦時経済の信じられないような組織が、この反プロイセン的気分をおこさせた主な原因であった。**というのは、普通の小人物にとって、元来ベルリンに本社をもっている軍需会社は、ベルリンと同一であり、ベルリン自体がプロイセンと同じであることを意味したからである。**この軍需会社と称する強奪財団を組織しているものは、ベルリン人でもプロイセン人でもなく、しかもドイツ人でさえなかったが、このことが当人各自にはほとんどわかっていなかった。人々はただドイツ国の首都にあるこれら憎むべき組織のひどい失策と、絶えざる侵害だけを見て、そのすべての憎悪をとうぜんこのドイツ国の首都とプロイセンに同時に移したのだ。特定の方面からはこれに対して何も行なわれなかっただけでなく、そういう説明がひそかにしかもにやにや笑って歓迎されただけ、なおさら大きいのだ。

ユダヤ人は、すでにそのころ、自分が軍需会社という仮面のもとに、ドイツ民族に対して組織した恥ずべき略奪行為が抵抗をまねくだろう、むしろまねくにちがいない、ということがわからないほどバカではなかった。この抵抗が自分のノドにとんでくるまでは、かれはそれを恐れる必要がなかった。だが絶望と憤激にかりたてられた大衆の爆発をこの方面において妨げるためには、かれらの憤激を他

ったのだ。

牽制策としての反プロイセン扇動　バイエルンはプロイセンに対して、プロイセンはバイエルンに対して争っておればよい。やればやるだけいいのだ！　両者のこのうえもなく激しい闘争が、ユダヤ人のためには最も安全な平和を意味した。一般の注意はそれによって完全に国際的な民族のウジからそれ、人々は民族のウジを忘れてしまったように思えた。そしてそのうえ思慮ある分子——こういう分子がバイエルンにもたくさんいたのだが——が、見通しや内省や自制をするよう注意し、それによって激烈な闘争をやわらげるよう迫る危険が現われるように思えると、ベルリンのユダヤ人は新たに挑発を押し出し、その結果をまっていさえすればよかった。南北間の争いで漁夫の利をしめるものはみんな、こういう事件にはいつもすぐに身をなげだし、憤激の熱火がふたたび赤々と炎をたてて燃えあがるまで吹くのであった。

ユダヤ人が当時個々のドイツ種族をたえず没頭させ、注意をそらさせて、その間にますます徹底的にまきあげるためにしたことは、巧妙な狡猾(こうかつ)な演技であった。

さらに革命が起った。

さて一九一八年まで、もっとよくいえば、同年十一月まで、普通の人、特にあまり教養のない俗物や労働者が、ドイツ種族同士の争いの実際のなりゆきとその必然的な結果とを、とりわけバイエルンにおいてまだ正しく認識することができなかったとしても、少なくともみずから「国家主義的」と称していた一部のものは、革命の勃発の日にわからねばならないはずだった。というのは、この行動が

成功するかしないかのうちに、早くもバイエルンでは革命の指導者と組織者が、「バイエルン」の利益を代表するものになったからである。国際的ユダヤ人クルト・アイスナーが、バイエルンをプロイセンと争わせる先手となり始めた。よりによって、インチキ新聞記者として絶えずドイツ中をあちこちと走りまわっていたこの近東人が、バイエルンの利益をまもるためには最も不適任であることや、だがまたまさしくこの男にはバイエルンが——神がこの広い世界を与えたのであるから——どうでもよいところだったぐらいのことは、わかりきっていたのである。

「バイエルンの小邦分立主義者」クルト・アイスナー　クルト・アイスナーはバイエルンにおける革命的高まりに対して、ドイツの他の地方に反対するすべての意識的な要点を与えることによって、かれはバイエルンの視点から少しも行動せず、ただユダヤ主義の代理人としてのみ行動したのである。かれはバイエルン民衆に存在する本能と嫌悪を利用し、それを手段として、ドイツをよりたやすく打ちくだくことができたのである。だが崩壊したドイツ国はやすやすとボルシェヴィズムのえじきになるところだった。

かれが用いた戦術は、かれの死後もはじめのうちは継続された。いつもドイツの個々の連邦や王侯たちに残虐このうえもない嘲笑をあびせかけていたマルクシズムは、「独立社会党」としていまやとつぜん王家や個々の連邦に最も強い根をもっている感情と本能に訴えたのである。

進出してきた解放進駐軍に対する評議会共和国の闘いは、宣伝によってまず第一に「プロイセン軍国主義」に対する「バイエルン労働者の闘争」としてあらわされた。こうしたことからのみ、人々はまた、なぜミュンヘンではドイツの他の地方とまったく異なって、評議会共和国の打倒が大衆の自覚

にならず、むしろいままでより以上のプロイセンに対する立腹と不機嫌さに導いたのかも、理解できるであろう。

ボルシェヴィキの扇動者たちが、評議会共和国を除外することは、「反軍国主義的」、「反プロイセン的」な考えをもつバイエルン民衆に対して、「プロイセン的＝軍国主義的」勝利になるのだとわからせた技術は、十分な実を結んだ。クルト・アイスナーがミュンヘンにおけるバイエルン地方の立法議会での選挙にさいして、一万人の支持者も集めることができず、しかも共産党は三千人以下にとどまっていたのに、共和国の崩壊後両党は、約十万人の選挙人数に高まったのであった。

反プロイセン扇動に対するわが闘争　すでにこのころに、ドイツ種族相互の荒唐無稽な扇動に対するわたし自身の闘争が始まった。

わたしは自分の生涯において、当時の反プロイセン扇動に対するわたしの抵抗ほど不人気なことを始めたことは、いまだなかったと思っている。ミュンヘンでは早くも評議会時代に第一回の大衆集会が開かれた。そこではドイツの他の地方、だがとりわけプロイセンに対する憎悪が、煮えたぎらんばかりに扇動され、北ドイツ人がそういう集会に出席することは死の危険と結びついていたばかりでなく、この種の示威大会の帰結はたいていまったく大ぴらに「プロイセンからの分離だ！」――「プロイセンを倒せ！」――「プロイセンと戦え！」という狂ったような叫びで終ったものだ。その雰囲気は、特にりっぱなバイエルン主権の利益代表者がドイツ国会で「**プロイセン人として朽ちるよりは、むしろバイエルン人として死せん**」といったときの声に集約されている。

わたしがはじめて、少数の友に取囲まれてミュンヘンのレーヴェンブロイケラーにおける集会で、

この妄想に対して抵抗したとき、それがわたし自身にとって何を意味したかは、当時の集会をいっしょに体験したものでなければわからないにちがいない。当時わたしを援助したのは戦友たちだった。そして人々は無分別になった大衆が、われわれに向かって怒号し、われわれを打ちくじこうと脅迫したときのわれわれの気持を多分理解できるだろう。かれらは、われわれが祖国を防衛していた間に、その大部分は逃亡兵や徴兵忌避者として兵站地や故国内をぶらついていたのだった。もちろんこの場面はわたしにとって幸福だった。すなわち大勢のわたしに誠実なものたちが、はじめてわたしと固く結ばれたことを感じ、やがて生死をかけてわたしを信頼したのだった。

絶えずくりかえし行なわれ、一九一九年中長引いたこの闘争は、一九二〇年のはじめにますます激化するように思えた。いろいろの集会があった——とりわけわたしはミュンヘンのゾネン街のワーグナーザールでの集会を記憶している——そこでは、その間に大きくなっていたわたしのグループは、極度に困難な闘争で地歩を維持させねばならなかった。数十人のわたしの支持者が虐待され、打ちのめされ、足蹴にされ、ついには生きているというよりむしろ死骸と同じになって、会場から投げ出され、死にはてることもまれではなかった。

わたしが最初ひとりで、ただわたしの戦友だけに支持されて始めたこの闘争は、いまや若い運動の神聖な任務として——とわたしはいいたいが——その後も続けられた。

われわれが当時——わがバイエルンの支持者だけがほとんどもっぱら頼りだったが——しかもなおこの愚鈍と裏切の混合物を徐々にではあるが、しかし確実に終局にもたらした、ということができるのは、今日でもなおわたしの誇りである。野次馬のようなもともと実際にお人よしで愚鈍な大衆を固く信じているが、組織者や扇動者にこういう愚直さがあるなどとは考えられないから、だからこそわ

たしは愚鈍と裏切りというのである。わたしはかれらをフランスに雇われて、金をもらっている裏切り者であると思ったし、いまでもまだそう思っている。ある場合に、ドルテン[2]の場合などは、実際にそうするうちに歴史がすでに判決をくだした。

「連邦活動」　当時、事態を特に危険ならしめたものは、かれらがこの策動の唯一の誘因として連邦主義的意図を前景に押しだしながら、ほんとうの意図を包みかくすことを心得ていた腕前であった。もちろん反プロイセン扇動が連邦主義とまったく関係がなかったことは、明白である。また、ある他の連邦国家を解体し、分解させようとする「連邦活動」も奇妙なものである。というのは、ビスマルクの帝国の思想の引用を決して虚偽の空文句ではないと考える忠実な連邦主義者は、その息の下で、ビスマルクによってつくられた、あるいは完成されたプロイセン国家の分割を望んだり、あるいはそのうえそうした分離の努力を公然と支持することができないだろうからである。保守的なプロイセンの政党がバイエルンからのフランケン地方の分離を応援したり、あるいはしかも公然たる行動で要求したり、促進したりするならば、人々はミュンヘンでどんなにガヤガヤ騒ぐことだろう。いずれにせよ、この憎むべき詐欺師の演技を看破できなかった正直に連邦主義を奉じた人々は、ただまことに気の毒だった。というのはかれらがまっさきに欺かれたものだったからである。こういうように連邦思想に罪を負わせることによって、その本来の担い手は墓穴を掘ったのである。人々が、こういう国家構成の最も本質的な肢体たる**プロイセン**をみずから**見くびり**、**侮辱し**、**汚し**、要するにできれば**連邦国家**として**不可能**にするならば、ドイツ国の連邦主義的形成を宣伝することはできないのである。それと同時にこのいわゆる連邦主義者の闘争が、十一月革命の民主主義とはほとんどなんら結びつける

ことができないこのプロイセンに向けられているだけに、ますます信じがたいのである。というのは、このいわゆる「連邦主義者」の誹謗（ひぼう）と攻撃は、ともかく大部分南ドイツ人かユダヤ人であったワイマール憲法の父たちに向けられず、古い保守的プロイセンの代表者、すなわちワイマール憲法の反対者に対して向けられていたからである。そのさい人々が特にユダヤ人に触れることを用心していたのに驚く必要はない。だがこれがすべてのナゾを解くカギをわたすかも知れないのである。

ユダヤ人の扇動戦術　革命前にユダヤ人は、注意を自分たちの軍需会社から――あるいはもっとよくいえば自分たち自身から――そらすことを心得ていて、大衆、特にバイエルン民衆を反プロイセンに態度をかえさせねばならないことを知っていたが、同じようにユダヤ人は革命後も新たな、そして今度は十倍も大きな略奪行為を、どうにかしておおいかくさなければならなかったのだ。そして今度はドイツのいわゆる「国家主義的分子」をおたがいにけしかけることにもう一度成功した。すなわち、保守的立場に立っているバイエルン人を同じく保守的思想をもつプロイセン人に対立させたのだ。そしてユダヤ人はまたもや最も老獪（ろうかい）な方法をとった。ドイツ国の運命をかれの手でたぐっていたただ一人のユダヤ人は、そのためにいつも新たにその時々の関係者の血が激高するようなひどい、手心を知らぬ侵害を誘発したのだった。だがそういう気持もユダヤ人に対してではなく、いつもドイツ人同胞に対して起った。バイエルン人は四百万の勤勉に働いている熱心な、生産的な人々からなるベルリンを見ないで、腐敗し、解体している最も悪い西部のベルリンを見ていたのだ！　けれどもかれらの憎悪はこの西部に向けられず、「プロイセン」の都市に向けられたのだった。

実際しばしば絶望的だった。

公衆の注意を自分からそらし、他のところに没頭させるというユダヤ人のこの技量は、今日でもまたもう一度研究することができる。

宗教的不和　一九一八年には組織的な反ユダヤ主義についてはまったく問題にならなかった。わたしはいまでも、ユダヤ人ということばを口にしただけで面倒に突きあたったことを思いだす。人々は不快げにじろじろ見られたり、このうえもなく激しい抵抗を体験するからであった。公衆に真の敵を知らせようとするわれわれの最初の試みは、当時ほとんど見込みがないように思えた。そして事態が改善に向かいはじめたのはまったく遅々としていた。「攻守同盟」は組織的構造では欠けていたが、それにもかかわらず、**ユダヤ人問題**をそれとしてふたたび**巻きこんだ**功績は大きかった。いずれにせよ一九一八年から一九一九年にかけての冬に、なにか反ユダヤ主義が徐々に根をおろしはじめた。さらにその後、もちろん国家社会主義運動は、ユダヤ人問題をまったく別のやり方で前進させていった。国家社会主義運動はまずなによりも、この問題を上層ブルジョアジーやプチ・ブル階層というかぎられた範囲からひき出して、一大民族運動の推進的動因に変じたのだった。だがこの問題において、偉大な統一的な闘争思想をドイツ民族に与えることが成功するかしないかに、ユダヤ人は早くもまた対抗策を講じた。ユダヤ人は古くからの手段を用いたのだ。信じがたい迅速さでユダヤ人は、この民族主義運動自体の中に争論のたいまつを投げいれ、分裂の種をまいた。諸情勢が元来そうであったように、ユダヤ人に対する集中突撃を阻止するために、公衆の注意を他の問題に働かせる唯一の可能性は、**ローマ教皇全権論の問題を提出し、それからおきるカトリシズムとプロテスタンティズムの相互の抗争を強くもち出すこと**であった。まさしくこの問題をわが民族の中へ投げいれた人々が、いかに罪が

あるかは、決して償うことができないほどである。いずれにしてもユダヤ人は所期の目標に達した。すなわちカトリックとプロテスタントは、おたがいに喜ばしき戦争をする。そしてアーリア人種と全キリスト教の仇敵(きゅうてき)はくすくす笑うのだ。

かつてユダヤ人が何年にもわたって世論を連邦主義と中央集権主義の間の争いに没頭させて、かれらをそれによって困憊(こんぱい)させ、その間に国民の自由を駆引して売り、わが祖国の秘密を国際的な財界上層部にもらすことを心得ていたように、いまもまたドイツの二宗派を相互に衝突させることに成功したのだ。その間に両方の基礎は国際的な世界ユダヤ人の毒によって腐蝕(ふしょく)され、危くされたのだった。

人々はユダヤ人との混血が日々わが民族におこしている被害を注視していなければならない。そしてこの血の毒化が数百年後でなければ、あるいは一般にもはやわが民族体から除去されえない、ということを考えてほしい。さらに、この人種的壊敗がわがドイツ民族の最後のアーリア的価値をいかに下落させ、そのうえ往々にして文化の担い手たる国民としてのわれわれの力がますますはっきりと後退しているか、そしてわれわれが、少なくともわが大都会で、今日の南イタリアがそうであるようなところまで来ている危険にいかにさらされているか、を考えてほしい。何十万のわが民族は、わが民族の毒化を盲目的にみのがしているが、だがそれはユダヤ人によって今日計画的に追求されているのである。これら黒い髪の民族寄食者は、われわれのウブな、若い娘を計画的に凌辱(りょうじょく)し、こうしてこの世でもはやかけがえのないものを破壊しているのである。キリスト教の両宗派――そうだとも、両方ともだ――は神の恩恵によってこの地上に与えられた尊い、比類のない生物が汚され、破壊されているのを無関心に傍観しているのだ。だがこの世の未来にとって重要なことは、プロテスタントがカトリックに打ち勝つか、カトリックがプロテスタントに打ち勝つかではなく、アーリア人種が存続する

か死滅してしまうかにある。それにもかかわらず、両宗派は今日この人間の絶滅者に対しては闘わず、おたがいに自滅するようにしている。まさしく民族主義の立場をとるものには、各人が自己の宗派内で、**そもそも外面的に神の意志について語るだけでなく、実際上神の意志を実行し、神の御業をはずかしめない**よう配慮する最も神聖な義務があるであろう。というのは、神の意志が人間にかつてその形、その本質、その能力を与えたのだからである。神の御業を破壊するものは、それによって主の被造物、神のご意志に宣戦を布告しているのだ。それゆえ、各人がしかも喜んで自己の宗派において活動し、演説や行動によって自己の信仰団体のわくから走り出して活動し、他の信仰団体の中でかきまわろうとするものに対立することを、自分の第一の最も神聖な義務と感ずるのである。というのは、昔からある宗教上のわれわれの対立の内部で、ある宗派の本質特性にうち勝つことは、ドイツでは必然的に両宗派間の殲滅（せんめつ）戦に導くからである。この点でわれわれの状態は、フランスやスペインあるいはそれどころかイタリアとはまったく比較することができない。たとえばこの三国のどこにおいても、教権主義、ローマ教皇全権論に対する闘争を、この企てによってフランス、スペインあるいはイタリアの民族自体が分裂するというような危険を犯さないで、宣伝することができる。だがドイツではこれができない。ここではプロテスタントもそういう企てにたしかに関与するだろうからである。それゆえ、よそでは自分の教皇へ加えられる政治的干渉に対してただカトリックだけが行なうだろう防衛が、ただちに**カトリシズム**に対する**プロテスタンティズム**の攻撃の性格をもつのである。自己の宗派の信者からは、それが正しくないときですらつねになお許されるものが、反対者が他の信仰団体から出るやいなや、とたんにはじめから極端に鋭い拒否にであうのである。元来は自己の宗教的信仰団体の内部の明らかな弊害をさっさと除去するつもりでいる人々ですら、自己の団体に属していない立場

からそういう矯正をすすめられたり、そのうえ要求でもされたとなると、ただちにそれから離れ、外部に抵抗を向けるほど極端に走るのである。かれらはこれを、何も関係のないことに干渉するのは、不当な、許しがたい、そのうえぶしつけな試みだと感ずるのだ。またさらに、こういうやり方は、たといそれが国民の共同社会の利益というより高い権利でもって基礎づけられていても、許されないのである。今日の宗教感情が依然として国家的、政治的合目的性よりもより深く座を占めているからである。そしてこれはまた、人々が両宗派を相互の激戦にかりたててもまったく変らず、双方の融和によって国民に未来を贈ることによってのみ、変えることができるのである、未来はこの領域でも徐々に融和的な効果を及ぼすほど大きなものをもっているのである。

わたしは、今日民族主義運動を宗教的な争いの危機にひきいれる人々を、その辺にいる国際主義的立場をとる共産主義者よりも、わが民族にとってもっと悪い敵であると考えている、と言明することをはばからない。というのは共産主義者を転向させることを、国家社会主義運動は任務としているからだ。だがこの運動を本来の線からはずし、実際の使命から離すものは、最も唾棄すべき行為である。その人は、意識的たると無意識的たるとにかかわらず——それはまったく問題にならない——ユダヤ人の利益のための戦士である。というのは、今日民族主義運動がユダヤ人にとって危険になりはじめたその瞬間に、宗教闘争において出血死させることは、ユダヤ人の利益であるからである。さらにわたしは出血死させるということばを故意に強調する。なぜならば、数世紀間も偉大な政治家が粉骨砕身した問題を、今日この運動で解決できると思うのは、まったく歴史的な教養のない人間だけだからである。

さらに事実それ自身が語っている。一九二四年に突如として民族主義運動の最高の使命が、「ロー

マ教皇全権論」に対する闘争であると打ちあけた紳士方は、ローマ教皇全権論を打倒せずに、民族主義運動を分裂させてしまった。わたしもまた民族主義運動の陣営の中で未熟な頭のものが、ビスマルクのような人物すらもできなかったことをできると思いちがえることに対して、用心しなければならなかった。国家社会主義運動をそういう闘争のために利用しようとするあらゆる試みに対しては最も激しく立ち向かい、そういう意図のある宣伝者をただちに運動の陣営から遠ざけることが、つねに国家社会主義運動の指導層の最高の義務であるであろう。事実上、また一九二三年秋までにこれが完全に成功した。われわれの運動の陣営には、**つねに自己の宗教的信念が良心の葛藤を少しも経験することなく、最も敬虔なプロテスタントと最も敬虔なカトリックがならんでいる**ことができた。両者がアーリア人種の破壊者に対して共同の激しい闘争をなし、それが逆におたがいに尊敬し、価値を認めることを教えたのだ。そしてそのさい、ちょうどこのころに運動は中央党に対して最も激しい闘争をやり抜いて決着をつけたのだ。もちろん決して宗教的根拠からでなく、もっぱら国家的、人種的、経済的根拠からであった。その結果は、今日われわれが知ったかぶりをするものを証拠だてているように、当時われわれが正しかったことを物語っていた。

無神論のマルクス主義者の新聞に応じて、とつぜんに宗教上の信仰団体の代弁者となり、実際に愚劣な言辞を幾度かあちこちへ流布し、両派に重荷を負わせ、かくして極端に火をかきおこしているが、民族主義の連中は宗教上の論判の神にみはなされたような盲目さで、自分たちの行動の精神錯乱状態をこのことからも決して認めないという程度にまで、近年往々にして到達しているのだ。

だがドイツ民族のように、幻影のために出血死するまで戦争をすることができることを、すでにしばしばその歴史において示した民族の場合には、まさしくこういうときの声は死ぬほど危険である。

かくしてわが民族はいつも自分の存在という実際にリアルな問題からそらされてしまった。われわれが宗教論争で衰弱している間に、他の世界は分割されてしまった。そしてローマ教皇全権論の危険のほうがユダヤ人の危険より大きいか、あるいはその反対か、と民族主義運動が熟考している間に、ユダヤ人はわれわれの生存の人種的基礎を破壊し、**それによってわが民族を永久に絶滅しているのだ。**

この種の「**民族主義**」**の闘士**に関するものを、わたしは国家社会主義運動に、それとともにまたドイツ民族に、衷心よりただ「主よ、運動をかかる友から守り給え、そうすれば運動はその敵との間に決着をつけるであろう」と望むことができるのである。

＊

連邦国家か単一国家か？　一九一九、二〇、二一年およびそれ以後にユダヤ人によって非常に抜目なく宣伝された連邦主義と中央集権主義の間の闘争は、それをすべて拒否していたにもかかわらず国家社会主義運動も、その本質的な問題に対して態度をきめざるをえなかった。ドイツは**連邦国家**たるべきか、**単一国家**たるべきか？　また実際に人々は両者のもとに何を理解すべきか？

わたしには後者のほうがより重要な問題であるように思えた。それはただ全問題を理解する基礎であるばかりでなく、また解明的であり、和解的な性格をもっていたがためである。

連邦国家とは何であるか？

連邦国家をわれわれは、主権国家の連合と理解している。すなわち主権国家が自由意志からその主権の力で結合し、そのさい各主権国家の至上権のうち共通の連邦国家の存在を可能にしまた保証する部分を、全体に譲渡するものである。

この理論的定式は、実際には今日地上にある連邦国家には完全に一つも該当しない。アメリカ合衆国の場合が最も該当しない。アメリカ合衆国では、各州のほとんど大部分が本来主権なるものが一般に話題になりえず、多くのものは時がたつにつれてはじめて連邦の全領域の中に、いわば描きこまれたのである。それゆえまたアメリカ合衆国の各州の場合には、たいていの場合行政技術の根拠から形成された大小いろいろに定規でぎられた地域であり、各州は昔から独自の国家としての主権を所有していなかったし、またまったくもつこともできなかったことがむしろ問題なのである。というのは、この各州が合衆国を形成したのではなく、合衆国がまずそういういわゆる諸州の大部分を形成したのだからである。そのさい各地域にゆだねられた、あるいはもっとよくいえば、与えられたこのうえもなく包括的な自治権は、この国家連合の全本質に応ずるのみならず、まずなによりもほとんど一大陸の範囲に匹敵する面積の大きいことや空間的な広がりに対応するのである。したがって人々は、アメリカ合衆国の州の場合、その国家的主権について問題としえないのであり、ただその憲法上規定され保証された権利――おそらく権限といったほうがもっとよいが――についてだけ問題とするのである。

ドイツについてもまた、上述の定式は完全に、まったくあてはまらない。たといドイツでは疑いもなく、まず個々の連邦国家が、しかも国家[3]として成立し、そこからドイツ帝国が形成されたものであるとしても、だ。しかしながらたしかにドイツ帝国の形成は、各国家の自由意志とか、同じような協力とかいう基礎から生じたものでなく、それらの中のある一つの国家、すなわちプロイセンのヘゲモニーの成果によって生じたものなのである。もともとドイツの各連邦国家の純地域的な大きさの差異が、たとえばアメリカ合衆国の構成とは比較を許さないのである。ドイツの各連邦国家の中でかつて

最も小さかったものと、もっと大きなもの、あるいはそのうえ最大のものとの大きさの相違は、ドイツ帝国の建設、連邦国家の形成に対する業績も同じでないし、その関与も一様でないことを実証している。しかし実際上また、これらの諸国家のたいていのものにおいては、国家主権ということばが官庁用語以外には何の意味もないことを除けば、真の主権については問題にしえなかった。実際、単に過去においてだけでなく、また現在においても、これらのいわゆる「主権国家」の多くは廃止され、それとともにこの「主権をもった」組織の弱点をはっきりと示したのであった。

ここではこれら個々の連邦国家が歴史的にどのように形成されたかを確認するつもりはないが、しかしそれらがほとんどの場合、種族的境界に応じていないことが確認されなければならない。それは純政治的な現象であり、その根はたいていドイツ国が無力であった最も悲しむべき時代、無力の原因をなし同様にそれによって逆にふたたびそれ自体を条件づけるわが祖国ドイツの分裂の最も悲しむべき時代に達しているのである。

旧ドイツ帝国の憲法は、連邦会議において各国に同等の代表を許容せず、大きさや事実上の重要さや、同様にドイツ帝国形成のさいの個々の国々の業績に応じて格差をつけたかぎりにおいて、前に述べられたすべてに、少なくとも部分的に順応したものであった。

ドイツ帝国の形成を可能にするため個々の国家から譲渡された主権は、その最少部分だけが自己の意志から放棄されたのであり、大部分それは実際にもともと存在しなかったか、あるいはプロイセンの優勢な圧迫のもとに簡単にとりあげられるか、したものである。もちろんビスマルクはその場合、各国家からとりあげることができるものをドイツ帝国に与えるという原則によらず、ドイツ帝国が絶対に必要とするものだけを各国家から求める、という原則から出発した。習慣と伝統に最高の顧慮を

一方で払い、他方それによってはじめから新ドイツ帝国に十分の愛と欣然たる協力を保証した、温和な、賢明な原則である。だがビスマルクのこの決意を、それによってドイツ帝国がいかなる時代も十分に主権をもつだろうという確信に帰することは、根本的に誤っている。ビスマルクはこういう確信をまったくもっていなかった。逆に、かれは現在において実行することがむずかしく、耐えがたいであろうものを将来にゆだねよう、と考えただけだった。かれは徐々に調整する時の効果と、かれが個々の国家の現在の抵抗をただちに破ろうと企てるよりもしまいにはより大きな力があると信じていた展開それ自体の力とに、望みをかけたのであった。それによってかれは、自分の政治家としての技量の偉大さを示し、最もよく実証したのである。というのは、実際にドイツ帝国の主権は、絶えず個々の国家の主権を犠牲にして高まったのだからである。ビスマルクが時間に期待したことを、時間が実現したのだ。

この進展は、ドイツの崩壊、君主制的国家形態の廃絶と相関して促進された。というのは、ドイツの個々の国家はその存在が血族的基礎によるよりも、純粋に政治的原因に帰するものだから、これら個々の国家の意義は、これらの国家の政治的発展の最も本質的権化たる君主制的国家形態と王家が除去されるや、ただちに崩壊して無にならねばならなかった。そのために多数のこうした「国家組織」は、あらゆる内面的な支えをいちじるしく失って、みずから今後の存在を断念したり、純粋に合目的な根拠から他の国家と合併したり、あるいは自由意志からより大きな国家に解消してしまった。これは、こうした小さい組織の事実上の主権が非常に弱く、そしてかれら自身、自分たちの市民から受けていた評価が低かったことに対する最も適切な証明である。

このように君主制的国家形態とその担い手が除かれたことが、ドイツ帝国の連邦国家的性格に早く

も強い一撃を加えたのであるが、「講和」条約の結果から生じた義務を引き受けたことが、ますます大きな打撃を加えたのである。いままで諸邦にあった国家財政権がドイツ国に帰し失われたことは、ドイツ国が敗戦によって諸邦の個々の分担金では決して償還しえないほどの財政的義務を課せられた時には、とうぜんのことであり、自明のことであった。郵便と鉄道の国有化を招来したその後の歩みも、わが民族が講和条約によって次第に奴隷化の道に導かれた必然的な結果であった。ドイツ国はその後の搾取の結果生じた義務を果たしうるために、強制的に不断に新しい価値のあるものを、まとめて所有せざるをえなかったのである。

国有化が実施された形式は、しばしばバカげたものであったが、その過程自体は論理的であり、自明のことであった。その責任は、かつて戦争を勝利に終らせるために何らの処置もとらなかった人々や政党にあった。特にバイエルンでは責任は、利己的な自己目的を追求して、大戦中にドイツ帝国という考え方を奪ってしまった政党にあった。かれらは敗戦後にそれを十倍にして償わねばならなかったのだ。因果応報の歴史だ！　罪を犯したのち、天罰がこの場合ほど急激に加えられたことはまれである。つい数年前まで個々の連邦国家の利益を——そしてこれは特にバイエルンでそうだった——がドイツ国の利益よりも高く置いていたこれらの政党は、いまではいろいろの事件の圧迫のもとに、ドイツ国の利益が各連邦国家の生存の息の根をとめたことを体験しなければならなかった。すべては自業自得だった。

選挙人大衆にむかって（というのは今日のわれわれの政党の扇動はただ大衆にだけむかっているからだ）各邦が主権を失ったことについて不平をいい、他方でこれらすべての政党が、例外なく、その究極の帰結においてドイツ内部のとうぜんのまた徹底的な変革を招来せざるをえないような条約履行

政策におたがいに全力をつくしたのは、無類の欺瞞（ぎまん）である。ビスマルクのドイツ帝国は、外に対しては自由であり、奔放であった。今日のドーズ案下のドイツが負うべきであるような重大な、しかも完全に非生産的な財政的義務を、このドイツ帝国はもっていなかった。だがまた国内においては、かれの権限は、わずかの絶対に必要な関係に限られていた。それゆえ、自己の財政権なしで、各邦の分担金によって生きていくことがたいへんうまくできたのだった。そして、一方では自己の主権の所有を維持することと、他方ではドイツ国への財政的支出が比較的少なかったことが、各邦がドイツ政府に好感をもつのに非常に好都合だったことは、自明のことである。だが今日、現今のドイツ国に好感がもてないのは、ドイツ国に各邦がたんに**財政的に隷属**していることに帰するだろう、という主張を宣伝しようとするのは、誤っているうえに不誠実である。そうだ、事態はほんとうにそうではないのだ。**ドイツ国という考え方に喜びが少ないのは、各邦の側の主権の喪失に帰すべきものでなく、むしろドイツ民族が現今自己の国家によって経験しているあわれむべき代表の結果なのである。**ドイツ国旗や憲法の制定記念祝典などをみんなやるにもかかわらず、今日のドイツ国は民族のすべての層の心に疎遠になっている。そして共和国保護法は、もちろん共和制を脅かして毀損（きそん）することはできるが、しかしただ一人のドイツ人の愛さえも得ることができないのである。**法令の条項や刑務所によって、自国の市民から共和国を保護しようとする心配のしすぎは、全機構自体のこのうえもなく破滅的な批判や軽蔑をもたらすのである。**

しかし別の理由からも、今日ある政党によって行なわれている主張、すなわちドイツ国に対する好意が消失したのが各連邦国家の一定の主権に対するドイツ国の侵害のせいだというのは、正しくない。ドイツ国がその権限の拡張を企てなかったと仮定しても、それにもかかわらず全租税額そのものが今

日のようでなければならないならば、各邦のドイツ国に対する好意がより大きくなるだろうと、人々は信じてはならない。反対に各邦が今日、ドイツ国が奴隷化されるような債権の義務履行に必要であるだけの額の租税を負担せねばならないならば、ドイツ国に対する敵意はもっと無限に大きくなるだろう。ドイツ国に対する各邦の分担金はたんに徴収が非常にむずかしいだけでなく、まさしく強制執行によって取りたてられねばならなかったであろう。というのは、共和国は元来講和条約の上に立ち、それを破棄する勇気も、またどんな形式にせよ意図ももたないのだから、共和国がその義務をはたさねばならないからだ。けれどもその罪はまた、ただ政党のみにある。絶えず辛抱強い選挙人大衆に各邦の自主の必要を説き、しかしそれと同時にこれらのいわゆる「主権」の最後のものまでもまったく強制的に除去するようになるにちがいないドイツ国の政策を、促進し、支持していた政党にのみあるのだ。

わたしは、今日のドイツにとっては、その極悪の内政外交によって負わされた負担を負うより他の可能性がまったくないから、強制的というのである。ここでもまた一つのくさびで他のくさびを追いだし、そしてドイツ国が、ドイツ国の利益を犯罪者のように代表することによって対外的にみずから負うすべての新しい負担が、国内においては下に対するより強い圧迫によって調整されねばならないのだ。それはまた一方で、各連邦国家で抵抗の胚細胞が生じたり成立したりさせないために、各連邦国家の全主権が徐々に除去されることが必要になるのである。

国家主義国家か奴隷植民地か？　一般に、かつてのドイツ国家政策と今日のドイツ国の政策との間の特色ある差異として、次の点が確認されねばならない。すなわち、共和国が外に向かっては弱さ

を示し、国内では市民を圧迫しているのに、旧ドイツ国は国内には自由を与え、対外的には力を示したのだった。両方の場合に前者が後者を条件づけている。すなわち、力にみちた国家主義国家は、その市民たちの愛と忠誠心が大きいため、対内的には法律をあまり必要としない。国際的な奴隷国家は暴力によってのみ臣民に強制労働をさせることができるのである。というのは「自由の市民」などと語るのは、今日の政府のこのうえもなく破廉恥な鉄面皮のひとつだからである。そういうものは旧ドイツ国だけがもっていた。外国の奴隷植民地としての共和国は、市民などはなく、せいぜい臣民がいるにすぎない。だから共和国はまた国旗をもたず、ただ当局の指令と法律上の規定によってつくられ、保証されている意匠登録商標だけをもっているのだ。ドイツ民主主義のゲスラーの帽子[4]として感ぜられるこのシンボルは、それゆえまたわが民族にいつでも内心に親しさを感じさせないのだ。当時伝統に対するどんな感情ももたず、過去の偉大さに対するどんな畏敬の念もなく、そのシンボルに泥をぬった共和国は、いつか臣民が自己のシンボルに感じている愛着がいかに皮相的であったかに驚くだろう。共和国はドイツ史の間奏曲の性格を自分で自分に与えたのだ。

そのようにこの国家は、今日自己の存立のために、ますます各邦の主権を、たんに一般的実利的観点からだけでなくまた、理念的観点からも取りあげざるをえなくなっている。というのは、この国家は財政的な恐喝政策によって、市民たちから最後の血の一滴をも吸いあげると同時に、一般の不満がいつかはっきりした反乱になることを欲しないならば、最後の権利までも強制的にとりあげねばならなかったからだ。

前に述べた原則と逆に、われわれ国家社会主義者にとっては、次のような基礎的規範が生ずる。すなわち、対外的には市民の利益を最大の範囲で認め、保護する力にみちた国家主義のドイツ国は、対

内的には国家の恒常性を心配する必要もなく、自由を提供することができる。だが他方強力な国家主義政府は、個人の自由や各邦の自由における大きな干渉にすらも、個々の市民がこうした処置の中に自民族が偉大になる手段を認める場合には、ドイツ国家という考え方をそこなわずに行なうことができるし、責任をとることもできるのである。

統一化の傾向　もちろん世界中のすべての国々は、その内部組織においては一定の統一化に近づいている。ドイツもこの点では例外ではない。今日すでに実際にその組織の笑止千万なほどの大きさによって、ないのと同じような個々の連邦の「主権」について語るなどということは、ナンセンスである。交通の分野においても、個々の連邦国家の重要性はますます低下している。現代の交通、現代の技術は、距離と空間をますます収縮させている。かつての国家は今日ではもはやただ一地方であるにすぎず、現代の国々は以前は大陸と同じぐらいに考えられていたのだ。純技術的に考えれば、ドイツのような国を統治する困難さは、百二十年前のブランデンブルクのような一地方を管理する困難さより大きくはない。ミュンヘンからベルリンまでの距離を克服することは、今日では百年前のミュンヘンからシュタルンベルクの距離を行くよりもたやすい。そして今日の全ドイツ国の領土は現今の交通技術の状態では、ナポレオン戦争の時代の中程度のドイツの一連邦国家よりも小さいのである。所与の事実から生ずる結果を見ないものは、時代におくれる。そういう人々は、いつの時代にもいたし、また将来においてもつねにいるだろう。けれどもかれらは歴史の車輪の速度をおくらせることはほとんどできないし、停止させることは決してできない。

中央集権化の濫用　われわれ国家社会主義者は、これらの真理の必然の結果を盲目的に通り過ぎてはいけない。ここでもまたわれわれは、いわゆる国家主義的ブルジョア政党の空文句につかまえられてはいけない。わたしが空文句ということばを用いるのは、これらの政党自体がまったくその意図を遂行する可能性をまじめに信じていないからであり、さらにかれら自身が今日のような進展に対して共犯、主犯の罪を負っているからである。特にバイエルンでは、中央集権解体の叫びは、実際にみんなまじめな底意もない、政党のつくり物にすぎなかった。これらの政党は、かれらの空文句から実際にまじめにやらなければならなくなったときには、いつも例外なしに、みじめにも思うようにできないのだった。ドイツ帝国によるバイエルン国家のいわゆる「主権の略奪」はどれも、不快なほえ声は別として、実際は無抵抗に甘受された。そのうえ、この狂気のような体制に対して本気で反抗するようなことを誰かがあえてやったならば、その人は「今日の国家の基礎にそむくものとして」、その場合にはその政党から放逐され、弾劾され、投獄されるか違法の演説禁止によって口を封ずるまで、追求されたであろう。まさにそこから、われわれの支持者は、これらのいわゆる連邦主義の連中の内面的虚偽を、最もよく認識しなければならないのだ。宗教がいくらかそうであるように、かれらには連邦的国家思想も、往々にして不潔な党の利益のための手段にすぎないのである。

＊

個々の連邦国家の抑圧　このようにある統一化が、特に交通制度の面で、たいそうな自然に思われても、今日の国家におけるこういう進展に対しては、すなわちこの処置がただ宿命的な外交政策を庇護し、可能にする目的をもつだけであるならば、われわれ国家社会主義者にとっては最も峻厳な態度をとるべき義務があるのである。今日のドイツ国は鉄道、郵便、財政等のいわゆる国有化を、まさ

しく高度な国家政策的観点から企てず、ただそれでもってはてしない条約履行政策のための手段と担保を手に入れるためにのみやっているのであるから、われわれ国家社会主義者は、こういう政策の遂行を困難にし、できれば妨害するのに適していると思われるすべてのことをやらねばならない。だが、わが民族の生きるために重要な制度の中央集権化に対する今日の闘争は、それに属している。それはそうすることによって、われわれの戦後政策のために何十億という金額と担保物件を外国に対して流すためにだけ認められているのだ。

こういう理由から国家社会主義運動はまた、そういう試みに反対の態度をとったのである。

われわれをこの種の中央集権化に反対するように誘うことができる第二の根拠は、全体の効果においてドイツ国民にこのうえもなく苦しい不幸をもたらした政府の組織の権力が、そのために国内で高まりうるだろう、ということである。ドイツ国民にとって真に呪いとなった今日のユダヤ的＝民主主義的ドイツ国は、まだ全体にこの時代精神にみたされていない個々の連邦国家の批判を、個々の連邦国家を圧迫して完全にその重要さを失わせることによって、無力にしようと試みているのである。これに対して、われわれ国家社会主義者は、これら個々の連邦の反対に、ただ成功を約束する国家的な力の基礎を与えるだけでなく、中央集権化一般に対するかれらの闘争を、より高い国家的一般的なドイツの利益の表現にしようと試みる完全な誘因をもっているのだ。それゆえバイエルン人民党が小心な分離主義の観点から、バイエルン国家のために「特権」を維持しようと努めているのに、われわれはこの特殊な立場を、今日の十一月革命の民主主義に対立するより高い国家的利益への奉仕にふりむけるべきである。

中央集権は政党経済に好都合である　さらにわれわれを当今の中央集権化に対して闘う決意をさせた第三の理由は、次のような確信である。すなわち、いわゆる国有化の大部分は事実上統一化でもなく、決して簡易化でもなく、たいていの場合には各邦の主権から諸制度を奪い、その門をさらに革命諸党の利益のために開くことを眼目としていたのである。ドイツ史上、いまだかつてこの民主主義的共和国におけるほど無恥な情実政治が行なわれたことはない。**今日の中央集権化憤激の大部分は、かつて有能なものに道を解放することを約束し、だがその場合官職や役職を占めるともっぱらその党に属するものだけを注意するという政党の責に帰するのである。**特にユダヤ人は、共和国の成立以来、信じられないような多数で、ドイツ国によってかき集められた経済企業や行政部門に氾濫し、両方とも今日ではユダヤ人の活動の分野となったのである。

とりわけこの第三の顧慮は、戦術的理由からわれわれをして、中央集権化の途中でこれ以上のすべての処置をきびしく吟味し、もし必要ならば、これに反対の態度をとる義務を負うものでなければならない。だがわれわれの観点はそれと同時につねにより高い国家政策的なものであって、決して小さな連邦分離主義的なものであるべきでないのである。

ドイツ国の国家主権　この最後の所見は、われわれ国家社会主義者がドイツ国自体に各連邦国家の主権以上のより高い主権を具現する権利を与えないだろうという考えを、われわれの支持者の間におこさせないために必要である。この権利については、われわれの間に少しの疑いもさしはさむべきでないし、またさしはさむこともできない。**われわれにとって国家それ自体はただ形式であって、けれどもその本質的なものはその内容であり、国民であり、民族であるから、国民や民族の至高の利益**

に他のすべてのものが従属することは、明らかである。特にわれわれは、国民の内部と国民を代表するドイツ国の内部において、個々の国家が強権政策的至上権や国家主権を承認することはできないのである。外国や相互の間にいわゆる代表機関をもっている個々の連邦国家の不法は廃止しなければならないし、いつか廃止されるであろう。こんなことが可能であるかぎり、外国はいぜんとしてわがドイツ国の組織の堅固さに疑いをもち、それに応じてふるまうであろうが、われわれは驚くにあたらないのである。この代表機関の不法さは、百害あって一利もないだけ、それだけ大きいのである。外国にいるドイツ人の利益が、ドイツ国の大公使によって守られえないならば、今日の世界秩序の範囲で笑われるような小国家の公使によってなお守ることはできないのである。これらの小連邦国家の中に、人々は実際にドイツ国の内外で——特にある一つの国によってつねに喜んで見られている解体の努力に対する攻撃点だけを見うるのである。またわれわれ国家社会主義者は、なにかある老衰しきった高貴な根幹がほとんどすでにたいそう枯れてしまった小枝に、公使の衣服をつけて新しい畑を与えるというような理解をこれに対してもってはならない。外国におけるわが外交代表機関は、すでに旧ドイツ帝国の時代からたいそうあわれむべきものであったが、当時行なわれた経験にいっそう補足するようなことは、このうえもなく余計なことである。

諸邦の文化的課題　各邦の意義は将来、絶対にもっと文化政策的領域におくべきである。バイエルンの意義に最も多くつくした君主は、頑固な、反ドイツ的態度をとった小邦分立主義者ではなく、むしろ大ドイツを志し、同様に芸術的感覚をもっていたルートヴィヒ一世であった。かれは国の力を第一にバイエルンの文化的地位の拡張に向け、他の方法でなしえたであろうもの以上にもっとよいも

の、もっと永続的なことを成し遂げたのだ。かれは当時ミュンヘンをたいしたものでない地方的王城の地のわくから偉大なドイツの芸術の都の大きさにまで高めることによって、一つの精神的中心点をつくったのであり、それは今日でもなお本質的に差異のあるフランケン人をこの国にひきつけることができるのである。ミュンヘンが、昔ながらのミュンヘンにとどまっていたと仮定するならば、バイエルンにおいても、ザクセンにおけると同じような過程がくり返されたであろう。バイエルンのライプツィヒたるニュールンベルクがバイエルンの都市とならず、フランケンの都市になったであろうという相違をもっているだけだ。「プロイセンを倒せ」という叫びが、ミュンヘンを大きくしたのでなく、ドイツ国民に観賞され、尊重されねばならず、そして観賞され、尊重される芸術の宝をこの都市に贈ろうとした王が、この都市に意義を与えたのだ。そしてそこにまた将来に対する教訓がある。**各連邦国家の意義は、将来一般にむしろ国家的、強権政治的領域にはないであろう。わたしはそれを種族的、あるいは文化的領域に見るのである。**だがここにさえも、時は水準化の作用を及ぼす。今では往来がたやすくできるので人間をこのように雑然と揺り動かしている。すなわち徐々に絶えず種族の境界が消され、そしてそこで文化像さえも次第にならされはじめているのである。

軍隊と個々の連邦国家　軍隊は、特にすべての個々の連邦国家の影響からきびしく離すべきである。来るべき国家社会主義の国家は、過去の欠陥におちいって、そして軍隊がもっていない、またもってはならない任務を軍隊になすりつけるべきではない。**ドイツ軍隊は種族の特性を維持するための学校であるべきではなく、むしろすべてのドイツ人の相互理解と適合の学校としてあるのである。**さもなければつねに国民生活において分離的であるかも知れないものが、軍隊によって合一的な力にも

ドイツ国民の中に位置せしめるべきである。かれらの故郷の境界でなく、自分の祖国の境界を、かれらたらされねばならない。さらに個々の若い人々を、小さな自分の地方の狭い視界から引きあげて、ド
は見ることを学ばねばならない。というのは、かれはいつかは国境を守護すべきであるからだ。それゆえ、若いドイツ人を自分の故郷に置いておくことは無意味であり、軍隊時代にドイツをかれに見せるほうが、目的にかなっているのだ、このことは、今日若いドイツ人が昔のように遍歴に出て、それによって自分の視界を広げることをやらなくなっただけ、なお必要である。これを認識すれば、若いバイエルン人をできればさらにミュンヘンにおいておく、フランケン人は、ニュールンベルクに、バーデン人はカールスルーエに、ヴュルテンベルク人はシュトゥットガルトにおいておくなどということは非常識ではなかろうか？　そして若いバイエルン人にあるときはライン川を、そしてあるときは北海を見せてやり、ハンブルク人にはアルペンを、東プロイセン人にはドイツ中部山岳を、等々のほうが、より理性的ではなかろうか？　地方人的性格は部隊内にとどまるべきであるが、駐屯地にまで及んではならない。中央集権化の企てはすべてわれわれの不賛成を見いだすかも知れない。だが軍隊の中央集権化だけは決してそうではないのだ！　反対に、われわれがそういう企てを歓迎したくなくても、この一つについてはわれわれは喜ばねばならなかった。今日のドイツ軍の大きさでは、個々の連邦国家の部隊を保持することはバカげているが、それをまったく度外視すれば、われわれはドイツ国軍に生じた統一化の中に、われわれも将来、国民軍の再編成のさいに決して無視してはならない一歩を見るのである。

一つの民族——一つの国家　そのうえに、若い勝利をはらんだ理念は、その思想を推進する活動

力をおとろえさせるようなすべてのしっこくを拒否しなければならない。国家社会主義は、原則的に従来の連邦国家の境界を顧慮することなく、全ドイツ国民にこの原理を押しつけ、かれらをその理念と思想で教育する権利を要求しなければならない。教会が政治的境界によって束縛や制限を感じないのとまったく同様に、国家社会主義の理念も、わが祖国の個々の連邦国家の領域によってそれらを感ずるものではないのである。

国家社会主義の教説は、個々の連邦国家の政治的利益の召使ではなく、他日ドイツ国民の主となるべきものである。それは一民族の生命を規定し、新たに秩序づけるべきものであり、それゆえわれわれが拒否した発展が描いた限界を、かるく片づける権利をやむをえず要求しなければならない。

その理念の勝利が完全になればなるほど、さらにこの理念が国内で提供する各々の人々の自由も大きいであろう。

第十一章　宣伝と組織

理論家――組織者――扇動者

一九二一年は、種々の点でわたしおよび運動にとって、特別な意義をもっている。

ドイツ労働者党への入党後、わたしはただちに宣伝の管理をひきうけた。わたしはこの部門が目下のところ格段に重要な部門であると思った。とにかくはじめのうち、組織の問題に頭を悩ますことは、理念自体をかなりの数の人々に知らせるよりも、重要ではなかった。宣伝は組織にはるかに先立って急ぎ、それによってまず働きかけるべき人材を獲得しなければならなかった。わたしもあまりに急速な、あまりに杓子定規の組織に反対するものである。その場合にはたいてい死んだ機構だけができあがるが、いきいきした組織はめったにできあがらない。というのは組織は、有機的生活、有機的発展にその存立のおかげをこうむっているものだからである。一定数の人々をつかんだ理念というものは、つねにある秩序をえようと努力するものであり、その内面的形成は非常に大きな価値がある。だが、この場合も、少なくとも初めのうちは、すぐれた頭脳の持ち主には本能的に抵抗するように、個々人を迷わす人間の弱点を計算に入れなければならない。組織が上から機械的につくられるや、一度任命された、自分でも才能のないことを認めている頭脳の持ち主が、運動の内部でもっと有能な分子が台頭してくるのを、嫉妬(しっと)から妨害しようとする大きな危険が生じてくる。こういう場合は、危険な意味をもつ可能性がある。

こういう理由から、理念をまず一定期間中央から宣伝的に普及し、さらに次第に集まってくる人材を慎重に、指導者たる頭脳があるかどうか厳重に検査し、吟味することが、目的にかなっている。しかも本来見ばえのしない人間を、それにもかかわらず生まれながらの指導者と見なさねばならないことが、しばしば明らかになる。

もちろん理論的認識が豊富であるからといって、指導者としての特性、指導者としての資質が有能であるという特性的証拠であると見ようとするのは、まったくあやまりであろう。

往々にしてこの逆がほんとうだ。

偉大な理論家が偉大な組織者であるのは、ごくまれな場合だけである。理論家や計画者の偉大さは、まず第一に抽象的に正しい法則の認識と確認にあるのであり、一方組織者は、まず第一に心理家であらねばならないからだ。かれは人間をあるがままに受けとらねばならない。それゆえかれは人間を知らねばならない。かれは人間を過大評価してもいけないが、また大衆のなかにいる人間を過小評価してもいけない。反対に、生きた有機体として最も強い不断の力にみち、そして理念を担って、それの成功にいたる道を開くのに適切な組織を、あらゆる要因を顧慮してつくるためには、弱点や獣性も同じように計算にいれるように努めねばならない。

だが偉大な理論家が、偉大な指導者であることはもっとまれである。むしろ扇動者のほうが指導者にむいているだろう。ある問題についてただ学問的にのみ研究している多くのものは、好んで聞こうとしないが、しかしそれは理解しうるのである。ある理念を大衆に伝達する能力を示す扇動者は、しかもかれが単なるデマゴーグにすぎないとしても、つねに心理研究家であらねばならない。そうすればかれは、人間にうとい、世間から遠ざかっている理論家よりも、つねに指導者にもっとよく適する

であろう。というのは、指導者であるということは大衆を動かしうるということだからである。理念を形成する才能は、指導者の才能とはまったく別のものである。その場合、人類の理想と人類の目標を設定することや、あるいはそれを実現することと、どちらがより重要であるかについて争うことは、まったく無用なことである。人生において非常にしばしばあるように、ここでも前者は、後者なしではまったく無意味であるだろう。最もりっぱな理論的洞察は、指導者が大衆をその方向に動かさなければ、目的も価値もないのである。そして逆に、もしも才気煥発の理論家が人類の格闘のための目標を設定しないならば、すべての指導者としての天才も指導者としての熱も、無目的、無価値であるにちがいないのではなかろうか? だが理論家と組織者と指導者が一人の人物の中に結合しているのは、この世の中でこのうえもなくまれに見いだされうるものである。この結合が偉人をつくるのである。

支持者と党員　すでに述べたように、わたしがこの運動で活動をはじめた最初のころには、宣伝に専念した。後に組織の最初の分子としての役割をはたしえた人材を養成するために、少数の中核分子に次第に新しい教説を注ぎこむべく宣伝を成功させねばならなかった。そのさい宣伝の目標はたいがい組織の目標をこえた。

もしも運動が、ある世界を破壊し、そのかわりに新しい世界を建設するという意図をもつならば、さらに次のような原則について、自分たちの指導者の間で完全に明確になっていなければならない。すなわち、いかなる運動も、獲得した人材をまず二大グループ、つまり支持者と党員とによりわけねばならない。

宣伝の任務は支持者を募集することであり、組織の課題は党員を獲得することである。

運動の支持者とは、運動の目標に同意を明らかにするものであり、党員とはその目標のために闘うものである。

支持者は、宣伝によって運動に好意をもたせられる。党員は組織によって、自分自身新しい支持者を募集するために協働し、その支持者の中からさらにまた党員をつくることができるようにうながすのである。

支持者たることがただ理念の受動的承認だけを前提とするのに対し、党員たることは活動的な主張と弁護を必要とするのであるから、十人の支持者に対していつもせいぜい一人ないし二人の党員がいるだけである。

支持者であることはたんに認識に根ざしているにすぎないが、党員たることは認識されたものをみずから主張し、さらにこれを広める勇気に根ざしているのである。

受動的な形での認識は、怠惰でいくじのない大多数の人間にふさわしい。党員たることは活動的志操を前提とし、それとともに少数の人間だけにふさわしいのである。

したがって宣伝は、理念が支持者を獲得するよう孜々として世話しなければならないが、一方組織は支持者層自体の中から最も価値あるものだけを党員にするようにこのうえもなく鋭敏に心がけねばならない。それゆえ宣伝は、宣伝によって教えられる各人の意義、かれらの才能、能力、理解力あるいは性格について頭を悩ます必要はない。一方組織は、こういう分子の群の中から、運動の勝利を実際に可能にするものを注意深く集める必要があるのである。

＊

宣伝と組織　宣伝はある教説を全民族に押しつけようとし、組織はそのわく内に、心理的理由か

ら理念のそれ以上の普及にとって障害となる恐れのないものだけを抱えこむ。

＊

宣伝は、全体を理念の意味において説得し、この理念の勝利の時のためにかれらを成熟させる。一方、組織は勝利のために闘う能力と意志があると思われるその支持者を、絶えず組織的に、そして戦闘能力のあるように結合させることによって、勝利を闘いとるのである。

＊

理念の勝利は、宣伝が人間をその全体において説得する範囲が広ければ広いほど、さらに闘争を実際に行なう組織が排他的で締っており、堅固であればあるほど、それだけ早く可能になるのである。それゆえ支持者の数は、どんなに多くても十分すぎることはないが、党員の数は小さすぎるよりはむしろ大きくなりやすいのである。

＊

もし宣伝が全民族を一つの理念でみたしたならば、組織は小人数でその必然の結果をひきだすことができる。それとともに宣伝と組織、すなわち支持者と党員は一定の逆比例をなしている。宣伝がうまく働けば働くほど、組織はそれだけ小さくてよい。そして支持者の数が多ければ多いほど、それだけ党員の数は少なくてよい。そして逆に、宣伝が拙劣であればあるほど、それだけ組織は大きくなければならない。そして運動の支持者群が小さければ小さいほど、それだけその党員数は、かれらが一般にそのうえある成果を期そうとするならば、より大きくなければならない。

＊

宣伝の第一の任務は、その後の組織のために人を獲得することであり、組織の第一の任務は宣伝の

継続のために人を獲得することである。宣伝の第二の任務は現状を打破することと新しい教説でもってこの状態を貫徹することにあるが、一方、組織の第二の任務はこの教説の究極的な成果を達成するために権力闘争をすることでなければならない。

＊

世界観の革命の最も決定的な成果は、もし新世界観ができるかぎりすべての人に教えられるならば、また必要な場合には、あとで強制的にたたきこまれるならば、つねに闘いとられるであろう。一方、理念の組織、つまり運動は、問題になる国家の中枢神経を占めるために絶対必要であるだけの人間を集めるべきである。

すなわちいいかえれば次のようである。

真に偉大な世界変革的運動においてはどれも、宣伝がまずこの運動の理念を普及させなければならない。それゆえに宣伝は、孜々として新しい思考過程を他のものに説明し、かれらを自己の地盤に引きいれるか、あるいはかれらがいままでもっていた確信をぐらつかせるようにつとめるだろう。さて教説の普及、つまりこの宣伝というものは、バックボーンをもたねばならないから、教説はしっかりした組織を与えねばならないだろう。組織はその党員を、宣伝によって獲得された一般の支持者層から得る。支持者層は、宣伝が激烈に行なわれるほど、ますます早く成長し、そして宣伝は背後にある組織が強ければ強いほど、また元気旺盛(おうせい)であればあるほど、ますます活動することができるであろう。

それゆえ組織の最高の任務は、何か運動の党員間の内部的不一致が、分裂やひいては運動における活動の弱化に導かないよう、さらに断固たる攻撃精神が断絶せず、たえず更新され堅固になるよう、配慮することである。それであるから党員数は際限もなく増大する必要はない。反対である。ただ小

部分の人間だけがエネルギッシュな勇敢な素質をもっているのだから、その組織を無限に拡大する運動は、そのためにいつか必然的に弱化するだろう。一定数以上に成長した組織すなわち党員の数は、次第にその闘争力を失い、理念の宣伝を決然として、攻撃的に支持し、ないしは利用することがもはやできないのである。

さて、理念が大きくなり、内面的に革命的であればあるほど、ますますその党員層は活動的になってくるだろう。教説の変革的な力とその担い手に対する危険とは結合しており、その危険があるということが小心な卑怯な俗物を遠ざけるのに適しているように思えるからである。かれらはひそかに支持者だと感じているだろうが、しかし党員となって公然とこれを表明することは拒否するのだ。だがそれによって、真に変革的な理念の組織は、宣伝によって獲得した支持者の中の最も活動的なものだけを、党員として得るのである。しかし、自然的な選抜によって保証された運動の党員の活動力の中に、その運動のそれ以後の活動的な宣伝や同様に理念実現のための効果ある闘争のための前提がある。

党員採用の制限　運動に迫りうる最大の危険は、あまりにも急速な成果によって党員層が異常に膨張するということである。というのは、運動もそれがきびしい闘争をしなければならないかぎり、卑怯な利己的な素質をもっているすべての人々から非常に敬遠されるが、その発展によって党の大成功が確実らしくなってきたり、実際に成功がおさめられたとなると、急速に党員を獲得しうるのがつねだからである。

多数の常勝の運動が、成功を前にして、あるいはもっとよくいえばその意図がいまや実現されるという一歩手前で、なぞのような内的弱点からとつぜん落伍し、闘争を中止し、そしてついに倒れる理

由は、そこに帰するのである。初期の勝利のために、多数の劣悪な、品位のない、だが特に卑怯な分子がその組織にはいってくる。そしてこの劣等者がついには闘争力をもったものよりも優勢になり、今度は運動を自分たちの利益に奉仕するように強制し、自分たちの貧弱な豪胆さの水準にまで押しさげ、そして本来の理念の勝利を完成させるためにはなにもしないのである。それとともに熱狂的な目標は抹殺され、闘争力はおとろえ、あるいはこういう場合にブルジョア社会の人々がいつも非常に適確にいうのだが、「酒が水で割られた」ことになる。そうなるともちろん、もはやその木はどこまでも成長することはできなくなるのだ。

それゆえ運動は、純粋な自己保存衝動から、成果が自分の側にあがるやいなや、ただちに党員採用を阻止し、それ以後はただこのうえもなく慎重に、またこのうえもなく徹底的に吟味して、その組織の拡大をはかることが非常に必要である。こうしてのみ運動は、運動の核心をそこなわずに新鮮に、健全に保つことができるのである。**さらにもっぱらこの核心だけが、その後も運動を指導し、すなわち運動が一般的承認をうるように導くべきである宣伝を規定し、そして権力の所有者として自分たちの理念を実際に実現するために必要な行動をとるように、配慮しなければならない。**

組織は古くからの運動の根幹から、獲得された組織のすべての重要な地位を占めなければならないばかりでなく、また全指導権を形成すべきである。そしてそれを党のいままでのいろいろの原則や教説が、新国家の基礎や内容となるまで続けなければならない。そうしてはじめて、その精神から生まれたこの国家の特殊な制度に対して徐々に手綱が与えられたのである。だがそれもたいていはただ相互の闘争によってのみ実行される。それは人間の洞察の問題であるよりも、はじめからよく認識されてはいるが、しかし永久に操縦されえない諸力のはたらきと効果の問題であるからである。

すべての偉大な運動は、それが宗教的性質のものであると、政治的性質のものであるとを問わず、その力強い成功を、この原則を認識し、適用したことにのみ帰すべきである。だが特にすべての永続的成功は、この法則を顧慮することなくしては、まったく考えられないのである。

＊

無気力者の威嚇　わたしは党の宣伝主導者として、今後運動が大きくなるための基盤を準備するために、非常に努力しただけでなく、この活動におけるたいへん過激な意見によって、組織が最良の人材のみを獲得するように活動した。というのは、わたしの宣伝が過激であり、挑発的であればあるだけ、ますます弱虫や小心者を威嚇して後退させ、われわれの組織の第一の核心にかれらが侵入することを妨げたからであった。かれらはおそらく支持者であることに変りはなかったが、大声で強調せずに、この事実を不安げに黙っていたのは確かである。自分はもともとまったく全面的に同意しているが、それにもかかわらずどんなことがあっても党員にはなりえないと、わたしに当時確言したものが幾千いたかわからない。運動は非常に過激であるから、党員となると、各人がさだめしこのうえもなくやっかいな異議をもうしたてられ、そのうえ危険にさらされるだろう。それゆえ人々は行儀正しい、平和な市民が、かれが心から完全に適切であると考えるときでも、少なくともはじめは傍観していることを、悪くとってはいけないのであろう。

そしてそれはそれでよかったのだ。

もし心から革命に同意しないこれらの人々が、当時みんなわが党に、しかも党員としてきたならば、われわれは今日殊勝な団体と見られるだろうが、もはや若い、喜んで闘争する運動とは見られなかったであろう。

わたしが当時われわれの宣伝に与えたいきいきした、無鉄砲な形式が、われわれの運動の過激な傾向を固め、保証したのである。というのは爾後ほんとうに過激な人間だけが――例外をのぞいて――党員になる覚悟ができたのだからである。

だがそのさいこの宣伝は、早くも短期間で何十万の人々が、たとえまた個人的には党のために犠牲になったり、あるいは入党したりするには臆病すぎたとしても、心から正しさを信じただけでなく、われわれの勝利を希望するような影響を及ぼしたのである。

一九二一年の中ごろまではこの単なる勧誘的活動でまだ十分でありえたし、また運動にも有益であることができた。だが同年の盛夏の特殊なでき事が、いまでは徐々に目に見えてきた宣伝の成果に組織が適応され、等置されるように指示しているように思えた。

運動の再編成　民族主義的空想家のグループが、当時の党首の促進的支持のもとに、党の指導権を手に入れようとした企てがあったが、この小陰謀は崩壊に導かれ、党員総会において運動の全指導権が一致してわたしにゆだねられた。同時に新しい党則の採用が行なわれた。それは運動の第一議長に全責任が負わされ、委員会の決議は原則的に廃止され、そのかわりに分業制が導入された。それはそれ以来りっぱに実証されたのである。

わたしは、一九二一年八月一日から運動の内部再編成を引き受けた。そしてそのさいすぐれた力をもつ一連の人々の支持をみいだした。わたしは特別付録で名をあげることが必要であると考える。

さて宣伝の成果を組織的に利用し、かくして確立しようと試みた場合、わたしは従来の一連の習慣を一掃し、現存の政党が決してもっておらず、あるいはまた承認さえしていない原則を設定しなけれ

ばならなかった。一九一九年から一九二〇年にかけて、運動はその指導のために委員会をもっていた。それは党員集会――それ自体また規定によって定められていたのだが――によって選ばれた。委員会は第一会計係、第二会計係、第一、第二の書記、および長として第一、第二議長から成りたっていた。なお一名の党員監督者、宣伝部長および種々の陪席者が加わった。

この委員会は、おかしなことだが、本来運動自体が最も激しく闘おうとしているもの、すなわち**議会主義**を具体化していた。というのは、最小の地方管区から、さらに管区、大管区、州をこえて、国家の指導部にいたるまで具体化しており、その下でわれわれみんなが苦しんできたし、いまもなお苦しんでいる原則が問題になったことはもちろんである。

もし内部組織の基礎が悪いため運動が永久に腐敗し、かくして後日高い使命を果たすことができなくなるに違いないならば、いつかこの点で転換を行なうことは、緊急に必要なことであった。

議会主義の廃止　議事録がとられ、多数決で投票し決定が行なわれる委員会は、実際には小さい議会であった。ここでもあらゆる個人的な引責や責任というものが欠けていた。ここでもわれわれの偉大な国家代表機関におけると同じような不合理や同じような無理が支配していた。この委員会のために人々は書記を任命し、会計のための人々を、組織の党員のための人々を、宣伝のための人々を、そして誓ってなおその他のもののための人々を任命した。だが個々の問題ごとに、みんな共通の態度をとらしめ、そして投票によって決せしめるのだった。それゆえ、宣伝のために出席していた男が、財政係に関係していることがらについて投票し、そして財政係が組織に関することがらについて投票し、さらにその男が、ただ書記だけが関係すべきである事項についてまた投票する、等々だ。

だが会計係、書記、党員係等が宣伝に関する問題について判断すべきであるならば、人々はなぜはじめに宣伝のために特別の人間を定めたのかは、健全な頭脳の持ち主にはまったくわからないらしい。それは、ある大工場企業でつねに他の部門や他の分野の取締役や設計者たちが、自分たちの仕事にまったく関係のない問題を決定しなければならないならば、わけがわからないのと同じである。

わたしはこういう不合理には従わず、早くもごく短期間に、委員会に出席しなくなった。わたしはわたしの宣伝をし、それでおしまいだった。そしてそのうえ、およそこの領域でなにもできもしない男が、わたしに口出しすることを禁じた。同様にわたしもまた逆に他人に文句をいったりしなかった。

新しい規定が採用され、わたしが第一議長の地位に任ぜられ、その間にわたしに必要な権威とそれに応ずる権利を与えられたとき、またただちにこのナンセンスなことが終った。委員会の決議のかわりに、絶対責任の原則が導入された。

指導者の責任　第一議長は、運動の全体の指導に責任がある。かれは自分の下に立つ委員会の連中や、その他なお必要な協力者を、なすべき仕事に配当する。これらの人々はいずれも、それによって自己にゆだねられた任務に対してすべて責任がある。かれは全員の協働のために配慮し、それぞれの場合に応じて人員を選択し、一般方針を与えることによって、この共同の仕事自体を導かねばならない第一議長にだけ従属するのである。

この原則的責任制のおきては、少なくともこれが党の指導に関するかぎり、次第に運動の内部においては自明のことになった。小さな地方管区においては、そしておそらく管区や大管区においてはなおさらだが、この原則が貫徹されるまでには、かなりの年月がかかるであろう。というのは臆病者や

無能者はつねにこれに対して抵抗するにちがいないからだ。かれらにとってはある企てに対する単独責任はつねにいやなことだろう。かれらは、むずかしい決定があるごとに、いわゆる委員会の多数による背面援護があるならば、そのほうがもっと自由で快適に感ずるのだ。だがこういう志操には、できるだけ猛烈に反対して、責任に対する卑怯さは、少しも許容せず、それによって、たとい長年の後にはじめてそうなっても、ほんとうにそのために適任でありかつ選ばれたものだけを、指導部にもっているという指導者としての義務と、指導者としての手腕についての見解をえようと目ざしていくことが、わたしには必要だと思われる。

だがいずれにせよ、議会主義的妄想を克服しようとする運動は、みずからをそれから解放しなければならない。運動は、またこういう基礎の上にのみ、闘争に対する力をうることができるのである。

すべてあらゆるところで、多数者が支配している時代において、みずから主義として、指導者思想の原理と、それによって条件づけられる責任負担の原理をねらいとする運動は、他日数理的確信でもって、いままでの状態を克服し勝利者として登場するであろう。

運動の萌芽状態　この考え方は、運動の内部に完全な新組織をもちこんだ。そしてその論理的成果として、運動の事務的経営が一般の政治的指導から非常にはっきりと区別された。原則的にこの責任負担の思想はまた、全体の党経営にも広げられ、それが政治的影響から解放され、純経済的視点をとるやいなや、必然的にそれにつれて党経営の健全化が行なわれた。

一九一九年の秋、わたしが当時の六人の党にはいったとき、それは事務所もなく、使用人もおらず、そのうえ用紙やスタンプさえなく、印刷物はなにもなかった。委員会の場所は、はじめはヘルン街の

レストランだった。後にガスタイクのカフェーになった。なにもできない状態だった。それでけっきょくわたしはその後しばらく動きまわって、党のために別室か、その他会場のようなものを賃借りしようとして、数多くのミュンヘンのレストランや料理店をさがしまわった。タールにある以前のシュテルンエッカーブロイに小さい丸天井のある部屋がみつかった。それは以前に一度バイエルンの上院議員が一種の酒場として利用していたものだった。その部屋は陰鬱で暗く、したがってかれらの昔の目的にはぴったり合っていたが、新しい利用目的にはそわなかった。路地――そこに面してただ一つ窓があったが――は狭く、最も明るい夏の日でさえ部屋は陰鬱で、暗いままであった。これがわれわれの最初の事務所になった。間代は一か月わずか五十マルクだった（当時のわれわれには巨大な金額だった！）が、われわれは大きな要求をすることができず、われわれの引越し前にかつて議員連のために張られてあった壁の薄板がただちに引きはがされ、それで部屋はいまやまったく事務室というよりもあなぐらだという印象のほうがむしろ残っているが、不平さえこぼせなかった。

運動の構成　だがこれはそれでもたいへんな進歩だった。徐々にわれわれは電燈を引き、ずっとおくれて電話も引いた。借り椅子つきの机もはいり、最後に開架式戸棚や、いくらか遅れて戸棚がはいった。家主のものである二つの食器棚がビラやポスター等の保管のために利用されることになった。いままでのやり方、すなわち一週に一度開かれる委員会によって運動を指導していくやり方では、ついにやっていけなくなった。運動のために一人の使用人を雇わないと、継続的な事務の仕事が保証できなくなった。

それは当時、たいへん困難だった。運動はまだわずかの党員しかもたず、かれらの中から、自分自

身のためには求めるところが最も少なく、多方面の運動の要求を満足させうるような適当な人物をみつけだすことはむずかしかった。

長い間探したあげく初代の党の事務長に、兵士であり、かつてわたしの戦友だったシュスラーをみつけだした。はじめかれは毎日午後六時から八時までの間、われわれの新しい事務所にやってきた。その後五時から八時まで、ついには毎日午後、そしてまもなく一日中引き受けて、朝から夜遅くまでかれの仕事をした。かれは勤勉で、誠実で、根っからの正直な男であった。かれはみずからすべてに骨を折り、特に運動自体に忠実にしたがった。シュスラーは、自分のもっている小さいアドラー・タイプライターを持ちこんだ。それがわれわれの運動に用いられたこの種の最初の道具であった。これはその後分割払いで党のものになった。カード目録や党員簿の盗難よけのために、小さい金庫が必要であるように思えた。だからその調達は、大金を——われわれが当時いくらかもっていたとしても——入れるためではなかった。反対にすべては貧乏きわまりなく、そしてわたしはしばしば自分のとぼしい貯金を寄付したものだった。

一年半後には、事務所は狭くなった。そしてコルネリウス街の新しい場所へ移転した。われわれが引越したところはまたもや飲食店だった。だが今度はわれわれはもはや一部屋だけでなく、三部屋とそれに付属した大きな広間をもった。それは当時われわれにはまったく大したものに思われた。われわれはここに一九二三年十一月までいた。

一九二〇年十二月に「フェルキッシァー・ベオバハター紙」を手に入れた。これは、すでにその名が示しているように一般に民族主義的利益を擁護したものだが、いまや国家社会主義ドイツ労働者党の機関紙に転換されることになった。最初は週二回発行したが、一九二三年の初めに日刊紙になり、

一九二三年八月末以後はよく知られるように大判になった。
わたしは当時新聞界についてはまったくの新米として、また多くのにがい経験をなめなければならなかった。
巨大なユダヤ新聞に対して、真に重要な民族主義的新聞がただ一つすら存在していないという事実は、それ自体考えてみなければならなかった。それは、わたしがさらに実際に何回となく自分で確認しえたように、ほとんど大部分いわゆる民族主義的企業一般のへたなやり方に原因があった。それらはあまりにも、主義を実行に先行させねばならないという観点に引きずられていた。主義はそのうえ決して皮相的なものであってはならず、実行の中にこそその最もりっぱな表現をみいだすのであるかぎり、それはまったく誤った観点であった。民族のためにほんとうに価値あるものをつくるものが、それと同時に同じような価値ある主義を示すのであり、一方実際に民族のためには有用な仕事を果たさず、単に主義だけをみせかけるものは、あらゆるほんとうの主義を害するものである。そういう人間はまた自分の主義で社会をなやますのである。
「フェルキッシァー・ベオバハター紙」もすでにその名称が語っているように、いわゆる「民族主義的」機関紙で、あらゆる長所をもっていたが、また民族主義的組織につきものの欠点や弱点をもっと多くもっていた。企業の管理は内容がどんなに高潔であっても、商業的には不可能なものであった。この場合も、民族主義新聞は民族の寄付金で維持されねばならないという考えが基礎になっており、そのかわりに民族主義新聞は他の新聞との競争をやりとげねばならないのであり、企業の事務的経営の怠慢や失敗を、人のよい愛国者の寄付金によってカバーしようとするのは下劣だという考えが欠けていた。

いずれにせよわたしは、やがてその容易ならないことをまもなく認識して、この状態を除去しようと努力した。そしてそのとき幸運が、ある男を知らせてくれて、それによってたすけられた。かれはそれ以来新聞の事務的指導者としてのみならず、党の事務長として運動に無限に多くの貢献をなした。一九一四年、すなわち戦場で、わたしは（当時まだわたしの上官として）党の今日の事務総長**マックス・アーマン**を知った。戦時中の四年間、わたしはほとんどいつもわたしのその後の協力者の異常な能力、勤勉、きちょうめんすぎるぐらいの誠実さを観察する機会をもったのである。

一九二一年の盛夏に、運動が苦しい危機にあり、わたしが多くの使用人にもはや満足できず、そのうえある一人のためにはなはだつらい経験をなめていたとき、ある日偶然にわたしを誘いにきたかつての連隊仲間に、運動の事務長になってくれないかと請願した。長くためらったあとで――アーマンはある有望な地位についていた――かれはついに承諾した。もちろん、かれは決して無能な委員会の手先をつとめなくともよい、もっぱらただ一人のものだけを承認する、という明確な条件つきであった。

党経営に秩序とまじめさをもちこんだのは、商業的に実に広範な知識のあるこの運動の初代事務長の不滅の功績である。それ以来党の経営は模範的であり、運動の支部員もこれに達することはできず、いわんや凌駕（りょうが）することはできなかった。だが人生においては、つねにそうだが、卓越した有能さは、嫉妬（しっと）や悪意の誘因となることがまれではない。もちろんこの場合も人はそれを予期し、我慢して耐えていかねばならなかった。

早くも一九二二年には、一般に運動の事務的および純組織的構成のための確固たる方針が存在していた。すでに運動に所属する全党員をのせた完全な中央のカードもできていた。同様に運動の財政は

健全な軌道にのせられていた。経常支出は経常収入によってカバーされ、臨時収入はただ臨時支出のためにのみ向けられねばならなかった。そのために、困難な時であったにもかかわらず、運動は比較的少額の経常会計を度外視すれば、ほとんど借金もなく、そのうえ額をたえず増加させることさえ成功した。それは私経営におけるように行なわれた。すなわち雇われたものは仕事によってひいでるべきであり、決してただ有名な「主義」だけを主張することはできなかった。すべての国家社会主義者の主義は、まず第一に民族共同体から自分にゆだねられた仕事の実行を喜びと勤勉、能力において示すのである。この点で義務を果たさないものは、主義を誇るべきでない。かれ自身が実際に、それに反して罪を犯しているのだ。党の新事務長によって、あらゆる起りうべき影響に対抗して、党経営は仕事を喜んでしない支持者や党員のための名誉職であってはならないという立場が、激しいエネルギーをつかって主張された。われわれの今日の行政機構の政党のような腐敗に対して激しいやり方で闘っている運動は、自分の機構をそういう悪徳に染まらないようにしておかなければならない。以前の主義からいえばバイエルン人民党に属していたが、その仕事ではすぐれた適性を示した従業員が新聞の経理部に採用されたという場合があった。これを試みた結果は、一般にすぐれていた。各人のほんとうの仕事を公正かつそっちょくに認めることによってこそ、運動はそうしなかった場合よりも、より迅速に、より根本的にこれら従業員の心を獲得したのであった。かれらはその後よい国家社会主義者になり、ずっとそうである。単に口先だけでなく、かれらが新運動のためになしとげた良心的な、りっぱな、誠実な仕事によってそれを証明したのである。よい才能のある党員が、同じように評判のよい非党員よりも好かれるのはとうぜんである。だが誰も党に所属しているという理由だけでは、任用されないのである。新事務長がこの原則を断固として主張し、あらゆる抵抗をものともせず、次第

にやりとげたことは、その後のこの運動にとってこのうえもない利益になった。それによってのみ、幾万の企業が破滅し、幾千の新聞が閉鎖しなければならなかった容易ならぬインフレ時代において、運動の事務管理が存続しつづけ、その任務を十分果たしえただけでなく、「フェルキッシァー・ベオバハター紙」をますます大拡張することができたのであった。フェルキッシァー・ベオバハター紙はそのころに、大新聞に伍したのだった。

一九二一年は、さらにわたしが党首の地位についたことによって、また個々の党経営について、しかじかの多くの委員会の委員がする批判や口出しを禁ずることが、次第に達成されたという意義をもった。これは重要なことであった。なぜなら、実際には救いがたい混乱をあとに残すために、無能力者がたえずその間にはいってぺちゃくちゃ口を出し、なにもかも知ったかぶりをするならば、ある課題にたいして実際に才能のある人物をうることができなかったからである。そのうえにもちろんこのなんでもできる人間は、たいてい自分で統制し、息を吹きこめる活動のために他の分野をひそかに探すために、まったくしとやかに身をひいてしまうのだった。すべてどんなことでも、あとで何か見つけてくるというまぎれもない病気にとりつかれていて、すばらしい計画、思想、企画方法の一種の永続的妊娠状態にある人間がいた。さらにかれらの最も理想的な最高の目標は、たいてい監督機関として、他人のりっぱな仕事を専門的にちらりとながめる委員会をつくることであった。だが物事のわからない人間が、実際の専門家にたえず口出しするのが、いかに無礼なことであり、国家社会主義的でないかは、この委員会屋にはもちろん意識されなかったのである。いずれにせよわたしは、この数年間に、みんなりっぱな仕事をし、運動の責任を負っている人々をこういう分子から保護し、かれらに必要な背面援護と、前面には自由な仕事の場をつくってやることをわたしの義務とみなしていた。

なにもしないか、あるいは実際に実行不可能な決議だけをつくりあげているこういう委員会を、片づけてしまう最もよい方法は、もちろんかれらになにか実際の仕事を指定することだった。そうするとそういう団体がいかに声も出さずに消失し、とつぜんにまったく見えなくなってしまうことか。それはお笑いぐさだった。その場合わたしは、この種の最大の制度、すなわちドイツ国会に考えおよんだ。人々はかれらにただしゃべらせておくかわりに、実際の仕事を、それもこれら大言壮語をはく一人一人が、最もきびしい個人的な責任のもとに果たすべき仕事を指定したならば、どんなにとつぜんみんながそこからこっそり逃げだしてしまうことだろう。

すでにそのころわたしは、私生活においてどこでもそうであったように、また運動においても個々の経営のために明らかに有能な、誠実な役員、管理者、あるいは指導者を見つけ出すまで、探さねばならないということを、いつも要求していた。だがさらにこの男には上に対しては完全な責任を課するとともに、下に対しては絶対の権威と行動の自由を与えるべきであった。その場合何人もそれに関する仕事を自分でよくやりうる人でなければ部下に対して権威をもつことはできない。二か年の間に、わたしは自分の考えをますますつらぬいていった。そして今日それは、運動においては、少なくとも最高指導部が問題となるかぎり、すでに自明のことである。

だがこの態度の明白な成果は、一九二三年十一月九日に現われた。わたしが四年前運動に参加したときは、印章一つさえなかった。一九二三年十一月九日に、党の解散と党財産の差押えが行なわれた。しかしこれは、あらゆる財産品目、新聞を含めて、すでに十七万金マルクの額になっていた。

第十二章　労働組合の問題

労働組合はぜひとも必要か？　運動の急速な成長は、一九二二年には、今日でもなお全部は解決されていないある問題に、態度をきめるようわれわれに迫った。

われわれは、運動が最も速く、最も容易に大衆の心に通じうる方法を研究するようこころみたさいに、純職業的、経済的領域における労働者の利益代表が、意見を異にするものやその政治組織の手にとどまっているかぎり、労働者は決してわれわれに完全に属することができない、という異論にいつもぶつかった。

もちろんこの異論は、それ自体多くの根拠をもっていた。一般の確信によれば、ある工場で働いている労働者は、労働組合員にならなければまったく生存しえないのだった。たんにかれの職業的利益がそれによってのみささえられていると思われるだけでなく、工場での地位もついには労働組合の所属員でなければ考えられなかったのである。労働者の多数は、いろいろの労働組合団体に属していた。これらは一般に賃銀闘争を闘い抜き、賃率協定を結び、いまや労働者に一定の収入を確保したのである。疑いもなく、これらの闘争の結果は、すべての工場労働者に役に立った。そして労働者が、労働組合によって闘いとられた賃銀をうまくポケットにしまい、だが自分は闘争に参加しないならば、それは特にまじめな人間にとっては、良心の葛藤を生ずるに違いなかった。

普通のブルジョア企業家と、この問題について話すことは、むずかしいかも知れない。かれらは、

この問題の物質的側面に対しても、道徳的側面に対しても理解がなかった（あるいは理解しようとしなかった）のだ。けっきょくかれらが勝手に考えた自分の経済的利益はいつも、もともとかれらにつかえている労働者たちのあらゆる組織的なまとまりと、対立しているのである。それゆえすでにこういう理由から、たいていのものには偏見のない判断をすることが困難なのである。だからここでは、しばしばよくあるように、木を見て森を見ないような誘惑に屈しない局外者にたのむことが必要である。そうすればかれらは、いずれにせよ善意でわれわれの今日および将来の生活に最も重要なものに属することがらを、はるかに容易に理解しうる機会をもつことができるであろう。

わたしはすでに第一巻で、労働組合の本質、目的およびその必要性について述べた。そこでわたしは次のような立場に立った。すなわち、国家的処置によって（しかしこれはたいていみのり少ないものだが）あるいは一般的な新しい教育によって、労働者に対する使用者の態度が変更されないかぎり、経済生活に同等の価値ある当事者として、その権利をたてにとって自分で自分の利益を守る以外にまったく方法がないのだ、と。さらにわたしは、将来民族の全共同体の本質に重大な損害を及ぼすに違いない社会的不公平が、そういう利益擁護によって阻止されうるならば、そういうことに留意するのは全民族共同体の意義にまったくかなっている、と強調した。さらにわたしは、企業家の中に、社会的義務感をもたないだけでなく、最も素朴な人権についての感情すらもたない人間がいるかぎり、この必要性はとうぜんとみなされねばならない、と述べ、そしてかかる自衛が一度必要であるとみなされるならば、その形式はその意味からして、ただ労働組合的基礎の上に立つ労働者のまとまりの中にのみ存立しうるという結論を、そこからひきだした。

こういう一般的見解は、わたしの場合には一九二二年においてもなんら変らなかった。だがいまや

もちろん、この問題に対する立場のためにはっきりした一定の定式が求められねばならなかった。今後は単に認識することだけで満足してはいけない。むしろここから実際的結論を引きだす必要があった。

次のような問題の解決が肝要であった。

一、労働組合はぜひとも必要であるか？

二、国家社会主義ドイツ労働者党は、みずから労働組合活動をすべきであるか、それとも党員をなんらかの形でそういう活動に導くべきであるか？

三、国家社会主義の労働組合は、どんな方式のものでなければならないか？　われわれの任務は何であり、労働組合の目標は何であるか？

四、われわれはどのようにして、こういう労働組合をつくるか？

第一の問題については、わたしは実際に十分に答えたように思う。わたしの確信によれば、今日のような状態であれば、労働組合は決して欠くことができないのである。反対に労働組合は、国民の経済生活の最も重要な組織に属している。だがその意義はたんに社会政策の領域だけにあるのではなく、むしろ一般的国家政策的領域にもっと多くの意義がある。というのは、ある民族、その大衆が正しい労働組合運動によって生活の要求を満足させ、だが同時にまた教育を受けるならば、それによって民族の生存競争上の全抵抗力が異常に強められるからである。

労働組合はなによりもまず、将来の経済議会ないしは職能代表会議の礎石として、ぜひとも必要である。

国家社会主義労働組合とは？　第二の問題も同様にもっとも容易に答えることができる。労働組合運動が重要であるならば、さらに国家社会主義はたんに純理的だけでなく、また実際的にも、それに態度をきめなければならないことは、明白である。もちろんそのときに「いかに」ということが早くも説明しがたいのである。

国家社会主義的民族主義国家をその活動の目標と見ている国家社会主義運動は、この国家の将来のすべての制度を他日この運動自体からつくりださねばならない、ということを疑ってはいけない。まずなによりも主義にかなった準備教育を受けた人間というある基礎をあらかじめもっていなくても、ただ力さえもっておればとつぜんに、無から一定の再組織を行なうことができると考えるならば、それはこのうえもなく大きな間違いである。機械的に非常に早くつくりうる外面形式よりも、そういう形式をみたす精神のほうがつねにより重要であるという原則が、ここでもまたあてはまるのである。たとえば命令によって、ある国家組織に指導者原理を圧制的につぎ穂することはもちろんできる。だがこれは、自己の発展において最小のものから自分自身をだんだんと形成し、人生の苛酷な現実がたえず行なう永続的な選抜によって、多年の間にこの原理の遂行に必要な指導者の人材を獲得したときにのみ、いきいきとなるのである。

だから、とつぜん書類カバンの中から新しい国家の憲法草案を公表し、さてこれを主権者の絶対命令で上から「実施」できる、と思ってはならない。そうやってみることはできる。だがその結果は、確実に生存能力のない、たいていは死産児であろう。それは、ワイマール憲法の成立や、最近半世紀におけるわが民族の体験とはなんら内的に関連のない新国旗をも新憲法といっしょにくれてやるという企てを、わたしにはっきりと思いださせるのである。

国家社会主義の国家も、こういう二の舞をやらないよう注意せねばならない。国家社会主義の国家は、他日、すでに長い間存在してきた組織からだけ生成することができる。けっきょくはいきいきした国家社会主義の国家をつくるために、この組織は本来、国家社会主義的生命を自己の中にもっていなければならない。

すでに強調したように、種々の職業代表機関の中に、特に労働組合の中に、経済会議所に対する胚細胞がなければならない。だがこれらその後の職能代表機関と中央の経済議会が、国家社会主義的制度であるべきであるならば、その場合これらの重要な胚細胞もまた、国家社会主義的志操と見解の担い手でなければならない。運動の諸制度は国家の中に持ちこむべきであるが、それがまったく生命のない組織であってはならない以上、国家はとつぜんそれに対応する制度を無から魔法のようにつくることはできないのである。

この最高の観点からしてもすでに、国家社会主義運動は、自己の労働組合的活動の必要性を認めねばならない。

民族共同体という共通のわく内において労資双方が一体になるという意味で、労働者も企業主も真に国家社会主義的に教育するということは、理論的な教訓や呼びかけや警告では達せられず、日々の生活の闘争を通して達せられるのであるから、なおこれは必要なのである。この闘争において、またこの闘争によって、運動は個々の大経済グループを教育し、大きな観点に立っておたがいに接近させなければならない。そういう準備工作なしに、他日ほんとうの民族共同体の成立を望むことは、すべてまったくの幻想である。この運動が主張している偉大な世界観的理想だけが、他日、新時代を単に外面的に作られたものとしてではなく、真に内面的に確固たる基礎をもつものとして出現させる一般

それゆえ運動は、単に労働組合の思想そのものに肯定的態度をとらねばならないだけでなく、実際的活動で多くの党員と支持者に、きたるべき国家社会主義国家のために必要な教育が与えられるようにしなければならないのである。

第三の問題の答は、以上に述べたところからでてくる。

国家社会主義的労働組合は、階級闘争の機関ではなく、職業代表の機関である。国家社会主義の国家には「階級」はなく、ただ政治的な点でまったく同等の権利と、したがってまた同等の一般的義務とを有する市民と、その他に国策的な点でまったく権利をもたない国籍所有者があるだけである。

国家社会主義的意味での労働組合は、民族体の内部に同様につくられた他の組織に対して闘争するために、民族体の内部において一定の人間をまとめることによって、それを次第に一つの階級に変えるという任務をもっているのではない。この任務をわれわれは、労働組合そのものの責任に帰することは一般にできず、それは組合がマルクシズムの闘争の道具になったときに、はじめて組合に与えられたのである。労働組合が「階級闘争的」なのではなく、マルクシズムが組合を自己の階級闘争の道具にしあげたのである。マルクシズムは、国際的な世界ユダヤ人が自由独立の国民国家の経済的基礎を破壊し、国民的な工業と国民的商業を破壊し、それとともに国家をこえた世界金融＝ユダヤ主義のために、自由な諸民族を奴隷化するために利用する経済的武器をつくったのである。

これに反して国家社会主義的労働組合は、国民的経済過程に関与している一定グループを組織的にまとめることによって、国民経済自体の確実性を高め、その終局の帰結において国家主義的民族体に破壊的影響を及ぼし、民族共同体のいきいきした力、それとともにさらにまた国家のいきいきした力

を害し、けっきょく経済自体に不幸と破滅をもたらすあらゆる弊害を修正し、除去することによって国民経済の力を強化すべきである。

それゆえ国家社会主義的労働組合にとっては、ストライキは、国民的生産に破壊と動揺を与える手段ではなく、その非社会的性格のために経済の能率と同時に全体の存在を阻害しているあらゆる弊害と闘うことによる国民的生産の増加と流動化の手段なのである。というのは、個人が経済過程においてしめる一般の法律的および社会的地位と――さらにただそこからだけ生じてくるのだが――自己の利益のためにこの過程が繁栄する必要性について認識することと、個人の能率とは、つねに因果関係にあるからである。

国家社会主義的な使用者と労働者の認識　国家社会主義的労働者は、国民経済の繁栄が、自己の物質的幸福を意味するということを知らねばならない。

国家社会主義的使用者は、自分の労働者の幸福と満足とが、自分の経済的な力の存立と発展のための前提であることを知らねばならない。

国家社会主義的労働者と国家社会主義的使用者とは、ともに全民族共同体の代理人であり、擁護者である。そのさいかれらにその活動において許される高度の個人的自由は、次の事実によって説明される。すなわち、経験によれば、個々人の能力は上からの強制によるよりも、広範な自由を保証することによっていっそう高められるし、またさらにそれが最もすぐれた、最も有能な、また最も勤勉なものを助長するに違いない自然な選抜過程が、なにほどかそがれるのを阻止するのに適しているのだ。

職能代表会議と経済議会　それゆえ国家社会主義的労働組合にとっては、ストライキは、国家社会主義的民族主義国家が成立しないうちだけ行なうことが許されるし、またもちろん行なわれねばならない手段である。これはもちろん――使用者たちと労働者たちの――二大グループの大衆闘争のかわりに（これはその結果として生産減少となり、つねに民族共同体に全面的に損害を与えるのだ！）すべてのものの権利の配慮と権利の保証を引きうけるべきものである。**経済会議所**[1]自体には、国民経済の活況維持とそれに害を与える欠陥や欠点を除去する義務が課せられる。今日幾百万人の闘争によって決せられることが、将来においては**職能代表会議と中央経済議会**において、解決されねばならない。それとともにもはや企業者側と労働者側が、賃銀および賃率の闘争で両者の経済的存立に損害を与えながらおたがいに騒ぐこともなく、この問題はつねに民族共同体および国家の福祉をまず第一にまざまざと念頭に浮かべねばならない高い立場で、ともに解決されるのである。

ここでもまた徹頭徹尾、第一に祖国が、ついで党がくる、という鉄則が適用されるべきである。

国家社会主義的労働組合の任務は、この目標自体に対する教育と準備である。目標とはすなわち、**個々人の生まれつきの、また民族共同体によって完成された能力と体力に応じて、われわれの民族とその国家の維持および確保のために、みんなが共同して働くことである。**

労働組合は二つあってはならない　**第四の問題**、すなわちわれわれはいかにしてかかる労働組合をつくるか？　ということに解答することは、当時非常に困難であった。

ある新しい土地で設立にとりかかるほうが、すでによく似たものが設立されている古い土地で行なうよりも、一般に容易である。ある種の商売がまだ存在しない場所では、人々はそういうものを容易

に設立することができる。すでに類似の企業が現にあるならば、よりむずかしい。そしてただ一つだけが繁昌できるという条件が与えられている場合は、最も困難である。というのはここでは設立者は、自己の新しい商売を持ちこむだけでなく、存立しうるためには従来からその場所に存在しているものをつぶさねばならない、という仕事があるからである。

国家社会主義的労働組合が、他の労働組合と並ぶことは、ナンセンスである。というのは、国家社会主義的労働組合もまた、その世界観的課題とそこから生ずる義務——他のよく似た、あるいはそのうえ敵性を帯びた組織に対して、不寛容な、また唯我独尊の排他的必要性を強調すべき義務——によってつらぬかれていることを、自覚せねばならないからである。ここにもまた類似の努力との談合や妥協はなく、ただ絶対的に唯一である権利の維持だけがあるのだ。

さてこういう発展をするには、二つの道があるだけだった。

一、人々が自分の労働組合を設立し、そして次第に国際主義的、マルクス主義的労働組合に対して闘争するか、あるいは、

二、マルクス主義的労働組合の内部へ侵入し、それ自体を新しい精神でみたすように企てるか、ないしはそれ自体を新しい思想界の道具に変形させることができたかである。

第一の方法に対しては次のような疑念があった。すなわち、そのころにわれわれの財政的困難は、いぜんとして非常に容易ならなかったし、われわれが自由に使える資金は、まったく些細なものだった。次第にますます広がるインフレーションは——このころには組合員にとって組合のつかみうる物質的利益が問題にならないぐらいであったために——事態をいっそう困難にした。こういう観点から見れば、個々の労働者は当時労働組合に組合費を払いこむ理由はまったくなかったのである。すでに

存在していたマルクス主義の組合でさえ、クノー氏の天才的なルール地方の行動[2]によって、とつぜん数百万の金額がポケットにはいるまでは、瓦解にひんしていたのである。このいわゆる「国家主義的」宰相は、マルクス主義的労働組合の救世主といってよいのである。

当時われわれは、そういう財政的可能性を期待することができなかった。そして財政的無力のために、ごくわずかのものをも提供することができない新しい労働組合にはいるようには、だれも勧誘できなかった。他方そのかわりにわたしはそういう新しい組織の中で、多少とも偉大な人物に対して小さい避難所をつくることを、絶対に防がねばならなかった。

労働組合と指導者の問題　概して、人間の問題がなによりも重大であった。当時わたしは、この大きな課題を解決しうると信ずるにたるただひとりの人も、もっていなかった。当時マルクス主義の労働組合を実際に崩壊させ、この破滅的な階級闘争機関のかわりに、国家社会主義的労働組合の理念をたすけて勝利をえさせるための人間があれば、かれはわが民族のまったく偉大な人物に属するものであり、かれの胸像はいつか将来レーゲンスブルクの招魂堂において、後世のためにささげられるにちがいなかった。

しかしわたしは、こういう台座にふさわしい人物をひとりも知らなかった。

そのうえ、国際主義的労働組合すらも、みんな普通の人間ばかりを意のままに動かしているという事実によって、こういう考え方に疑問をおこさせるのはまったくまちがっている。それは現実にはまったくなんの意味もない。というのは、国際主義的労働組合がかつて設立されたときには、それ以外に何もなかったからだ。今日、国家社会主義運動は、長く存立してきた巨大な、また最小のものにま

で広げられた巨大組織に対して闘わねばならないのだ。しかし征服者は、かれが防御者を征服しようとするならば、防御者よりもつねに独創的でなければならない。今日マルクス主義的労働組合の城郭は、なるほど普通の坊主によって管理されることができる。だがそれは反対側の卓越した偉人の激しいエネルギーと、天才的な能力によってのみ強襲することができるのである。そういう人物がいないならば、運命と争っても効果がなく、不十分な代用物でムリ押ししようとするのは、なおいっそうナンセンスである。

人生においてはそれにふさわしい力が不足しているのに、ただ中途半端に、あるいはへたに始めるよりも、まず現状のままにしておくほうがよい場合がしばしばあるが、その場合にこの認識を役に立てることができるのである。

まず世界観闘争　もう一つ別の考慮——どうかそれを政治扇動的といってほしくないのだが——が、なお加わった。当時わたしは、偉大な政治的、世界観的闘争を経済的な物事にあまり早く結びつけることは危険だ、という揺るがしがたい確信をもっていたし、またいまもなおもっている。特にこれは、わがドイツ民族の場合に妥当する。というのは、こういう場合にここでは経済的な格闘が、政治闘争のエネルギーをただちにそいでしまうに違いないからだ。人々は倹約することによっても小さい家ぐらい建てることができそうだという確信をうるやいなや、かれらはこの課題だけに専心し、もはや政治闘争——いずれにせよ貯えた小金をいつかまた取りあげようと考えているものに対する政治闘争をする時間などは、あまり残らないのだ。獲得された洞察や確信のために政治闘争で苦労するかわりに、かれらはただもう「住宅をつくる」という考えだけに没頭し、たいていついにはアブハチ取

らずになるのだ。

国家社会主義運動は、今日その格闘の初期にある。国家社会主義運動は大部分まずその世界観的な像を形成し、完成せねばならない。国家社会主義運動はそのエネルギーをすべて繁殖させて、その偉大な理想を遂行するために闘うべきであり、その成果は全力をあますところなくこの闘争に注いだときにのみ、考えうるのである。

しかし、ただ経済的諸問題にだけ没頭することが、いかに活動的な闘争力を奪うものであるかということを、われわれはちょうど今日この目前にある典型的な例の中に見るのである。すなわち、

一九一八年十一月の革命は、労働組合によって行なわれたものではなく、それに反して遂行されたのである。しかもドイツ・ブルジョアジーは、ドイツの将来のためには政治闘争をしない。かれらは、将来が、経済の建設的なはたらきにおいて十分確保されていると臆断しているからである。

われわれはこういう経験から学ばねばならない。というのは、われわれの場合にも同じことがあるかも知れないからである。われわれの運動の全力を政治闘争に集めれば集めるほど、われわれはそれだけ早く全面的な成果を期待してよかったのである。だがわれわれがあまり早く、労働組合や住宅地や類似の問題を背負いこめば背負いこむほど、全体としてみればそれだけわれわれの仕事を利さないことになるのである。というのは、この利益が非常に重要であろうとも、われわれがすでに大衆の力をこの思想のために役立たせる状態にあるときにだけ、それが大規模に実現されるからである。それまでは、その問題にかかわるのが早ければ早いほど、そしてそれによって世界観的意志が害をうけるのが強ければ強いほど、ますますその問題は運動を無力にするであろう。さらに世界観が自分の軌道に労働組合を従わせるかわりに、労働組合的契機が政治運動をあやつるということに、容易になるで

あろう。

だが運動のための実際的成果も、わが民族一般のための実際的成果も、国家社会主義的労働組合運動から生ずるとすれば、それは世界観的にすでにわが国家社会主義の理念に非常に強くみたされており、マルクス主義の足跡におちいる危険をもはやおかさないというときだけなのだ。というのは、マルクス主義的労働組合との競争だけを自分の使命と考えているような国家社会主義的労働組合は、存在しないよりもなお悪いだろうからである。国家社会主義の労働組合は、マルクス主義的労働組合に単に組織としてだけでなく、なによりもまず理念として闘争を通告すべきである。国家社会主義の労働組合は、そこにおいて階級闘争および階級思想の布告者とぶつからねばならないし、それにかわってドイツ市民の職業上の利益の保護者になるべきである。

設立しないのは、へたに設立するよりもよい　これらの観点はすべて、自己の労働組合の設立に反対することを当時も物語っていたし、今日もなお物語っている。明らかに運命によって、まさしくこの問題の解決のために招かれた頭脳の持ち主がとつぜん現われるのでなければ、だ。

それゆえその他には、ただ二つの可能性しかない。すなわち、自分の党員に労働組合から脱退することをすすめるか、それとも内部でできるだけ破壊的に活動するためにいままでの組合にとどまるかである。

わたしは一般に後者の道をすすめた。

特に一九二二年、二三年においては、人々は無造作にそうすることができた。というのは、われわれの運動が若かったため、われわれの陣営出身のあまり多くない組合員から労働組合が、インフレ時

代にかすめとる財政的利益は、ゼロに等しかったからである。だが労働組合に対する損害は非常に大きかった。なぜならば、国家社会主義の支持者たちは組合の最もきびしい批判者であり、したがってその内部的破壊者であったからだ。

当時わたしは、はじめからすでに不成功がわかっている実験はすべて、全面的に拒否した。わたしは組合員の利益について、内面的な確信をもっていない制度のために、労働者にかれらの乏しい収入からしかじかの額をとりあげることを、犯罪のようにみなしたのだった。

ある新しい政党がいつかまた消滅したとしても、これはまず損にはならず、ほとんどいつも利益になるのであり、そして誰人もこれをなげく権利はない。というのは、個人が政治運動に与えるものは、報酬をあきらめて与えるのだからである。しかし労働組合に払いこむものは、自分に確約された反対給付を実行させる権利がある。もしこれが考慮されないならば、そういう労働組合をつくったものは詐欺師であり、そして少なくとも軽薄な人間であり、責任を問われねばならないのである。

それで一九二二年には、われわれもまたこの観念にしたがって行動した。他のものはそれをもっとよく理解していたとみえて、労働組合をつくった。かれらは、われわれがそういうものをもっていなかったことを、われわれの不正確な狭い洞察の最も明らかなあらわれだ、と非難した。だがこの設立されたもの自体も消滅するまでに、そんなに長くかからなかったのだ。そのようにしてそれ自体の終局の成果は、われわれの場合と同じであった。ただひとつ違うところは、われわれが、自分たち自身をもまた他人をも裏切らなかったことだけである。

第十三章　戦後のドイツ同盟政策

無能な原因　有効な同盟政策の根本方針を立てる際に見られたドイツの外交政策指導層の散漫な態度は、革命後も続けられたばかりでなく、なお一層はなはだしくなった。なにしろ戦前には、まず第一に一般的な政治概念の混乱が外交政策についてわが国指導層を誤らした原因であると考えられたのに、さらに戦後に至っては、誠実な意欲が欠けてしまったからである。革命を通じてついに自分達の破壊的目標に達したと思った仲間共が、究極的には自由なドイツ国家の再建をめざすべき同盟政策に、なんの関心をももちえなかったのは自然のことであった。そのように事が運ばれることは十一月犯罪の本質的な意図に矛盾したばかりでなく、またそれがドイツ経済やドイツの労働力を国際化するのを妨害し、あるいは終結させさえしたに違いないというだけでもない。外交政策での自由を求める闘争から結果する現象としての国内への政治的影響もまた、今日の国家権力の所有者達にとって将来不吉なものとなったであろう。人々をあらかじめ国民化することなしには、およそ国民の高揚など少しも考えられないが、また逆に強力な外交政策の成果は必然的に同様な意味での反作用を生じるのである。あらゆる自由のための闘争は、経験からすれば、国民感情や自意識の上昇をもたらし、またそのことによって、非国民的分子やこれとよく似た傾向に対する感覚の鋭敏さを一層高める。平穏な時代には許容されるばかりか、いやしばしば注意さえ払われないような状態や人物も、国民的熱狂がかき立てられた時期にはただ忌避されるだけでなく、命取りとなる反抗を呼ぶのもまれでない。たとえ

ばスパイに対する一般の恐怖についてだけでも思い出してほしい。その恐怖は戦争の開始によって、人間の激情の沸騰点にまで突然にふき上り、きわめて残酷な、時には不当な迫害に走るものである。このことは、たとえスパイの危険が当然な理由からそれほど一般に注意されなくても、その危険は長期にわたる平和時代のほうが一層大きいとさえいわれうるにもかかわらず、依然としてそうなのである。

十一月事件によって表面に姿を見せるようになった国家の寄生虫連中の鋭敏な本能は、このような理由からしてすでにわが国民が賢明な同盟政策に援助されて自由を求めて立ち上り、また国民の激情がそれによってあおり立てられることにでもなったら、自分達の犯罪者的存在が恐らく破滅するかもわからぬということをかぎつけるのである。

したがって、なぜ一九一八年以降政府の決定権をもつポストにある人々が外交政策の面で少しも動こうとせず、またなぜ国家の支配者達がドイツ国民のほんとうの利益に対して、ほとんどいつも計画的に反対する活動をしていたか、という理由も理解されるだろう。なにしろ、一見しただけでは無計画に見えるものでも、細かに見れば、一九一八年の十一月革命が初めて全くおおっぴらに歩み出した道の首尾一貫した継続であるにすぎぬことがバレてしまうからである。

もちろんここでわが国のことを考える場合には、責任のあるあるいはより適切に表現すれば、「責任のあるべき」国政の指導者層と、議会主義的政談屋の有象無象と、それから羊のように辛抱づよい愚鈍な去勢された民衆の大群とを、それぞれ区別しなければならない。

その中の一つのグループは自分の望むことについて理解している。もう一つのグループはその仲間になるが、それはかれらも同じような理解をもっているか、あるいは一度承認されたことや有害だと

感じられたことに対して容赦なく反抗するにはなにしろあまりにも臆病でだめなためである。しかし、残ったグループは少しも理解できず、愚鈍なために服従している。

国家社会主義ドイツ労働者党がただ小さなほとんど人に知られていない結社の規模のままでいる限り、外交政策の問題は多くの支持者の眼に二次的な意味をもちうるだけだった。その二次的性質はとくに、外ならぬわれわれの運動がいつも原則的に次のような見解を主張していたし、また今でも主張しなければならぬという原因から生じたのである。つまり、国外に対する自由は天からも地上の主権からも贈り物として与えられるものではなく、むしろ国内の力の発展によってはじめて実りうるものに過ぎない、と。**ただわが国の崩壊の原因を除去し、同時にその崩壊から不当に利益をえたものを絶滅することだけが、国外に対する自由のための闘争の前提を作り出すことができるのだ。**

外交政策の目標――明日の自由　したがって、このような観点からして、この若い運動の最初の時代に、運動が国内の改革を意図したことの意味に比べて外交政策問題の価値が軽視されたことは、きっと理解されるに違いない。

しかし、小さな、問題にもならない結社のわくが広げられ、ついにそのわくが破裂してしまい、この若い組織が巨大な団体としての意味を獲得するやいなや、はやくも外交政策を展開する問題について態度を決めなければならなくなったのである。つまり、われわれの世界観の基礎的な諸観念に矛盾しないだけでなく、さらにこのような考え方の結果を示すような方針を確定することが肝要であった。まさしくわが国民が外交政策的訓練を欠いていたことによって、この若い運動は個々の指導者と大衆に方針を大筋なりとも示して、外交政策についての考え方の輪郭を与えるよう義務づけられた。こ

の輪郭は、わが国民の自由およびわが国の真の主権を回復する活動を外交政策的に用意するような、将来現われてくる実際的なあらゆる遂行のための前提なのである。

この問題を判断する際われわれがつねに忘れてはならない本質的な原則、主旨は、外交政策もまただ目的に対する手段に過ぎないこと、そして目的はもっぱらわれわれ自身の民族を振興させるものであること、この二点である。**現在あるいは将来においてわが民族に役立つものであるか、あるいは害をもたらすものだろうか？**という観点以外のどのような見地からも、けっして外交政策的考慮を行なってはならないのである。

この観点は、このような問題を取扱う場合に妥当しうる唯一の先入見である。政党政治的、宗教的、人道的、およそあらゆるそれ以外の観点は、完全に問題外なのである。

＊

戦前のドイツの外交政策の課題が、わが国民とその子供たちのこの地球上での扶養をば、この目標に到達しうるような道を用意することによって保証することであり、そしてまたその場合に必要な助力をば目的にかなった同盟国という形式で獲得することであったとするなら、その課題は現在でも同じであり、ただ次の区別があるに過ぎない。**戦前は、独立の主権国家が現実にもっていた力を考えつつ、ドイツ民族の維持に奉仕することが重要だったとすれば、今日は、民族にまず自由な主権国家という形態の力を再び与えることが肝心なのである。この力こそ、わが民族を将来とも維持し、振興し、扶養してゆく意図をもって、実際の外交政策を今後進めてゆくための前提である。**

換言すれば、今日のドイツの外交政策の目標は、明日の自由を再獲得するための準備でなければならない。

その場合、次のような一つの基本的な原則を同様にいつも心がけていなければならない。一つの民族にとって独立を再び獲得しうる可能性は、国家の領土が一つにまとまっていることが絶対条件ではない。むしろ、必要な自由を手に入れた場合には、ただ全民族の精神的共同体のにない手でありうるだけでなく、軍事上の自由のための闘争の準備者ともなりうるようなこの民族と国家の——たとえどれほど小さいとしてもとにかく残っている——生き残りの部分が現に存在しているということが必要である。

失われた領地を解放するための前提　もし数億の人口をもつ一民族が国家的まとまりを保つために、手に手をとって奴隷状態のくびきを忍耐するとすれば、このことは、そのような国家と民族が粉砕されてしまい、ただその一部だけが完全な自由を保有し続ける場合よりも一層悪いのである。もちろん、この最後に残った部分が、ただ精神的および文化的に他の部分と分離が不可能なことを絶えず宣言するだけでなく、不幸な抑圧されている部分を究極的には解放し再統合するため軍事的準備を行なう、という神聖な使命で満ちみちていることが前提されてはじめて、そのように批評できるのだが。

さらに熟慮しなければならぬのは、一つの民族および国家の失われた領土部分を回復する問題は、いつも第一に、母国の政治的主権と独立の回復の問題であること、したがってまたそのような場合には、失地の利害などは本国領の自由を回復するという唯一無比の利害に対しては、容赦なく無視されなければならぬこと等である。なぜなら、抑圧されている割譲された民族の一かけらとか、一国の数州とかの解放は、抑圧されている者達の願望や残された者達の抗議などの原因に基づいて生じることはないのであり、多かれ少なかれかつての共通の祖国の主権行使を続けながら残っている者達の武力

の手段によって生じるものであるからである。

それゆえ、失地を獲得するための前提は、生き残っている残存国家の集中的な振興と強化であるとともに、心の中にまだ隠されてはいるが揺るがしがたい決意、つまりそうして形成される新しい力を万一の時期には全民族の解放と統一のためにささげようとする決意でもある。したがって、分離させられた領地の利害を唯一無比の利害、つまり残存している残りの領地の利害に対して軽視することは、敵である戦勝国の意志を修正するための前提となる程度に政治的権力と政治的エネルギーを獲得することなのである。なにしろ、抑圧されている国土は激しい抗議でもって共通の国家のひざの中に戻ってくるのではなく、戦闘力のある剣によって取り戻されるのだ。

この剣を鍛造することが、一民族の国内政策上の指導の課題であり、鍛造作業を安全にし、戦友を探すのが外交政策指導の課題である。

＊

戦前の間違った大陸政策　この著書の上巻で、わたしは戦前のわが国の同盟政策が中途半端であったことについて述べておいた。わが民族を将来維持し、扶養するための四つの道の中から、第四番目の最悪の道がわれわれによって選ばれたのであった。健全な領土政策をヨーロッパで行なう代りに、植民地および貿易政策が選び取られた。この選択は、今やそれによって武器による対決から逃れうると思い込まれただけ、なおさら欠点の多いものとなった。この二兎ばかりかすべての兎を追おうとする試みの結果は周知のように一兎もとらずになり、世界大戦はわが国の誤った外交指導について、われわれに差し出された最後の勘定書であるに過ぎなかった。

正しい道はすでに当時でも**第三の道**であったに違いない。すなわち、**ヨーロッパで新しい領土を獲**

得することによって大陸での勢力を強化する道であるが、この場合まさしくそのことによってその後の植民地による補充など自然に可能となってくるものと思われたのである。この政策は、もちろんイギリスと同盟するか、あるいは四、五十年間も文化的な課題が完全に前面から押しのけられるほど、軍事力という手段を異常に振興するのでなければ、遂行されるものではなかったであろう。この政策はきわめてよく責任を果すものといえるに違いない。一国民の文化的意味は、ほとんどつねにかれらの政治的自由と独立に結びついており、したがってこれらは文化の存在するための、あるいはむしろ生成するための前提である。それゆえ、政治的自由を確実にするための犠牲であれば、どんな犠牲でも決して大き過ぎるということはありえない。一般の文化に関する事柄が国家の軍事上の度を越した増強によってそこなわれたとしても、後になればきわめて十分に再び取り戻されることができるだろう。しかり、国家の独立維持の方面にだけ圧縮された努力が払われた後には、民族の今まで放っておかれていた文化的能力がしばしばまさに目を奪うばかりに開花することによって、ある種のくつろぎあるいは平衡状態が続いて現われるのがつねである、といわれうるのだ。ペルシャ戦役の危難からペリクレス時代の精華が生み出され、またポエニ戦役の心痛を過ぎて、ローマの国家体制はより高度の文化のために献身し始めたのである。

もちろん、国家の後年の安全のために将来の戦闘に準備するという唯一無比の課題に対して、民族のその他のすべての関心事を以上のように徹底的に従属させることを、議会政治屋の鈍物や無能者の多数決の決断力に任せることはできない。他のあらゆることを無視して戦闘を準備するのは、フリードリッヒ大王のような創始者であってできたことであり、ユダヤ人流のわが国の民主主義的議会のナンセンスの創始者達には手に負えぬものである。

したがって、この理由からしてすでに、戦前にヨーロッパの中で土地を獲得するための軍事的準備はささやかなものでしかありえなかったので、その結果、目的にそう同盟国による支援をなしですますことはまったく困難であった。

しかし、およそ戦争の計画的準備などについてはなにも理解しようと望まなかったため、ヨーロッパでの土地獲得をわが国は断念し、さらにこの代りに植民地および貿易政策に従事することによって、そうしなければ可能でもあったイギリスとの同盟を犠牲にした。しかしそれであれば、今や理屈からしてもロシアに支持を頼むべきであったのにそれもせず、遂には、ハープスブルク家が相続してきた罪に加え、あらゆるものから見放されて世界大戦へとよろめきながら入っていったのである。

＊

今日のヨーロッパの勢力関係　わが国の今日の外交政策の特徴としては、いずれにしろ明白な、さもなくば十分理解可能である方針というものがおよそ存在していないことが挙げられなければならぬ。戦前には誤まって第四の道が歩まれ、しかももちろん同様にただ中途半端に進んだだけだったけれども、革命以降はもはやどんなに鋭い目にも道は一つとして認識されえないのである。わが民族の再高揚の最後の可能性までも破壊しようという企て以外には、戦前よりもっとはなはだしく、計画的思慮などすべて欠けているのである。

今日のヨーロッパの勢力関係を冷静に再吟味してみると、次のような帰結に達する。

つまり、三百年この方わが大陸の歴史は、ヨーロッパ各国の勢力関係を均衡させ、相互に牽制(けんせい)させるといった方法によって[1]、自己の巨大な世界政策的目標にとって必要な後方守備を安全にしようとするイギリスの企てにより決定的に支配されていた。

ドイツではただプロイセン陸軍の伝統が比較の対象となりうるだけであるような、イギリス外交の伝統的傾向は、エリザベス女王の努力の後は、計画的に、あるヨーロッパの強国が一般的な力の秩序のわくを越えて躍進することをあらゆる手段でもって阻止し、必要となれば軍事干渉によって粉砕することであった。そうした場合にイギリスがいつも使った暴力手段は、存在していた事情だとか課せられた問題に応じさまざまであった。しかし、その暴力手段を使おうという決心と意志力はいつも同じであった。しかり、時の経過によってイギリスの立場が困難になればなるほど、イギリスの国家指導層は、大国が相互に張り合うことから生じているヨーロッパ各国の力の一般的マヒ状態を維持するのを一層必要と感じた。昔の北アメリカ植民地が政治的に分離したことは、その後、絶対的なヨーロッパ背後防衛を保持することにいよいよ最大の努力を払わせるに至った。したがってイギリス国家の勢力が——偉大な海軍国であったスペインとオランダの殲滅（せんめつ）の後——上昇しようと努力しているフランスに継続的に集中された結果、ついにナポレオン一世の没落により、このイギリスにとってもっとも危険だった陸軍国がヘゲモニーをとる危害は取り除かれた、と見なされうるようになった。

イギリスとドイツ　ドイツに対するイギリスの政策変更は緩慢にしか実施されなかったが、それは差し当ってドイツ国家の国家的統一が欠如していたので、イギリスにとって明らかな危険が認められなかったためばかりでなく、宣伝によってある特定の国家目的に合うように育成された世論というものが、緩慢にしか新しい目標に向かうことができなかったからでもあった。政治家の思慮のある認識が、この場合、感情的な価値に転化したように思われる。この感情的価値はその時々の効果の点でより生産的であるばかりでなく、その継続性という点でも一層安定的である。したがって、政治家は

一つの意図を成就した後には、ぞうさなく新しい目標に考えを進めてゆくことができるにしても、大衆はただ緩慢な宣伝活動を通じてはじめて、感情的に自分の指導者[2]の新しい意見の道具に作り替えられることができるだろう。

かれこれするうちに、すでに一八七〇～七一年には、イギリスは新しい態度を確立していた。アメリカの世界経済的重要性とロシアの強権政策の発展の結果として数回その態度のゆらぎがあったにもかかわらず、このゆらぎをドイツは残念にも利用しなかったので、イギリスの政策の本来の傾向はますます確固としたものになってゆかざるをえなかった。

イギリスはドイツの中に商業上で、したがってまた世界政策の上でも、無視できぬ力を見てとった。この力のもつ重大さは、なんといってもドイツの巨大な工業化によって、それぞれ同じ領域で両国の強さがすでに平衡に達したと見なされうるほど、脅威的に拡大したことにある。世界の「**経済的平和的**」征服は、わが国の支配者達にとっては取っておきの知恵を集めた最上の結論と思われたが、イギリスの政治家にとってはそれに抵抗するための組織をつくる理由となった。この抵抗は用意周到に組織された攻撃という形式でなされたが、さらにこのことは、その目標が、問題とさるべき世界平和の維持には全然なく、イギリスの世界支配の確立というところにあった政策の本質に完全に一致していた。その際イギリスが、軍事的におよそ問題となりえたあらゆる国を同盟者に利用したことは、敵の力を評価する場合の伝統的な慎重さ、および現在の自己の弱点に対する洞察、これら両方に対応するものである。これは、そのような用意周到な戦争組織が勇ましいかどうかではなく、目的にふさわしいかどうかという観点から評価されねばならぬのであるから、けっして「良心的でない[3]」などということはできない。**外交は、一民族が勇ましく滅亡することにではなく、実際に維持されてゆくことに**

尽力しなければならない。後者に到達する道はしたがってすべて目的にふさわしいものであり、それらの道を歩まぬ場合は、義務を忘れた犯罪といわなければならない。

ドイツの革命化によって、ゲルマンの世界制覇におびえるイギリスの不安は自国の政策にとって救済的な結末を迎えた。

「バランス」の乱れ　ヨーロッパの地図からドイツを完全に消そうとする関心を、その後は、イギリスももはや持とうとしなかった。反対に、一九一八年十一月に生じた恐ろしい瓦解は、まさにイギリス外交を新しい、初めのうちは可能と考えられなかったほどの状況に引き込んだのである。

つまり、四年半の長きにわたって大英帝国は、大陸の一強国の想像上の優越性を破壊しようとして戦ったのである。ところが突然崩壊がやってきた。この崩壊によって、その国はまったく視界から消えてしまったように思われた。もっとも原始的な自己を保存しようとする衝動さえも欠如していることが示され、この欠如によって、ヨーロッパのバランスは一つの事業を通じて四十八時間もせぬうちに土台からくつがえされたように思われた。すなわち、**ドイツが破滅し、フランスがヨーロッパで第一の大陸政治の支配力となったのである。**

イギリスの戦争目標は達せられなかった　この戦争でイギリス国民を最後まで持ちこたえさせ、際限もなく扇動し、あらゆる原始的本能と激情をかき立てた巨大な宣伝は、今や鉛のおもりのようにイギリスの政治家達の決心の上に重荷となってのしかかった。イギリスの戦争目標は、ドイツの植民・経済・貿易政策の破滅により到達されたのであって、それ以上のことはイギリスの利益を侵害す

るものであった。ヨーロッパ大陸でドイツのような強国が消滅することによっては、ただイギリスの敵だけが得することができた。それにもかかわらず一九一八年十一月から一九一九年の盛夏になるまで、たしかにこの長い戦争中に以前よりも一層大衆の感情の力を利用してきたイギリス外交の転向はもはや不可能であった。転向は、自国民にひとたび与えられた態度という点から考えても不可能であったし、軍事的な力関係の布陣から見ても可能ではなかった。フランスは自己の思いのままに行動でき、他国に命令することができた。しかし、この駆引と取引の数か月間に、変更をもち込むことができたはずの唯一の国家、つまりドイツ国自体は内乱のけいれんの床の中であり、いわゆる政治家の口からくり返しどんな無理な条約も喜んで承認する意志があることを予告していた。

ところで、諸民族間の生活の中で一国民が、自らの自己保存衝動をまるきり欠くことによって、「積極的な」同盟者でありうることを止めるとするならば、その国民は奴隷民族と堕落し、その国土は植民地の運命に陥るのがつねである。

まさしくフランスの力をあまりにも大きく成長させまいと思えば、フランスの略奪欲に自己も参加することがイギリスの唯一可能な取引形式であった。

実際イギリスは自己の戦争目標に到達しなかった。ヨーロッパの一国がヨーロッパ大陸の国家秩序の力関係を越え出て上昇することがただ阻止されなかっただけでなく、かえって増強された形で固められたのである。

陸軍国としてドイツは一九一四年には二国にはさまれていたが、その一方はドイツと同程度の力をもち、他方はより勝った力を自由にしていた。その上、優越したイギリスの海軍力が加わった。ただフランスとロシアだけでも、ドイツの勢力が巨大な発展をとげるためにはつねに妨害となり抵抗とな

った。ドイツ国の極度に不利な軍事的な地理状況も、この国の力の増強が程度を越さぬための安全係数と見なされることができた。とくに海岸平野は軍事的に見た場合、イギリスとの戦争には不利であり、また短く狭かった。これに反して、地上の戦線は非常に長く広々としていた。

今日のフランスの立場は異なっている。軍事的には、大陸において強力なライヴァルをもたぬ第一の強国である。国境の点では、南のスペインとイタリアに対しては守備されているも同然の地勢であり、ドイツに対してはわが祖国の仮死状態によって安全が保証されている。海岸線の点では、イギリス帝国の中枢の前面に長い戦線をくり広げているのである。ただ飛行機や長距離砲にイギリスの生命中枢が攻撃しがいのある目標となるばかりでなく、Uボート[4]の活動にとってもイギリス貿易の交通網はむき出しであるといえよう。大西洋に面した長い海岸線、および地中海沿岸のヨーロッパあるいは北アフリカのフランス領のそれに劣らず長い海岸線を基地にして、Uボート戦をするならば、恐ろしい成果をあげるに違いない。

フランスとイギリスの政治目標　したがって、ドイツの勢力発展に対する戦いの結果は、政治的には大陸でのフランスのヘゲモニーをもたらした。軍事的成果は、フランスを陸上でのもっとも支配的な勢力として安定させ、アメリカ合衆国を自己と同等の海上勢力として承認したことである。経済政策的には、世界で最大だったイギリスの勢力範囲を以前の連合国に明け渡したのである。

今やイギリスの伝統的な政治目標は、ある種のヨーロッパのバルカン化を望み、またそれを必要とするのであるが、それとまったく同じように、フランスの政治目標もドイツのバルカン化にある。

イギリスの願望は、変ることなく、大陸の一強国が世界政策的意味をもつまでに法外に上昇するこ

とを防止する点にある。すなわち、ヨーロッパ諸国家間相互の勢力関係にある一定のバランスを保つことにある。なぜなら、このことはイギリスが世界を制覇するための前提と考えられるからである。

フランスの願望は、相変らず、自己のヨーロッパでの支配的立場をつくり出し、また安全にする前提として、ライン川の左岸を占領することによって、ドイツが統一した強国を形成するのを防止し、そして統一的な指導を欠いた、それぞれの勢力関係で平均化した小邦群からなるドイツ国家の秩序を固持することである。

フランス外交の究極目標は、イギリスの国策の究極的な傾向と永遠に矛盾するものとなる。

＊

ドイツとの同盟可能性　以上の観点から、ドイツにとっての今日の同盟可能性を吟味するならば、究極のところ実現可能な結合としては、ただイギリスに依存することしか残っていない、という確信に到達するに違いない。イギリスのドイツに対する戦争政策の結果がどれほど恐るべきものであったにしろ、また現在でもそうであるが、しかし、ドイツの破滅を不可避的に要求したイギリスの利害はもはや今日では存在しないこと、いやその反対にイギリスの政策は年々ますますフランスの度外れた制覇欲の阻止に進まざるをえないこと、これらのことの洞察に目をふさぐことは許されない。しかし今や同盟政策は、かつて不和だったことを考慮して進められてはならないのであって、むしろかつての経験を認識することから結ばれるだろう。だが経験は、今やわれわれに消極的な目標をもつ同盟は本質的な欠陥をもっていることを教えているといえよう。民族同士の運命は、ただ共通の取得、征服、つまりは両方の勢力拡張という意味での共通の成果が見込まれてのみ、互いに固く接合するように鍛造されるに過ぎない。

どれほどわが民族が外交政策的に考える力に欠けているかは、どこそこの国の政治家が多かれ少なかれ強い「親独感情」をもっているなどと、現在の新聞が報じていることからもっとも明白に知ることができる。その上この場合には、そのような人物がわが民族に対してもつ架空の態度の中に、われわれに対する慈悲深い政策の特別の保証が読み込まれているのだ。これはまったく信じられぬほどのナンセンスであるが、平凡な政治ずきな俗物的ドイツ人のたぐいない人のよさにつけこんだものでもある。かつて「ドイツびいき」な態度をもったような政治家は、イギリスにもアメリカにもイタリアにだっていたことはない。イギリス人ならだれでも、政治家であれば当然ますますイギリス人であるだろうし、アメリカ人はすべてアメリカ人であり、イタリアのためでない政策を進んで行なおうとするイタリア人はいないだろう。したがって、他国との同盟をその国の指導的政治家のドイツびいきの見解に基づいてうち建てることができると信じるものは、愚者か不正直な人間である。二つの民族の運命が互いに結ばれるための前提は、けっして相互の尊重だとかさもなくば好意などに支えられて存在するのではなく、締結国双方の目的にかなうことが見込まれる点に基づくものである。つまり、それはいってみれば、イギリスの政治家がつねにイギリスのための政策を追っており、したがってドイツのための政策を顧みないとしても、だがそうであればあるほど、このイギリスのための政策のまったく特定の利害はさまざまな理由からドイツのための利害と等しくなることがある、ということでありうるものである。むろんこのことはただある程度まで当てはまれば十分であり、いつかまるきりその反対に転化しうるものである。しかしながら、指導的な政治家の手腕といったものはまさしく、自己に必要なことを特定の期間に実現するために、その国の利益を守るためには同じ道を進まなければならぬ相手国をいつも見出してゆく点にあるのだ。

したがって現在にそれを実際応用するためには、次のような問題が解答される必要がある。すなわち、ドイツ的中央ヨーロッパが完全に排除されることによって、フランスの経済力および軍事力が絶対的、支配的な覇者の地位につくことに、現在少しも生存上の利害をもたない国はどことどこであるか？　いや、自己自身の生存条件および今までの伝統的な政策指導からして、そのような事態の発展に際して自己の将来が脅かされると考える国はどことどこであろうか？

なにしろ、次の点についてはとことんまで完全に知られる必要がある。すなわち、ドイツ民族にとって仮借のない不倶戴天（ふぐたいてん）の敵はいつの世でもフランスである。ブルボン王家であろうとジャコバン党であろうと、またナポレオン一族であろうとブルジョア民主主義者であろうと、ローマカトリックの共和主義者であろうと赤いボルシェヴィストであろうと、だれがフランスを支配したとしても、また将来だれが支配することになってもまったく変りはない。かれらの外交政策上の活動の究極目標はつねにライン国境を占取する企てであり、ドイツの分解と破壊によってフランスにこの川を保証することである。

イギリスがドイツの世界強国化を望まないとすれば、フランスはドイツと呼ばれる強国そのものを望まないのである。なんといってもこれは非常に本質的な相違である！　しかし今日では、われわれは世界強国の地位をえようと戦っているのではなく、わが祖国の存続のため、わが国民の統一のため、われわれの子供たちの毎日のパンのために格闘しなければならないのである。われわれがこの観点からヨーロッパでの同盟者を探して見渡すときただ二つの国が残るに過ぎない――イギリスとイタリアである。

イギリスは、その軍事力が他のヨーロッパの国から妨害されずに、いずれにせよいつかイギリスの

利益と衝突するに違いない政策の援護を引き受けうるほど強力なフランスの存在など欲しない。イギリスは、巨大な西ヨーロッパの鉄と石炭の鉱坑を所有することによって、危険な経済上での世界的地位を占めるための前提を保持するフランスの存在など、けっして欲することはできない。またさらにイギリスは、その大陸政策の状況がヨーロッパの他の国々が破壊されたお陰で、その世界政策のより増大された進路の再出発が可能になるばかりかまさしく強行されるに至るほど安泰なものと考えられるようなフランスの存在などけっして欲することはできない。そのときは、かつてのツェッペリンの落した爆弾が千倍にもなって毎夜訪れるに違いない。フランスの軍事的な優越は大英帝国の心を重く圧するのだ。

しかしまたイタリアも、フランスがヨーロッパでそれ以上優越した地位を堅固とすることを望むことはありえないし、望まないだろう。イタリアの将来はつねに、地域的には地中海付近に群がった事件の展開によって限定されるだろう。イタリアを大戦に駆り立てたものは、フランスを強大にしようとする病的欲望ではなく、むしろ憎むべきアドリア海でのライヴァル⑤に止めを刺そうという意図であった。それ以上の大陸におけるフランスの強大化はなおすべて、将来のイタリアにとって妨害を意味するのであるが、ここで思い違いをしていけないことは、民族間の血縁関係はけっしてお互いにライヴァルであることを止めさせることはできぬということである。

もっとも公正に、またもっとも冷静に考える場合、今日ではまずイギリスとイタリアのこの二つの国家は、少なくとももっとも本質的な点では、自国のもっとも自然で固有な利害を追求してもドイツ国民の生存条件に対立しないし、それどころか、ある一定の限度までは一致さえするのである。

*

ドイツは今日同盟できるか？　もちろん、われわれはそのような同盟可能性を判断するについては、三つの要素を見逃すことは許されない。第一の要素はわれわれの側にあり、他の二つは問題となっている国々自身にある。

およそ今日のドイツは同盟される価値があるだろうか？　自己の攻撃的な目標を実行するのを助けるために同盟を求めようとする国家が、その指導層が数年にわたってきわめてみじめな無能ぶりと平和主義的臆病のていたらくを示し、またその国民の大多数が民主主義・マルクス主義に眩惑されて、自国民と自国の利益を天人共に許さぬようなやり方で裏切っているような、そんな国家と同盟できるだろうか？　自国の貧しい生活を守るためほんの指一本動かす勇気も意欲も明らかに欠けている国家が、将来いつか共通の利益のために共同して戦ってくれもするだろうと信じて、この国と貴重な関係を結ぶことができるようにと、今日およそどのような国家が希望しうるだろうか？　同盟というものを、緩慢に腐朽してゆくある状態を維持するための保障条約――恐るべきかつての三国同盟の意図と同じような――より以上のものであり、またより以上のものであるべきだと考えているような国家であるならば、その特徴的な生活の表現を外国に対しては卑屈な恭順さに、国内に対しては国民の美徳の恥ずべき圧迫に見出せるような国家に、自国の運命をかけた約束をするだろうか？　つまり、その全体的ふるまいから見て、もはや偉大さに値しないために、もはや偉大さをもたぬ国家、あるいはその国民からの尊敬など誇りたくとも全然受けることもできず、したがって外国がそれに対してどれほども賛嘆の気持をいだくことができないような政府に、そうした約束をするだろうか？

否、自国の威信を保ち、獲物をあさる議会屋が受けとる報酬にかける期待以上のものを同盟にかけている国家は、当今のドイツと同盟はしないだろう。いや同盟ができないのだ。**今日のわが国が同盟**

の可能性をもちえないことが、やはり、敵意をもった略奪者達が団結していることのもっとも深い究極の理由となってもいる。なにしろ、わが国の二、三の議会の選良の行なった燃えるような「抗議」の外には、ドイツはけっして自衛したことがないのだから、そして他国はわが国の防衛のために戦うなんの理由ももたず、神様も臆病な民族は原則として自由にして下さらぬ——わが国の愛国団体が神様目当てにしくしく泣いたとしてもだ——から、したがって、わが国の完全な破滅に少しも直接的利害をもたない諸国でさえも、たとえ略奪に参加し獲物にあずかることによって、フランスの独占的強化を少なくとも阻止だけはするという理由からそうするに過ぎぬとしても、フランスの略奪行進に参加する以外まったく不可能である。

第二の要素として、われわれに対して今まで敵であった国で、大衆宣伝によってもうある一定の方向に影響づけられてしまった大部分の国民層の方向転換を企てるのは困難であることも見過ごされてはいけない。多年にわたって一国民を「フン人のようだ」[6]「どろぼうみたいだ」「ヴァンダル人のようだ」[7]等々と呼んでおいで、突如一夜明ければその反対だったことを発見し、以前の敵を明日の同盟者として紹介することはまったく無理である。

イギリス人とユダヤ人の利害の相違　しかし、第三の事実により以上の注意が向けられねばならない。この事実は、将来におけるヨーロッパの同盟関係を形成するためには本質的意味をもつものだろう。

つまり、イギリスの国家的見地からすれば、ドイツのそれ以上の破滅に対してイギリスのもつ利益は非常に少ないのだが、そのような事態の発展は国際的なユダヤ人金融組織の利益を、イギリスと反

対にますます大きなものにする。イギリスの公式な、より適切にいえば、伝統的な国策と、ユダヤ人の決定的な支配力をもつ金融力との間の分裂は、イギリスの外交政策問題に対するさまざまな態度の中になによりもよく示されている。ユダヤ人金融資本家は、イギリス国家の福祉という利益に反対して、ドイツ経済の徹底的破滅を望んだだけでなく、完全な政治上の奴隷化も望んでいる。わがドイツ経済の国際化、つまりドイツの労働力をユダヤ人の世界金融資本の所有物に引き渡してしまうことは、政治的にボルシェヴィズム化した国家ではじめて徹底的に実現されるのである。しかし、国際的ユダヤ人金融資本のマルクス主義的闘争グループが、ドイツの国家主義的国家のバックボーンを徹底的に打ち砕こうとするのであれば、このことは外国からの友達の援助がどうしても必要である。したがってフランス軍は、国内的に疲れきったドイツ国が国際的なユダヤ人世界金融資本家のボルシェヴィズム闘争グループに降服するまで、ドイツの国家組織を包囲攻撃していなければならないのである。

ユダヤ人の反独的世界扇動　したがって、ユダヤ人は今日ドイツの徹底的破壊を狙う大扇動者である。われわれがこの世界でドイツに対して書かれた攻撃を読む場合には、その製造業者はつねにユダヤ人である。まったく平和時代であろうと戦時であろうと変ることなく、ユダヤ人の金融新聞およびマルクス主義新聞は、ついに諸国家が続々と中立性を放棄し、自国民の真の利益を断念して世界大戦の連合国に役立とうと参加するまで、ドイツに対する憎悪を計画的にあおったのである。

その際、ユダヤ人の考え方ははっきりしている。ドイツのボルシェヴィズム化、すなわち国家主義的で民族主義的なドイツのインテリを根絶すること、およびそれによって可能になるドイツ労働力のユダヤ人世界金融資本のくびきの下での搾取は、このユダヤ人の世界支配の趨勢を更に拡大するため

の前奏曲と考えられているに過ぎない。歴史の中で幾度も幾度も示されたように、巨大な闘争の場合にはドイツは重要な枢軸である。わが民族および国家が、この血と貨幣に飢えているユダヤ人の民族暴虐者の犠牲に供せられれば、全地球はこのクラゲどもに籠絡されてしまうだろう。ドイツがこのからみつきから解放されるならば、この最大の民族危難は世界全体にわたって破壊されたと見なすことができる。

したがって、ユダヤ人がドイツに対する諸国民の敵意を保持させるだけでなく、可能ならばなおも進んでそれを高めようとするために扇動活動に全力を尽すことが確実であると同様、この活動がそれによって毒を盛られた諸民族のほんとうの利益とはほんのちょっぴりしか一致しないことも確実である。**ところで、一般にユダヤ人は、つねに諸国民の気質の認識に基づいてもっとも成果があると考えられ、また最大の結果も約束されるような武器でもって、それぞれの民族体の中で闘争を行なうだろう。**したがって血液的には極度にごちゃまぜになったわれわれの民族体では、それから生じた多かれ少なかれ「世界市民的」な、平和主義的・イデオロギー的思想、簡単にいえば、国際主義的傾向が存在しており、この傾向をユダヤ人は権力闘争に利用するのである。フランスではショーヴィニズムを認識し、正しく評価した上で活動が企てられる。イギリスでは経済的、世界政策的見地からなされる。つまり、つねにある民族の気質を示す本質的性質がユダヤ人によって利用されるのである。そのようにして経済的、政治的権力を十分に手に入れ、その一定の肥大しゆく勢力を獲得した場合、はじめてこのような今までもっていた武器の束縛を脱して、今や一様に自分の意欲や闘争の真の内面的意図を表面に出すのである。今や、一国から一国へと続けて廃墟に変えてゆき、そうして永遠のユダヤ王国支配権が確立されるようになるまで、ますます破壊は激しくなってゆく。

イギリスでもイタリアでも、よりよいその国特有の政治観念とユダヤ人の世界金融資本の意欲との間の分裂は明白に見られるし、それどころかしばしばはなはだしく目につくのである。

フランスとユダヤ人の利害の一致　今日フランスでは、以前にまして金融およびそれを支配しているユダヤ人の意図とショーヴィニズムの立場に立った国家主義的政策の願望との間に本質的な一致が見られる。しかしまさしくこの同一性の中には、ドイツにとって計り知ることのできぬ危険が横わっている。まさにこの理由からして、フランスはつねにきわめて恐るべき敵なのである。この自己の中でますます黒人化しつつある民族は、ユダヤ人の世界支配の目標と結びつくことによって、ヨーロッパの白色人種の存続にとっては身に迫る危険を意味するものである。なにしろ、ヨーロッパの心臓部であるライン地方の黒人の血によるペスト化は、このショーヴィニズムにとりつかれたわが民族の永遠の敵国がもつサディスト的、倒錯的な報復情熱に対応するものであると同様、このようにヨーロッパ大陸の中央部の雑種化を始め、低劣な人種からの伝染によって白色人種のもつ独裁的存在の基礎を奪おうとするユダヤ人の氷のように冷たい熟慮にも応ずるものである。

フランスが、自国の報復情熱に拍車をかけられ、またユダヤ人に計画的に導かれ、今日ヨーロッパでやっていることは、白色人種の存続に反する罪であり、そして将来いつか人種侮辱を人類の原罪と認識している一種族の復讐心がすべてこの民族に向かって突進するだろう。

二つの同盟国が可能である、イギリス――イタリア　しかしドイツに対して、このフランスの危険は、われわれと同様に脅かされているがフランスの征服欲望を忍耐できない国々に、すべての感情

的ゆきがかりを押えて自己の手を差し出すことを義務づける。
　ヨーロッパでは、近い将来ドイツの同盟国となりうる国はたった二つしかない。つまりイギリスとイタリアである。

＊

フランスに対するへつらい

　今日、革命以後のドイツ指導層の外交政策を回顧し追跡する労力を払うものは、わが政府の絶えざる理解に苦しむ無能を見て頭をかかえ込む外はないに違いない。そしてあっさりと絶望してしまうか、あるいはそのような政府に燃えるような憤激をこめて戦いを宣告することになるだろう。これらの政府の行動はもはや分別のあるなしとは関係のないことである。なにしろ、思惟する人々のすべてに不可解と思われるに違いないことが、わが国の十一月党派[8]の精神的一つ目小僧どもには処理できたからである。かれらはフランスにこびを呈したのである。その通り、このところずっと、手のつけられない空想家のもつほろりとさせられそうな愚鈍さでもって、くり返しフランスにへつらうことにこれ努めていたのだ。くり返しこの「大国民」の前でごきげんがとられ、そしてこのフランスの首つり役人のすれっからしの手管の一つ一つに、すぐさま明らかな意見の変更を示す最初の前兆を見出しえたなどと信じていたのだ。わが国の政治の実際の黒幕[9]は、もちろんこのような常軌を逸しているような信念を抱くことはけっしてなかった。かれらにとっては、フランスにへつらうことはただ、そのようにして実際の同盟政策をすべてサボるためのわかりきった手段であるに過ぎなかった。かれらはフランスおよびその背後の人間達の目標をよく知らないわけではなかった。それにもかかわらず、かれらがまるで誠実にドイツの運命を変えてゆく可能性を信じたかのように、あのように行動することを余儀なくさせたものは、やはりそうしなければわが民族自身が多分違った

道をたどるかも知れぬということの冷静な認識であった。

もちろんわれわれにとっても、自分達の運動の隊伍の中で、イギリスを将来に可能な同盟者だと納得させるのは困難だった。わが国のユダヤ的新聞は、とくにイギリスに対して憎悪を集中させる手段をやはりこの際も承知していた。そこでは、非常に多くの善良なドイツのばかどもがユダヤ人の差し出すモチざおに喜んで飛びついて、ドイツの海上勢力の「再強化」についておしゃべりし、わが国植民地の略奪に抗議し、その回復を他に勧め、それによって、ユダヤ人のごろつきがイギリスにいる同族者に対して、実際の宣伝的利用のために送ってやることのできる材料を調達する手助けをしたのだ。なにしろ、今日われわれが「海上勢力」などをえようと闘争すべきでないことは、次第にわが国の政治ずきなブルジョア階層のアホウ連中の頭にも意識されなければならぬものであった。ヨーロッパでのわが国の地位をきわめて根本的にあらかじめ安全なものとしておきもせずに、ドイツの国民の力をこのような目標に向けることは、戦前においてさえもナンセンスであった。今日そのように希望することは、政治の世界だったら犯罪という言葉が添えられるような愚行である。

同じ時期にフランスがわが民族体の肉を一切れずつ裂き取り、わが国の独立の基礎を計画的に奪っていたというのに、どれほどユダヤ人の黒幕がわが民族を今日ではもっとも些細なものになっている事柄に没頭させていたか、またデモンストレーションや抗議に出ることを扇動していたか、われわれはこうしたことを見ないわけにゆかなかったのだから、実際にしばしば絶望も生じたのである。

南ティロール問題　わたしはここで、この数年間にユダヤ人がきわめて巧妙に演じて見せた十八番についてとくに述べておかねばならない。つまり南ティロールのことである。

その通り、南ティロールである。わたしがすぐさまほかならぬこの問題に取りかかるのは、なによりもまず忘れっぽくまた愚かなわが国の大衆層に乗じて、かささぎが誠実な所有権の概念をもたない以上に議会主義の欺瞞者連中にはとくに縁のない国民的憤慨をあえて装っている大うそつきの下民どもと論判するためである。

わたし個人は、南ティロールの運命についても決定がなされた時期——だから一九一四年八月に始まり一九一八年十一月に至るまで——に、この地域をも実際に防衛したもの、つまり陸軍へ入隊した一人であったことを強調しておきたい。この期間わたしは自分の持ち分を尽して共に戦ったが、それも単に南ティロールを失わないためではなく、ドイツの他のすべての国土と等しくそれを祖国に対して保持するためであった。

当時いっしょに戦わなかったものは議会のオイハギ連中、つまり政論ずきで政党に集まった無頼の徒のすべてであった。われわれが、戦争の勝利の結果だけがこの南ティロールをもドイツ民族に保持させるに違いない、という確信をもって戦っている時、戦うのとは正反対にこれらエフィアルテス(10)の口は、ついに戦っているジークフリードが陰険な短剣の一刺しで倒されてしまうまで、この勝利を阻止するような悪宣伝をし、また攪乱(かくらん)したのである。なにしろ、南ティロールをドイツの所有に止めておくことは、もちろんヴィーン市役所の広場やミュンヘンのフェルトヘルンハレの前で行なわれる、勇敢な代議士先生のうそっぱちな扇動的演説によって保証されるものではなく、戦っている前戦の諸大隊によってのみ可能なことであったからである。これらの大隊を破滅させたものは南ティロール、およびまったく同様にドイツの他の全領地をも裏切ったものである。

しかし今日、抗議、宣言、組合員の行進等々で南ティロール問題を解決できると信じるものは、ま

ったく特別の無頼漢かあるいはドイツの俗物的市民である。

失われた地域の回復は、神様にいかめしく請い求めても、あいるは国際連盟に無邪気に期待を抱いてもなされるものではなく、武力によってだけ実現されるということについて、ともかく、じゅうぶんに知っていなければならない。

　したがって、武力でもってどこまでもこれらの失地を回復する覚悟のついたものはだれなのか、ということだけが問題となるに過ぎない。

　わたし個人に関していえば、南ティロールの圧倒的勝利による征服に加わるために、代議士のおしゃべり屋やその他の政党指導者そしてまたさまざまな枢密顧問官から成り立つ議会人の突撃大隊が形成される場合、わたしはその先頭に立つだけの勇気をまだ呼び起すことができるということを、なんのやましさも感じずにここに約束しうると思う。もし一度そのような「燃えるばかりの」抗議デモの頭上に突然数発の榴霰弾（りゅうさんだん）が四散するならば、かならずやわたしを喜ばせることだろうが、このことは理解してくれる人にだけ任せよう。わたしが考えるのに、一匹のきつねが鶏小屋に押し入った場合の鶏の鳴き声も、そのような堂々たる「抗議組合」が逃走する時ほどもひどくはないだろうし、また一羽一羽の家禽（かきん）が危険を防ぐのでもかれらほど迅速に行なわれることはありえないと思われる。

　しかし、この事態について不快きわまることは、やはり、紳士達ご自身がこのようにしてなにかあることが達せられるとはまるきり信じていらっしゃらぬということである。かれらは自分達の物々しい行動がなんの役にも立たずまた毒にもならぬことを、個人的にはもっともよく承知している。ただ今日では、南ティロールの回復のためにおしゃべりするほうが、以前それを維持するために戦ったよりも、当然幾らか容易であるという理由から、かれらはまさしくそのように行動しているに過ぎない。

各人はまさにそれぞれの分を尽している。当時われわれは自分達の血を犠牲にしたが、今日この仲間達はそれぞれのくちばしをみがいている。

独伊協調の妨害

なお、その際にヴィーン正統派連中が自分達の南ティロールの奪回活動にまったく得意になっているのを見るのも、とりわけ愉快なものである。七年前には、かれらの崇高で貴顕な王家は、いうまでもなく偽証的な裏切りという悪質な手段によって、連合国が勝利者として南ティロールをも獲得できるように援助したのである。当時これらの連中は、かれらの売国奴的王朝の政策をたすけ、南ティロールについても、その他のことについても無頓着であった。もちろん、今日ではこの地域のために闘争を引き受けるのはよりやさしい。というのは、今やこの闘争はただ「精神的」武器で戦われるに過ぎないし、「抗議集会」で声をからして演説する――心の内部にある崇高な憤激から――ことや、新聞の論説を書きまくるほうが、およそルール地域を占領した時のようにたとえば橋を空中にふっ飛ばすことなどよりも、なんといってもやさしいからである。

なぜここ数年来、まったく特定の連中の間で「南ティロール」問題がドイツ・イタリア関係の要点とされるに至ったか、という理由はまったく明らかである。ユダヤ人とハープスブルク正統派は、いつかドイツという自由な祖国の復活に導くであろうような、ドイツの同盟政策を阻止することに最大の関心をもっている。南ティロールに対する愛情から、今日このようなものものしい行動がなされているのではなく――なにしろ、南ティロールはその行動によって援助されはせず、損害を受けるだけだから――多分、実現可能かも知れぬドイツ・イタリア協調に対する不安からそのような行動がとられているのだ。

この場合、これらの仲間が氷のような冷たさと、またあつかましさでもって、まるでなにかわれわれが南ティロールを「裏切った」かのように事態を説明しようと企てているが、このことはこの仲間に一般的な虚偽と中傷の性癖の線につながるものであるに過ぎない。

南ティロールを売ったもの　次のことをこれらの紳士方にきわめて明白にいっておかねばならない。第一に、一九一四～一九一八年の間に健康でありながらどこの戦線にも行かず、祖国に自己の献身を役立たせなかったドイツ人はすべて、南ティロールを「売った」のである。

第二に、これらの年月の間、わが民族体の戦争遂行に必要な抵抗力を強化し、またわが民族がこの闘争を貫き通すために必要な耐久力を堅固にすることに協力しなかった人々のすべてである。

第三に、十一月革命――直接的に行動したものであろうと、また間接的にいくじなくその行動を黙認したものであろうと――の突発に協力し、またそのことによって、それだけが南ティロールを救うことができたであろう武器を破壊した人々のすべてが南ティロールを売ったのである。

そして第四に、ヴェルサイユとサン・ジェルマン[11]の不名誉な条約に署名した政党およびその支持者のすべてが南ティロールを売ったのである。

その通りだ、事態はそうなのである。わが恐れを知らぬ、口先ばかりの抗議屋諸先生方よ！

今日、わたしはただ次のような冷静な認識によってだけ導かれるだろう。つまり、われわれは失われた領域を代議士連中の磨き上げられた能弁によって回復することができず、磨かれた剣、したがって血まみれの戦争によって失地を獲得しなければならぬ、ということである。

武力ではなく同盟政策で　　　それでもやはり、わたしはもちろん次のように断言することをためらいはしない。すなわち、さいころは振られてしまったのだから、戦争による南ティロールの回復はわたしにとって現在ではもはや不可能と思われるだけでなく、さらにこの問題について全ドイツ民族の燃えさかる国民的熱狂も勝利の前提となる程度にまではとても達しないだろうと個人的には確信しているから、わたしはそのような回復の道を否認しようとするものでもある、と。その反対にわたしは、もし二十万のドイツ人のために――それとならんで七百万を越す人々が他国の支配に悩んでおり、またドイツ民族の生命線がアフリカの黒人の群の運動場の中を走っているにもかかわらず――いつかこの民族の血が賭けられるとするなら、そのとばくを行なうことは犯罪に違いないと思う。

もし、ドイツ国民がヨーロッパから自分達がまさに絶滅させられようとしている状況を終結させたいと願うならば、その時かれらは戦前の誤りを犯して、神と世界を自分達の敵にしてはならず、さらにもっとも危険な敵を認識することによって、この敵に集中された全力をもって打ち当らねばならないだろう。そして、もし他の場所を犠牲とすることによってこの戦いが勝利した場合には、わが民族の後の世代の人々がそれでもなおわれわれに有罪の判決を下すということはないだろう。かれらは、ひどい苦境、深刻な不安、またそれらから生じたきびしい決断について、これから発生した結果が輝かしいものになればなるほど、ますますその真価を認めなければならぬことに気づくだろう。

一国の失地を回復することは、第一に母国の政治的独立と勢力の回復の問題である、という根本的洞察は相変らず、今日のわれわれを導くものでなければならない。

このことを賢明な同盟政策によって可能にし、安全なものにするのは、わが国家組織の強力な外交指導の第一の課題である。

しかし、外ならぬわれわれ国家社会主義者は、わが国のユダヤ人に導かれているブルジョア的な言葉だけの愛国者の誘導索に引っぱり込まれないように用心すべきである。もし、われわれの運動までも戦闘の準備をする代りに、抗議の練習をするようにでもなったら、禍あれかし！　腐肉のようなハープスブルク国家とニーベルンゲン的同盟を結ぼうと空想的に判断したから、ドイツは共に破滅に進んだのである。今日、外交政策上の可能性を処理する場合の空想的なセンチメンタリズムは、わが国の再興を永遠に妨害する最上の手段である。

＊

同盟政策についての三問題　すでに先行の部分で述べておいた三つの問題に関係する異論について、ここでなおまったく簡単ではあるが触れておくことが必要である。つまり、それらの問題とは、第一に、だれの目にも明白な欠陥に満ちた今日のドイツと、およそ同盟する国があるかどうか。第二に、敵意をもった国々がそのような転換をすることができると思われるかどうか。第三に、いずれにしろユダヤ人から与えられた影響というものは、あらゆる認識、あらゆる善意よりも、より強力なものではないだろうか、またそれゆえ、あらゆる計画をしくじらせ、破滅させるものでないかどうか、である。

わたしは第一の問題について、すでに半分ほどは、十分に議論したと思っている。今日のドイツとはどんな国でも同盟しないのは自明であろう。世界のどこの国も、その政府がありとあらゆる信用をなくすに違いないような国家と、自国の運命をあえて結ぶことはないだろう。ところが、わが民族同胞の多くが政府の行動に対して、わが民族の目下のみじめな精神状態を考慮することによって大目に見たり、あるいはそれを政府が口実とさえすることを許してやったりしているが、これに対してはき

わめて厳然とした反対態度をとるべきである。

ドイツ再生の最初の徴候　たしかに、この六年間のわが民族の無節操は深く悲しむべきであり、また民族のもっとも重大な関心事に対する関心のなさも実に憂鬱なことであるが、臆病さについては往々罰当りなくらいであった。しかしそれにもかかわらず、ほんの数年前には人類の最高の美徳の驚嘆すべき手本を世界に示していたような民族が、ここで問題とされているということがなお忘れられてはならない。一九一四年八月に始まって巨大な民族闘争が終わるまで、地球上のどの国民も、男らしい勇気、粘り強い根気、がまん強い忍耐力において、今日では非常にくだらないわがドイツ民族に勝っていることを示しはしなかった。現在のわれわれがこうむっている不名誉を、わが民族の特性を示す本質的表現である、と主張しようと思うものは一人もないだろう。われわれが今日、われわれの回りで、またわれわれの中に体験するに違いないものは、ただ一九一八年の十一月九日の偽証行為のぞっとするような、意識も理性も破壊するような影響に過ぎない。どんな時代にもましてここでは、続けざまに悪を生まねばならぬ悪という詩人の言葉が妥当する。しかしこの時代でも、わが民族の善良な基本的要素が完全に失われたのではなく、それらはただ深みの中で目覚めることなくまどろんでいるに過ぎず、しばしば人々は黒雲のたれた大空に稲光りが光るように美徳がぱっと輝くのを見ることができたのであり、これらの美徳を後代のドイツはいつか、回復の始まった最初の徴候と想起するだろう。若い生命を一九一四年の時と同じようにまたもや自発的に、また喜んで愛する祖国の祭壇の犠牲にささげようとする、献身的な決意をもった数千また数千のドイツの若者達が現われたのも一度やそこらではないのだ。再び、数百万の人間が、まるで革命によって破壊も生じなかったかのように、

勤勉に、熱心に活動している。鍛冶屋（かじや）は再び金敷の前に立ち、すきの後から農夫が歩み、そして研究室には学者がすわり、あらゆる人々が同じような努力と同じような愛着心でもってそれぞれの義務を果たしている。

　われわれの敵の側からの抑圧は、もはやかつてのように裁きが下ったのだといった笑いを呼び起すこともなく、不機嫌な、怒った顔でこたえられた。疑いもなく意向が大きく変化したのである。

ヴェルサイユ条約の怠られた利用　もしこれらすべてのことが、今日でもなおわが民族の政治的権力思想および自己保存衝動の再生となって現われていないとすれば、その責任は天の任命によるというよりはむしろ自分自身天職ときめ込んで、一九一八年以来わが民族を死の責め苦でもって統治している人々がになうものである。

　その通りだ、もし人々が今日わが国民について嘆くならば、やはり次のようにいろいろ問うことが許されるだろう。国民をよりよくするためになにがなされたか？　われわれの政府の決意——現実にはもう存在していなかったようなものだったが——に国民による支持が少ないのは、わが民族の生活力の乏しさの徴候に過ぎないか、あるいはなおそれにもまして、このすぐれた財宝の処理が完全に不成功だったことの徴候ではないのか？　**わが政府が、この民族の中に再び誇り高き自己主張、男らしい抵抗、および怒りに燃えた憎悪、これらの精神を植え込むために、なにを行なっただろう？**

　一九一九年に平和条約がドイツ民族に課せられた時、外ならぬ度はずれた抑圧のためのこの道具によって、ドイツの自由を請求する叫びが強力に促進されるように希望をもつことは、正当であったに違いない。**その要求が民族をむち打のように打ちすえる平和条約は、後の高揚への出発を告げる最初**

の太鼓のすり打ちとなることもまれではない。
このヴェルサイユ平和条約から、なにが実行可能であったか！
意欲的な政府の手にかかれば、度はずれた強奪とまったく恥ずべき屈従のこの道具も、国民の激情を沸騰点にまで興奮させるどれほど強力な手段と変えられえたことだろうか？　またこのサディスト的残酷さを才気縦横に宣伝として利用することによって、どれほど無関心な民族を憤激させ、またこの憤激を本物の熱狂にまで高められえたことだろうか！
これらの個々の論点を余すところなく、ついには六千万の男女の頭の中で、共通に感じられた羞恥心および共通の憎悪が唯一の赤々と輝く炎の海となるまで、この民族の頭脳と感覚に焼きつけることができ、さらにその炎熱の中から鋼鉄のように固い意志が立ち現われて、
われわれは再び武器を望む！
という叫びが起らざるをえないようにすることもできたろうに。
「主よ、われらの闘争を祝福し給え！」　その通りだ、そのような平和条約はこうしたことに奉仕することができる。その度はずれた抑圧、その恥知らずな要求の中に、一国民の中で眠り込んでいる活力を再び揺り起すための最大の宣伝武器が見出される。
もちろんその時は、子供の初歩読本から始まって最後の新聞紙に至るまで、あらゆる劇場、あらゆる映画、あらゆる広告塔、空いている板壁のあらゆる部分までがこの唯一の偉大な使命に向かって——ついには今日のわが国の愛国団体員の「主よ、われわれを自由にし給え！」という不安の祈りが、きわめて小さな子供の頭脳の中でさえも、「**全能の神よ、いつかわれらの軍備に祝福を与え給え、あ**

なたがいつもそうであったように公正であれかし、今やわれわれがおよそ自由に値するかどうかを裁かれよ、主よ、われらの闘争を祝福し給え！」という燃えるような祈願に変るようになるまで――奉仕させられなければならぬ。

あらゆることが怠られ、なにも実行されなかった。

ところで、わが民族がそうでなければならなかったように、そしてそうありえたはずなのに、現在そうなっていないとしても、だれが驚くだろうか？　他国の人々が、わが国の中にただ牢番（ろうばん）だけを、かつて自分をなぐった人間の手をありがたがってなめる従順な犬だけを見出すに過ぎぬとしても、だれが驚くだろうか？

わが国の同盟可能性が、今日わが民族のためにせばめられていることはたしかであるが、しかしわが国の政府はそれに対して最大の障害となっている。政府は退廃しており、まったく際限のない抑圧が八年続いたあとでも、まだ自由を求める意志がほとんど現われていないことはかれらの責任である。

したがって、積極的な同盟政策が、わが民族へ下されるそれに必要な価値判断にはなはだしく制約されるものであると同様、この価値判断はさらに、他国の下職人であろうと望まず、自国の働き手の監督官であることも望まず、むしろ国民的良心の軍使であろうとする政府権力の存立によって大きく左右されるものである。

そして、わが民族がこの軍使を自分の使命だと見なす国家指導層をもっているとすれば、六年は空費されることもないだろうし、そしてドイツ国の大胆な外交政策指導層は同様に大胆な、自由を渇望している民族の意志を意のままにできることだろう。

＊

とは大変困難であるという異論については、おそらく次のように答えられるだろう。

異常な反独意識の好転　第二の異論、つまり敵意をもった民族を友好的な同盟者に好転させることは大変困難であるという異論については、おそらく次のように答えられるだろう。つまり、他の国々の中で戦時宣伝により育成された一般的な異常な反独意識というものは、ドイツ国が、自己の自己保存意欲をあらゆる国々にもわかるように回復させることによって、共通のヨーロッパという将棋盤で指し、また他国が一緒に指しうるような、一国家としての性格特徴を再びもつようにならぬ限り、不可避的に存続を止めないのである。政府と国民の中に実際の同盟能力に対する無条件の保証が生じたと思われた場合、はじめて一、二の国が平行する利害からして、宣伝的感化によって自国の世論を好転させようと考えることも可能になる。もちろん、これもまた巧妙な工作を何年も継続することが必要である。一国民の心境を変化させるには、まさにこのような長期間にわたる継続が必要であるという事情の中に、その着手が慎重に行なわれねばならぬ理由がある。すなわち、そのような工作の価値と将来の効果について無条件の確信をもたぬ場合には、そうした活動に取りかかることはできない。多かれ少なかれ気のきいた外務大臣の空虚な大言をもってしても、一国民の精神的態度というものは、その新しい態度の現実的な価値がはっきりと保証されない限り、変更されることはないだろう。さらに保証を欠く変更は、世論の完全な分裂に導くに違いない。しかし、一国と後になって同盟する可能性をもっとも確実に保証するものは、けっして個々の政府当局者の誇大な話しっぷりではなく、むしろ一定の、合目的だと思われる政府の傾向がはっきり安定していること、および類似した立場にある世論なのである。政府権力の明確な活動が自己の工作を宣伝的に準備し支持する面で大きければ大きいだけ、また反対に世論の意向が政府の傾向により明白に反映されていればいるほど、保証に対する信用もそれだけ確実であるだろう。

自由闘争に対する明確な意志　したがって、一民族——われわれのような状況にある——は、政府と世論が同様な熱狂さでもって自由闘争に対する意志を予告し主張する場合に、同盟能力があると見なされるだろう。このことこそ、自国の認識に基づき、その国固有の利益を守るために好都合と思われる相手国に接近しようとする、つまりその民族と同盟を結ぼうとする、他の国々の世論がいよいよ転換に着手されるための前提なのである。

ところで、なおもう一つそれに付け加えられねばならぬ。一民族の特定の精神的状態を変えるためには、もともと困難な工作が必要であるし、差し当り多くの人間によって理解されないだろうから、自己の誤ちによってこれらの意向の違う分子達に反対工作をさせるための武器を引き渡すのは、犯罪であると同時に愚行である。

一民族が徹底的に政府のほんとうの意図を知るようになるまでには、必然的にある期間が過ぎなければならぬ、ということが理解さるべきであるが、それというのも、ある特定の政治的予備工作の究極の最後的目標についての説明は与えられうるものでなく、それにはただ大衆の盲目的な信頼か、あるいは精神的により高い位置にある指導者層の直覚的洞察が期待されうるに過ぎないからである。しかし、多くの人間にはこの千里眼的な政治的感覚および予感能力が存在していないし、しかも説明は政治的に理由づけて与えられることができないのだから、インテリ指導者層の一部分はつねに新しい傾向に対して反対するだろう。この傾向はかれらの目先きの利かぬために、ややもすると単なる実験と解釈されうるのである。したがって、心配性の保守的な国家の構成分子の抵抗が喚起される。

一つの敵に集中

けれどもこの理由からして、相互理解の促進を妨害するこのような人間からできる限りすべての利用されうる武器を取り上げるように尽力することは、ますます最高の義務となるのであり、そしてわが国の場合のように、もともとうぬぼれ屋の愛国団体員や俗物的なコーヒー店政治屋のまったく実現見込みのない、純粋な空想的おしゃべりが問題でしかない時にはとくにそれに妥当する。なにしろ新しい艦隊やわが植民地の回復等々を要求する叫び声が、現実には単に無思慮なおしゃべりであるに過ぎず、実際に実行できる考えなどかれらはただの一つももたないのであるが、このことは静かに考慮すればおそらく少しの異議も唱えられぬに違いないからである。しかしイギリスにおいて、この半ばは無邪気な、半ばは正気でない、だがつねにわれらの不倶戴天(ふぐたいてん)の敵に内々では奉仕している抗議戦士達のまったくとんまな真情吐露が政治的にどれほど利用し尽されているだろうか、このことはドイツに有益だと呼ぶわけにはゆかない。かれらはこのように神と全世界に対する有害なデモめいたものによって疲れはて、すべて効果を収めるための前提である次のような第一原則を忘れている。つまり、なんじの行なうべきことは、完全に行なえ、である。五か国あるいは十か国に不平面を見せているが、意志と肉体の全勢力をわれわれのもっとも憎むべき敵の心臓を突き刺すことに集中するのを怠り、この敵と対決するために同盟することによって強力化する可能性を犠牲にしている。

ここにも、国家社会主義運動の一つの使命がある。この運動は、小さなことにこだわらずに最大なことに目をむけ、些細なことで精力を浪費せず、われわれの今日戦うべき目標はわが民族のただ生きてゆくだけのぎりぎりの存立であること、およびわれわれが当るべき唯一の敵はいつの時代にあってもこの生存をわれわれから奪う国であること、この二つのことをけっして忘れぬようわが民族に教えなければならない。

多くのことがわれわれをひどく苦しめるかも知れない。しかしこのことから、理性を断念し、ナンセンスな叫び声で全世界とけんかし、集中した力でもって不倶戴天の敵と対決することをやめてよい、という理由を簡単に引き出してはならない。

売国奴に対する論判　その上ドイツ民族は、唯一無比の国土を売り渡し裏切った犯罪者達の責任を追及しない限り、他の国々の態度について非難する道徳的権利をもたない。なるほどイギリスやイタリア等々に対して遠方から毒づき抗議したとしても、敵の戦時宣伝に雇われてわれわれから武器をかすめ取り、道徳的バックボーンを破砕し、マヒしたドイツ国を銀貨三十枚の口銭で売り飛ばした無頼漢を国内でのさばらしているのでは、ほんとうのまじめとはいえない。かれらの態度と行為から、われわれは予想すべきことであったことをただ行なっているに過ぎない。かれらの態度と行為から、われわれは学んでもよさそうなものである。

しかし、このような見解の卓抜さを認めることをあくまで拒否しようとするものは、そうなれば将来永遠にあらゆる同盟政策が除去されるのだから、したがってまったく断念することしか道は残っていないことを、最終的になお熟考してもよいだろう。というのは、イギリスはわれわれから植民地を奪ったのだから、われわれはイギリスと同盟できないし、イタリアは南ティロールを占有しているからイタリアともだめであり、ポーランドとチェコスロヴァキアとはもともとだめだ、と文句ばかりいっていては、フランス——ついでながらこの国もやはりわれわれからエルザス・ロートリンゲンを盗んだ——以外にはヨーロッパで残る国はないからである。

そのことがドイツ民族の役に立つかどうかは、ほとんど疑問をはさむ余地がない。ただ、そのよう

されているのか、ということだけがいつも疑問として残るに過ぎぬ。
その際指導者が問題にされる限りでは、わたしはつねにかれらは後者であると信じる。したがって人知でおしはかる限り、もしわが国家の本質的な強さおよびわれわれの存在を維持しようとする明確な意志がわが国を同盟国として再び価値あるように他国に思わせるならば、またさらに以前わが国の敵であった民族とそのように将来同盟することに反対する人々に、再びわれわれ自身の不手際あるいは犯罪者的行為によってかれらの活動のための栄養物を与えたりしないならば、その国がわが国と類似した実際の利害を将来にたいして抱いているかぎり、今まで敵であった個々の国民の精神状態を転換することは、十分に成功しうるものである。

＊

国家主義国家の利益は勝つか？　第三の異議はもっとも答えにくいものである。同盟可能な諸国の真の利益を擁護する人々が自由な民族国家、国家主義国家に対する仇敵ユダヤ人の意志に抵抗して、自己の確信を貫くことが可能である、と考えられるだろうか？たとえば伝統的なイギリスの政治勢力は恐ろしいユダヤ人の影響をなおもくじくことができるかどうか？

この問題は、すでに述べたように、非常に答えにくいものである。それは余りにも多くの要因によって左右されるものであるから、簡明な判断を下すことはできない。いずれにしても一つのことは確実である、つまり、ある一つの国家では目下のところ国家権力が大変しっかりと安定し、また文句なしに国家の利益に奉仕していると見なされうるので、そのため、政治的急務が国際主義的ユダヤ人勢

力によって実際に効果ある妨害を受けることなど、もはや話題になりえない。

ファッショ的イタリアとユダヤ人　ファッショ的イタリアが、あるいは究極のところ無意識であったにしても（わたし個人はそう信じていない）、ユダヤ主義の三つの主要武器に対して遂行している闘争は、間接的なやり方であるにしても、この超国家的な勢力の毒牙が折られうることを示す最上の徴候である。フリーメイスン的秘密団体の禁止、超国家的な新聞の迫害および国際主義的マルクシズムの絶えざる排撃、また逆にファッショ的国家観の不断の強化等によって、イタリア政府は年とともにますます、世界にまたがる九頭蛇ユダヤ人の叱声など顧慮せずに、イタリア民族の利益に奉仕できるだろう。

イギリスとユダヤ人　イギリスでは事情はより困難である。この「もっとも自由な民主主義」の国では、ユダヤ人は世論という間接的手段により、今日でもまだほとんど無制限に独裁的ふるまいをしている。そしてなおこの国でも、イギリスの国家的利益を擁護する人々とユダヤ人の世界独裁の戦士達との間の絶えざる格闘が存在しているのである。

この対決のどれほど猛烈な衝突がしばしばくり返されているかは、戦後にはじめて、一方ではイギリスの国家指導層の、他方では新聞の、日本問題に関するさまざまな態度の中にきわめて明瞭(めいりょう)に見ることができた。

大戦が終結するや否や、アメリカと日本相互間の古くからの不和が再び表面に現われ始めた。もちろん、ヨーロッパの世界的大国もこの新しい迫り来る戦争の危険に対して無関心のままでいることは

できなかった。あらゆる血縁的結合にもかかわらず、イギリス国内では、国際経済政策・強権政策のすべての面にわたるアメリカ合衆国の成長に対するある種の嫉妬的な懸念の感情が盛り上らざるをえないのである。以前の植民地、偉大な母国の子供から、世界の新しい支配者が立ち現われるように思われる。イギリスが今日心配に満ち満ちた焦慮から自国の古い日英同盟を再吟味し、もはや、**「海の支配者イギリス！」**ではなく、**「合衆国の海！」**と呼ばれるようになる時点を、おそるおそるイギリスの政治がじっと待ち受けているとしても理解できぬことではない。

処女地の莫大な資源をもった、どでかいアメリカ巨人国家には、周囲から締めつけられているドイツ国より一層手出しが困難である。いつかこの国とも最後の決戦をかけたさいを振るような事態になるとすれば、イギリスが自国の力だけに依存することは命取りとなるだろう。したがって黄色いこぶしと握手することを熱望し、人種的に考えればあるいは許しがたいことかも知れぬが、政治的には、興隆を目指しているアメリカ大陸に対抗するイギリスの世界的地位強化の唯一の可能性である同盟にしがみついている。

それゆえ、イギリスの国家指導層は、ヨーロッパの戦場で共同して戦争したのにもかかわらず、アジアの相手国との同盟がぐらつくようなことを決心したくはなかったのだが、あらゆるユダヤ人新聞はこの同盟の背面を攻撃した。

一九一八年まではドイツ国に対するイギリスの戦争の忠実なたて持ちであったユダヤ人の機関が、今や突然裏切りを働きわが道を行くなどということは、どうして可能なのか？

ドイツの絶滅はイギリスの利益ではなく、第一にユダヤ人の利益であったが、まったくこれと同じように、今日において日本を絶滅することもまたイギリスの国家的利益であるよりも、むしろユダヤ

人の期待された世界帝国の指導者達の広大な願望に奉仕するものである。イギリスがこの世界での自国の地位を維持するために骨折っている時、ユダヤ人は世界征服のための攻撃を組織している。

ユダヤ人は今日のヨーロッパ諸国を、いわゆる西欧民主主義という間接的手段であれ、ロシアのボルシェヴィズムによる直接的支配の形態であれ、とにかく、すでに自分の手の中で意志の自由を失っている道具と見なしている。しかし、かれらは旧世界だけをそのように籠絡しているにとどまらず、同じ運命は新世界にも迫っているのだ。ユダヤ人達はアメリカ合衆国の金融力の支配者である。一年一年とかれらはますます一億二千万民衆の労働力の監督者の地位に上ってゆくのである。かれらの怒りを買いながらも、今日でもまだ完全に独立を保っている人々はまったく少数しかない。

すれっからしの巧妙さでもってかれらは世論をこね上げて、そこから自分達の将来のための闘争の道具を作り出すのである。

すでにユダヤ人の最高の首領達は、諸民族を大規模にむさぼり食い尽すというかれらに遺言的に伝えられているモットーの成就が近づくのが見られると信じている。

このように非国家化されてしまった植民地的な国家の大群の中で、ただ一つだけでも独立的な国家が残っていさえすればその国はかれらの全仕事を最後の瞬間になおも崩壊させることができよう。なぜなら、全世界をおおい尽すのでなければ、ボルシェヴィキ化された世界は存続しえないからである。ただの一国でも国家的エネルギーと偉大さをもち続けるとすれば、専制的なユダヤ人総督治下の世界帝国は、この世界でのあらゆる暴政と同様、国家主義思想のもつ力に負けるだろうし、また負けるに違いない。

日本とユダヤ人　ところでユダヤ人は、自分達の千年にわたる順応によってヨーロッパ民族の基礎を掘り崩し、かれらを種族の性格を失った雑種に養育することはなるほどできるにしても、しかし日本のようなアジア的国家主義国家に同じ運命を与えることはほとんどだめだということをじゅうぶん知っている。今日ユダヤ人はドイツ人、イギリス人、アメリカ人、そしてフランス人のふりをすることはできるが、黄色いアジア人に通じる道はかれらに欠けている。したがってかれらは、日本という国家主義国家をやはり今日同じような構造をもつ国々の勢力によって破壊しようと企てるのであるが、それはこの危険な敵のこぶしによって、最後の国家権力が防御力のない諸国家を支配する専制に変ってしまう以前に、その敵を片づけるためである。

ユダヤ人は自分達の至福千年王国の中に、日本のような国家主義国家が残っているのをはばかり、それゆえ自分自身の独裁が始められる前にきっちり日本が絶滅されるよう願っているのである。

したがってかれらは、以前にドイツに対してやったように、今日日本に対して諸民族を扇動しており、それゆえ、イギリスの政治がなおも日本との同盟を頼りにしようと試みているのに、イギリスのユダヤ人新聞はすでにこの同盟国に対する戦争を要求し、民主主義の宣伝と「日本の軍国主義と天皇制打倒！」のときの声の下に、絶滅戦を準備するということも起りうるのである。

このようにして、ユダヤ人は今日イギリスでは不従順となってしまった。

したがって、ユダヤ人による世界の危難に対する闘争はイギリスでも始められるだろう。

そしてまた、外ならぬ国家社会主義運動は自己のきわめて巨大な課題を果さなければならぬ。

世界の敵に対するわれらの闘争　この運動は民族の目を他国民に向けて開いてやらなければなら

ぬし、われわれの今日の世界におけるほんとうの敵を再三再四思い出させなければならない。（ほとんどあらゆる面でそれらからわが民族を分離することができるとしても。）[12] 共通の血あるいは同質の文化といった太い線でなおわれわれと結ばれているアーリア諸民族に対する憎悪の代りに、すべての苦悩の真の元兇である人類の悪質な敵を一般の憤激の前にさらさねばならない。

だがこの運動は、少なくともわが国の内部で不倶戴天の仇敵が認識され、そしてこの敵に対する闘争がより輝ける時代のきらめく徴候として、格闘するアーリア人類の幸福のための道を他の諸国民族にも示しうるように心を配らなければならない。

ところで、理性がその場合にわれわれの指導者となり、意志がわれわれの力となりうる。以上のように行為すべきである神聖な義務がわれわれに堅忍不抜さを与え、また最高の保護者としてわれわれの信念が存続するようにあれかし。

第十四章　東方路線か東方政策か

外交政策問題についての偏見　わたしがドイツとロシアの関係をとくに吟味しようとするのには、次の二つの理由がある。

1　つまり、この場合にはドイツの外交政策全体におそらくもっとも決定的と思われる要件が問題であるということ、そして、

2　この問題は若い国家社会主義運動が明晰に思考しうるかどうか、正しく行動しうるかどうかという、その政治能力に対する試金石でもある。

わたしは、とくに第二の点について、しばしば気がかりな憂慮で心が満たされることを告白しなければならない。なにしろわれわれの若い運動は、自分達を支持する人々を公平な人々の陣営からではなく、ほとんどは非常に極端な世界観の持主の中から連れてくるのであるから、この人々が外交政策の理解という点でも、始めのうちはかれらが以前に政治的、世界観的に属していたに違いない仲間の偏見もしくは理解不足に煩わされていることは、当然という外はない。しかも、このことはけっして左翼からわれわれに参加した人間にだけ当てはまるのではない。反対である。このような問題について左翼だった人々が今まで受けてきた知識がどれほど危険なものであったにしても、その知識はかなりの場合、少なくとも部分的には、自然の健全な本能が残存していることによって再び除かれたのである。そこで以前に押しつけられた影響をよりよい見地で取り替えてやることだけが必要だったに過

ぎず、かれらがまだ残存しているそれ自体は健全な本能と自己保存衝動を、最上の同盟者と認識しうることもきわめて頻繁に起った。

それに反して、今までにこの面について受けた教育がかなり理性と論理を欠き、さらにまた結局自然の本能を跡かたもなく客観性という祭壇の犠牲にささげてしまったような人間を、明確な政治的考え方に導くのはずっと困難なことである。外ならぬわれわれのいわゆるインテリ仲間こそ、自分達の利益や自己の民族の対外的な利益を、真に明確にまた論理的に擁護するような気持にさせるのがもっともむづかしい連中である。かれらはただ無意味きわまる観念と偏見というまぎれもない重荷に煩わされているだけでなく、さらになおまったく余計なことには、あらゆる健全な自己保存衝動を失い、また断念してしまっている。国家社会主義運動もこれらの人々と困難な闘争を続けなければならない。それが困難であるというのは、残念にもかれらが完全に無能であるにかかわらず、法外な自負心にしばしば取りつかれてしまい、その結果かれらは他人を、多くの場合より健全な人々さえも、自分達が少しも本質的な資格をもたないのに見下げるからである。それは思い上った自負心の強い知ったかぶりであるが、そこには、冷静な吟味と熟慮の能力がすっかり欠けている。だがこの能力こそはあらゆる外交政策上の意図と行為の前提と見なされるべきものであるのだ。

なにしろ外ならぬこの仲間が今日わが外交政策の目標志向を、きわめて不幸なことにわが民族の民族的利益を真に擁護することから転換させてしまい、その代りに自分達の妄想的なイデオロギーに役立たせはじめたから、わたしは自分の支持者に対して、もっとも重要な外交政策問題、つまり対ロシア関係を特別に扱い、そしてこのことが一般の理解に必要であり、またこのような著作のわくの中で可能な限り根本的に扱うことが義務であると感じている。

国家の領土の意味　わたしはここでなお一般的に次のことを前置きしておきたい。つまり、もしわれわれが外交政策という言葉でもって、一国民の他の国々に対する関係の調節を理解すべきであるとするなら、調節の方法はまったく一定の事実によって制約されるに違いない。国家社会主義者としてわれわれは、さらに進んで民族主義的国家の外交政策の本質について、次のような命題を提出することができる。

つまり、民族主義的国家の外交政策は、一方では国民の数およびその増加と他方では領土の大きさおよびその資源との間に健全で、生存可能であり、また自然的でもある関係を作り出すことにより、国家を通じて総括される人種の存在をこの遊星上で保証すべきものである。

この場合健全な関係というのはつねにただ一国民を自己の領土でもって確実に養うことのできる状態であると理解してよいだろう。たとえ数百年も、いや数千年続いたとしてさえも、これ以外のあらゆる状態はそれにもかかわらず不健全であり、その国民が絶滅しないとしても、いつかは損害をこうむるだろう。

この地上で十分な大きさの区域を占めることだけが、一民族に生存の自由を保証しうるのである。

この場合、定住地域に必要な大きさはただ現在の要求だけから判断されることはできない、いや、民族の数からはじき出された土地利得の大きさからもけっして判断されてはならない。なぜなら、わたしがすでに第一巻で「戦前のドイツ同盟政策[1]」の見出しの下に詳しく述べたように、**一国家の領土には一国民の直接的な生計の資を与えるという意味の外に、なお他の、つまり軍事政策的意味もつけ加わるからである。**たとえ一民族がその領土の大きさによって自己の食物そのものは確保したにして

も、それにもかかわらずやはり現在の領土自体の安泰を考慮することも欠かすことができない。国土の安泰は国家の一般的な強力政策の強さに依存しているが、後者はさらに軍事地理的観点によって決定されることが少なからずあるのだ。

領土の大きさと世界強国　したがって、ドイツ民族は世界強国となることによってのみ自己の将来を擁護することができるだろう。わが国の外交政策活動について多かれ少なかれ成功だったと呼ばれるに違いないような、二千年近くわが民族によってなされた利益擁護が世界史であった。われわれ自身はこの証人である。なにしろ一九一四年から一九一八年までの巨大な民族間の格闘は、ドイツ民族が地球上での自己の存在をかけての格闘に過ぎなかったからである。だがこの場合、われわれは経過そのもののこの様式を世界大戦と呼んでいる。

ドイツ民族は**ひとりよがり**の世界強国としてこの闘争に出場した。わたしはここで、ひとりよがりというが、それは実際にはそんな強国ではなかったからである。もしも、ドイツ民族が一九一四年にもっと違った領土と人口の関係をもっていたと仮定されるならば、ドイツは実際世界強国であったかも知れず、また戦争は、他のすべての要素を無視すれば、有利に終りえたであろう。

もし「しかし」というようなことが万一ないとしたら、「もしも」ということについて述べることなどはここでのわたしの課題ではないし、またわたしの意図でさえもない。だがしかしわたしはたしかに、現在ある状態を飾らずそして冷静に明示し、その状態のもつ恐ろしい欠陥を指摘し、その結果として少なくとも国家社会主義運動の陣営の人々が必要な点についての洞察を深めることを絶対に必要だと感じる。

ドイツは今日けっして世界強国ではない。たとえわれわれの現在の軍事的無力が克服されたとしてさえも、われわれはなおこの世界強国という称号をもはや要求できないに違いない。現在のドイツ国のように、人口と領土の比例がみじめな状態となっている国家組織は、今日この遊星上でどんな意味があるだろうか？　次第に地上が諸国家に領有されて分割されていく時代に、しかもその中の多くの国がほとんど大陸さえも包括しようというのに、その政治上の本国がようやく五万平方キロになるかならぬほどの笑うべき領土に限られている国際組織が世界強国などということはできるものではない。

フランスとドイツの植民政策　純粋に領土の点から見るとすれば、ドイツ国の面積などはいわゆる世界諸強国に比べる場合には完全に消滅してしまう。もちろん、イギリスは反証にはならない、というのは、イギリス本国は事実上ではほとんど全地表の四分の一を自分の領土と呼びうる大英帝国の大首都に過ぎぬからである。さらにわれわれは第一はアメリカ合衆国を、それからロシアと中国を巨大な国家と見なさなければならない。それらは現在のドイツ国のまず十倍より以上の面積をもっているような国土ばかりである。そしてフランスさえも、これらの諸国の中に数えなければならぬ。フランスではますます大規模に巨大な自国内の有色人種現員から軍隊が補充されるだけでなく、人種的にもフランスの黒人化は非常に急速に増進し、そのため実際はヨーロッパの大地の上にアフリカ的国家が成立したと語りうるほどである。今日のフランスの植民政策は過去のドイツのそれとは比較にならない。今日のやり方でフランスの発展がもう三百年も継続されると仮定すれば、最後のフランス民族の血の残余も形成されつつあるヨーロッパ・アフリカ白黒混血国家の中で滅亡するに違いない。絶えざる混血によってゆっくりと形成されつつある低級な人種で満ち満ちた、ラインからコンゴに至る巨

大で密集的な定住地域が成立するのだ。

このことがフランスの植民政策を旧ドイツ国のそれから区別する。以前のドイツの植民政策は、わが国が行なった他のあらゆることと同じように中途半端であった。その政策はドイツ人種の植民地域を拡大することもせず、また——犯罪的ではあったとしても——黒い血を注入することによって国家の勢力強化を来たす企ても行なわれなかった。ドイツ領東アフリカの土民兵はこの方向での細やかな、ためらいがちな一歩であった。実際、かれらは植民地自体の防衛だけにしか役立たなかった。黒人部隊をヨーロッパの戦争舞台に連れてこようとする計画は、大戦中には実際に不可能であったということをまったく度外視しても、より好都合な状況なら実現させるという意図としてさえも存在したことがなかった。他方フランス人の方は反対で、それは以前からかれらの植民活動の本質的基礎と見なされ、感じられていた。

国家社会主義の歴史的使命　このように今日地球上に、民族人口の点で、まずわがドイツ民族の勢力をはるかに越えるだけでなく、とりわけ面積の点で、政治的強国の地位を支える最大の柱石をもっている多数の強国をわれわれは見出す。その上、面積と民族人口から計るならば、ドイツ国が他の登場してきている世界的大国に対してもつ関係は、二千年前のわが国の歴史の始めほどに、そしてまた再び今日ほどに、不利だったことはけっしてないのだ。当時、われわれは若い民族として、疾風のように崩壊しつつあった大国家組織の世界へ侵入し、その最大の巨人ローマを殺害することをわれわれ自身手伝ったのである。今日では、われわれは形成されつつある大強国がひしめく世界の中にいるのであり、この世界でわれわれ自身の国家はますます無意味な存在に没落してゆくのである。

われわれはこの苦々しい真実を冷静にまたまじめに考えることが必要である。またわれわれは、ドイツ国の民族人口と面積が他の諸国に対してどのような関係にあったかを、数百年にわたって追求し、比較することが必要である。そうすればだれでもが、わたしがこの考察の始めにすでに語ったこと、つまり、軍事的に強力であろうが弱体であろうが、それとは無関係に、ドイツはもはや世界強国ではないという結論に到達してびっくり仰天するだろう、とわたしは予想している。

わが国は地球上の他の偉大な諸国家とはまるっきり比較にならない状態に陥っている。この状態はまったく、外ならぬわが民族のあわれな外交政策指導層のお陰によるものであり、かれらが特定の外交政策目標に対し、先祖の遺言的な——わたしはほとんどそういいたいのだが——確固たる態度が完全に欠けていたお陰であり、さらには自己保存の健全な本能と衝動をすべて喪失していたからに外ならない。

もし国家社会主義的運動がほんとうに歴史の前で、わが民族のために働くという偉大な使命にたいして祝詞を授かりたいと望むならば、この運動は、この地球上でのわが民族のありのままの状態を徹底的に認識し、また苦痛を十分かみしめながら、今までわがドイツ民族を外交政策の進路で導いてきた人々の無目標と無能力に対して、大胆にそして目標を自覚しつつ闘争をひき受けなければならない。さらにこの運動は、「伝統」や先入見にこだわることなく、生活圏の今日の狭さからこの民族を新しい領土に導き出し、それによってまたこの地上で滅亡、あるいは奴隷民族として他の民族の奉仕に心を煩わさねばならぬ危険から永久に解放されるような道を前進するために、わが民族とその勢力を結集する勇気を出さねばならない。国家社会主義運動は、わが民族の人口と面積の間のふつりあい——後者は糊口（ここう）の道と強力政策の支点と見なされる——や、わが国の歴史的過去と希望がもてぬわれわれ

の現在の無力さとの間のふつりあいを取り除くように努力しなければならない。この運動は、その場合、われわれがこの地上における最高の人類を守るものとして最高の義務も課せられていることを忘れてはならない。そして、運動はドイツ民族が人種的な迷いから覚め、犬、馬、ねこなどの種の外に自分の血にもあわれみを感じるように心を配れば配るほど、ますますこの義務を果たすことができるのである。

＊

わたしは今までのドイツの外交政策を無目標で無能だと特色づけたが、わたしの主張に対する証明はこの政策が実際になにごともしえなかったことに求められる。かりにわが民族が精神的に劣等であり、あるいは臆病であったとしても、地上でのかれらの格闘の結果は、われわれが今日自分達の前に見ているよりひどいものではないに違いない。大戦直前の数十年における発展によってさえも、このことについてわれわれは思い違いをしてはならないだろう。なぜなら、一国家の勢力というものはその国自体でもって計られることができず、他の諸国と比較することによってのみ計られうるからである。しかし外ならぬこのような比較によって、他の諸国の兵力増加がわが国より一層均斉のとれたものであったばかりか、最後的な成果の点でもより大きなものであったこと、それゆえドイツの歩んだ道があらゆる見かけの興隆にもかかわらず、実際は他の諸国の興隆からますます遠ざかり、はるかに遅れたものとなり、要するに、量の差がわが国の不利な方向に拡大していったことが証明されるのである。それどころか、民族の人口からさえもわれわれは時日が過ぎてゆけばゆくほどますます取り残されていった。ところで、わが民族は英雄的精神の点では地上のどの民族にも負けなかったから、いやそればかりか、要するに自民族の存在を維持するためには地上のすべての民族の中でもっとも多量

果に過ぎない。

の血液を注入したのだから、その不成功はただこの注入が不適当な方法でしか行なわれえなかった結果に過ぎない。

千年にわたる政策から残った結果　もしわれわれがこれと関連して、千年以上も昔からのわが民族の政治的体験を再吟味したり、無数の戦争や闘争をすべて想起して、これらの戦争から生じて今日われわれの前に現存している究極的成果を研究したりすれば、われわれがはっきりした特定の外交政策的および一般の政治的経過の残存結果と見なしうるような、この血の海から生じた現象は実際にはただ三つしかないということが承認されねばならない。つまり、

1　主にバイエルン人の祖先によって実現されたオストマルクの植民、

2　エルベ川以東の地域の獲得と侵略、および、

3　ホーエンツォレルン家によって実現された、新しい国家の模範および結晶核としてのブランデンブルク・プロイセン国家の組織である。

将来に対し、なんと有益な警告であろうか！

わが国の外交政策の初めの二つの偉大な成果はもっとも永続的な成果として存続している。これらの成果を欠いては、わが民族は今日およそどんな役割ももはや演じることがないに違いない。これらは上昇する民族人口と領土の大きさを調和させる最初の、だが残念ながらたった一度成功しただけの企てでもあった。わがドイツの歴史家達がこれら二つの、きわめて巨大で後世にとっても意義深い業績をなんら正しく評価することを知らなかったということは、ほんとうに不運なことと見なされねばならない。だがかれらは他方でありとあらゆるものを称賛し、また空想的な英雄的精神や無数の冒険

的闘争および戦争を驚嘆しながら賞賛しているのであるが、国民の偉大な発展進路にとってこれらの事件のほとんどがどれほど無意味であったか、ということについてはついに認識しなかったのである。

わが国の政治活動の第三の偉大な成果は、プロイセン国家の創設、それによってもたらされた特殊な国家思想の培養、そしてまた現代世界に適切である、組織化された形式にもち込まれたドイツ陸軍の自己保存および自己防衛衝動の培養の中に現われている。個々人の国防思想が国民の兵役義務に転化したことはこの国家組織とその新しい国家観から生じているのである。この経過の意味はどれほど高く評価しても評価し過ぎることはありえない。外ならぬ自己の血の混濁によって超個人主義的に解体されたドイツ民族は、プロイセン軍隊の組織によって、訓練されて、少なくとも民族からとっくに失われていた組織能力の一部を取り戻したのである。他の諸民族では、仲間同士一緒に住もうとする衝動の中にまだ根源的に存在しているものを、われわれは、少なくとも部分的ではあるが、軍事的な鍛錬の過程によって人為的にわが民族共同体のために再び取り戻したのであった。したがって、一般的な兵役義務の廃止も――幾ダースもの他民族にとっては大したことでないに違いないが――われわれにとってはきわめて重大な意味をもっている。ドイツ人を十世代の間、矯正的でまだ訓育的な軍事的鍛錬を与えずに、血液的な、それゆえ世界観的な不統一から生じる悪影響の下に放置しておくならば――その場合、わが民族はこの遊星上での独立的存在の最後の残りかすまで実際に喪失してしまうに違いない。ドイツ精神はおそらくただ個人的には他国民の内部で文化に貢献するであろうが、この場合その源泉さえも認識されることはないに違いない。われわれの中にあるアーリア系・北方種の血の最後の一滴が腐敗し、あるいは絶えてしまうまでの期間、ドイツ精神は文化の肥料となるだろう。

わが民族が千年以上も闘争して獲得したこの実際の政治的成功の意味は、われわれ自身によりもわ

れわれの敵にはるかによく把握され、また真価を認められているが、このことは注目に値する。われわれはわが民族からそのもっとも高貴な血の所有者を数百万も奪ったが、それにもかかわらず究極的成果としては完全に無効でしかなかったヒロイズムに今日でもまだ心酔している。

わが民族の実際の政治的結果と、無益な目的のために賭けられた国民の血とを識別することは、現在ならびに将来においてわれわれがとるべき態度を考える上できわめて重要なことである。

盲目的愛国主義ではだめだ！　われわれ国家社会主義者は、**今日わがブルジョアジーの世界に通例の盲目的愛国主義には断じて賛同しえない。大戦直前の発展を、たとえほんの少しでもわれわれ自身の道と関係させようと考えることは、とくに危険この上ないものである。**十九世紀の全歴史的期間からは、この期間そのものの中で始まったものでわれわれを義務づけるようなものはただの一つも引き出されえない。この時代の代表者達の態度とは反対に、われわれはあらゆる外交政策について最高の観点を代表するものであることを公言すべきである。つまり、**領土を民族人口に調和させるという観点である。**然り、過去からはただ、われわれが二重の方向でわが国の政治的行動の目標設定を企てねばならぬ、ということを学ぶことができるに過ぎない。二重の方向というのは、つまり、**領土がわが国外交政策の目標であり、そして新しい、世界観的に確定した、統一的な基礎を築くことが国内政策における行動目標である。**

＊

旧国境を望む声　どの程度まで領土に対する要求は倫理的、道徳的に正当化されると見なされるだろうか？　この問題についてわたしはなお簡単に態度表明をしておこう。残念ながらいわゆる民族

主義者の仲間達の中にさえも、ありとあらゆる大げさなおしゃべり屋が現われ出し、かれらがドイツ民族に外交政策上の行動目標として一九一八年の不法行為の回復を掲げることに努力するばかりか、そのことを越えてなおかつ全世界に民族的兄弟愛と好意を確信させることが必要だと考えているために、わたしはそのような表明を欠かせないのである。

ここでわたしは次のことを前置きしてもよいだろう。一九一四年の国境を回復しようという要求は、犯罪と見なしてもよいほどの程度の、またさまざまな結果をもともなった政治的ナンセンスである。一九一四年のドイツ国の国境が到底条理にかなったものではなかった、ということを完全に無視するとしてもなおそうなのである。なにしろ、当時の国境は実際にドイツ国籍をもった人間を包括する点に関しても完全ではなかったが、その軍事地理的な合目的性の点についてもやはり合理的ではなかったからである。当時の国境は思慮深い政治的行動の結果ではなく、けっして終ることのない政治的格闘の生んだ当座の国境であった。いや一部分は偶然のたわむれの結果であったのだ。だから、かつての状態を回復することを外交政策活動の目標と言明するのであれば、同一の正当さでもって、そして多くの場合より以上の正当さでもって、ドイツの歴史の中からそれ以外のある時点を選び出すこともできよう。しかし、上述の要求はまったくわがブルジョアジーの世界にふさわしいものであり、かれらはこの場合にも、将来成果を収めるような政治思想はほんの少しも所有していず、むしろ過去の中でだけ生きており、しかもつい先ほど過ぎ去ったばかりの時代に生きているのだ。なにしろ過去に向かって回顧している目でさえ、かれら自身の時代を越え出ることはないからである。惰性の法則はかれらをある所与の状態に縛りつけ、その状態の変更にはどんな場合でも抵抗させるが、それにもかかわらずこの抵抗という活動がいつかただの惰性以上のものに高まることはないのである。したがって

自明のことだが、これらの人々の政治的理解力は一九一四年の国境以上に思い及ばない。しかしかれらは、そのような国境の回復を自分達の活動の政治目標と宣言することによって、われわれの敵国間でこわれかけている同盟をつねに新たに強化している。ただこのように考えてはじめて、それぞれ雑多な願望と目標を抱いた諸国家が参加した世界的闘争がすんで八年もたったのに、当時の戦勝国の連合が依然として多かれ少なかれまとまった形態を保持していられる理由がはっきりする。

これら諸国はすべて当時ドイツの崩壊によって不当に利得した。当時わが国の勢力に対する恐怖は、個々の大国間相互にあった貪欲と嫉妬を引っ込めさせたのだ。諸国はわが国の相続をできるかぎり隅々まで貫徹することが、われわれの将来における高揚を阻止する最上の保障と見なした。良心のやましさおよびわが民族の力に対する不安は、この同盟の個々の加盟国を今日でもなお結束させている耐久力のきわめて強い接着剤である。

そして、われわれは諸国を失望させはしなかった。わがブルジョアジーの世界が一九一四年の国境回復をドイツの政治綱領に設定することにより、かれらはわが敵国の同盟からあるいは脱退しようかと考えていたそれぞれの関係国を再び恐怖させ後戻りさせてしまった。なにしろ、これらの国々は孤立すれば攻撃され、またそれによって個々の同盟国の援助を失うことになりはしないかという不安を抱かざるをえなかったからである。それぞれの国はすべてあのスローガンにびっくりし、脅威を感じたのである。

しかもこのスローガンは次の二つの観点からしてナンセンスである。

1　つまり、スローガンをクラブの夕べでの幻想の中から実現化するような強力な手段が欠けているし、また、

2　スローガンが実際に実現されるとしても、なおその結果はまたもや非常にみじめなものだろうし、それゆえそのために新たにわが民族の血を賭けることは、誓って利益でないはずである。なぜなら、一九一四年の国家の回復でさえも血によってのみ達成されるに違いないことは、ほとんどどんな人間でも疑うようには思えないからだ。子供じみた素朴な頭の持主でなければ、はいつくばったり物請いしたりするやり方でヴェルサイユ条約の修正をもたらすことができる、などという考えにふけることは不可能だろう。そのような修正の企てには、われわれドイツ人が所有していないタレーラン[2]的人間性を必要とするに違いない、ということを完全に無視してもやはりそうなのである。わが国の政治家の半数は、非常に抜け目がないが、また同様に無節操であり、一般にわが民族に敵対的な意見をもつ分子から成立している。他方、残りの半数は善良な、お人よしで喜んで人の意に従うようなばか者どもから構成されている。それに加えて、時代というものはヴィーン会議以後変化してしまったのである。つまり、**王侯や王侯の側室が国家の境界を掛値販売をしたり、値をつけたりしているのではなく、無慈悲な現世主義者ユダヤ人が諸民族の征服を目指して戦っているのだ**。どの民族も剣による以外は自分達ののどからこのこぶしを離れさせることはできない。ただ力強く反抗に立ち上る国家主義的熱情が集結され、集中されて発揮する力だけが、国際主義的な民族の奴隷化に挑戦できる。そしてこのような事件は、変ることなくつねに血を見なければならない。

それにもかかわらず、ドイツの将来はどっちみちすべてを賭けることを要求している、という確信がもしも正しいとすれば、政治的策略の考慮そのものなどはすべて完全に無視しても、すでにこのようにすべてを賭けるためには、それにふさわしい目標が設定され、また擁護されなければならない。

一九一四年の国境はドイツ国民の将来にとってなんの意味もない。その国境は過去にドイツを守ら

なかったし、将来における勢力も保証していない。ドイツ民族は、その国境によって自国の内部統一を維持できないだろうし、それによっては自民族を養うことも保証されないだろう。またこの国境は、軍事的な観点からみても目的にふさわしくないもの、あるいはただ満足させることさえもしないもののように思われた。最後にまたこの国境は、われわれが現在他の世界列強、あるいは一層適切に表現すれば、本物の世界列強に対して維持している関係を改善することもできない。イギリスとの間隔も縮められないし、アメリカ合衆国の大きさにも到達できないのだ。いやそればかりか、フランスも自国の世界政策的重要性の本質的な削減などけっしてこうむらないに違いない。

ただ一つだけ確実であるだろう。つまり、もっとも有利な結果となってさえ、一九一四年の国境回復のそのような企ては、わが民族体の一層ひどい流血に導くに違いない。しかもその流血は、国民の生活と将来を真に保証する決意や行為を行なうため注入すべき貴重な血液がもはや存在しなくなってしまうかもわからないほどなのだ。いやその反対に、そのような中味のない成功に有頂天になってしまい、「国民の名誉」はとにかく回復されたし、商業の発展にとっては少なくとも差し当り二、三の門戸が再び開かれたのだから、それ以上の目標設定はすべて喜んであきらめよう、という具合になるに違いない。

国家社会主義の外交目標　それに対して、われわれ国家社会主義者は不動の態度でわれわれの外交政策目標、つまり、**ドイツ民族に対して相応の領土をこの地上で確保すること**を固執すべきである。そしてこの行為は、神とわがドイツ国の子孫の前で流血を正当化するように思われる唯一の行為である。まずわれわれは、地上の支配者としての自分の地位を、ただ独創力およびこの地位を戦い取り維

持しうる勇気だけに依存し、なにものもただで贈与されてはいない生物として、毎日のパンのために永遠の闘争が運命づけられてこの世界に存在させられている。その限り、流血は神の前で正当化されるものである。次にわれわれは国民の一人の血たりとも、その犠牲によって他の千人の生命が救われるということでなければ決して流さなかった。その限り、流血はドイツ国の子孫の前で正当化されるものである。将来いつかドイツ農民階層が力強い息子達を生みうる領土であるなら、その土地は今日の息子達を賭けることの正当な理由となるだろう。そして責任ある政治家というものは、たとえ現代において攻撃されようとも、いつかは血を流した罪過および民族を犠牲にしたことに対して無罪の判決を受けるはずである。

外交でセンティメンタリズムは不要　さらにわたしは、そのような土地獲得には「神聖な人種の侵害」を見出すと称して、その見地から土地獲得に反対してへたくそな文章を書いている民族主義的三文文筆家に、もっとも激しく対決しなければならぬ。いやまったくこんなヤツらの背後にどんな人間が隠れているかわかったものではない。確実であるのはただ、かれらが準備しうるような混乱がわが民族の敵によって望まれており、またこれらの敵に都合のよいものであるということである。こうした行状によってかれらは、わが民族の内側からその生存に必要なものを擁護する唯一の正しい方法を望む意欲を弱めまた除去することに、無法にも協力している。なにしろどのような民族でも、生存を擁護すること以上の高級な願望から、そしてそれ以上の高い権利でもってこの地上の一平方メートルの領土をも所有してはいないからである。ドイツの国境が偶然による国境であり、その時代その時々の政治闘争による当分の間の国境であると同様、他民族の生活圏の境界もまたそうしたものであ

る。そして、われわれの地球表面の形態が無思慮な低能児にとってのみ花崗岩のように変化しないもののように見えるとしても、だが事実は不断の生成作用から自然の巨大なエネルギーによって作られて、流動している発展の中にあっていつでもただ見かけだけの静止を示しているに過ぎず、あるいは明日にでもより一層大きな力によって破壊または変形をこうむるか知れないのであるが、民族間の生活での生活圏の境界についても同様なのである。

国境は人間によって作られ、そして人間によって変えられる。

一民族によって法外な土地獲得が成功するという事実は、それを永遠に承認しなければならぬという抵抗しがたい義務を課すものではない。その事実はせいぜい征服者の力と忍耐する人々の弱さを証明するだけである。そしてその場合、この力の中にだけしか権利は存在しないのである。ドイツ民族が今日考えられぬほどの小さな面積の土地にすし詰めにされながら、みじめな将来に向かって進んでいるとしても、このことがけっして運命の命令ではないように、そんな将来に反逆することもまた運命を粗末に扱うことをけっして意味しないのである。それは、あるなにかより強大な権力が考えられて、それがドイツ民族より他の民族により多くの領土を与える約束をしたというようなことはないし、現在のような不正な土地配分の事実によってそうした権力が侮辱を受けているといったこともないのとまったく同じである。われわれの先祖達はわれわれが今日生活している土地を天から贈られて保持したのではなく、生命を賭けることによって戦いとらねばならなかったと同じように、将来われわれに土地、したがってわが民族の生活を割り当ててくれるのは民族に対する恩寵ではなく、無敵な剣の力だけなのである。

今日どれほどわれわれがフランスとのあらゆる面での対決を急務であると認識しているとしても、

もしわが国の外交政策目標がそれだけに終ってしまうとすれば、その対決は大体において無効なものであり続けるに違いない。その対決はただ、ヨーロッパでのわが民族の生活圏を拡大するための背面掩護をもたらすものである限り、意味をもちうるものであり、また実際にもつに違いない。なにしろ、われわれはこの問題を解決するのには、ただ植民地を獲得すればよいと考えてはならないのであり、母国の面積そのものを増し、それによって新しい移住者を本土との緊密な連合の中に維持するだけでなく、両者の結合の偉大さの中に存在する利益を全地域に保証するような移民領域を獲得することにもっぱら問題解決はかかっているからである。

民族主義的運動は他民族の代理人であってはならず、自身の民族の先鋒でなければならない。そうでなければその運動は余計なものであり、またとりわけ過去について不平をいう権利など少しもないのである。なぜなら、そうでない場合には、その運動は過去と同じことを行なうからである。旧ドイツ国の政治が誤って王朝的観点から決定されたと同じように、将来の政治は民族についての平凡な感傷癖によって導かれてはならない。だがとくに、われわれは周知の「あわれな諸々の小民族」の保安警察官ではなく、われわれ自身の民族の兵士なのである。

しかしわれわれ国家社会主義者はまだ先に進まなければならない。つまり、**もし領土拡張ができぬとすればある大民族が没落せねばならぬように思われる場合、領土に対する権利は義務と変りうる。**その際任意の黒色小民族が問題ではなく、現在の世界に文化的素描を与えた全生活の母であるゲルマン民族が問題になっているとすれば、まったくそのことは特に妥当性を深めるのである。**ドイツは世界的強国になるか、あるいは全然存在できないかのどちらかである。**しかし、世界的強国になるためには、今日ドイツに必要な意義を与え、その国民に生活を与える国土の大きさが必要である。

終止符を打っておくことにする。われわれは六百年前に到達した地点から出発する。われわれはヨーロッパの南方および西方に向かう永遠のゲルマン人の移動をストップして、東方の土地に視線を向ける。われわれはついに戦前の海外植民地政策および貿易政策を清算し、将来の領土政策へ移行する。

だが、われわれが今日ヨーロッパで新しい領土について語る場合、第一にただロシアとそれに従属する周辺国家が思いつかれるに過ぎない。

この場合、運命自体はわれわれに暗示を与えようと望んでいるかのように思われる。ロシアはボルシェヴィズムに引き渡されたことにより、それまでこの国家を存立させ、またその存立を保証してきた知性がロシア民族から奪われてしまった。なにしろロシア国家の構造組織はロシアにおけるスラブ民族の国政能力の結果ではなく、むしろ低級な人種の内部に存在するゲルマン民族的要素による国家形成活動の驚くべき一例であるに過ぎない。地上の数多くの強国はこのようにして建設されたのである。ゲルマン民族の組織者や支配者を指導者にもつ劣等民族が巨大な国家構造に膨張し、また国家を形成し支えている人種の人種的中核が維持される限り相変らず存続したことは再三再四にのぼる。数百年来、ロシアはその上級の指導層にいたこのゲルマン民族的中核のおかげで存続してきた。この中核は今日ほとんど跡かたもなく根絶され抹消されたと見なすことができる。その代りにユダヤ人が登場した。ロシア人自身にとって、自己の力でユダヤ人のくびきを振り払うことが不可能であるように、ユダヤ人にとってもこの強力な国家を永い期間にわたって維持することは不可能である。ユダヤ人自身は組織の構成分子ではなく、分解の酵素である。東方の巨大な国は崩壊寸前である。ロシアでのユ

＊

東国政策の再開

以上でもって、われわれ国家社会主義者は、わが国戦前の外交政策については

ダヤ人支配の終結は、国家としてのロシアの終結でもあるだろう。われわれは、運命によって民族主義的人種理論の正当さをきわめて強力に裏書きするに違いない一大破局の目撃者となるよう選ばれている。

だが、われわれの課題、国家社会主義運動の使命は、わが民族の将来の目標が新しいアレキサンダー遠征といった心を酔わせる感銘で実現されたと見なされてはならず、剣によってのみ大地が与えられうるとしても、むしろドイツの鋤(すき)による勤勉な労働にこそ将来の目標があるのだ、という政治的洞察をわれわれ自身の民族が持つようにさせることにある。

＊

ビスマルクの対ロシア政策　ユダヤ人がそのような政策に対して、きわめて激しい抵抗の意志を表明することは自明である。かれらは他のだれよりも、この行為が自分自身の将来に対してもつ意味をよりよく感じている。外ならぬこの事実こそ、あらゆるほんとうに国家主義的な考え方をしている人々に、このような新しい方向づけの正当さを悟らせてもよいはずである。だが残念ながら、事態は反対の方向に進む。ただドイツ国家人民党ばかりでなく、「民族主義」的な仲間の中にさえ、このような東方政策の思想に対する熱烈きわまりない挑戦者が現われるが、その場合、同じような状況になるとほとんど例外なく行なわれるように、かれらはずっと偉大な人物を証人として引き合いに出すのである。ナンセンスであると同様不可能であり、ドイツ民族にとっては危険きわまりない政策をかばうために、ビルマルクの精神が引用されるのだ。ビスマルク自身はかつてつねにロシアとの友好関係を尊重していた、とかれらはいう。それは絶対に正しい。しかしかれらはその場合、次のことについても述べなければならぬことをまったく忘れているのだ。つまり、ビスマルクがたとえばイタリアと

の友好関係にも同じように大きな顧慮を払っていたこと、いやそればかりか、このビスマルクという同一人物がかつてイタリアと同盟したのはオーストリアをより楽に仕末できるということのためであったことに、言及するのをまったく忘れている。それではなぜこちらの政策を同じように続けてゆかないのだろうか？「それは今日のイタリアは当時のイタリアではないからである」と、かれらは答えることだろう。結構だ。しかしそれなら、尊敬すべき諸君よ、どうか次のような異議を申し上げるのを許して頂けまいか。つまり、今日のロシアもまたもはや当時のロシアではない、と。ビスマルクは、一つの政治進路を戦術的原則として永遠に固定しようと望むことなど、一度として思いついたことがなかった。かれはこのようなことにかけては、好機会を逃さぬ非常な達人であったので、そのように自分を拘束するようなまねはしなかったはずである。したがって、問題は、なにをビスマルクが当時実行したか？ではなく、むしろ、今日だったらかれがなにをするだろうか？ということになる。そしてこの問題はかなり容易に答えられる。かれは政治的に抜け目がないから、没落するに決まっているような国家とは同盟しないに違いない。

ところで、ビスマルクは当時すでにドイツの植民および貿易政策に交錯した感情を抱きながら眺めていた。なにしろ、かれにとっては差し当り、ただかれによって創設された国家組織の強化と内部の緊密化をもっとも安全な方法で可能にすることだけが問題だったからである。このことはまた、かれが当時ロシアの背面掩護を歓迎した唯一の理由でもあったが、この掩護はビスマルクが腕を西に向かって自由に振りまわすことを許したのである。しかし、当時ドイツに利益をもたらしたものが、今日では危害をもたらすに違いないのだ。

「被抑圧国民同盟」　すでに一九二〇年～二一年の頃、つまり若い国家社会主義運動が徐々に政治の地平線上に顔をのぞかせ始め、そしてあちらこちらでドイツ国民の自由運動と呼ばれるに至った頃、さまざまな方面からわが党に向かって、この運動と他国の自由運動との間に一定の関係をつけようと企てる人間が接近してきた。かれらは多くの人々により宣伝されていた「被抑圧国民同盟」の線につながっていた。かれらは主に個々のバルカン諸国家の代表者であり、さらに進んでは、なにも実際的な背景がないのに、各々が決まっておしゃべりで偉がり屋の印象をわたしに与えたようなエジプト人やインド人連中であった。だが、このようにうぬぼれた東洋人によってだまされ、またたれかれなしに取るに足らぬようなインドやエジプトの学生を、無造作にインドやエジプトの「代表者」と決め込んでしまうドイツ人が少なくなかったし、国民主義陣営にはとくにそれがはなはだしかった。これらドイツ人には、それらの連中が多くの場合およそ背後には支持するなにものもたず、とりわけなにかの協定をどこかと結ぶといった権利の委任などだれからも受けていず、結局、このような分子と関係したところで、それで浪費した時間をとくに損失としてなおも記録してみようとするのでもない限り、その実際的成果はゼロである、ということがまるきり理解されていなかったのだ。わたしはこのような企てに対してつねに抵抗していた。なにしろ、わたしが、そのような無益な「論議」で幾週間もむだにつかうよりも、もっと優れたことをすべきだったというばかりでなく、かりにかれらがそれらの国民の全権委任を受けた代表であったとしてさえ、それらすべてが無用であり、いや有害であるとも考えられたからである。

ドイツの同盟政策がその積極的な攻撃意図を欠如していたために、老いて世界史的には恩給退職者のような状態の諸国家との防衛同盟に終ってしまったことは、平和な時代でさえもすでに大変困った

ことだった。オーストリアとの同盟も、トルコとの同盟もそれ自身ほとんど好都合だという点はなかった。地球上で最大の軍事、工業諸国家が積極的な攻撃同盟によって連合していたというのに、ドイツは二、三の老いぼれて無気力となった国家組織を結集し、これらの没落の運命にあるガラクタと共に積極的な世界連合に立ち向かおうと企てたのだ。だがこの報いもいまだにきびしさが十分でなかったように思われる。というのも、われらの永遠の妄想家連中がたちまち同様の過失に陥るのを用心させることもできなかったからである。なにしろ、「被抑圧諸国民同盟」によって全能の勝利者の武装解除ができるのだという企ては、笑うべきものであるだけではなく、有害でもある。なぜ有害かといえば、それによってわが民族は現実に可能であることから再三再四注意をそらされてしまい、結果としてその代りに妄想に満ちた、なおかつ不毛な希望や幻想にふけることになるからである。今日のドイツはわらでもなんでもつかもうとするおぼれかけているものと実に似ている。それも平常ならば大変教養のある人々に当てはまるのである。いくら非現実的に思えても、とにかく希望の鬼火がどこかに見つかったならば、これらの人々はもう早速足早やに駆けだし、まぼろしを追いかけてゆくのである。それが被抑圧国民同盟であれ、国際連盟であれ、あるいはその他の新しい妄想的な虚構であれ、一切お構いなしにこの虚構は幾千という信者の群を見つけだすに違いない。

イギリスのインド統治は動揺しているか？　わたしはなお今でも記憶していることだが、一九二〇〜二一年当時突然民族主義者の仲間の中で、イギリスはインドで崩壊寸前にある、という子供じみた、そして理解に苦しむ希望が浮び上ってきた。当時ヨーロッパをうろつき回っていたアジア人のだ

れともわからぬ香具師（やし）連中——ほんもののインドの「自由の闘士」といっても差しつかえないのだが——が平常はまったく理性的な人間の頭の中にまでも、インドに自国の土台を所有している大英帝国が外ならぬそのインドで崩壊寸前にある、という固定観念を注ぎ込むことをやってのけたのである。その上この場合でも、ただ自分達自身の願望があらゆる思いつきの源泉であったに過ぎぬことは、当然かれらに自覚されていなかった。同様にまた、自分自身の希望が矛盾していることについても自覚されなかった。なにしろ、かれらはインドにおけるイギリス統治の崩壊から大英帝国とイギリス勢力の終末を期待しているにもかかわらず、正しくインドこそイギリスに対してもっとも卓越した重要性をもっている、ということをやはり自身で承認しているからである。

だが多分この致命的な問題は、実際に単にドイツの民族主義的予言者に底知れぬ神秘として熟知されていただけでなく、恐らくイギリス史を導いていく人々自身にもよく知られていたに違いない。イギリスは自己の世界連邦に対してインド帝国のもつ重要性を正しく評価できぬ、などと仮定することがすでにまことに子供じみている。そして、もしイギリスが最後のものもつぎ込まずにインドを放棄するなどと空想するならば、それは世界大戦から全然学ばなかったことに対する、そしてまたアングロサクソン人種の決意の固さを完全に誤解し、認識していないことに対する不幸な徴候であるに過ぎない。それはさらに、ドイツ人が、この国土へイギリスが侵入しまた支配した際にとった方法をまるきり理解していないことの証明である。**イギリスは、自己の支配機構の中で人種的解体の運命をたどるか**（現在のところインドでは完全に問題外であるようなことだが）、**あるいは強力な敵の剣によって征服される場合にのみ、インドを失うだろう。**しかし、インドの扇動者連中にはこのことは成功しないだろう。イギリスを征服することがどれほどむつかしいものであるかは、われわれドイツ人が十

分体験してきた。わたしはゲルマン人として、それでも依然としてインドが他国に支配されるよりは、イギリスの統治下にあるのをむしろ望ましく思っているが、このことはまったく無視しよう。

それとまったく同じように、エジプトに荒唐無稽の反乱を希望することもあわれむべきものである。この「聖戦」は、わがドイツの机上の勝負師連中には、今や他のものが喜んでわれわれのために血を流すことを覚悟している――正直にいうならば、なにしろこの臆病な思惑こそがきっとそのような希望のひそかな源泉である――という快適な戦慄を与えることができるが、現実的に考えれば、その聖戦はイギリスの機関銃中隊の一斉射撃と爆裂弾のあられの下に地獄のような終末をつげるはずである。

自国の生存のために、必要ならば血の最後の一滴も注入する決意をしている強力な国家を、とんまな国家の連合によって包囲攻撃することなど正しく不可能である。人類の価値を人種的基礎でもって評価する民族主義信奉者として、わたしはこれらのいわゆる「被抑圧諸国民」が人種的に低級であることをすでに認識しているので、自己の民族の運命をそれらの国民の運命と結合させることはできないのである。

ロシアとドイツの同盟はどうか？　だがわれわれは今日ロシアに対しても、それとまったく同じような態度をとらなければならない。ゲルマン人の上層部を奪われている目下のロシアは、その新しい支配者の内的な意図をまったく無視するとしても、ドイツ国民の自由闘争にとって同盟国ではない。純粋に軍事的に考えても、ドイツとロシアが西欧に対して、多分他の全世界を相手にすることになろうが、戦争をする場合には、状況は正しく破局的なものとなるのであろう。戦争はロシアの土地でなく、ドイツの大地で行なわれるに違いない。そして、その際ドイツはロシアからほんの少しばかりも、

有効な援助を受けることができないに違いない。今日のドイツ国の軍隊は非常にみじめであり、外国との戦争はとても不可能であるから、イギリスを含めて西欧に対する国境防衛はどこもかしこも実施されることができず、外ならぬドイツの工業地帯はわれらの敵の集中する攻撃兵器に対して無防備の状態に任せられているのだ。その上さらに、ドイツとロシアの中間には完全にフランスの手中にあるポーランド国家が存在している。ドイツとロシアが西欧と戦う場合には、ロシアは自国の最初の兵隊をドイツ戦線にもたらすために、まずポーランドを圧倒しなければならぬことになる。だがその場合、兵隊などよりも技術的装備が問題である。この観点から見れば、世界大戦中の状態が、ますますそれに輪をかけたひどさでくり返されるに違いない。当時ドイツの工業はわが国の光栄ある同盟諸国のために無心されただけで、ドイツはほとんどまったく独力で技術戦を引き受けなければならなかったと同じように、この戦争でもロシアは一般に技術的要素としては完全に問題外であるだろう。次の戦争できっと圧倒的に勝敗を決定するものとして現われてくるであろう世界の一般的モータリゼイションに対して、われわれの方にはほとんどなにも対抗すべきものをもちえないと思われる。なぜなら、ドイツ自体がこのもっとも重要な方面で不面目にもはるかに立ち遅れているだけでなく、自国が現にもっているほんのわずかなものによって、今日でさえまだ実際に走る自動車を生産しうる工場一つないようなロシアをさらに守らなければならなくなるに違いないからである。したがって、そのような戦争はただ虐殺という性格をもつに過ぎないだろう。ドイツの青年は以前に比べてもっと多くの血を流すに違いない。というのは、いつでもそうであるように戦争の負担はわれわれだけで背負い込むこととなり、その結果はのがれられぬ敗北となるに違いないからである。

だが、かりに奇跡が生じ、そのような戦争がドイツの徹底的な破壊に終らなかったとした場合を仮

定してさえも、究極的な結果はやはり、出血し尽したドイツ民族が相変らず大軍備をもつ諸国家に包囲され続け、それゆえ自国の実際の形勢は少しも変更されていない、ということでしかないだろう。
ところで、ロシアと同盟することをすぐに戦争と結びつけて考える必要はないだろう。あるいはたとえそうだとしても、そのような戦争のためには根本的な用意もできるだろう、などと異議を唱えてはいけない。そうはならないのだ。**戦争意図を目的として含まないような同盟はナンセンスであり、また無価値である。**戦争のためにのみ同盟は結ばれるものである。そして、たとえ同盟条約を締結する時点においては対決がまだ非常に遠い先のことであるとしても、それにもかかわらず戦争に巻き込まれるという見込こそが同盟締結をもたらす本質的誘因である。また、あるどこかの国がこのような同盟の意味を違った風に理解するかも知れない、などとはもちろん信じてはいけない。ドイツ・ロシア同盟はただの紙片だけで終ってしまい、われわれにとって無益、無価値であるか、あるいは、その同盟は条約書の文字だけに止まらず目に見える現実に転化——こうなれば他の国々は警告されるに違いない——されるかの、いずれかである。そのような場合イギリスとフランスが、ドイツ・ロシア同盟が戦争のための技術的準備を終了してしまうまで、十年でも待ってくれるかも知れぬなどと考えるのは、なんという思慮のない話だろうか。けっしてそうではない。あらしは電光のように速くドイツに襲いかかってくるに違いない。
したがって、ロシアと同盟を締結するという事実のうちには、すでに次の戦争についての見込がつけられている。締結の結果はドイツの終末となるはずである。
だがその上になお次のことがつけ加わる。つまり、
1　ロシアの今日における権力者は、誠実な態度で同盟に加わることはもとより、さらにそれを維

持することなど、ちっとも考えていない。

人々はとにかく次のようなことを忘れてはならない。つまり、今日のロシアの統治者達は血でよごれた下賤(げせん)な犯罪者であること、またかれらは人間のくずであり、悲劇的な時期の情況に恵まれて大国家を打倒し、その指導者的なインテリ数百万を粗野な残忍さでもって惨殺し、根絶し、今やざっと十年ばかりの間どんな時代にもなかった残酷きわまる暴政を行なってきていることを忘れてはならない。さらにまた、これらの権力者達が野獣のような残忍さをとらえがたいうその技術に非凡な融合方法で結びつけて、自分達の残虐な圧制を全世界に加えるのには今日こそもっともよいという使命感をもった一民族に属していることを忘れてはならない。次にまた忘れてならないことは、ロシアを今日完全に支配している国際主義的ユダヤ人がドイツを同盟国と見なさず、自国と同じ運命に定められている国家と見ているということである。**しかし、他方の国の絶滅がその唯一の関心であるような相手国とどんな条約も結んではならない。**とりわけ、どんな条約も神聖でないに違いない奴ら、というのは、かれらは名誉と真実の擁護者としてでなく、虚偽、欺瞞、剽窃(ひょうせつ)、強奪、横領の代表者としてこの世の中に生きているからであるが、そんな奴らとは条約を結ばないものである。もし人間が寄生虫と契約による結びつきが可能だと信ずるならば、それは木が自己の利益を求めてやどりぎと協定を結ぶのと似ている。

2　**以前ロシアを敗北させた危険は、ドイツにとって絶えず現存している。**ボルシェヴィズムが払いのけられたと思い込むのはただブルジョア階層のお人よしだけができることである。かれらは自分達の皮相な考え方からして、この際問題であるのは本能的な事実であること、つまりユダヤ民族の世界征服を目指す本能的な事象、さらに換言すれば、アングロサクソンがアングロサクソン自身でこの

ないのである。そしてアングロサクソンがこの道をかれら流儀で歩き続け、闘争をかれらの武器でもって戦っているのとまったく同様に、ユダヤ人もまたそうしている。かれらはかれらの道、つまり諸民族中に潜入し、これらの民族の内部を空洞にするという道を進んでおり、そしてかれらの武器、つまり虚偽と中傷、毒殺と壊敗でもって、かれらが憎悪する敵を残虐に絶滅するまでは闘争を強化しつつ戦うのである。**ロシア・ボルシェヴィズムは二十世紀において企てられたユダヤ人の世界支配権獲得のための実験と見なされなければならぬ。**このことは、かれらが他の諸時代において、たとえ内面的に同質であるとしても別の事象の経過によって、同一目標に到達しようと試みたのとまったく同じである。かれらの本能はもっとも奥底では、かれらの本質的存在である種に基いている。他の民族もけっして自発的に自己の種と勢力を拡張しようという衝動に従うのを断念することなどなく、外部の状況からそのように強いられるか、あるいは老化現象によって無気力に陥るかのどちらかであるに過ぎないように、ユダヤ人もまた自分の世界独裁の道を自発的な断念によってだめにしたり、あるいは自己の永遠の熱望を抑制することによってだめにすることはけっしてしない。ユダヤ人もまたかれら自身の外部にある力によって、自分達の道を押し戻されるか、あるいはかれらのあらゆる世界支配本能がかれら自身の死滅によってくたばってしまうかのどちらかである。だが諸民族の無気力化やその老衰死はそれら民族の血の純粋さの放棄に基いている。そして、ユダヤ人は地上の他のあらゆる民族よりも血の純粋さを保護している。したがって、ユダヤ人にある他の勢力が対抗し、激しい格闘によってこの巨人を再び悪魔のところへ追い返さぬ限り、かれらは自分達の宿命的な道を前進するのである。

ドイツは今日ボルシェヴィズムの差し当っての大きな闘争目標である。わが民族をもう一度引きずり上げ、この国際主義的蛇連中の籠絡から救い出し、国内での民族の血の堕落を阻止し、その結果として自由となりゆく国民の力を、未来永遠にわたって先ごろの破局をくり返さずにすむようなわが民族の守り手として注入しうるためには、若々しい使命感に満ちた理念のもつあらゆる力が必要である。しかしこの目標が追求される場合に、われわれ自身の将来にとっては仇敵であるものを支配者としている国家と同盟を結ぶなどということは狂気の沙汰である。もし自分自らボルシェヴィズムの抱擁に身を任せているのであれば、どのようにしてその悪意に満ちた抱擁のきずなからわれわれ自身の民族を救い出すというのだろうか？　もし自分自身がこの悪魔の組織と同盟するのであれば、したがってそれを大体において承認するならば、どのようにしてボルシェヴィズムがのろうべき人類に対する犯罪であることをドイツ労働者に理解させるというのであろうか？　さらにもし国家の指導者自らがある世界観の代表者を同盟者として選ぶならば、どのような権利でもって、その世界観に対し好意をもったからという理由から大衆階層の者達を非難できるのか？

ユダヤ人の世界ボルシェヴィズム化に反対する闘争は、ソヴィエト・ロシアに対するはっきりした態度を要求する。ベルゼブブ[3]によって悪鬼を追い出すことはできない。

民族主義者の仲間でさえも今日ロシアとの同盟に熱中しているけれども、かれらはドイツ国内だけでも見回して、自分達の行動がだれの支持をえるかを自覚しなければならない。あるいは、またもや民族主義者連中は、国際主義的なマルクス主義者の新聞によって推薦され要求されている行動を、ドイツ民族にとって祝福豊かなものと見なしているのだろうか？　いつから民族主義者連中は、ユダヤ人がたて持づらをしてわれわれに差し出しているかっちゅうをつけて戦っているのだろうか？

戦前のドイツ――ロシア　旧ドイツ帝国はその同盟政策の点で散々に非難されても仕方がなかった。つまり、ドイツはどんな犠牲を払ってでも世界平和を守ろうとする病的な弱気から、絶えずあれこれ迷っているうちにあらゆる国との関係をだいなしにしてしまったのである。しかし、一つだけは非難されることができない。つまり、ロシアとの友好関係はもはや維持されなかったことである。

実をいえば、わたしはすでに戦前からドイツがナンセンスな植民政策を断念し、また商船隊、艦隊もあきらめて、同盟をイギリスと結んでロシアと対抗し、それによって弱々しい全面友好的政策を捨てて大陸で土地の獲得を目指す断固たるヨーロッパ政策に移ったほうがずっと正しかったと思っていたのだ。

忘れることのできないのは、当時の汎スラブ主義ロシアがドイツにあえて行なった絶えざる厚かましい脅かしである。わたしはまた、その意味がドイツを怒らすことにしかなかったような動員訓練を絶えずくり返したことも忘れない。さらにまたわたしは、戦前すでにわが民族と国家に対し、憎悪に満ちた攻撃を熱心にやっていたロシアの世論の調子も忘れることができない。最後に、われわれよりもフランスにますます心酔していたロシアの大新聞を、わたしは忘れることができない。

しかしそれらすべてにもかかわらず、戦前にはまだ第二の道が存在していたとも考えられる。イギリスと対抗するために、ロシアに頼ることができたかもわからなかった。

今日では状況が変ってしまっている。たとえまだ戦前にはあらゆる胸に迫りくる感情を押し隠してロシアと同調することもできたに違いないが、今日ではもはやこのことは不可能である。その後世界の時計の針はどんどん進み、わが民族の運命がどっちみち決定されねばならぬ瞬間を巨大な時鐘の響

きでもってわれわれに告知している。現在地上の諸大国家が強固になりつつある傾向はわれわれに対する最後の警報であり、われわれは自省し、夢の世界からわが民族を再びきびしい現実に連れ戻し、旧ドイツ国を新たな繁栄に導きうるたった一つの将来への道をかれらに指示しなければならないのである。

将来の政治的誓約　もし国家社会主義運動が偉大な、もっとも重要な課題についてあらゆる幻想から解放され、理性を唯一の指標と見なすならば、いつの日にか一九一八年の破局はわが民族の将来にとってなお無限の祝福を与えるものとなることができる。その時はこの崩壊からわが民族は脱出して、自国の外交政策的行動を完全に新しく方向づけるところまで到達できるし、さらに、国内では民族の新しい世界観による強化が行なわれ、国外に対してもその外交政策の究極的な安定化が達せられるのだ。そうなれば結局、イギリスが所有しており、ロシアでさえも所有していたもの、そしてフランスに再三再四、同様な、自国の利益にとって申し分のない正しい決定をまちがいなく見つけさせたもの、つまり、**政治的誓約**をわが民族も手に入れることができるのである。

だがドイツ国民の国外に向かっての行動に対する政治的誓約は、つねに意味あるためには次のようでなければならないし、またそのようであるに違いない。

つまり、**ヨーロッパ内に二つの大陸強国の成立をけっして許してはならない。ドイツ国境に第二の軍事的強国を組織しようとする企ては、たとえそれが軍事的強国になる可能性のある国家の創設という形式で行なわれるに過ぎぬとしても、すべてドイツに対する攻撃と見て、そのような国家の成立を阻止するため、あるいはすでに成立している場合にはそれを再び粉砕するために、あらゆる手段を用**

い、武力使用も辞さぬことが権利であるばかりか義務でもあると考えねばならない。――わが民族の力がその基礎を植民地にではなく、ヨーロッパの故郷の大地の上に維持するように尽力すべきである。もしドイツ国が数百年のその後までも、わが民族の子孫達にかれら自身の地所を与えることができぬとすれば、けっしてそれを安全な国家であると考えてはならない。この世界でもっとも神聖な権利は、自分自身で耕そうとする土地の権利でありもっとも神聖な犠牲はこの土地のために流される血であることを忘れてはならない。

＊

ドイツ・イギリス・イタリア同盟　わたしはこの考察を終える前に、現在ヨーロッパ内でわれわれのために考えられる唯一の同盟可能性について、もう一度ふれておかねばならない。わたしはすでにドイツの同盟問題を述べた前章の中で、イギリスとイタリアをば、われわれにとって密接な関係を結ぶ努力をする価値があり、また有望であるようなただ二つの国家と呼んでおいた。この場所で、わたしはもう一度簡単に、そのような同盟のもつ軍事的意味について一言述べよう。

この同盟締結の軍事的帰結は、どこから考えても、ロシアとの同盟結果とは反対になるに違いない。もっとも重要な点は差し当り、イギリスとイタリアに接近することは少しも戦争の危険をひき起すものでないという事実である。この同盟に反対の立場に立つものとして考慮されてもよい唯一の強国、つまりフランスも反対することができぬに違いない。したがってこの同盟はドイツに、このような提携のわくの中でではあるが、フランスに返報するためいずれにせよ行なわれなければならぬ準備をまったく安んじて行なう可能性を与えることだろう。なにしろそのような種類の同盟の重要さは、たしかに、正しく次の点にあるからである。つまり、ドイツはこの締結によってすぐに敵の侵入の犠牲と

なるというのではなく、かえって敵の側の提携自体がくじかれる。われわれに無限に多くの不幸をもたらした協商それ自体が解消され、それによってわが民族の仇敵であるフランスは孤立に陥るのである。たとえこの成果が差し当りは、ただ精神的影響しかもたないとしてさえも、それは十分に、今日ではほとんど予想もできぬほどの行動の自由をドイツに与えることは間違いない。なぜなら、行動の規準は新しいヨーロッパにおける英・独・伊同盟の手中にあり、もはやフランスにはないはずだからである。

その次の成果は、一瞬にしてドイツが自国の不利な戦略的態勢から解放されるに違いないことである。一方ではきわめて強力な側面援助、他方では食糧と原料をわが国に供給するのが完全に保障されること、これらは新しい国家秩序に与えられる祝福に富んだ成果に相違ない。

だがおよそ、それよりも一層重要なことは、この新しい同盟が多くの点で相互にほとんど補い合う技術的な実行力をもった国々を含んでいるという事実であるだろう。第一に、ドイツは、ヒルのようにわが国固有の経済に吸いつくこともなく、その上わが国の技術的準備を十分過ぎるほど完成させるのにそれぞれの分を尽しうるし、また尽すことも間違いないと見られる同盟国を手に入れることとなろう。

さらに次のような最後の事実も見逃してはいけない。つまり、これら二つの同盟国のどちらもトルコや今日のロシアと比較されうるような国ではないのだということである。地上で最大の世界強国とはつらつとした国家主義国家はドイツが前大戦で同盟した腐敗している国家のしかばねとは異なった前提を、ヨーロッパでの闘争に対して提供してくれるに違いない。

東方政策のための前提

わたしがすでに前章で強調したように、このような同盟に対する困難が大きなものであることはたしかである。しかしあの三国協商の形成などは幾分でも仕事がやさしかっただろうか？　エドワード七世④のような国王にできたこと、一部では自然の利益にほとんど反しながらも成功したことは、もしそのような発展の必然性を認識することによってわれわれが鼓舞され、われわれ自身の行動を賢明な克己心でもってその必然性に従うよう決定する場合には、われわれにも成功すべきものであるし、また成功もするだろう。そしてこのことは、困窮したことを忘れずに胸に抱きつつ、この数十年の外交政策上で無目標だった態度を捨てて、唯一の目標を意識した道を歩み、またこの道を堅持する時やっと可能になるのである。西方路線も東方路線もわが国外交政策の将来の目標とはなりえず、わがドイツ民族に必要な土地の獲得という意味での東方政策が目標なのである。このためには力が必要であるが、しかしわが民族の仇敵であるフランスはわれわれを無慈悲にも窒息させており、力を奪っているのであるから、結果としてヨーロッパでのヘゲモニーをねらうフランスの努力の絶滅を促進するに役立つとしたら、われわれはどんな犠牲もひき受けなければならない。われわれと同様に大陸でのフランスの野心を我慢できぬと感じている国々は、すべて今日ではわれわれの当然の同盟国である。もし究極的な結果として、わが国にきわめて残忍な憎悪を抱く国を圧倒する可能性だけでも提供するものであれば、そのような同盟国に接近する道はわれわれにとって苛酷過ぎることなどありえないし、断念するなど口に出せるものとは思えないのである。もし最大の傷を焼灼しょうしゃくしていやしうるとすれば、われわれは安心して時間という緩和作用に小さな傷の治療を任せられるのである。

国家社会主義の外交政策上の捺印　もちろんわれわれは今日、国内のわが民族の敵による憎悪に満ちた叫び声に取り囲まれている。しかしわれわれ国家社会主義者はその声に影響されて、われわれの心の底にある確信からすれば絶対に必要なことを予告するのにけっして迷ってはならない。今日おそらくわれわれは、ユダヤ人の術策によってドイツ人の無思慮が利用し尽された結果である惑乱された世論の流れに抵抗しなければならず、おそらくたびたびその波は悪意に満ちて荒々しくわれわれの回りに砕け散るであろう。しかし流れにそって泳ぐものは、川の水に逆らって抵抗するものよりも見落されやすいものである。今日われわれは一つの岩礁である。数年もせぬうちに早くも運命はわれわれをダムに作り上げるかも知れない。全体の流れはこのダムに当って砕け、新しい河床に流れ込むだろう。

　したがって、外ならぬ国家社会主義運動は他の世界の人々の目に、自己をある特定の政治的意図の所有者であることを認識させ確認させることが必要である。**天はわれわれをどうなさるご心算かわからぬが、われわれの面構えを見てもうわれわれの本質をわかってもらいたいものである。**

　われわれの外交政策上の行動を決定すべきである偉大な必然性をわれわれ自身が認めるやいなや、この認識から堅忍不抜の力が流れ出るだろう。そしてわれわれの敵側の新聞暴徒によるやつぎばやの攻撃にあって、味方のあちこちで不安な気分が生じたり、またすべてのものを敵に回さぬために、少なくともここあるいはそこの分野では譲歩を承諾しよう、郷に入っては郷に従おうというような気持が少しでも味方を襲ったりする場合には、しばしばその力がわれわれには必要となる。

第十五章　権利としての正当防衛

卑怯な屈服は恩恵をもたらさなかった　一九一八年十一月の武装解除でもって、どんな人間の予測でも、徐々に完全な屈服にまで行きつくに相違ない政策が始まったのである。これと似た種類の歴史的諸例が示すように、絶対にやむをえないという理由もなしにまず武器を投げ出した諸民族は、次の時代になっても、新しく力に訴えて自分達の運命を変更しようと企てるより、むしろこの上ない軽蔑と強奪を耐え忍ぶものである。

これは人間的に当然なことである。賢い勝利者は可能な限り、自分の要求をつねに分割して敗北者に課するだろう。そのように運べば勝利者は、節操を失ってしまった民族——自ら進んで降服するような民族はすべてそうなるが——がそのような個々の圧制のどれに対しても、もう一度武器をとるに足る十分な理由をもはや感じ取れない、ということを期待してよいのである。だがこのような仕方で強奪が従順に容認されればされるほど、見かけ上は個別的であるとしてもしかしもちろんのことといつもくり返されている新しい圧迫に対して、最後になってどうしても抵抗しなければならぬなどということはますます妥当でないように見えてくるものである。要するに、とにかくそのような民族が、すでに非常に多くのそしてまた大きな不幸をおとなしく、忍耐強く耐えてきた場合にはとくにそうしたことがいえる。

カルタゴの没落は、そのような緩慢な自業自得の破滅が一民族を襲ったことをもっとも恐るべき形

で示している。

それゆえクラウゼヴィッツ[1]もかれの「三つの信条」の中で、卓絶した仕方でこの思想をつかみ出し、そして次のように語ることにより、あらゆる時代の人々にはっきりとその点を指摘している。つまり、「卑怯な屈服の汚名はけっして消し去ることはできぬ。一民族の血液内のこの毒薬のしずくは子孫に伝えられ、その後の種族の力を奪い、害するだろう」。またこれに反して、「血みどろの、名誉ある闘争の結果であれば、この自由の滅亡でさえも民族の再生を保証し、そして、いつか新しい樹木となってしっかりと根をおろすような生命の種子である」

もちろん、名誉も節操もなくしてしまった国民ならば、このような訓戒を気にすることもないだろう。なにしろこの訓戒を肝に銘じているものは、とにかく、決してそんなにひどく堕落することがありえないし、それを忘れるか、あるいはもはや知ろうともしないものだけが破滅するに過ぎぬからである。したがって、節操を欠いて屈服している連中に対して、かれらが突然後悔し、その結果、理性とすべての人間経験に基いて今までとは違った行動をするなどと期待することは許されない。それどころではなく、他ならぬこれらの連中は、それらの訓戒をすべてまったく拒絶するだろうが、その結果は民族が自己の奴隷的首かせにすっかり慣れてしまうか、あるいはにくむべき破滅をもたらしたものから、権力を奪うために一層強大な勢力が表面に現われてくるのを待っているかである。その第一の場合には、これらの人間は賢い勝利者によってしばしば奴隷監督の職務を与えられているため、決してそれ程悪い感情を抱かないのが常である。その場合、これらの節操のない連中は、自分自身が属する民族に対してこの職務を行なうのに、たいていは敵自身によってその職につけられた外国の野獣のような人間のだれよりも一層無慈悲であるとすらいえる。

ところで一九一八年以来の事件の発展は、従順に服従することによって戦勝国の恩恵がえられるのではないかという希望が、ドイツでは残念ながらきわめて不幸な形で大衆の政治的洞察と行動を決定していることをわれわれに知らせる。したがってわたしは大衆に強調点を置くのが大切だと思うが、それというのもわが民族の指導者の一切の行動がことによれば大衆と同じ堕落的な妄想のせいだなどという説明を、わたしは認めることができないからである。戦争終結以来わが国の運命の管理人は、今や完全に明らかであるようにユダヤ人であるから、ただ誤った認識だけがわれわれの不幸の原因であるなどとは実際信じられず、その反対に故意の計画がわが民族を破滅に導いたということをわれわれは信じざるをえないのである。そしてまずこの観点から、わが民族の外交政策指導層の外見上の妄想を再吟味してみれば、ただちにその妄想と見えていたものがユダヤ人の世界征服の思想と闘争に奉仕するための、狡猾きわまる、氷のように冷たい論理的思考であることを暴露される。

一八一三年までの七年――ロカルノまでの七年

したがって、完全に破壊されていたプロイセンが新たな生活力と闘争決意で満たされるためには一八〇六年[2]から一八一三年までの短期間で十分だったのに、その同じ期間が今日ただ無為に過ぎてしまっただけでなく、それどころかわが国家をますますひどく弱体化しつつあったことも理解できるように思われる。

一九一八年十一月以後七年たってロカルノ条約[3]は署名されたのだった！

しかもその経過は以前すでにスケッチしておいた通りのものであった。つまり、一度不名誉な休戦が署名されるやいなや、わが民族はその後常にくり返されてなされる敵の抑圧的方策に対して、今や

突然抵抗を企てるといった実行力も勇気も湧きではしなかった。だが敵は非常に賢明だったので、一時にあまりにも多くのことを要求はしなかった。かれらはつねに自分達の強奪を一定の範囲に制限していた。つまりその範囲とは、かれら自身の考え方——そしてまたわがドイツ指導者層の考え方でもある——からは、現在まだ辛抱できるに違いないと思われ、またしたがって民族感情が、敵の強奪によって爆発するのを恐れる必要がない限度のことである。しかしこのような命令的条約の個々の条項が署名され、苦心惨澹しながらも果たされてゆけばゆくほど、**個別的**に追加されてくる強奪あるいは不面目な要求と直面しても、今や突然に、その他の非常に多くの場合にもできなかったことつまり抵抗を行なうことは一層妥当でないように思われてくるものである。これこそクラウゼヴィッツの語った「毒薬のしずく」のことである。なにはさておきまず犯された無節操な行ないは、それ自体ますます拡大されなければおさまらぬものであり、徐々にきわめて悪性な遺伝となって、あらゆる将来の決意の上に重くのしかかってゆくものである。それは恐るべき重荷となりうるもので、しかもそうなってしまえば民族はもはやほとんどそれを振り落すことができず、それによって、最後には奴隷的種族という存在にひきずり落されるのである。

不快な警告者の迫害　以上のようにドイツでも武装解除および奴隷化の訓令、政治的無防備化、経済的搾取等が相次いで実行され、ついにはドーズ[4]の意見を幸運と考えロカルノ条約を成功と見なすような精神を心の中に生みだすことができた。その場合もちろん高い見地から見れば、この悲境の中にもたった一つの幸運があったと語ることができる。つまり、人間を惑わすことはたしかにできたが、天を買収することは不可能だったことがそれである。なにしろ天の祝福はやってこなかったからであ

る。その後、困窮と不安がわが民族の変らざる同伴者となってしまい、唯一のわれわれに忠実な同盟者は悲惨と名がつくものであった。この場合も運命は例外を作らず、われわれが受けるに値したものを与えてくれた。われわれは名誉を重んずることをもはや知らないので、運命はわれわれに最小限パンの自由を尊重するよう教えるのである。人々は今ではもうパンを呼び求めることを学び終ったが、いつの日にか、かれらは自由のためになお祈ることがあるだろう。

一九一八年以後数年間のわが民族の崩壊は非常にひどいものであり、また明白なものであったにもかかわらず、外ならぬこの時期にその後になって必ず適中したことを、すでにその当時あえて予言した人々は、すべてきわめて猛烈に迫害されたのである。わが民族の指導層はもう哀れなほどに低劣であったが、かれらはまたうぬぼれ屋でもあった。そしてこの傾向は、かれらに不都合であるため不快に感じられた警告者を追っぱらう時などはとくにはなはだしかった。当時、議会内の最高ボスである頭の空っぽな連中、馬具職の親方だとか、手袋製造人といった本物の俗物たち——ただ職業からだけのことではない、職業などはまるきり問題にはならないのだ——が突如政治家の脚台の上に立ち上って、ちっぽけな人間どもを見下しつつ叱りつけるといったことがお目にかかれた（今日でもなおお目にかかることができる！）のである。この場合には、そのような「政治家」の多くが自分の腕前を六か月も見せることになれば、きわめて頼りない香具師であったことは早くもバレてしまい、世間の人々のだれからも冷笑と軽蔑を浴びせられ、途方にくれながら、自分の完全に無能だったことをまぎれもないほど適切に証明しているのであるが、こんなことは問題にはまったくならなかったし、また現在でも取り上げるべきことではない！　しかり、それは全くどうでもよいことである。それどころか、この共和国の議会屋的政治家連中に実際の手腕が欠けていればいるほど、その返報として、自分

ゆる悪の主要な根源であることについてはただの一言も認めようとはしないのである。
たりしても、かれらは自分達の失敗の口実となる理由を幾千も幾千も見つけ出し、かれら自身があら
さらに政治屋自身の側も自分のすべての活動とその結果の失敗だったことをもはや否認できなくなっ
しかし、このような議会屋的紳士の正体をひとたびわれわれが決定的に証拠をつきつけてあばいたり、
た自分達の将来の活動の失敗を予言するような人々を、かれらはますます熱狂的に迫害するのである。
達に手腕を期待したり、自分達の従来の活動がむだであったことを容赦なく確認したり、あるいはま

＊

フランスの不動の戦争目標　おそくとも一九二二〜二三年の冬までには、フランスが平和条約締結後でさえも自己の眼前に最初からちらついて離れない戦争目標をどうしてもなお達成しようと鉄のような覚悟で努力していた、という事実が一般に理解されるべきだったと思われる。というのは、ただ後になってそれまでに受けた損失を賠償によって再び弁償してもらうだけのために、フランスが四年半もの間自国の歴史上もっともきわどい闘争をし、もともと十分でない自民族の血液を注入したなどとはおそらくだれも信用しないからである。もしその場合、すでにフランス外交政策の未来についての実に大きな政治的プログラムの一部分が問題となっていたのでなければ、エルザス・ロートリンゲン問題さえもそれだけではフランスの戦争遂行に費したあのエネルギーをまだ説明できぬに違いない。だがこのフランスの目標は、小邦ごったまぜの状態にドイツを解体することである。この目標のためにショーヴィニスト的なフランスは戦ったのである。とはいってもその際、フランスが自国民を国際主義的なコスモポリタンのユダヤ人に傭兵（ようへい）として売った、というのが真相であることはもちろんである。

もし戦争が始めの頃パリで希望されたようにドイツの国土内で行なわれたとしたなら、このフランスの戦争目標は、戦争そのものによってすでに達成されたに違いない。世界大戦という血みどろの殺戮がソンム川のほとりや、フランドルや、アルトワではなく、またワルシャワ、ニシュ、ニイ・ノヴゴロド、コヴノー、リガの近く、またその他の至るところで行なわれたのではなく、ドイツ内で、つまり、ルールやマイン川、エルベ川のほとりや、ハノーヴァー、ライプツィヒ、ニュールンベルク等々の付近で行なわれたと想像してみれば、ドイツの粉砕が可能なはずだったことにおそらく同意せざるをえなくなるだろう。われわれのできたての連邦国家が四年半も、数百年以来厳格な中央集権の下にただパリという文句なしの中心点だけが顧慮されているフランスのように、自国内を戦場とする同じ重圧試験に耐えることができたかどうか非常に疑わしいのである。この巨大な民族間の格闘がわが祖国の国境外で演じられたことは、ただ比類ない旧ドイツ軍の不滅の功績であったばかりでなく、ドイツの将来にとってきわめて大きな幸運でもあった。もしそうでなかったとすれば、今日すでにとっくのむかしにドイツ国は存在せず、ほんのもう「ドイツ諸邦」が存在するだけだろうということは、わたしの岩のように堅く、そしてしばしばほんとうに息苦しくなるほど心の奥に迫ってくる確信である。このことはまた、戦死したわれわれの友人や兄弟の血が少なくともまったくむだに流されたのではないといえる唯一の根拠でもある。

フランスの不動の政治的目標　このようにすべてはフランスの考えたこととは別様になってしまった！　なるほどドイツは一九一八年十一月に電光のような速さで崩壊した。しかし破局が故国内で起った時、野戦軍の軍隊はまだ敵国深くはいっていた。フランスが当時第一に憂慮したことはドイツ

れるか？　ということであった。したがってパリの国家指導層にとって、世界大戦終結についての第一の課題はドイツ軍の武装解除と、そして可能であれば差し当りドイツへ押し返すことであった。そして第二の段階としてやっと、自分達が元来もっていた固有の戦争目標の成就に没頭できた。たしかにフランスはこの目標についてはすでに実行力を失っていた。イギリスにとっては、ドイツを植民・貿易国としては破滅させ、そして二流国の地位にまで突き落したことによって、戦争は実際に勝利と終ったのである。イギリスにはドイツ国家の徹底的な絶滅は利益でなかったばかりでなく、その上イギリスは将来ヨーロッパにおいてフランスがライヴァルをもつのが望ましい理由をすべてもっていた。したがってフランスの政策はまず断固として平和工作でもって、大戦が自国に準備してくれた仕事を続けなければならなかったし、クレマンソーの、わたしにとっては平和もまた戦争の継続に過ぎない、という金言は意味を一層深めたのである。

あらゆる可能な機会をみつけてフランスは絶えずドイツの国家組織をゆすらねばならなかった。一方ではつねに新しい軍備撤廃に関する通牒（つうちょう）を発することにより、また他方ではそれによって可能となる経済的搾取を行なうことにより、パリはわが国家組織を徐々にぐらつかせてゆくことができるようにと希望していた。国民の名誉心がドイツ国内で死滅してゆけばゆくほど、経済的重圧と永遠の困窮をますます早く政治面での破壊的な影響に導くことができたのである。政治的圧制と経済的略奪についてのこのような政策が十年、二十年と実施される場合には、次第に最上の国家主体でさえも破壊されてゆき、状況によっては解体するに違いない。そしてこの解体でもってフランスの戦争目標は最後的に達せられるのである。

以上のことはやはり一九二二〜二三年の冬には、もうとっくの昔にフランスの意図であると認識されていなければならなかった。しかしその認識からは、ただ二つの可能性しか残らなかった。つまりドイツ民族体の強靭さによってフランスの意志を次第に鈍らせてゆくか、あるいはやはり起らずにはすまされぬことを思いきって実行してしまう、つまり、なにか特にフランスが法外なことをした場合にドイツ国という船の進路を変えて、衝角を敵の方に向けるかであり、われわれはこれらのどちらでも希望することができた。だがもちろん後者は生死を賭けた闘争を意味した。その場合生存の方の見込は、あらかじめフランスを孤立させ、その結果としてこの第二次の闘争がもはや世界に対するドイツの格闘にはなることなく、世界とその平和を絶えず乱しているフランスに対するドイツの防衛と見せかけることに成功しない限り存在しなかったのである。[5]

フランスとの決定的対決　この第二の場合がいつかはどっちみち生じなければならぬし、また生じるに違いないことについて、わたしは強調しておくと同時にそのことを固く信じている。わたしはフランスのわれわれに対する意図が、いつか変更されうるなどとはけっして信じていない。というのもフランスの意図が、その究極の根底においてはフランス国民の自己保存の欲望にのみ基いているものだからである。かりにわたし自身がフランス人であれば、したがってわたしにとってドイツが神聖であるようにフランスの偉大さに愛情をもつとすれば、わたしもまた結局クレマンソーのような人間が行なうのと違った行動をすることはできぬだろうし、そうしようとも思わないに違いない。ただ自民族の人口からだけでなく、とくにその人種的に最上の分子についても次第に死滅しつつあるフランス人は、結局は、世界における自分達の重要性をただドイツが破壊されることによってのみ維持でき

るに過ぎない。フランスの政策は百千回となく迂路を通るかも知れぬが、結局はつねにこの目標が究極の願望やもっとも奥底の憧憬の充足としてどこかに存在していることだろう。しかし、純粋に消極的なただ自分自身を維持することのみを意欲している意志が、それよりも強力でしかも積極的に他に立ち向かう意志に対して、抵抗を長期にわたってなしうるなどと思うのは正しくない。**ドイツとフランスの間の永遠の衝突は、ただフランスの攻撃に対するドイツの防衛という形態でのみ解決が図られる限りけっして決着させることはないだろう。**それぱかりか、ドイツは世紀を経るごとに次々とその**地位を失ってゆくに違いない。**十二世紀から始まって今日に至るまでのドイツ語の境界線の変遷を追求するならば、すでに今までわれわれにこれほど多くの損害をもたらした態度や事態の発展から生じた結果にはおそらくもう少しも頼れぬはずである。

このことがドイツで完全に理解され、それによってドイツ国民の生活意欲がもはや単に消極的な防衛によって萎縮させられることなく、フランスとの決定的な積極的対決にそれを集中させ、そしてドイツの側での最大の究極目標をもった最後の決定的闘争に投入される時がきてはじめて、われわれとフランスとの間の永遠的でそれ自体はまったく不毛の格闘が終結させられうるようになるのである。このことはもちろん、ドイツはフランスを破滅させる手段によってしか、自民族を他のものに代って発展させてゆく可能性をもちえないということを、ドイツが実際に認識していることが前提された上でのことである。今日、われわれはヨーロッパに八千万のドイツ人を数えるのである！　百年もせぬうちにこの大陸に二億五千万のドイツ人が生活するだろう。しかも他国の工場クリーとして押しつぶされるのではなく、自分達の活動によって相互に生活を保証し合う農夫と労働者として生活するだろう。このようなことが実現されてはじめてこの外交政策は正しいものと承認されることだろう。

化を強めたように思われた。**ルール地方の占領** 一九二二年十二月に、ドイツとフランスの間の情勢は再び人々を脅かす激烈化を強めたように思われた。フランスは新しい法外な強奪を念頭において、そのための抵当を必要としていた。経済的略奪には政治的圧迫が先行しなければならず、フランス人はわが「反抗的」民族にもっときびしいくびきをかけうるためには、ただわれわれドイツ人の全生活の神経中枢を無理やりにつかむだけで十分だと考えたのである。**ルール地方の占領**によって、フランスはただドイツの精神的バックボーンを決定的に折り砕くだけでなく、経済的にもわが国をわれわれすべてがいやでもおうでもきわめて辛い義務をも引き受けなければならぬといった逼迫状態に突き落すことができるのを望んだ。

それは屈服するか決裂するかを要求するものだった。ドイツは最初からすぐにいいなりになったが、さらにその後になって完全な決裂に終ってしまったのである。

ルール地方が占領されることになって、運命は再びドイツ民族に再起の手を差し出した。というのは、一見したところやっかいな災難と思われるに違いなかったことが、詳しく眺めて見るとドイツの一般的な苦悩の終結を限りなく期待させる可能性を含んでいたからである。

外交政策の面で考えれば、フランスはルール占領によってイギリスをはじめてほんとうに内心からそむかせることとなった。しかも、単にフランスとの同盟自体をただ無情な打算家の冷静な目によって締結し、注視しまた維持していたイギリス外交部だけでなく、イギリス国民のきわめて広大な層をもフランスにそむかせてしまったのである。とくにイギリス経済界は、隠しきれぬほどの不愉快な気分でもって大陸のフランス勢力がこのようにとてつもなく一層強化されたことを迎えた。なぜならフ

ランスは今や純粋に軍事政策的にみて、以前にドイツさえももっていなかったほどの地位をヨーロッパ内で占取したばかりでなく、経済的に見ても、今や自国の政治的競争能力を経済的にほとんど独占的地位に高める基礎をえたからである。したがってヨーロッパで最大の鉄坑と炭田は一国民の手中にもろ共に落ち込んだのであるが、このフランス国民というのはドイツ国民とは大変異なり、従来断固として活動的に自国の生活の利益を計ってきており、また軍事力について自国が信頼するに足る国であることを大戦を通じて全世界になまなましく思い出させた国民であるのだ。フランスによるルール炭田の占領でもって、イギリスは大戦でえたすべての成果を再び奪われ、今やもう勝利者は、活動的ですばしこいイギリス外交部ではなく、フォッシュ元帥[6]とかれによって代表されるフランスであった。

イタリアでも、そうでなくても大戦終結以後もう単にバラ色とばかりいえなかった対フランス感情は、今やまぎれもない憎悪に変った。昨日の同盟国が明日の敵国となりえた偉大な歴史的瞬間であった。それにもかかわらず、それとは違った事態が生じ、第二次バルカン戦役の時のように同盟国がそれ以来突然相互に不和に陥ることがなかったのは、ドイツがまさしくエンヴェル・パシャをもたず、クノーのような首相をもっていたからである。

しかし外交政策上だけでなく、国内政策上でも、フランス人のルール侵入はきわめて大きな将来のための可能性をドイツに与えた。わが民族のかなりの部分は、うそにみちた新聞の絶えざる影響によって、フランスを相変らず進歩と自由の闘士と見なしていたが、急激にこの迷妄からさめたのである。一九一四年という年は国際主義的な民族連帯の夢想をわがドイツ労働者の頭から追放し、そしてかれら労働者を突然、その至る所で生物が他の生物を食べて生きており、より弱いものの死はより強いものの生を意味する永遠の格闘の世界へ連れもどしたが、一九二三年の春もそれと同じ働きをしたので

ある。

ルール占領後なにがなされるべきだったか？　フランス人が脅迫を実行し、ついに低ドイツの炭坑地方に最初はまだ非常に用心深くまたためらいがちに進入し始めた時、ドイツにとっては偉大な決定的な運命の時鐘が告げられていたのだ。もしこの瞬間にわが民族が自分の意見と一緒に今までの態度をも改めていたとしたら、ドイツ領ルール地方はフランスにとってナポレオンのモスクワとなりえた。とにかく二つしか可能性はなかった。つまり、われわれはその運命をも忍耐してなにもしないか、あるいは、灼熱の鍛冶場(7)や、もうもうとけむっている炉に目を向けさせることにより、この永遠の恥辱を終らせて、際限のない恐怖をさらに我慢してゆくよりも、むしろ目下の恐怖を自身に選び取る灼熱した意志をドイツ民族にえさせるか、そのどちらかであった。

第三の道を発見したのは、当時の首相、クノー様の不朽の功労であり、その道を賞賛してそれに協力したことはわが国ブルジョア政党連中の一層光輝あるお手柄であった。

わたしはここでまず第二の道を、ただもう可能な限り簡単に考察しようと思う。

ルール地方の占領により、フランスはヴェルサイユ条約の明白な侵害を遂行したのであった。フランスはこのことによって一連の保障国、とくにイギリスとイタリアに対立することにもなった。自国の利己主義的なきたない略奪行為のおかげで、フランスはこれらの国々からどんな支持ももはや希望できなくなった。したがって、この冒険は、そしてそのようなことは差し当りはおよそ冒険であったが、フランスだけでなんとか有利な結果にもってゆかなければならなかった。国家主義的なドイツ政策にとってはただ一つの道、つまり名誉が命じる道しかありえなかった。わが国が始めから積極的な

武力でもってフランスと対立することができないことはたしかであった。しかし、背後に兵力をもたない交渉はすべてこっけいで効果がないことを了解する必要があった。積極的な抵抗が可能でないのに、「われわれはどんな交渉にも応じない」という立場に立ったのはナンセンスであった。だがかれこれする間に、兵力を獲得することもせずに、最後にはやはり交渉に応じてしまったのはもっとナンセンスであった。

　わたしがいおうとしているのは、**軍事的方策**によってルール占領が阻止できたかも知れぬなどということではない。そのような決意を勧告しうるものは狂人以外にないだろう。しかし、このフランスの行動の印象が残っているうちに、そしてこの行動が実行されている間に、フランス自身によって侵害されたヴェルサイユ条約など顧慮することなく、その後に送るべき交渉使節に、はなむけとしてもたせてやりうる軍事的方策について確認しておくことは考えられえたし、考えられねばならなかった。なぜなら、いつかはこのフランスによって占領された地方について、会議の席上で決定が行なわれるに違いないことが最初からはっきりしていたからである。だが、最上の交渉使節でさえも自分の立つべき大地や、自分の座るべき椅子が自分の属する民族の腕によって保護されていない限り、ほとんど成果を獲得することはできない、ということもそれと同じようにはっきり理解されていなければならなかった。虚弱な弱虫は力士と争うことはできぬし、武装していない交渉使節は、もし天秤を平衡させるために自身の剣をもち合わせていないとすれば、依然として敵の天秤皿の上にのっかっているブレヌス[8]の剣をしんぼうしなければならなかったのである。あるいはまた、一九一八年以来時々無条件的な命令がくるたびに、いつも先行して行なわれた談判のコメディーを見物しなければならなかったのは実に悲惨ではなかったろうか？　連中は、われわれを人々の笑いぐさにするかのように、まず会

議のテーブルに招き、それからすでに仕上っている決議や計画、それについてたしかに意見をいうことが許されはするが、しかし最初から変更できぬものと見なさないわけにゆかぬような代物を提案して、全世界にこのわれわれの面目を失わせる芝居を提供したのであった。もちろん、われわれの交渉使節は、ほとんどただ一度さえも、きわめて凡庸な普通の人間より勝っていたことはなかったし、たいていは、「ドイツ人は指導者や代表者に聡明な人物を選ぶことを知らないようですね」と、前ドイツ国務大臣ジーモンの面前で侮蔑的に述べたロイド・ジョージの厚かましい言辞の正当さがかれらによってただ十分過ぎるくらい証明されただけであった。しかしかりに天才がいたとしても、敵国民の断固たる武装意志と自国民の悲惨きわまる無防備に直面しては、いずれにしてもほとんど手も足も出せなかったに違いない。

だが一九二三年の春に、フランスのルール占領をわが国の軍事的能力の回復のきっかけとしようと望むものは、差し当って国民に精神的武器を与え、意志力を頑強にしなければならず、さらにこのきわめて貴重な国民の勢力を破壊するものを絶滅しなければならなかった。

一九一四年と一九一五年にマルクス主義の蛇の頭を断固として踏みつぶすところまで進まなかったことは、一九一八年に血みどろの復讐となったのであるが、それと同じように一九二三年の春にマルクス主義的売国奴と民族虐殺者の行為を最後的に終らせる機会をとらえなかったことも、きわめて不吉な報復を受けないではすまなかった。

マルクシズムとの怠慢な決算　フランスにほんとうに抵抗しようと考えるものが、五年前に戦場でのドイツの抵抗を内側から破滅させた諸勢力に、闘争をいどまなかったとしたらそんな考えはすべ

てまったくのナンセンスだった。ただブルジョア階級の人間だけしか次のようなとてつもない考えをもつことはできなかった。つまりマルクシズムは現在ではおそらく以前とは違った性格のものになっているだろうとか、一九一八年のゲスな指導者のできそこないどもはより上手に政府の各種のポストにはい上るために、その当時二百万の死者を冷淡に踏み台に使ったのだが、そのかれらが一九二三年の現在、国民の道徳意識に対して突然かれらの貢物をささげる覚悟になっているかも知れないといった考えである。以前売国奴だったものが突然ドイツの自由のための闘士になるかも知れぬなどという希望はありうるはずのない、実にナンセンスな考えである。かれらはちっともそんなことを考えてはいなかったのだ！　**ハイエナが腐肉から少しも離れることがないと同じように、マルクス主義者は祖国を売る仕事を見限ることはない。**そうはいってもかつて、あんなに多くの労働者がドイツのために血を流したのではないか、などというこの上もなくばかげた異論には後生だからかかわらないでほしい。そうだ、ドイツの労働者はたしかに血を流した。しかしその頃には、かれらはもはや国際主義的マルクス主義者では全然なかったのだ。もし一九一四年にドイツ労働者の精神的態度がまだマルクス主義的であったならば、大戦は三週間後には終っていたことだろう。ドイツは、自国の最初の兵士が国境をただもうまたぐ前に崩壊したに違いない。いや、当時それにもかかわらずドイツ民族が戦ったという事実は、マルクス主義的妄想がドイツ人の心の奥底まではなお食い込むことができなかったことを証明している。だが、大戦の経過につれて、ドイツ労働者とドイツ兵士が再びマルクス主義の指導者の手中に逆戻りしていったが、それにちょうど比例して祖国はかれらを失っていったのである。戦争開始時に、そして戦争中も、あらゆる階層から出て、あらゆる職業をもったわが最良のドイツ労働者数十万が戦場でこうむらなければならなかったように、これらの一万二千か一万五千のヘブライ

人の民族破壊者連中を一度毒ガスの中に放り込んでやったとしたら、前線での数百万の犠牲がむなしいものにはならなかったに違いない。それどころか、これら一万二千のやくざ連中が適当な時期に始末されていたとしたら、おそらく百万の立派な、将来にとって貴重なドイツ人の生命が救われたかも知れないのだ。だが、まつげ一本動かさずに数百万の人々を、戦場で血にまみれて死んでゆくままに放置したにもかかわらず、一万あるいは一万二千の民族を売る者、奸商、高利貸、詐欺師等を貴重な国民の宝物と見なし、それゆえかれらに触れることができないなどと公けに布告することは、たしかにブルジョア階級的「政治」にお似合いのことでもあった。このブルジョア階級の世界ではなにがより勝れたものであるのか、ひどい精神遅滞者なのか、柔弱なのか、臆病なのか、あるいはとことんまで堕落した根性なのか、ほんとうに判らないのである。かれらは実際運命によって没落が定められている階級であるが、ただ残念なことは全民族がかれらによって地獄にいっしょにひっぱり込まれることである。

だが一九二三年にわれわれが見出したものは一九一八年とまったく同じ状況であった。どのような種類の抵抗が決意されようがそれはまったく同じことであり、第一になさるべき前提はつねにわが民族体からマルクス主義的毒を排泄させることであった。そしてわたしの確信からすれば、当時ほんとうに国家主義的な政府がなすべき最初の課題は、マルクシズムに殲滅戦を宣告する決意をしている勢力を探して見つけ出し、さらに、この勢力に自由な進路を開拓してやることだった。外敵が祖国にこの上なく破壊的な打撃を加え、国内ではどこの街角にも反逆者が機会をねらっている時期には、「安寧秩序」などというナンセンスを崇拝しないことが政府のなすべき義務であった。しかり、ほんとうに国家主義的な政府であれば、当時は無秩序と社会不安こそを願うべきだった。というのも、それら

社会的混乱の中でなければ、わが民族の仇敵マルクス主義との根本的な決算が結局不可能であり、生じえなかったからである。このことが放置されたならば、抵抗についてどんな種類の考えがでっち上げられようとまったく変りはなく、それらはすべてまぎれもなく狂気の沙汰であった。

もちろん現実的な、世界史的重要性をもったこのような決算は、枢密顧問官といった連中や、老いぼれて干からびてしまった内閣の首脳達の計画によって行なわれるものではなく、この地上の生命を支配する永遠の法則、この生命のための闘争であり、また永久にそうした闘争でしかありえない生命の法則に従って実現されるものである。人々は次のことを思い浮べるべきだった。つまり、血に荒れ狂った内乱からはしばしば鋼鉄のように堅く健全な国民体が生成したのに、他方人為的に育成された平和状態からは、前代未聞の腐敗が生まれたのも一、二に止まらないという事実である。民族の運命はピカピカした革手袋をはめた手で丁重に変えられることはできない。したがって、一九二三年には、わが民族体をむさぼり食っていた毒蛇連中を捕えるためには、残酷きわまるつかみ方をしなければならなかった。このことが成功してはじめて、積極的抵抗を用意することが意味をもったのである。

わたしは当時幾度も幾度も声をからして演説し、少なくともいわゆる国家主義の仲間にとって次の二つのこと、つまり、今回はなにが賭けられているのか、そして一九一四年およびそれに続く数年の場合と同じような失敗をすれば、再び一九一八年のような結果に不可避的に到達するに違いないことをはっきりさせようと努力した。運命のなすがままに任せて、われわれの運動にマルクシズムとの対決の可能性を与えてくれるようにと、わたしは再三再四かれらに請い求めた。だがわたしは馬の耳に念仏を唱えていたのだ。かれらは、国防軍長官を含めて、すべてについてもっとよく心得ていて、結局あらゆる時代を通じてもっともみじめな降服に直面することとなったのである。

当時わたしは心の底から次のことを自覚していた。つまり、ドイツのブルジョアジーは自分達の使命を終ろうとしており、もうその先かれらの天職としての課題はなにもなかったことをである。当時わたしの見るところでは、これらの政党はすべてほんのもう競争的嫉妬からだけマルクシズムとけんかをしていたのであり、その上マルクシズムをまじめにすっかり絶滅しようなどとは望んでいなかった。かれらは心の中では皆とっくに祖国の破滅に満足していたし、かれらを動かすものはただ一つしかなかった。つまり葬式後のごちそうに自分も加えてもらえるかどうかという大きな心配しかなかった。ただそのことのためにかれらはさらに「闘った」のである。

この時期に――わたしは正直に告白するが――わたしはアルプスの南方の偉人に対し、心の底からの驚嘆の念を抱いていた。かれは自民族に対する激しい愛情から、イタリアの国内にいる敵を容認せず、あらゆる方法およびあらゆる手段を用いてかれらの絶滅に努力した。ムッソリーニをこの地上の偉人の列に加わらせるものはなにかといえば、それは、イタリアをマルクシズムと分配することなく、国際主義を絶滅に至らせることによって祖国をそれから救った決然たる態度に求められる。

それに反してわがドイツ国の自称政治家共はなんとみじめで矮小に見えるだろうか。そして、これらの無価値な連中が粗野な思い上りによって、千倍も偉大な人をせんえつにもあえて批評する場合には、どんなに胸がむかつかせられるに違いないことか。さらに、ほとんど五十年もまだ過ぎぬ以前に、ビスマルクのような人物を自己の指導者と呼ぶことができた国で、このようなことが生じたのを考えることはどれほど苦痛なことであるだろうか――。

武器ではなく、意志が決定的である　ところが、ブルジョアジーのこの態度とマルクシズムを扱

う寛大さによって、一九二三年に行なわれた、ルールのためのあらゆる積極的な抵抗の運命は最初から決まっていた。自己の隊列の中に不倶戴天の敵をもちながら、フランスに対して戦おうと望むのは明らかにナンセンスである。その後なお実行されたことといえば、せいぜい、ドイツ内の国家主義的分子を幾分か満足させ、また「沸騰する民心」を静めるため、というより実はペテンにかけるため上演された八百長試合でしかありえなかった。もしかれらが真剣に自分達の行なったことを信用していたとすれば、一民族の力というものはまず第一にその武器にあるのではなく意志にあるということ、および外敵を敗北させる前にまず自国内の敵が絶滅されなければならぬことなどを、どうしても認識しなければならなかったに相違ない。もしそうでなければ、戦いの最初の日に早くも勝利がえられなかったとしたら災でなければならない。敗北の影が内部の敵にまだわずらわされている民族の上をほんのかすめでもするやいなや、その民族の抵抗力はくじかれ、敵は決定的に勝利者となるであろう。

このことはしたがって、一九二三年の春にすでに予言可能であった。フランスに対して軍事的成功は疑わしいなどということは、決していわないでほしい！　なにしろ、フランス人のルール侵入に対するドイツの行動の結果がただ国内のマルクス主義の絶滅であるに過ぎぬとしてさえ、すでにそれだけで成功はわれわれの側に存在するはずだからである。およそドイツが、この自国の存在と未来に対する不倶戴天の敵から救済されるならば、全世界をもってしてももはや破滅させることはできぬ勢力をもつに相違ない。**ドイツ内でマルクシズムが絶滅される日にこそ、その桎梏はほんとうに、永遠に除去されるのである。**なにしろ、われわれは自己の歴史の中でわれわれの敵の力によって敗北させられたことはなく、いつもただわれわれ自身の悪徳とわれわれ自身の陣営中の敵によってのみ屈服させられるのである。

当時ドイツの国家指導層にはそのような英雄的行為のため奮起することなど不可能であったため、かれらは聡明にも実際上ますます第一の道をゆくことしかできなくなった、つまり、この際はまるきりなにもせず、事態をまったくなるがままに放任しておくことにしたのであった。

クノーの道　しかし、重要な時期には、天がドイツ民族に一人の偉大な人間を贈ってくれたのである。クノー氏がそれである。かれは、もともと政治家や政論家を職業としてはいなかったし、素姓からすればなお一層そのように生れついてはいず、それゆえ単に特定の仕事をすますために必要な一種の政治的パートタイマーの役を果たしていた。かれはそれ以外では元来商売についてのほうがよりくわしかった。この政治づいた商人が今や政治をも経済的企業と見なして、それに応じて自分の行動を加減していったため、ドイツはのろわれた国となった。

「フランスはルール地方を占領した。ルール地方になにがあるか？　石炭だ。だからフランスは石炭のためにルール地方を占領したのではないか？」だからクノー氏にとって次のように考えるほど自然な考え方はなかった。つまり、フランス人が石炭をえられぬように今やストライキをすれば、それによってクノー氏の意見によれば企業に利益がなくなるから、フランス人はいつか必ずルール地方を再びあけ渡すに違いない、と。この「卓越した」「国家主義的」「政治家」の考え方の筋道はざっとこのようにたどられるが、かれはシュトゥットガルトやその他の地域で「自分の民衆」に対して演説させられ、それら民衆からまったく喜びにあふれた賞賛をうけたのである。

「統一戦線」　しかしストライキをするためにはもちろんマルクス主義者も必要であった。という

のは、まず第一にやはり労働者がストライキをしなければならなかったからである。だから労働者(労働者はこのようなブルジョア政治家の頭の中ではつねにマルクス主義者と同じ意味をもっていた)を他のすべてのドイツ人と統一戦線を組ませることが必要であった。当時これらのブルジョア政党的なカビがはえた文化人連中が、そのような独創的なスローガンに対した時の輝かしい顔を実際見ておくべきであった！　国家主義的であると同時に独創的であった——だからかれらは、いつも心の中で追求していたものを今やついにもつことができたのである！　マルクシズムへの通路は見つかった。今や、国家主義的ペテン師連は、「由緒正しいドイツ人」の顔つきをして、国家主義的なきまり文句を使い、国際主義的な売国奴に誠意をこめた手を差し出すことができるようになった。そして、このことは至急にかなえられたのである。なにしろ、クノーが自分の「統一戦線」のためにマルクス主義の指導者を必要としたと同じように、またマルクス主義の指導者のほうはクノーの金をぜひ必要としたからである。このようにしてその後両方が助け合われた。クノーのほうは、国家主義のおしゃべり連中と反国家主義のペテン師から構成された統一戦線を獲得し、また国際主義的な詐欺師のほうは国家の支出でもって、自分達のもっとも崇高な闘争使命に奉仕することができた。つまり国家経済を破壊しえたが、しかもその上今回は国家の出費によってなされたのである。だが買収されたゼネストによって国民を救うという不朽の大思想は、いずれにしても、無関心きわまる役立たずどもでさえやはりすっかり感激して賛同できるようなスローガンである。

一民族が祈りによって解放されぬことは一般に承知されている。しかし、それでも民族を自由にのらくらさせて果たしてよいかどうかということは、まだまだ歴史的に吟味されなければならなかった。当時、クノー氏が、ゼネストを買収によって誘い、したがって、それを「統一戦線」の基礎と考えて

奨励する代りに、各々のドイツ人にただの二時間だけでも余計に労働することを要求したならば、この「統一戦線」の妄想は三日目におのずから片付いてしまったに違いない。諸民族は怠惰によって解放はされず、犠牲によって初めて解放される。

消極的抵抗　もちろんこのいわゆる消極的抵抗それ自体は長続きしなかった。なにしろ、占領軍をそんなばかげた手段で追放できると空想できたのは戦争というものをまるきり知らぬ人間だけだったからである。それだけのことでもやはり意味はあったといえようが、しかしそれは、出費が数十億に達し、そして国家の通貨を徹底的に破滅させるに本質的に手を貸したような行動がもった唯一の意味としてであった。

もちろんフランス人は、抵抗がそうした手段に利用されているのを知った時、一種のひそかな安心感を抱いてルール地方で居心地よいよう調度を整えたのである。もし手におえぬ一般住民の挙動によって占領軍当局に重大な危害が考えられる場合に、どのようにしてかれらに理性を取り戻させればよいかということについての最上の処方を、フランス人は外ならぬわれわれ自身から受け取ったのだ。なにしろわれわれは九年前に、一般住民の活動によってドイツ軍が容易ならぬ損害をこうむりそうになった時、電光石火のようにベルギーのフランス義勇軍部隊を打ち負かし、かれら住民に状況の深刻さを知らせたてではなかったか。消極的な抵抗がフランスにほんとうに危険となるやいなや、占領軍はもう八日とたたぬ間に実にぞうさなくこのまったく子供じみた治安妨害に残酷な結末をつけてしまうに違いない。なにしろ究極的な問はつねに以下のようなものであるからである。つまり、敵に対する消極的な抵抗が結局ほんとうにかれらの神経を刺激してしまい、今度はその敵がその抵抗に対して残

虐な暴力による闘争を開始したならば、なにをしようというのか？　またその場合には、さらに抵抗を続ける決意であるのか？　ということが問われる。もし抵抗が続けられるとしたら、いやおうなしに、きわめて苛酷で残虐きわまる迫害を自身に引き受けなければならぬのだ。だがこうなってしまえば、積極的抵抗の場合にもまた立つべき場所に——つまり闘争に直面して——立つのだ。したがって、いわゆる消極的抵抗はすべて、その背後に必要ならば公然たる戦争か、あるいはゲリラ的な小戦闘によってこの抵抗を続行する決意が期待される場合に、はじめて本質的な意味をもつに過ぎない。一般的には、このような闘争はすべて成功が可能であることの確信に左右されるものであろう。敵から猛烈な包囲攻撃を受けている要塞が、囲みを解かれるという最後の希望を捨てざるをえなくなるやいや、それによって実際にはその要塞は放棄されたも同然となる。それもこの場合守備隊が多分死ぬかも知れぬということに代って、まだ生命を確保したい気持に誘われる時はとくにそうなるのである。包囲されている都市の守備隊から、解放が可能かもわからないという信念を奪ってしまえば、防衛力はすべてそれとともに急激に崩壊するだろう。

したがってルールの消極的抵抗もまた、それが実際成功すべきであったならば、もたらしえたし、またもたらさなければならなかった最後の帰結を顧慮するならば、その背後に積極的な戦線が設けられてはじめて意味をもつものであった。もちろんその場合には、わが民族から計りがたいほどの力が汲み出されえたに相違なかった。これらヴェストファーレン人[9]の一人ひとりが、故国には八十、あるいは百個師団の軍隊が編成されているということを意識したのであったら、フランス人はいばらの道を歩いたはずである。はっきりした目標を欠いている場合よりも、成功が追求される場合のほうが勇気に富み、自分を進んで犠牲にしようとする人々を一層多く見出すものである。

国家社会主義者の態度　以上のことは、われわれ国家社会主義者にいわゆる国家主義的スローガンに対してきわめてきびしい反対の態度をとらざるをえなくさせた一つの典型的な事件であった。そしてまたわれわれもこのように振舞った。自分たちの国家主義的見解はすべてただ愚鈍さと外面的な虚飾のまぜ合せに過ぎなかった連中や、今や突如として国家主義的に振舞うことが危険なしにできるという快適な欲情に抵抗できずあらゆることに声を合わせて叫んでいる連中から、わたしはその頃少なからず攻撃されていた。わたしはあらゆる統一戦線と呼ばれる組織の中でも、もっともあわれなこの統一戦線をこの上なくバカげた現象の一つと見なしていたが、歴史はわたしの正しさを証明したのである。

労働組合が、その金庫をクノーの金でざっと一杯に満たし、また消極的抵抗のほうも怠惰な防衛から積極的な攻撃に移行するよう決意を迫られるやいなや、赤いハイエナ連中はさっそく国家主義的な羊の群から脱出して、再びかれらの平常の姿に返ったのである。クノー氏はこっそりと自分の船に戻ったが、ドイツは一つ経験を増した代り一つ大きな希望を失ってしまった。

盛夏の終りかける頃までは、多くの士官たちは、かれらがもっとも劣悪な士官でなかったことはたしかであるが、かれらは心の中でこんな恥ずべき事件が展開するとは信じていなかった。かれらはすべて、たとえ公然とはできないにしても、フランスのこの厚かましい侵入をドイツ史の転換点にさせるための準備がやはり秘密のうちにでも行なわれるに相違ないと期待していた。われわれの隊伍の中にも、少なくともドイツ国陸軍には信頼の念を抱いていたものが多くいた。そしてこの確信は非常に力に満ちたものであり、そのため無数の若者達の行動、とくにかれらの人間形成が決定的に左右され

たのである。

しかしきわめて恥ずべき崩壊が現われ、数十億の財産と数千のドイツ若者達――かれらはドイツの指導者の約束を真剣に受け取ったほどに愚鈍であった――を犠牲にした後、まったくぐうの音もでないほど屈辱的なやり方で降服した時、不幸なわが民族をこのような仕方で裏切ったことに対する憤激は炎々と燃え上った。この現在支配的である全組織を徹底的に片付けることだけがドイツを救いうるに違いないという確信が、当時数百万の人間の頭の中で、突然明白でたしかなものとなったのである。

一方ではあからさまな祖国に対する反逆が恥知らずにも姿を現わしているのに、他方では民族が経済的には徐々に餓死の運命に追いやられていたこの時期以上に、そのような問題の解決の機が熟していた時代はなかった。否、当時ほど断固たる態度でその解決を叫んでいた時代はなかったのである。国家自体が誠実と信用の法をすべて足で踏みにじり、その市民の権利を軽蔑し、数百万のもっとも誠実な国家の息子をだまして犠牲にし、他の数百万からは最後のグロッシェンまでも盗み取ったのであるから、国家に所属する成員から憎悪以外のものを期待するなんの権利ももはや国家にはなかった。そして民族と祖国の破壊者に対するこの憎悪はどっちみち爆発にまで進まなければならなかった。わたしはこの場所では、一九二四年春の大裁判(10)でのわたしの最終の弁論の結論に言及しうるだけである。

「この国家の裁判官は、われわれの当時の行動について、安らかな気持ちでわれわれに判決を下してもよいだろう。しかしながら、より高い真理およびより優れた法を支配する女神である歴史は、いつの日にかこの判決をほほえみながら引き裂き、われわれすべての罪と過失を赦免してくれるだろう」

だが歴史はさらに、今日権力を握って正義と法を踏みにじっており、わが民族を窮乏と堕落に導き、また祖国の困窮の最中に自分達の自我を全体社会の生活よりもより高く評価しているような連中をも

法廷に出頭を命じるだろう。

一九二三年十一月　わたしはこの場所で、一九二三年十一月八日[11]に向かって進行し、またそれを終らせたあの事件の叙述を続けようとは思わない。わたしがそれをしようと思わないのは、次の理由による。まず、わたしは将来のために、そのことになんの有効さも期待していないからである。次に、とりわけ今日ではほとんど癒合するとは考えられない傷口を開くことは無益であるからである。その外、おそらく心の底の底ではやはりみんな自分の民族を同じ愛情でもって愛していただろうが、ただいっしょに歩む道を誤ったかあるいはその道に精通していなかった人々の罪を論じることも無益だからである。

義務の勧告者であるわれらの死者　わが祖国の大きな共通の不幸に直面しているのであるから、今日わたしは、わが民族の敵の共同戦線に対して、将来なおいつの日か内心から真に誠実なドイツ人の大統一戦線を形成すべき人々を侮辱して、その結果恐らくかれらを引き離してしまうようなことは、もはやしたくない。なぜなら、当時われわれに敵対的であった人々でさえ、自分達のドイツ民族のために死という辛い道を歩んだ人間を敬畏の感情を抱きながら思い出すような時期がいつかくるに違いないことをわたしは承知しているからである。

わたしが自分の著作の第一巻をささげたこの十六人の英雄が、きわめて明晰な自覚をもちつつわれわれのためにすべてを犠牲にした英雄であったことを銘記するように、第二巻の終結に当ってわたしはわれわれの教義の信奉者や闘士たちに望むのである。かれらは狐疑逡巡するものや意志の弱いもの

を、再三再四自己の義務を遂行するように、そしてかれら自身がこの上なく堅い信念により最後のぎりぎりまで果した義務を遂行するように、呼び戻すに違いないだろう。そしてわたしは、かれらの死者の中に、最上の人物の一人として、自分の、そしてわれらの民族を目ざますため、詩作や、思索や、そして最後には行為によって、自分の生命をささげた人、

ディートリヒ・エカルト

をも数え入れたいと思っている。

結語

一九二三年十一月九日、その成立して第四年目に、国家社会主義ドイツ労働者党はドイツの全地域にわたって解散させられ、禁止された。一九二六年十一月の今日では党は以前よりもずっと強大となり、また内部的にも堅固となって、再び全国で自由な姿を見せているのである。

運動やその個々の指導者に対するあらゆる迫害も、あらゆる誹謗も中傷も運動になんら害を加えることができなかった。運動の理念の正当さ、その意欲の純粋さ、その信奉者の犠牲的精神等が今まであらゆる抑圧の中から以前よりも一層強力に、この運動を出現させてきたのだ。

この運動が今日のわが議会主義的腐敗の世界の中で、ますますその闘争のもっとも深い本質を自覚し、自己を人種と人物の価値の純正な権化と感じ取り、またそれによって秩序づけられるならば、運動はほとんど数学的規則性に基いていつかその闘争を勝利させるだろう。それとまったく同様に、もしドイツが同一の原則に従って導かれ、組織される場合には、当然自己に相応する地位をこの地上で獲得するに違いない。

人種堕落の時代に自国の最善の人種的要素の保護に没頭した国家は、いつか地上の支配者となるに違いない。

いつか犠牲の大き過ぎることが、予想される成果と比較して不安な気持に誘うようなことがある時には、わが運動の信奉者はけっしてそのことを忘れないでほしいものである。

訳注（II）

第一章

(1) 十一月革命当時をさす。
(2) 議員。
(3) 十一月革命当時。
(4) ユダヤ人のこと。マルクスはユダヤ人であった。

第二章

(1) ワイマール共和制下のドイツをさす。
(2) 原文は Entgermanisation. ヒトラーは純粋ゲルマン化を意図した。
(3) スカンジナビア半島とロシア連邦コラ半島を含むラップランドに住む種族。
(4) 国家という制度。
(5) 一六一八年―一六四八年。ドイツを舞台に行なわれた国際戦争で、新教、旧教の対立がもとであったが、ウエストファリア条約で終る。
(6) 原文は nordische. スカンジナビアに住む民族。
(7) 原文は ostische. アルプス山脈の西側から東欧にかけて住む人種で、髪も眼も黒褐色。
(8) 原文は dinarisch. 東南ドイツ、ティロール、スイスに住む。コーカソイド人種に属する。
(9) 原文は westische. 地中海西南部沿岸地方に住んだ種族。
(10) 原文は Urelemente.

(11) 病弱などの肉体的欠陥をいうのであろう。
(12) ホッテントットはアフリカ南部と西南部に住む。ズール族は東南アフリカに住むバントゥ系種族。
(13) カトリックとプロテスタント。
(14) 孤児を保育することをさす。
(15) ヨーロッパ系独特の、疑惑、当惑、軽蔑をあらわす身ぶり。
(16) 主として商人の組合、同業組合。
(17) ここのところ原文がミス・プリントで原意不明なのでこの箇所の訳文は初版本によった。
(18) 原語は Menetekel 天使の手が Belsazar 王に、バビロン国の没落の警告を壁に記した故事をさす。ダニエル書五の二五。
(19) 原文は "die Grösse einer Tat nicht gerade im Wagnis bestünde." となっている。
(20) 第一巻第十章の訳注(2)参照。富と強欲の神。
(21) ドイツの十一月革命のこと。
(22) 連合国をさす。
(23) Reichsbanner, 第一次大戦後のドイツ共和制擁護の政治団体の名称。黒、赤、金の国旗の色を、党の旗幟とした。
(24) アメリカの財政家ドーズが、第一次大戦後のドイツ賠償金支払のためにつくった案。
(25) 一九〇九年から一九一七年までのドイツ宰相。一七年軍部におされて無制限潜水艦戦争に同意するも軍部に失脚させられる。
(26) 身分の差などをいう。
(27) ワイマール共和制の理想のなさをひにくったのである。

第三章

(1) Staatsangehöriger, および Staatsbürger の訳。

(2) 中世ドイツの神秘主義者、自然科学者、医者。一四九三―一五四一。本名は Philipp Theophrast Bombast von Hohenheim.

(3) 原文は Wenzel となっているが、これはドイツ人の一般的人名として使っただけのこと。

第四章

(1) 本能的ということば。

(2) 原文は Sämtliche Betriebsorganisationen となっている。

(3) Rat 原意は助言、協議、相談、協議会、評議会など。

(4) 原文は Beratungskörper.

(5) 原文は die politische und berufliche ständische Kammern.

(6) 原文は Senat.

第五章

(1) 古代マケドニア人が発明した結束の固い集団隊形。

(2) 犬属の野獣。夜間に腐肉などをあさる性質がある。

第六章

(1) 第一次大戦における一九一八年のドイツとロシアの講和条約をさしている。

(2) マルクシストに対する他の側としてここでは、ブルジョアジーをさしている。

(3) 原文は Hekuba となっている。Hekuba とはトロイア王妃。Hektor, Paris, Kassandra の母で、トロイア落城後ギリシア方の女奴隷となった。そこから転用された。

(4) ヴェルサイユ条約をさす。

(5) ブレスト・リトフスク条約をさす。
(6) 歌劇 Parzival のワーグナー風の書き方。
(7) ドイツのことわざに「自負と愚鈍とは一本の木に育つ」(Dummelheit und Stolz wachsen auf einem Holz.) というのがある。

第七章

(1) ライプツィヒの戦。一八一三年十月、プロイセン、オーストリア、ロシア連合軍がナポレオン軍を破った戦争。
(2) 三月革命のシンボル。
(3) 一八四八年、ドイツ連邦会議はこの三色をドイツ連邦の色とした。後、ワイマール共和制のもとにこの色が採用された。
(4) 一九二四年に社会民主党や中央党によってつくられた Reichsbanner Schwarz-Rot-Gold という団体をさす。
(5) 一八六七年北ドイツ連邦が、プロイセンの黒白、ハンザ同盟の白赤というそれぞれの色をあわせて、自分の色としたのを、一八七一年ドイツ統一とともにドイツ帝国の色とした。
(6) 黒・赤・金の旗。
(7) 黒・白・赤の旗。
(8) バイエルン州。
(9) 黒・白はプロイセン州の色。
(10) ハーケンクロイツ(鉤十字)は、もともとゲルマン人が青銅時代から用いた幸運のシンボル。
(11) ミュンヘンのサーカス場。
(12) Arbeitsgemeinschaft の訳語。一九一八年、ドイツ資本家団体と労働組合の間につくられた協力組織。

第八章

(1) ドイツ統一の問題。
(2) 普墺戦争でベーメンに侵入したプロイセン軍が、オーストリア軍を破って大勢を決した戦。
(3) 普仏戦争。一八七〇年から七一年のプロイセンとフランスとの間の戦争で、ナポレオンIII世が敗れ、ヴェルサイユ宮殿でドイツ帝国成立が宣言された。

第九章

(1) アダムとイヴの長子、弟アベルを殺す。旧約聖書、創世記四の一以下。
(2) 死肉をたべる動物で、ここでは死者のものをはぎとる人をさすことから、貪欲な人のことをさしている。
(3) いずれもフランス革命期のジャコバン的革命家。
(4) 社会民主党に属し、ドイツ共和国初代の首相。
(5) 中央党左派の政治家。講和締結の立役者。
(6) 社会民主党員、ドイツ共和国初代大統領。

第十章

(1) ミュンヘンをさす。
(2) ライン地方の連邦分離主義者。
(3) ドイツ語には、日本語の「国家」にあたることばに Reich, Staat, Land の三つがある。Reich とはドイツ国全体、あるいは帝国という意味をもち、Staat とはごく一般的な国家という意味のほかに、封建時代からの領邦国家、あるいはドイツ連邦内の一国家という意味であり、Land は地方、州、邦というように訳されている。ここでは Reich はドイツ国あるいはドイツ帝国と訳し、Staat は国家あるいは連邦国家と訳し、Land は邦と訳した。たとえばバイエル

ンはここでは主としてドイツ国（Reich）内の一国家（Staat）というように用いられている。

(4)「ヴィルヘルム・テル」の中にでてくるスイスの代官。自分の帽子を広場におき通行人に敬礼をさせた。

第十一章

注なし。

第十二章

(1) 原文では Wirtschaftskammer とあるので、「経済会議所」と訳したが、これは Ständekammer か Wirtschaftsparlamet の書きあやまりであろう。

(2) ヴィルヘルム・クノーは、一九二二年―二三年のドイツ共和国首相。一九二三年フランス軍のルール地方占領のさい、賠償金支払いを拒否して、ルール地方の石炭シンジカートをハンブルクにひきあげさせ、消極的抵抗をしたが、ためにマルクは急激に下落し、ユダヤ人だけがもうけた。ヒトラーはユダヤ人の作った労働組合がそのために利益をえたというのである。

第十三章

(1) 初版のテキストでは「間接的方法によって」となっている。

(2) 新しい版のテキストでは Leben「生活」となっているが、初版に従って、Leiter「指導者」の訳語を当てた。

(3) テキストは初版も Skrupellosigkeit となっているが、あるいは Skrupulösigkeit の誤植かも知れない。後者ならば「小心翼々な」、「細心な」、「良心的な」という逆の意味になるが、この方が文章はよく通るようにも思われる。

(4) 潜航艇のこと。Unterseeboot の略語。

(5) オーストリアのこと。

(6) 匈奴。野蛮人の比喩だが、とくにドイツ人（兵）を軽蔑して呼ぶ名称。

(7) ゲルマン民族の一種族。四五五年にローマを略奪してその文化を破壊したから、芸術、文化の破壊者、野蛮人の代表的名称となる。
(8) 一九一八年十一月の革命以後政権を担当した諸政党をさす。
(9) ユダヤ人をさす。
(10) 古代ギリシアの反逆者の名から、一般に反逆者をさす場合に用いられる。
(11) パリの西方、ヴェルサイユの北にある都市。この地で、ヴェルサイユ条約（対ドイツ）についで、オーストリアに対する講和条約が結ばれ、それはサン・ジェルマン条約と呼ばれる。その他、ハンガリー、ブルガリア、トルコに対しても各個に講和条約が結ばれている。
(12) 一九三六年版テキストでは（ ）内は欠けている。

第十四章

(1) 上巻第四章参照。なお、「戦前のドイツ同盟政策」という見出しはない。
(2) フランスの政治家・外交家（一七五四―一八三八）。
(3) 悪魔の王。「マタイ伝」一二章二四参照。
(4) ヴィクトリア女王の子で英国王（一八四一―一九一〇）。

第十五章

(1) プロイセンの将軍（一七八〇―一八三一）。かれの「戦争論」は有名である。
(2) 一八〇六年はナポレオンによってプロイセンが決定的に敗北させられた年であり、一八一三年は、いわゆるドイツ解放戦争が始まった年で、翌々年にはナポレオンはセント・ヘレナ島へ流される身の上となる。
(3) 一九二五年にスイスのロカルノで、独、仏、白、英、伊間に締結された。ドイツとフランス、ドイツとベルギーがたがいに戦争をしないことを約束した。

(4) アメリカの政治家、財政家（一八六五—一九五一）。連合国賠償委員としていわゆるドーズ案の作成に当った。
(5) 昔の軍艦の艦首吃水線の下部に突出している甲鉄。敵の軍艦に体当りして艦腹に穴をあけるためのもの。
(6) フランスの軍人（一八五一—一九二九）。第一次世界大戦末期の連合軍最高司令官。
(7) 原語は Essen である。エッセンはなお固有名詞としてはルール地方の工業都市をさす。ヒトラーはドイツ民族の意志を鍛える鍛冶場にエッセンをひっかけて用いているのだろう。
(8) 紀元前四世紀のはじめにローマを征服したガリアの将軍のこと。
(9) ヴェストファーレン州内にルールはある。
(10) 上巻「序言」の冒頭（上巻三ページ）および、上巻四九九ページ解説（I）参照。
(11) いわゆるビアホール・プッチ。上巻の解説を参照。

解説（II）

多くの人々が、ナチス興亡の歴史を描いた記録映画「わが闘争」で、占領地域におけるナチスの残虐な仕打ちの数々、特にユダヤ人に対する非道な迫害の場面を見て、どうしてこんなひどいことが人間に対して同じ人間の手で平然と行なわれえたのかと疑問に思い、かつやり場のない腹立たしさを感じたに違いない。アウシュヴィッツの強制収容所におけるあのガス室での大量殺人のむごたらしさは、人類の歴史が続く限り永遠に忘れ去られることはないであろう。

ナチス運動の生成過程やその歴史的運命等については、第一巻の解説で共訳者平野が説明することになっているので、わたしはここでは、あの悲惨な第二次世界大戦の導火線となり、かつヨーロッパ大陸を戦火のちまたとし、数々の異民族を迫害し、殺戮したナチズム運動のバイブルであった本書のヒトラーの主張の中から、かれの根本思想を取り出し、きわめて非合理的で、偏狭さと歪曲（わいきょく）に満ちたもろもろの断定を結びつけているヒトラーの思惟（しい）の大筋を明らかにしてみたい。ヒトラーが流行性脳炎にかかり、脳を冒されて狂気に満ちた思想と行動をとるようになったのだというヨハン・レクテンヴァルト「アドルフ・ヒトラーはどこを病んでいたか」（ミュンヘン、一九六三年）の主張は十分に立証されえないとされている。もちろんヒトラーの思想を正常で合理的であるとすることはできないが、他方『わが闘争』でのヒトラーの主張がそれなりにかなり首尾一貫性をもっていることも否定しえない。つまりここではヒトラーの思想のもつその一貫性に光を当ててみたいのである。

まず『わが闘争』に見出される最も根本的な思想といえば、第一にかれのいわば生物学主義的なア

ーリア人種（ドイツ民族）至上主義が挙げられよう。かれによれば、人類を文化創造者、文化支持者、文化破壊者の三種類に分けた場合、文化創造者はアーリア人種のみであり、日本その他の非アーリア民族はせいぜい文化支持者でありえても、文化創造の能力はもちえないのである。そして文化破壊者として憎むべき民族こそユダヤ人なのである。

このようなヒトラーの人種観は第二次世界大戦でドイツ軍の捕虜となった異民族の待遇にも現われたといわれている（河出書房、世界の歴史23、『第二次世界大戦』、上山春平）。イギリス人はドイツ人と同じ優秀民族として好待遇が与えられ、フランス人もかなり人間的に扱われたといわれている。スラヴ人種はさらに劣等人種としてドイツ軍による扱いはより劣悪化し、「つねに他民族の体内に住む寄生虫に過ぎない」（第一巻第十一章）人類文化の敵とヒトラーによって断罪されるユダヤ人にはただ絶滅の運命しか与えられなかったのである。

こうした人種観の歪みは、ヒトラーをして「人種の純潔」を守り、アーリア人種の優秀性を存続発展させるために結婚についてまで長広舌をふるわせるにいたるのである。

『わが闘争』では全巻を通じてユダヤ人が口汚なく罵倒されているが、その特徴としては、ヒトラーがみずから打倒すべきと考えた諸要素、つまり議会制民主主義、拝金思想、インターナショナリズム、マルクス主義、ソヴィエトのボルシェヴィズム等の一切合財がすべてユダヤ人の世界支配の陰謀から派生しているという、いわばユダヤ人＝悪魔説である。そのうちのひとつ、議会制民主主義とユダヤ人の陰謀を結びつけるヒトラーの論理を見ることにしよう。

「民主主義はほとんどの場合、ユダヤ人の要求に一致した。なにしろ、それは人格を排除し——その代りに、愚鈍、無能、そしてこれらに劣らず臆病さ、これらで構成されている多数をもち込むからで

ある」（第一巻第十一章）。本来、民主主義の思想は個人の平等という理念を基礎においてはじめて成立しうるものであるが、最も優秀な民族・人種が世界を支配すべきであるとするヒトラーの狂信的ともいえる人種論的世界観は、そのまま論理的必然性でもって、「この民族の内部でも最も優秀な人々が民族を指導すべきだとする貴族主義的政治原理」を導き出すのである（第二巻第四章）。つまり、国家社会主義の国家には、「多数決原理は存在せず、ただ責任ある人物だけがある。……もちろんすべての人々には相談相手というものはある。だが決定はひとりの人間がくだすのである。かつてプロイセン軍をドイツ民族の最も驚嘆すべき道具にした原則が……将来われわれの国家観を建設する根本原則であらねばならない。すなわち全指導者の権威は下へ、全責任は上へである」（同上）。

この貴族主義的原理は、同じドイツの特異な思想家ニーチェの説いたものと類似しており、ヒトラーがムッソリーニと会見した際にニーチェ全集を贈ったということは、ニーチェの影響のきわめて大きかったことを象徴するものであろう。ともあれ、自己の政治的天才、民族指導者としての資質を確信するヒトラーにとって、個人の平等を認める多数決原理、議会制民主主義はけっして容認できるものではなかったのである。

次に反ユダヤ主義と反マルクス主義の一体性についてのヒトラーの思想を簡単に眺めてみよう。「マルクス主義の理論は理性と人間的狂気の分かちがたい混合物を示しているが、つねに狂気だけは実現されても、けっして理性の方は実現されることがないのである。人格を、したがってまた国民とその人種的内容を無条件に否認することによって、その理論は全人類文化の根本的な基礎を破壊する。というのは、文化はまさにそれらの要素に依存するからである」（第一巻第十一章）。ヒトラーのこの主張はかれの反マルクス主義の性格を明瞭（めいりょう）に露呈させているといってよいであろう。要するに、マルク

ス主義はかれの人種論（アーリア民族至上主義）とかれの人格論（超人的な指導者原理・反民主主義〔このヒトラーの人格論の思想的源泉をニーチェに求めることはあながち不当ではないであろう。ニーチェの『善悪の彼岸』第五章だとか、『道徳の系譜学』第一論文等を読まれたい〕）と相容れないから狂気だと断罪されるのである。ヒトラーのこの議論はさらに一歩進んで、「人格と人種が破壊されれば、低級な人間——これはユダヤ人であるが——の支配を妨げる本質的な障害物はなくなる」と展開されるのであり、結局反ユダヤ主義に落ちつくのである。

ヒトラーはまた、この反マルクス主義をさらに反スラヴ主義、反ボルシェヴィズム、東方への領土拡張に結びつけてゆくのである。次にその議論を一瞥しよう。かれはドイツのとるべき領土政策について次のように主張する。「われわれが今日ヨーロッパで新しい領土について語る場合、第一にロシアとそれに従属する周辺国家が思いつかれるに過ぎない。……ロシアはボルシェヴィズムに引き渡されたことにより、それまでこの国家を存立させ、またその存立を保証してきた知性がロシア民族から奪われてしまった。なにしろロシア国家の構造組織はロシアにおけるスラヴ民族の国政能力の結果ではなく、むしろ低級な人種の内部に存在するゲルマン民族的要素による国家形成活動の驚くべき一例であるに過ぎない」。そしてロシアはヒトラーのいうユダヤ人の手に落ちたが、ユダヤ人はあくまでも民族の寄生虫でしかないので、「ユダヤ人は組織の構成分子ではなく、分解の酵素」なのであり、ロシアは崩壊の寸前にあると断定される（第二巻第十四章）。したがってドイツの東方への領土拡張は、ヒトラーの思想の中では、またもや人種理論によって正当化されうるのである。

以上、ごく簡単にヒトラー自身語るところを一部分浮き彫りにしてみたが、見られるように『わが闘争』におけるヒトラーの思想はかなり首尾一貫したものであったといえよう。また紙数の関係で紹

介は割愛せざるをえないが、ヒトラーの大衆心理の洞察力はきわめて優れており、宣伝、世論操作についてのかれの見解は注目に値するものであるとわたしは信ずる。いずれにしても、一人の偉大な独裁者、扇動家がみずからの大いなる偏見をひっさげて一民族の理性を征服し、世界の地図を塗り替える狂気の十字軍に大衆を旅立たせるに成功したということは、きわめて重大であり、かつて同じ旅路を歩ませられたわが国民にとっては特に他人事ではないのである。

わたしたちは、このヒトラーの『わが闘争』を今世紀に生じたひとつの大いなる悲劇・第二次世界大戦の原因をより正確に、より深く理解するための重要な一資料として細心に読み取る必要があるだろう。平和を願い、民主主義を大切に守ってゆこうと念願されている方々に、わたしたちの訳書が少しでも役立てばこの上ない喜びである。

＊

共訳者平野からこの書の翻訳に協力を依頼されて、わたしたちの初訳を黎明書房から出してすでに十二年が経過した。この十二年間にわたしたちが経験した内外の状勢は、ナチズムを「死んだ犬」扱いすることをますます許さなくなってきているように思われる。

とかく人民は為政者の大衆操縦術にほんろうされる運命をもつものであるが、現在のわたしたちもけっしてその例外ではありえない。そうした意味から、かつて初訳の解説の最後に書いたことを再びここに記しておきたい。

——わたくしはここで、ルソーが『社会契約論』で述べている言葉をつけ加えれば満足である。「マキャヴェルリは、国王たちに教えるようなふりをして、人民に重大な教訓を与えたのである。マキャヴェルリの『君主論』は共和派の宝典である」。もちろん、ヒトラーは人民に教えたのではない

が、わたくしにはやはり人民の宝典の価値をもつように思われるのである――

将積　茂

わが闘争（とうそう）

（下）

アドルフ・ヒトラー

平野一郎（ひらのいちろう）・将積茂（しょうじゃくしげる）＝訳

角川文庫　3144

昭和四十八年十月二十日　初版発行
平成十三年十月十五日　改版初版発行
平成十七年十月十日　改版七版発行

発行者——田口惠司
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話　編集（〇三）三二三八—八五五五
営業（〇三）三二三八—八五二一
〒一〇二—八一七七
振替〇〇一三〇—九—一九五二〇八

印刷所——旭印刷　製本所——BBC
装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はご面倒でも小社受注センター読者係にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

ヒ 3-2　　ISBN4-04-322402-8　C0131

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

角川文庫海外作品

アメリカン・ゴシック（1～4）
ショーン・キャシディ他
長橋美穂＝訳
アメリカ南部の平凡な町で突然起きた超常現象に巻き込まれる少年と家族の姿。「X-ファイル」に続く全米TVシリーズ話題作、小説化！

アメリカン・ゴシック1
ショーン・キャシディ他
長橋美穂＝訳
アメリカ南部の平凡な町で突然起きた超常現象に巻き込まれる少年と家族の姿。「X-ファイル」に続く全米TVシリーズ話題作、小説化！

アメリカン・ゴシック2
ショーン・キャシディ他
長橋美穂＝訳
次々と起る謎の事件に、少年は勇敢に立ち向かう。ホラー映画界の鬼才、サム・ライミが製作総指揮を務める話題の全米TVシリーズの小説第二弾！

アメリカン・ゴシック3
ショーン・キャシディ他
長橋美穂＝訳
姉の死の真実が暴かれそうになった時、男（ヤツ）は――。全米TVシリーズには登場しない、数十年前に起こった謎にも迫る小説第三弾。

アメリカン・ゴシック4
ショーン・キャシディ他
長橋美穂＝訳
数十年前からの怨念の対決、未来を変えるパワーとの勝負など、「アメリカン・ゴシック」のみどころのすべてを結集した、シリーズ最終編！

ジェネレーションX
加速された文化のための物語たち
ダグラス・クープランド
黒丸尚＝訳
エリートたちの拝金主義にうんざりし、都会を逃げ出し砂漠に移り住んだX世代の若者たち。圧倒的に支持されたX世代のバイブル。

切り裂き魔の森
A・クラヴァン
中野圭二＝訳
緑の森に囲まれた家、優しい夫と二人の子供。ホワイト夫人の生活は平穏だった。夫へのある疑惑が生じるまでは……。

角川文庫海外作品

傷痕のある男
K・ピータースン
A・クラヴァン
羽田詩津子＝訳
マイケルがクリスマスイブの夜に恋人に語った架空の物語「傷痕のある男」の連続殺人鬼が、現実の恐怖となってあらわれた！

秘密の友人
A・クラヴァン
羽田詩津子＝訳
華奢で美しい少女が殺人罪で起訴された。自分の中に誰かがいると言う彼女を看ることになった精神科医に恐ろしい事件が振りかかる！

エイリアン4 復活
A・C・クリスピン
東江一紀＝訳
惑星フィオリナでの死闘から二百年――最新のクローン技術によりリプリーは再び目を覚ました。体内に宿していたエイリアンとともに……。

スカイジャック
トニー・ケンリック
上田公子＝訳
三百六十人の乗客がジャンボ機ごと誘拐された！そこに若き弁護士ベレッカーと元妻アニーがさっそうと登場するが…最後に待つ意表外な結末とは？

リリアンと悪党ども
トニー・ケンリック
上田公子＝訳
誘拐されるための偽装家族？　そこには聞くも涙、語れば笑いの物語があるのだが……抱腹絶倒確実の傑作ユーモア推理、待望の再登場！

マイ・フェア・レディーズ
トニー・ケンリック
上田公子＝訳
40万ドルのエメラルドを狙う、美女とペテン師の奇想天外な計画とは――意外性に満ちた展開をみせる、傑作スラプスティック・ミステリー！

ピエドラ川のほとりで私は泣いた
パウロ・コエーリョ
山川紘矢＋山川亜希子＝訳
久々に再会した修道士の友人から愛を告白され戸惑うピラールは、彼との旅を通して、真実の愛の力と神の存在を再発見する。世界的ベストセラー。

角川文庫海外作品

女優の条件(上)(下)
オリヴィア・ゴールドスミス
川副智子＝訳
「もっと美しかったら」という女性の永遠の願いをテーマに、ハリウッド裏話をエッセンスに繰り広げられる傑作ロマンス・エンタテインメント長編。

洗脳裁判
ジーン・ハンフ・コレリッツ
法村里絵＝訳
善良なホームレスが少女を刺した。なぜ？ 事件の謎に迫る新人弁護士シビラが見た恐るべき事実とは…。NYを舞台にした法廷サスペンスの傑作。

紅の華網(はなあみ)
リサ・シー
篠原 慎＝訳
米中要人の息子が同時期に死体で発見された。女刑事胡藍(ホウラン)と米連邦検事補がコンビを組むが……。二大国を舞台にした壮大なサスペンスミステリー。

ラブ・ストーリィ ある愛の詩
エリック・シーガル
板倉 章＝訳
愛とは決して後悔しないこと——美しく清冽な愛のかたちが世界中の若者の心を捉え、永遠のベストセラーとなった一冊。

ドクターズ(上)(下)
エリック・シーガル
広瀬順弘＝訳
兄弟のように育ち共に医科大学院に入学したバーニーとローラが踏み出した新しい世界。医学生たちの愛と苦悩に満ちた青春を描く。

愛 死
ダン・シモンズ
嶋田洋一＝訳
戦地ベトナムから休暇で訪れたバンコクを二十二年ぶりに歩く。あの日追い求めた欲望と失ったものを辿って……。「愛と死」の五編。

夜の子供たち(上)(下)
ダン・シモンズ
布施由紀子＝訳
ドラキュラの末裔の遺伝子がエイズや癌の画期的治療の鍵になるのか——ルーマニアの孤児を巡って展開するゴシックホラーの傑作。

角川文庫海外作品

太陽の王ラムセス１
クリスチャン・ジャック
山田浩之＝訳
古代エジプト史上最も偉大な王（ファラオ）、ラムセス二世。その波瀾万丈の運命が今、幕を明ける——世界で一千万人を不眠にさせた絢爛の大河歴史ロマン。

太陽の王ラムセス２　大神殿
クリスチャン・ジャック
山田浩之＝訳
亡き王セティの遺志を継ぎ、ついにラムセス即位の時へ。だが裏切りと陰謀が渦巻く中、次々と魔の手が忍び寄る。若き王（ファラオ）、波瀾の治世の幕開け！

太陽の王ラムセス３　カデシュの戦い
クリスチャン・ジャック
山田浩之＝訳
民の敬愛を得た王ラムセスに、容赦無く襲いかかる宿敵ヒッタイト——難攻不落の要塞カデシュの砦で、歴史に名高い死闘が遂に幕を開ける！

太陽の王ラムセス４　アブ・シンベルの王妃
クリスチャン・ジャック
山田浩之＝訳
カデシュでの奇跡的勝利も束の間、闇の魔力に脅かされるネフェルタリの為、光の大神殿を築くラムセスだが……果して最愛の王妃を救えるのか!?

太陽の王ラムセス５　アカシアの樹の下で
クリスチャン・ジャック
山田浩之＝訳
ヒッタイトとの和平が成立、遂にエジプトに平穏が訪れる——そして「光の息子」ラムセスにも静かに老いの影が……最強の王の、最後の戦い！

バルコニーの男
M・シューヴァル
P・ヴァールー
高見浩＝訳
陰鬱な曙光の中、バルコニーからストックホルムの街路を見下ろしている男……。少女誘拐と強奪、二つの連続する事件が絡み合う。

笑う警官
M・シューヴァル
P・ヴァールー
高見浩＝訳
バスの中には軽機関銃で射殺された八人の死体が……。アメリカ推理作家クラブ最優秀長編賞を受けた、謎解きの魅力に溢れる傑作。

角川文庫海外作品

消えた消防車

PM・シューヴァル
ヴァールー
高見浩＝訳

ベックの僚友ラーソンの眼前で監視中のアパートが爆発炎上。なぜ消防車は現れなかったのか。やがて浮かび上がる戦慄すべき陰謀。

ロゼアンナ

PM・シューヴァル
ヴァールー
高見浩＝訳

運河に全裸死体が……。ストックホルムを舞台に描かれる警察小説の金字塔〝マルティン・ベック〟シリーズの記念すべき第一作。

蒸発した男

PM・シューヴァル
ヴァールー
高見浩＝訳

取材でハンガリーを訪れたルポ・ライターが消息を絶った。真相を探るため単身ブタペストへ飛んだベックを尾行者が待っていた。

サボイ・ホテルの殺人

PM・シューヴァル
ヴァールー
高見浩＝訳

スウェーデン南端の町のホテルで晩餐中の大物財界人が狙撃された。犯人を追うベックの前に立ち現れるこの大資本家の冷酷な面貌。

唾棄すべき男

PM・シューヴァル
ヴァールー
高見浩＝訳

凄惨な殺人現場。ベックの前に横たわる死体はニーマン主任警部だった。敏腕警察官で鳴る男の知られざる一面に解決の鍵が……。

密　室

PM・シューヴァル
ヴァールー
高見浩＝訳

銃創も癒え十五か月ぶりに登庁したベックが受け持った孤独な老人の変死事件……。真の悪とは何か。痛烈な問いかけに満ちた一作。

警官殺し

PM・シューヴァル
ヴァールー
高見浩＝訳

出張捜査でベックとコルベリの前に容疑者として現れたのはかつて逮捕した男だった。アイロニーとシリーズ独自の興趣に溢れる。

角川文庫海外作品

角川文庫海外作品

殺人症候群
リチャード・ニーリィ
中村能三・森　愼一＝訳

凄まじいまでの女性への憎悪が、内気なランバートと自信家のチャールズを結びつけた。そしてNYに〝死刑執行人〟が登場した――。

心ひき裂かれて
リチャード・ニーリィ
佐　和　誠＝訳

妻がレイプされた。夫は警察の捜査に協力するが、一方でかつての恋人との間に知られてはならない秘密をつくろうとしていた――。

ネオン・レイン
ジェイムズ・リー・バーク
大久保寛＝訳

娼婦、死刑囚、ニカラグアからの亡命者――狂気と背中合わせの連中を相手にロビショーのハードな捜査が始まった。シリーズ第一弾。

ブラック・チェリー・ブルース
ジェイムズ・リー・バーク
佐和誠＝訳

元警部補の貸しボート屋が守るべきものはなにか？　ニュー・オーリンズを舞台にした香り高きハードボイルド。MWA長編賞受賞。

天国の囚人
ジェイムズ・リー・バーク
大久保寛＝訳

ある朝、貸しボート屋のロビショーは近くの海に墜落した飛行機から少女を救う。「南」から来た何かが再び彼を脅かす……。シリーズ第二弾。

エレクトリック・ミスト
ジェイムズ・リー・バーク
大久保寛＝訳

連続レイプ殺人事件と二十年以上前の黒人殺人事件。不思議な因縁で絡みあう二つの事件を追う刑事に、霧の中から現れた亡霊が何かを告げる……。

新編　日本の面影
ラフカディオ・ハーン
池田雅之＝訳

ハーンの代表作『知られぬ日本の面影』を新訳・新編集した決定版。「神々の国の首都」をはじめ、日本の原点にふれ、静かな感動を呼ぶ11編を収録。

角川文庫海外作品

リプリー
パトリシア・ハイスミス
青田　勝＝訳

金持ちの放蕩息子ディッキーを羨望するトムは、あるとき自分と彼の酷似点に気づき、完全犯罪を計画する。サスペンスの巨匠ハイスミスの代表作。

プリティ・ブライド
S・パリオット
J・マクギボン他
高橋結花＝訳

過去3度、結婚式当日に逃げ出したマギーがついに運命の人と出会い…。ジュリア・ロバーツ&リチャード・ギアが贈るラブ・ロマンスを小説化。

天才アームストロングのたった一つの嘘
ジェイムズ・L・ハルペリン
法村里絵＝訳

2024年、若き天才プログラマーが的中率100%の嘘発見器を発明。嘘がなくなることで犯罪率は低下し世界中に平和が訪れたかに見えたが…。

螺線上の殺意
リドリー・ピアスン
羽田詩津子＝訳

上司をかばうため、刑事は過去に殺人を自殺と断定した。だが今、また新たな事件が……。最先端の遺伝子治療と激しいハイテク追跡劇が錯綜する！　傑作ミステリー。

魔女の鉄鎚
ジェーン・S・ヒッチコック
浅羽莢子＝訳

魔法書と共に消された父。事件の真相究明を通じて自分の中の魔性に目覚めたビアトリスに、カルト教団の影が忍び寄る……。驚愕の問題小説。

ふりだしに戻る(上)(下)
ジャック・フィニイ
福島正実＝訳

サイモンは、九十年前に投函された青い手紙に秘められた謎を解くために過去に旅立つ。奇才の幻のファンタジー・ロマン。

マリオンの壁
ジャック・フィニイ
福島正実＝訳

古い家に残された女優の落書が不思議な世界に導いていく。映画を愛するすべての人に贈るノスタルジック・ファンタジー。

角川文庫海外作品

ジャッカルの日　F・フォーサイス　篠原慎＝訳
ジャッカル——プロの暗殺屋であること以外、本名も年齢も不明。標的はドゴール大統領。計画実行日〝ジャッカルの日〟は刻々と迫る！

オデッサ・ファイル　F・フォーサイス　篠原慎＝訳
オデッサ——元ナチス隊員の救済を目的とする秘密地下組織——の存在を知った一記者がこの悪魔の組織に単身挑む！　戦慄の追跡行。

戦争の犬たち(上)(下)　F・フォーサイス　篠原慎＝訳
プラチナ採掘権独占を企む企業が新興国ザンガロの独裁大統領を廃すべく、五人の「戦争のプロ」を送り込む！　外人部隊を描く、雄渾の巨編。

シェパード　F・フォーサイス　篠原慎＝訳
事故は北海上空、高度一万フィートで発生！　すべての計器が止まったその時、霧の中から一機の古いモスキートが！　傑作中編集。

悪魔の選択(上)(下)　F・フォーサイス　篠原慎＝訳
ソ連の凶作情報を得た西側は、食料輸出の見返りに軍縮を迫ろうとした。が、KGB議長暗殺を機に、世界は一大危機に突入した！

帝王　F・フォーサイス　篠原慎＝訳
冒険、復讐、コンゲーム……。短編の名手としても定評のある著者が男の世界を描き切った、魅力の傑作集。表題作ほか七編収録。

第四の核(上)(下)　F・フォーサイス　篠原慎＝訳
西側世界転覆を狙う恐怖の陰謀「オーロラ計画」は始動した！　KGB工作員がイギリスに潜入する。衝撃の構想と比類なきスケール。

角川文庫海外作品

ネゴシエイター(上)(下)
F・フォーサイス
篠原慎＝訳
大統領子息誘拐の陰に潜むソ連とテキサス石油王の途方もない陰謀とは？　犯罪交渉人クインの熾烈な闘争を描く、傑作長編。

騙し屋
F・フォーサイス
篠原慎＝訳
英国秘密情報機関のベテランエージェント〝騙し屋〟マクレディは、情勢急変のため、引退を勧告される……。最後のスパイ小説、第一弾！

売国奴の持参金
F・フォーサイス
篠原慎＝訳
KGB大佐がアメリカ亡命を申し入れてきた。CI墳堺彼を信用したが、マクレディは腑に落ちなかった。スパイ同士の息詰まる対決！

戦争の犠牲者
F・フォーサイス
篠原慎＝訳
カダフィ大佐が西側に復讐を企てるべく、IRAテロリストをロンドンに送り込もうとしていた……。マクレディ・シリーズ、第三弾！

カリブの失楽園
F・フォーサイス
篠原慎＝訳
独立を控えたバークレー諸島で総督が暗殺。マクレディは騙し屋の本領を発揮！　雄々しく闘ったスパイ達に捧げる鎮魂歌。シリーズ完結編。

神の拳(上)(下)
F・フォーサイス
篠原慎＝訳
ついに独裁者は最終兵器を完成させた。褐色の英国人将校は、独りバグダッドに潜入する！　湾岸戦争をテーマに描く、最大級スリラー。

エイリアン（1〜4）
A・D・フォスター
深町眞理子＝訳
宇宙船「ノストロモ」に何が起きたのか？　人類未曽有の悲劇は、未知の惑星での異星人との遭遇から始まった！　SFホラーの金字塔。

角川文庫海外作品

エイリアン
A・D・フォスター
深町眞理子＝訳
宇宙船「ノストロモ」に何が起きたのか？ 人類未曽有の悲劇は、未知の惑星での異星人との遭遇から始まった！ SFホラーの金字塔。

エイリアン2
A・D・フォスター
野田昌宏＝訳
ノストロモ号を襲った惨事の唯一の生存者リプリーは五十七年後に救出されるが、誰もその話を信じない。そして再び悪夢が蘇る。

エイリアン3
A・D・フォスター
東江一紀＝訳
リプリーが不時着した星は流刑惑星。そこで彼女は自らの体内にエイリアンを宿していることを知る……。衝撃のクライマックス。

セックスとビデオと戦場
ジェームズ・W・ブリン
黒原敏行＝訳
アメリカ海軍対潜水艦部隊の音響分析兵グレッグ。シミュレーションのような現実の戦争の終わりに見たホンモノとは……。新感覚戦争小説。

K-パックス
G・ブルーワー
風間賢二＝訳
七千光年離れた星から地球に旅行に来たという男が精神病院に収容された。医者は多重人格障害と判断するが……。不思議なミステリー。

ギリシア・ローマ神話
トマス・ブルフィンチ
大久保　博＝訳
ギリシア、ヨーロッパはさまざまな神話や伝説の宝庫である。ギリシア・ローマ・北欧の神話を親しみやすく紹介し、〝伝説の時代〟を興味深く語る。

新訳 アーサー王物語
トマス・ブルフィンチ
大久保　博＝訳
六世紀頃の英国。国王アーサーや騎士たちが繰り広げる、冒険と恋愛ロマンス。そして魔法使いたちが引き起こす不思議な出来事…。

9784043224029

1920131007053

ISBN4-04-322402-8

C0131 ¥705E

定価：本体705円（税別）

突如として世界に巻き起こったヒトラー・ブーム、この不気味な現象は、いったい何を意味し、何を志向しているか。この謎を解くカギを秘めた『わが闘争』、それは独裁者ヒトラーの出現を許した混迷の政治風土と酷似する現代において、予想外の意味をもってわれわれに迫ってくる。ヒトラーが本書で語るその恐るべき政治哲学・魔術に近い巧妙な政治技術は、現代政治の虚構を見抜く有力な手掛りとして、今なお多くの示唆を放っている。戦争体験のない若人は勿論のこと、全国民にとって、批判的必読の書といえよう。